
ぼくらの天使

半導体

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくらの天使

【Nコード】

N4638N

【作者名】

半導体

【あらすじ】

当たり前のはずだった日常は、ある日突然崩れ去ってしまう。故郷を滅ぼされた少年は、幼馴染の少女とともに安住の地を求めて旅に出る。その道中、彼らは人間とは異なる異種族の存在、そして彼らが人間に迫害されているという事実を知る。それにより、彼らの旅は少しずつ違ったものへと変貌していく。

プロローグ

瓦礫の崩れる音で、目が覚めた。

気がついて最初に目に入ったのは、見る影もなく崩れ去った民家の列だった。抉られたような破壊の跡を晒している家や、中には単なる木とレンガの山と化しているものもある。

遠方では黒い煙が立ち昇っており、そこで火の手が上がっていることが伺える。高く昇った煙は、空を覆う濁った雲に紛れてその姿を眩ませていた。

一瞬にして、ぼんやりしていた頭が覚醒した。

気を失う直前の事を思い返そうとするが、うまく思い出す事ができない。

必死に逃げている途中で腕を掴まれ、地面に引き倒されてしまった記憶があるので、その際に意識がとんでしまったのだろう。ただ、その直前までに何があったのかは頭からすっかり抜け落ちてしまっていて、どうしても思い出す事ができなかった。

周囲からは一切の音がしない。崩れた建築材の隙間を吹き抜ける風だけが、砂埃を巻き上げてかすかな音を残していく。ほとんど聞き取れるか否かのその音は、耳にした人間の不安を煽りたてた。

他に生き残りはいないのか、捜しに行くことも可能な状況だ。しかし、体が思うように動かない。移動は愚か、立ち上がる事さえ叶わないのだ。無理に動き出そうと足を立てるが、バランスを崩して再びその場に倒れこんでしまった。

相変わらず、辺りは静寂に包まれている。風も止んでしまったように、耳が聞こえなくなつたと錯覚するほどに何の音も聞こえなくなってしまった。

虫の声も、木々のざわめきも、何も。
絶望に、涙が溢れた。

どのくらいそうしていただろうか。音に飢えていた耳が小さな音を聞き取り、反射的に顔を上げた。

それは人の足音だった。距離はあるが、こちらに向かってきているようだ。音が重複していないので、一人だけだと思われる。

体を起こそうとするが、やはり力が入らない。それでも、藁に縋るような思いで、音のする方に視線を向けた。

目に入っただのは、見慣れた幼馴染の姿だった。

服はボロボロに汚れていて、表情には疲労がくつきりと浮かんでいる。しかし、それは確かに毎日顔を合わせていた幼馴染だ。

夢中で呼びかけようと喉に力を込めるものの、掠れた呻き声のようなものしか出てこない。とにかくこちらに気付いてほしい一心で、かろうじて動く腕を力の限り動かし続けた。

やがてこちらに気付いたのか、歩くペースが速くなった。ゆっくりとした徒歩から小走りへ、そして最終的にはほとんど全力疾走となり、すぐ隣までやってきてしゃがみこんだ。

相手の顔はよく見えない。こちらを見下ろしているのは間違いないだろうが、逆光のせいで真っ黒なシルエットとなってしまうて輪郭がぼやけて見える。

今、どんな表情なのだろう。変わり果てた幼馴染の姿を見て悲しんでいるのだろうか。

心配をかけて申し訳なくもあるが、それでもやはり嬉しかった。自分の事を気にかけてくれる人が、こんなにも傍にいるのだから。

しゃがんでいた幼馴染は、その場で地面に座り込んだ。そのままこちらをじっと見つめている。

不思議な感覚だった。さっきまではどんなに足掻いても体が動かなかったのに、幼馴染の姿を認めた途端に力が蘇ってきたのだ。地面に手をつけて力を込めると、体がゆっくりと持ち上がっていく。

このまま死ぬなんて絶対に嫌だ。そう願えば願うほど、腕や足に

力が溢れてくる。

幼馴染の影は、流石に少し驚いたようだ。だがそんなことは気にせず、さらに体を起こしていく。ひざから上は完全に地面から離れたが、まだ足のバランスが上手くとれない。支えがないと立ち上がれそうになく、反射的に支えとなりそうなものを探す。

不意に、目の前に掌が現れた。

顔を上げてみると、こちらに手を差し伸べている幼馴染の姿が映った。

「……行こう」

震えながらも、確かな希望をかみしめている声。

突然の事で、どうしてもいいか分からなくなってしまう。目の前には自分の為に与えられた手があるというのに、頭の中がぐるぐる回ってしまい体を動かせない。

そんなこちらの混乱を汲み取ったのか、同じ言葉がもう一度繰り返された。

「一緒に行こう」

相変わらずの逆光で、顔は黒く染まって見える。

しかし、そこに浮かんでいる笑顔が、確かにその一瞬だけ見えたのだ。

収拾のつかなくなっていた頭に光が差し込んだ気分だった。

微笑みを返しながら、求められるままこちらの手を重ね合わせた。

異性の事をこれほど頼もしいと感じたのは、これが初めてかもしれない。今後、もう二度と感じることはないかもしれない。

もしそうだとしても、この瞬間の事はずっと忘れないだろう。手を掴んで立ちあがると、幼馴染の顔がすぐ目の前に迫った。いっ

つになく力強く、しかしとても儚い頼もしさ。

最後の涙が、頬を滑り落ちていった。

1話 嵐

「失礼、ちょっと道を尋ねてもいいかな」

いかにも隊商の一員といった風貌の男が、近くにいた少年を呼びとめた。退屈そうにしていた少年は声をかけられた位置から動こうとせず、顔だけを男に向けた。

見た目は十代半ばといった雰囲気少年に、男は気さくに歩み寄っていく。

「この道を行けばレダーコールの街につくかい？」

「ああ……はい、着きますよ」

少年の声のトーンは予想よりも低いものだったが、男はさして気にせず質問を続けた。

「どのくらいで着くか分かるかな」

「普通の人の足なら……三時間くらいでしょうか。歩き慣れた人ならもっと早いかもしれません」

「なるほど。ありがとう、助かったよ」

軽く頭を下げ、男は仲間の元へ戻るべく踵を返す。

「でも、行かないほうがいいですよ。絶対に」

だが、少年がそう告げて男の足を止めた。

「……どうということだい？」

怪訝そうに眉根を寄せる男。今の少年の発言は、嫌でも気になってしまっただけの大きな違和感があった。まるで警告のようにも受け取る事ができ、無視することが躊躇われてしまう。

対する少年は、あくまでも平然とした態度のまま、衝撃的な言葉を口にした。

「あそこはもう、ただの廃墟ですから」

レダーコールは、シダ大陸の南東に位置する比較的大きな町とし

て知られている。

大陸第五位の人口を保有し、貿易の中継点として多くの商人が行き来する。そのために多種多様な物資を手に入れることができ、利便性の高さから『市場』という愛称で親しまれていた。

その『市場』が、見る影もない廃墟と化した。

一体何があったのか、情報は一切人々に伝わらなかった。事実を伝える人間が一人たりとも存在していなかったことが大きな要因となっているだろう。

事件の大半が「未知」のままとなり、大陸中の人々に不安と恐怖を撒き散らしていった。

この事件こそが始まりであつたと発覚するのは、もう少し後の事となる。

遠ざかつていく男の姿を見送りながら、少年——エルクは小さく溜息をついた。

空一面を厚い雲が覆っており、日中だというのに薄暗い。風も強くなつてきており、今にも雨が降り出しそうな気配だ。早急に雨をしのげる場所を探さなければならぬのだが、彼にはまだそこを動けない理由があつた。

「エルクッ！ お待たせ！」

後ろから肩をたたかれたエルクは、呆れたように息を吐いてゆっくり振り返つた。

「メフィ、遅いよ」

そこに立っているのは、錆色の髪少女。自信に満ち溢れた目でうんざり顔のエルクを真つ直ぐに射抜いている。

メフィと呼ばれた彼女は、リーダーコールを離れる際になつたエルクの幼馴染だ。幼さの残る顔立ちをしているが、それを感じさせないほどの勝気な態度が最大の特徴としてエルクに認識されている。

レダーコールを出た二人は現在、街道沿いの小池で小休止をとっていた。二人揃って全身汚れまみれだったので、ここで汚れを落とすことにしたのだ。

「僕はもうちよつと早かったと思うんだけど……」

「男とは違うのよ。洗い残したら嫌だもん」

言いながらメフィは、自らの頬を指でなぞった。ススで汚れていた彼女の顔は、今はその面影を感じさせない。対するエルクはというと、メフィより先に洗ったにもかかわらずまだ汚れの存在が目立つ。どちらが綺麗になっているかは一目瞭然だった。

「エルクももう一度洗ってきたら？ そしたらちよつとはマシになるかも」

「いいよ、別に。雨も降りそうだし、それで流せば十分」

「……もう」

「？」

突然メフィが怒りだした理由が分からず、エルクはまた溜息をつく。急に疳癩を起こすのは以前からよくあったので、今ではエルクもほとんど気にしなくなっている。黙って嵐をやり過ごした方が被害を抑えられると、長い経験の中で学習しているのだ。

「早く出して」

見るからに不機嫌な表情と共に突き出される掌。

「何を」

「タオル！」

ほとんど叫ぶような声に、エルクは半ば呆れつつ――内心では、その元気に安心していた。

濡らしたタオルで手を拭いているメフィを見ながら、エルクは廃墟となったレダーコールでの事を思い出していた。

メフィと二人で少し歩き回ってみても、誰かの姿を見つけることはできなかった。既に街を離れていたか、他に生存者がいないのか、とにかく時間の無駄でしかないことは二人にもすぐに分かった。

街の姿から予想できていたことなので、エルクはそれほど気落ちしなかった。もちろんその惨状を簡単に受容できたわけではなく、今も気が動転していると自覚している。

対するメフィは、途中で一切口を開かなかった。表情は普段通りの強気な少女のままひたすら沈黙を貫き通している姿が、エルクの脳裏に焼き付いている。

現在の彼女は、旅路の疲労を感じさせない活発な様子に戻っている。一見すればいつも通りの姿なのだが、無理に明るく振舞おうとしているのが端々に表れている。エルクは、とつくにそれに気づいていた。

当然だった。エルクもまた、彼女と同じ状態なのだ。

あれほどの惨事の直後だというのに、エルクもメフィも、あまりに落ち着きすぎている。

お互いが相手に気を遣いすぎているのかもしれない。だからこそ、こんな状況にありながら異様なまでに冷静であるうとしているのだろう。

乱暴な手つきでタオルをたたんだメフィがエルクの元へと戻ってきている。不自然に自然なその仕草を、エルクは遠い目で眺めている。

「あ、降り出した」

空を見上げ、エルクが呟く。雲の色はますます濁ってきており、そこから降ってくる雨粒は既にかかりの勢いを得ている。本格的に土砂降りとなるまでそれほど時間はかからないだろう。

「やだ、せっかくキレイにしたのにー」

「とにかく急ごう。まだ強くなりそうだよ」

不満を口にするメフィをたしなめ、エルクも出発の準備を始める。もともと荷物はほとんど持ち出していないので、準備らしい作業があるわけではない。枝に提げていたリュックを掴んだエルクが振り返ると、いつでも走り出せそうなメフィがもどかしそうに彼を待つ

ていた。

「しかしまあ、濡れるのも悪くないかもね」

「どういう理由で？」

「汚れが落ちる」

「……」

無言のままエルクの頭を小突き、メファイが先に走りだす。その後を追うようにして、エルクもすぐに駆け出した。

草木の葉に水滴が当たって弾み、降り注ぐ雨の勢いがどれだけ強いかを如実に表している。黒く姿を象っている雲はめまぐるしい速度で流れていき、遠方からは雷鳴のような音が近づいてきている。

「どんどん強くなるなあ……まいったな」

下り坂の空模様を確かめてから、エルクがメファイの横に並ぶ。基礎体力の差か、メファイの全速力もエルクにとってはそれほど速くないようだ。

「これ、多分嵐になるよ。外にいと危険なんじゃないかな」

「……エルク、何でそこまで落ち着いて……ううん、なんでもない」

走りながらメファイは、その顔から先刻までの勝気な表情を消し去った。だがそれも一瞬の事で、またすぐに普段通りの顔を作りだす。「それくらい私でも分かるわよ。だからこうして走ってるんでしょ？」

「正論だけど……あてがあって走ってるんだよね？」

「……」

エルクの問いに、メファイは沈黙する。誤魔化すように目をそらす様子から、エルクはどんな返答がくるかおよその見当をつけた。

「ご、ごめん。慌ててたから何も考える余裕なくて」

「……まあ、メファイは昔からそうだもんね。大丈夫、気にしてないよ」

「ちよつ、それは酷くない!？」

メファイの抗議を聞き流し、エルクはスピードを上げてメファイの前に出た。進路は変わらず道に沿っているものの、その走り方は何か

明確な目標がある時のそれだ。

メファイが首を傾げると、示し合わせたようにエルクが説明を始めた。

「メファイがいないときに隊商っぽい人に会ってね。別れてからあんまり時間も経ってないし、まだ近くにいると思うんだ。その人もどこかで雨宿りをしてるはず」

口を動かしつつも、エルクは道の両脇にくまなく視線を送っている。それらしいものを見つければ即座に反応できる態勢だ。

「なるほど、そんなことがあったのね」

納得したメファイも、エルクの後ろについて隊商の姿を探しはじめた。

「ついでに食料も分けてもらえると嬉しいんだけどなあ」

「僕に訊かれてもね……」

滝のように雨が降り、容赦なく大地を叩いている。しきりに稲妻が輝き、時折落雷したかのような振動が伝わってくる。あまりの悪天候に、三步先の障害物はもう見えなくなってしまうほどだ。水はけの悪い地面では、小規模な池や川が生じ始めていた。

パシャリ、と音がして水がはねる。ほとんど間を置かず、パシャ、パシャリと続く。

小柄な人影が水の上を駆け抜けている。そこに足元の水音と、酷く荒れた呼吸の音が重なった。

「助けて……」

誰にもなく発せられた声は、嵐の轟音の中に吸い込まれて消えてしまう。

「誰か、助けて……」

救いを求める言葉が繰り返される。だが、それすらも虚しく雷雨にかき消されてしまい誰の耳にも入らない。

何度も後ろを確認しながら、人影の疾走は続く。ただがむしゃらに走っているのは火を見るよりも明らかで、しばらくして急激に速度が落ち、倒れるようにして近くの大木にもたれかかってしまった。幹に頬をつけ、自身の過呼吸の確認をする。

「助けて……たす、け……」

言葉が途中で切れる。それと同時に頬が離れ、人影は地面に倒れ伏した。

2話 うしろの声

雨量は瞬く間に増え、今はまるで洪水の中にいるかのような有様だ。当然ながら、その中にいたエルクとメフィはすっかり濡れ鼠と化してしまっていた。

おまけに視界が悪く、隊商探しも困難な状態となっている。二人も既に目的を変更しており、道の脇の巨木の下でひとまずの雨宿りをしていた。

枝葉の間から水滴が滴り落ち、満足に雨をしのぐ事もできない。

無いよりマシだからとメフィが半ば強制的にエルクを引き留め、現状に至る。

「うわー、びつしょびしょ。体に張り付いてくるよ」

上着をつまんで引っぱり、エルクが溜息混じりに笑った。

あまり薄い生地ではなく、耐水性もある程度は持っている素材で作られている。それでも、ここまで異常な降水量は流石に耐えられなかったようだ。木に立てかけるように置いたボロボロのリュックも、中身まで水浸しになってしまっている。

「ねえエルク、ちょっと後ろ向いてて」

服がぬれて気持ち悪そうにしていたメフィが、唐突にそんな事を言い出した。

「どうかしたの？」

「上を脱ぐのよ。このままじゃ風邪ひいちゃうもん」

「あ……ああ、そういうこと」

恥ずかしそうにしているメフィにつられ、エルクも顔が赤くなる。気が利かなかつたと自身を反省し、エルクは言われた通り背中を向けた。

「これでいい？」

「ん、ありがと」

お礼を簡潔に言い、メフィがずぶ濡れの服を脱ぎ始めた。もちろんエルクは直視などしてないが、体に張り付いた服を脱ごうと動いているのは見なくとも分かってしまう。

「よい、しょ……と」

「……………」

しばらくして水気を含んだ衣擦れの音が聞こえ始め、エルクは身が凍りついた。

すぐ後ろではメフィが着替えの真っ最中だ。後ろを向いてはいるが、居心地が悪いことこの上ない。

「あ、えつと……メフィ？」

首を固定し、絶対に振り返らないようにしながら口を動かす。

「なに？」

「その、僕、木の向こう側に行ってるよ」

「え？　ちょ、ちょっと」

「そのほうがメフィも安心して着替えられるよね？　終わったら呼んで」

早口に言いきったエルクは、メフィの返事を待たずに歩き始めた。横の木はそこまで大きくないが、間に挟めば仕切りとするには十分な太さがある。

「待ってよ！」

「うわ！？」

追いかけてきたメフィが、焦ったような声とともにエルクの腕を掴んでいた。急ぎ足だった上に不意を疲れたため、エルクの身体が後ろによろける。

「な、何？」

「そのほうが安心？　そんなわけないでしょ！　私のそば……うつん、せめて見える所にいて！」

「……メフィ？」

あまりに強い口調に気圧され、エルクは思わず後ろを向く。メフィは服を半分脱ぎかけていたが、それを気にする様子は見受けられなかった。強がってはいるものの、孤独に押しつぶされそうになっているのが見て取れる。

「い、一緒にいたほうが……安心に、決まってるじゃない」

メフィの手は、小刻みに震えていた。

「……………」

何も言い返せず、エルクは黙って俯いた。

分かっているはずだった。メフィは故郷の滅亡を目の当たりにし、共に旅に出た幼馴染以外に頼れる人間がいなくなってしまったのだ。不安になり、独りになるのを極端に恐れても無理はない精神状態になっている。

そしてエルクも、メフィと同じ境遇なのだ。彼女の気持ちに共感できる部分も多い。だからこそ、迂闊な行動に出してしまったことがひどく悔まれた。

「ごめん」

「あ……その、謝らなくていいよ。私もちょっとわがままだった」「そんなことないよ。僕だって、きつと……」

エルクも分かっていた。自分もまた、独りには耐えられないのだと。

言葉は途中で切れたものの、メフィには伝わったようだ。未だに震えている手を、エルクからそっと離れた。

手ごろな高さの枝に二着の上着が干され、袖や裾からしきりに水滴が落ちていく。上からは葉っぱで集められた雨粒が降ってきているので、雨自体がやまない限り乾く事はないだろう。

「雷、鳴らなくなったね」

「もうすぐやむかなあ」

エルクとメフィは、背中あわせになつて巨木の根に腰をおろしている。どちらも上半身に衣類をまとい、相手のほうを見ないようにしている。

決して離れようとはせず、かといって恋人同士のようにぴったりとくっついているわけでもない、微妙な距離。その間を保ちながら、それぞれが相手の存在を背中を感じ取っている。

たった二人だけの、切り離された空間。確かにそこにいる『もう一人』は、二人に少しばかりの安らぎを与えていた。

暴れるようだった雨は落ち着きを見せつつあり、穏やかな雨音が耳を伝つて全身へと染み渡っていく。水が葉で弾み、幹を伝い、土に染み込んでいくまで、全てが聴き取れるかのようだ。

「静かだね」

「うん……」

感慨深げにメフィが呟き、エルクがそれに同意する。

それきり会話もなくなり、雨の降りしきる静寂が辺りを包み込む。二人とも自然に目を閉じ、単調な雨音に耳を傾けた。

「……………」

「……………」

引き延ばされた時間が、ゆっくりと流れていく。

「……………、？」

唐突に、メフィが眉をひそめた。

「エルク……………気付いた？」

「……………うん」

エルクも頷く。既に目は明けており、表情は苦虫を噛み潰したよ

うなものになっている。メフィも同様の表情をしており、どちらも同じ事に気が付いているようだ。

「メフィ、服取って」

「え？ あ、うん」

振り向かないままエルクが後ろ向きに服を指さす。干してある服はメフィの正面につりさげられていた。メフィは一瞬戸惑ったが、すぐ言われた通りに服を取りに行った。

「ねえ……まだ濡れてるよ？」

「分かってる」

肩越しに服を渡されるなり、エルクはすぐさまそれを着込んだ。当然ながら全く乾いておらず、体に張り付く様子も干す前と変わっていない。

しばらくはエルクの背中を見つめていたメフィだったが、呆れたように溜息をひとつつくと、彼に続いて自分の服を身に着けることにした。

「メフィはどう思う？」

ずれて張り付いた部分を気にしながらエルクが問いかける。

「少なくとも隊商の人じゃないよね。……あとは、追手とか」

それに対するメフィの返答は、どこか怯えているような、気迫のないものだった。

二人が気付いたのは、人の声。

まるで呻くような声が、雨の音に混じって聞こえてきたのだ。それも、二人のいる巨木のすぐ反対側から。

「追手……って、何の？ それはないんじゃないかな」

苦笑しつつも、エルクは油断せず声の出所へ気を配っている。急に服を着たのは、そちらの様子を見に行くためである。

一方、エルクに苦笑されたのが気に食わなかったのか、メフィが頬を膨らませていた。不機嫌モードに逆戻りしてしまったようだ。

「あるわよ！ 私、レダーコールで武器持った奴に追い回されたのよ？」

「……え？」

突然の暴露に、エルクが目丸くして振り返る。自己の世界に入
って説明しているメフィは、エルクの反応には気づいていない。

「途中で気を失っちゃったから詳しくは分からないけど……レダー
コールがあんなことになったのは絶対あいつらのせいよ！」

「あ……そう、なんだ……」

「……エルクは見えてないの？」

「あ、それが、すぐに気を失っちゃったみたいで」

はぐらかすような物言いにメフィは疑問を抱いたようだが、追及
はやめて何者かの方向に意識を傾けた。今の最優先事項は木の向こ
う側の人物だ。

「ま、それでも追手ではないと思うよ。一人みたいだし、誰かを探
してるふうでもないし」

「じゃあ他に考えられる可能性は？」

「そうだなあ……僕ら以外の生き残りじゃない」

あまり期待をした様子のないエルクの声。メフィに表情を見せな
いように、幹に張り付いて木の裏側の状況を窺っている。メフィは
そんなエルクの態度のほうに気になったようだが、口に出して尋ね
ることはしなかった。

「……もしそうなら、一緒に連れてく？」

「どうしようか」

現在の二人は、ひとまず落ち着くために隣の街を目指している最
中だ。それ以後の事も含めて、他は何も考えていない。考える余裕
がない、と言った方がいいかもしれない。

そんな状態で新たに同行者を増やすのは、双方にとって良い結果
とならない可能性のほうが高い。もちろん隣の街につくまでの間だ
け共に行動するなど、一時的であればそうとも限らないのだが。

エルクは問いに答えず、大きく横に伸びる根に飛び乗った。そこ
で何かを思いついたように振り返り、ついてきていたメフィと目を
合わせる。

「少し様子を見てくるから、メフィはここで……」

「？」

「じゃなくて、僕から離れないようにね」

「……勿論よ」

エルクが手を差し伸べると、メフィは一瞬だけ笑い、嬉しそうにその手をとった。

「何か見える？」

「うーん、まだ何も……」

下方を見つめながらエルクが首を振る。今もまだ先刻の呻き声が聞こえてきており、大体の位置まで把握することが可能だ。だが生い茂る草の丈が思いの外長く、人の姿らしきものは捉える事ができない。

「降りてみようか」

根の上からの偵察を諦め、反対側へ降り立つエルク。メフィもすぐ後を追ひ、列になって歩き始めた。慎重になって歩みが非常に遅いのは二人共の事で、草を踏みしめる度に動きを止め、周囲の様子を確かめている。

ただ、エルクは何かを警戒してではなく、メフィを気遣ってそれを行っているようだ。

「も、もうちょっと早く行つてよ」

「どんどん行っちゃおうか？」

「……っ！ い、イジワル！」

メフィはエルクにしっかりとついてきている。やはり不安なのだろうが、もう少し素直でもいいのではないかとエルクは思わないでもない。

少し歩いてみて分かったのは、草や木の根がエルクの考えている以上に複雑に伸びているということだった。服を干していた向こう側とはまるで様子が違い、誰かが横になっているとその姿は簡単に

隠されてしまいそうだ。近づいてみてこの探しにくさなのだから、根の上からなど見つけれられるはずがない。

「……あ、また」

再び声が聞こえる。かなり近く、それこそ目の前から聞こえているかのようなのに、その姿を見つけれない。

これ以上進むと、逆に声から離れていつてしまう。そう判断したエルクは、周辺を丹念に搜索し始めた。足元に注意を払いながら歩いていると、メファイもそれに律儀についてくる。

「躓きやすいから気をつけてね」

「分かっているわよ……ひゃっ!？」

「つて、メファイ!」

メファイが突然素っ頓狂な声を上げ、思い切り顔面から倒れこんでしまった。エルクの言ったそばから突き出ていた根に足を取られたらしい。幸いにも顔の着地点は草地だったようだが、またしても体が汚れてしまったのは間違いないだろう。

「だ、大丈夫?」

「もう、最悪……あ、え?」

半泣きで立ちあがろうとしていたメファイが、草の中へ視線を向けて動きを止めた。一瞬だけ訳の分からないような顔をしてから、それがみるみる青ざめていく。

「メファイ?」

「エルク……そ、そこ……!」

メファイの指さした方へ、エルクも視線を向ける。くまなく探しているつもりだったので半信半疑だったのだが、草の下から姿を現した人の姿を認めるとエルクも呼吸が止まりそうになった。

そこには、草と根に守られるように横たわる少女の姿があった。

2話 うしろの声（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

気まぐれに更新させていただきます。大学の講義の関係から、恐らく更新は土日か水曜になるとおもいます。それも気まぐれで変化する気がしますが。

かなり気の長いプロットにしたので、いくらか更新されてからまとめて読んだ方がいいかもしれません。

3話 雨上がり

「はあ……」

未だに目を覚まさない少女を見下ろし、エルクは溜息をついた。倒れていた少女を連れ出してからしばらくたつ。雨は上がっており、空を流れる雲もだいぶ明度が増してきているようだ。もちろん、少女をこのままにして動き出すわけにはいかない。

「助けて………助けて……」

少女の口からは、今も助けを求める言葉が紡がれ続けている。表情には絶望が滲み出ており、尋常でないその苦しみ方は見るに堪えない。とても見ていられずに目をそらしたエルクは、じっと少女を見つめているメフィに気づいた。

「ねえ、やっぱりこの子変わってるよね」

「帽子の事？ うん、確かに変だよな」

言いながらエルクは、少女の頭部へと視線を向けた。

少女の頭には、大きなキノコのカサが被せられている。

頭よりやや大きいくらいのサイズは帽子と捉えても差し支えない。だがそのキノコは、どうやら少女の頭と完全にくっついてしまっているようなのだ。

横にしたときにエルクが脱がせてみようとしたのだが、ピッタリと張り付いていて離れない。無理に取ろうとすると少女が痛みがり始めたので、仕方なく被らせたままとなっている。

「そうじゃなくて……いや、帽子も確かに変ではあるけど」
メフィもその点は否定しないようだ。

「ちよつと痩せすぎな気がするのよ。歳は私たちとそんなに変わらないはずなのに、この子は……」

そう言いながら、メフィはおもむろに少女の腕をまくりあげた。独特なデザインの服は丈に余裕を持たせしていると外見で分かった

のだが、それを差し引いても彼女の腕はあまりに細いものだった。骨と皮ばかりという表現でさえ足りなく感じてしまうほどだ。

見た限り外傷は無いものの、彼女が衰弱しているのはよく分かる。メフィに腕を持ちあげられて力無く垂れる手首は、彼女が生きているということさえ疑わせた。

「うん……そうだよな」

「エルク、何か食べ物は？」

焦ったようなメフィの声に、エルクはハッとして自らのリュックの中をまさぐる。

廃墟だったレダーコールで、ある程度旅の準備はしていた。食料もその時にかき集めてリュックに入れた記憶がある。

「けど、こんなの食べられるかなあ……」

リュックの底からエルクが引っ張り出したのは、保存のききそうにな干し肉だった。かなり固そうで、今の少女が食べられるとはとても思えない。他の食料も似たような保存食ばかりで、彼女に食料を与えるのは厳しいように思えた。

せめて水だけでも飲ませた方がいいかもしれない。そう考えたエルクは、食料の代わりに水筒を取り出した。先ほどの小池で水を汲んでおいたので、中身には余裕がある。

「メフィ。せめてこれだけでも」

「ああ、ありがと」

水筒を受け取ったメフィは、少女の頭を起こして水を飲ませ始めた。飲める状態にあるかは分からなかったが、あとはメフィに任せ、問題ないだろう。

それを確認したエルクは、おもむろに道の中央へと歩み出た。

蛇行する道の先に顔を向け、エルク先刻会った隊商の事を思い出していた。

あの隊商はもう出発しているのだろうか。雨も上がり、少しでも

ロスした時間を取り戻そうとするのは当たり前と言えた。少し前に一人の男性がリーダーコール側から走り抜けていったのは、おそらくあの隊商が様子を見に行かせていたのだろう。

意識のない少女も連れている今、彼らと合流することは不可能に近い。

彼らに頼めばもつとしつかりした食料を分けてもらえたかもしれないし、少女の事を話せば力を借りることも可能だったはずだ。

一瞬だけ単身で追いかけてようかとエルクは考えたが、すぐに諦めた。

後ろを振り返る。そこではメフィが少女に少しずつ水を飲ませているようだ。少女の悲痛な声は聞こえなくなっている。

自分がこの場を離れたら、メフィはどんな思いで待つことになるのだろう。それを想像すると、エルク自身の身体にも寒気が襲ってきた。いずれは別行動も可能になるだろうが、今はまだ不安が拭いきれないはずだ。

彼女の傍にしよう。そう心に決めると、エルクは踵を返してメフィのもとへと戻っていった。

「まいったなあ……」

往路と全く同じ荷物を背負って歩きながら、隊商の男が何度目とも分らない独り言を呟いた。

道端の少年からリーダーコールの現状をきかされても、すぐには信じる事ができなかった。しかし実際にリーダーコールとは連絡が取れず、それらしい違和感を感じ取ることができた。豪雨の中、下っ端に様子を見に行かせた事でようやく事実として受け入れることができたのだ。

結局リーダーコールに卸す予定だった荷物を持ったまま、来た道を引き返さざるを得なくなってしまった。しかも荷物というのが特殊

な用途の金属器具らしく、かなりの重量がある。男が愚痴をこぼしたくなるのも当然のことと言えた。

「労力と時間が無駄になったんだ。商売人としちゃ痛手だよなあ」隣を歩く男からも嘆息がこぼれる。大きな隊ではないので、メンバーは全員で五人という小規模なものだ。

「それもそうだが……気になるのは、リーダーコールが崩壊したってことだろ？」

「ああ……いったい何があったんだろうか。天災ではなさそうだし、原因なんて……」

出かけた言葉が一瞬途切れる。そして打ち合わせたかのようにお互いに首を向け、並んで歩く二人の目が合った。

「これは『奴ら』じゃないか？」

「俺もそう思った」

声をひそませるようにして二人は会話を続ける。もともと他の人間は二人の会話を気にも留めていなかったようだが、これでだれにも話を聞かれることはないだろう。

「まさかここまでやるなんてな。日和見の連中と思って油断してた」
「上に報告すべきだろうな。リーダーコールを滅ぼすなんて、『奴ら』も本気ってことなんだろう」

それ以後二人とも口を噤み、表情を引き締めて黙々と歩き続けた。

「う……ん……」

しばらく何も言わなくなっていた少女が、急にこれまでと違うタイプの声を発した。ほとんど喃語のように聞こえるが、彼女が意識を取り戻したというのは把握できる。

「目、覚めた？」

「みたいよ」

エルクとメフィは少女の顔を覗き込む。少女は未だに苦しそうに

しているが、うなされているわけではなさそうだ。

そして間を置かずに、少女の目がうつすらと開いた。

「あ……？」

半分ほど開いたままで少女の瞳がエルクを見る。それからメフィへと移り、そして周囲を見回しはじめた。まだ状況がよく掴めていないのだろう、呆然とした表情をしている。

「あ、れ……？　ここは……」

「よかった、気がついたね。大丈夫？」

エルクがそう声をかけると、少女の目がエルクを見た。半開きのままだった瞳が、エルクを見ながらだんだんと開いていく。

「……………！？」

ほぼ完全に開いたところで、少女の表情に劇的な変化が訪れた。何も感情がなかった顔は一瞬で恐怖へと染まり、エルクの事を怯えた目つきで睨みつけてきたのだ。

「うそ……い、いやぁ……！」

どう考えても通常の反応ではない。そう感じたエルクは、ひとまず落ち着かせようと再び口を開いた。

「ねえ、どうしたの？　ひょっとして君もレダーコールの——」

「いやああああああ！　こないでえ！」

「わぁ！？」

叫ぶと同時に、少女はエルクの事を思い切り突き飛ばした。

思いがけない衝撃に、エルクは後ろに飛ばされてしりもちをついてしまう。驚いて顔を上げた時には、少女はかなり距離を置いて二人の様子をうかがっていた。エルクの隣にいたメフィは状況についていけないようで、少女とエルクを何度も見比べてオロオロしている。

「いたた……き、急にどうしたの？　驚いたのは分かるけど」

「私が……私が何をしたっていうんですか！？」

エルクが立ち上がると、少女はさらに一歩後ずさった。近づこうと踏み出せば、同じ分だけ下がって距離を保とうとしているようだ。

エルクから目を離さないようにしているが、すぐにでも全速力で逃げ出せるように身構えている。

「私もう耐えられな——あっ」

不意に少女の姿勢が崩れ、その場にぺたんと座りこんでしまった。「ちよつと、ホントに大丈夫？」

反射的にエルクが駆け寄ると、少女は顔を真っ青にして逃走を図る。しかし既に体力を使い果たしてしまっているのか、立ち上がることもすら叶わないようだ。

「ひっ……いや……」

「少し落ち着こうよ。ひどい事は絶対しないから」

我ながら胡散臭いセリフだとエルクは内心で自嘲したが、他に言い表せないのだから仕方がない。当然の事だが、今の言葉で少女が落ち着いた様子はない。

「う、あ、あっち行ってください！ こっちに来ないでください！」

最後の抵抗とばかりに両手を振りまわす少女。自暴自棄にしか見えないその必死な姿に、エルクは胸を締め付けられるような感覚に襲われた。

間違はなく自分へ向けられている拳を見て、エルクは小さく息を吐く。

「……うん、これ以上は近づかないよ」

「……え？」

予想外の反応だったのか、少女が動きを止めてエルクを見つめた。丸い瞳からは未だに涙が溢れ出ている。

「だからさ、待つよ。君が落ち着くまで」

エルクの後方ではメフィが事の成り行きを見守っている。どうやら事態の解決は全面的にエルクに任せることにしたようだ。

「え？ あ……えと」

「これは信じてもらうしかないけど、僕たちは敵じゃないよ。安心してくれていいから」

混乱している少女に向かい、エルクは自分の言葉を遠慮なく浴び

せていく。そして一通り言い終えると、のんびりした様子でその場に座り込んでしまった。それにより、目線が少女と同じ高さになる。しばらく反応に困っていた少女は、何かを見定めるようにエルクの事を真っ直ぐ見つめてきた。それにたじろぐでもなく、エルクはその視線を正面から受け止める。

「……『奴ら』とは、関係ないんですか？」

「うん？ 『奴ら』って何のこと？」

「い、痛い事とか……しないですか？」

「しないしない」

はつきり首を横に振って答える。それでも少女は悩んでいるようだったが、やがて強張っていた体からゆっくり力を抜いた。

「……まだ、信じたわけじゃないですけど……」

「それでいいと思うよ。用心深いのは悪い事じゃない」

自虐的に笑ったエルクが右手を差し出したが、少女はその手を掴もうとはしなかった。

4話 永い旅の前に

少しずつ陽が傾き始め、あたりにゆっくりと闇が差し始めてきている。灯りなしでの野宿は当然危険なのだが、エルクがランタンを持ちだしていたために暗闇で一夜を明かす事態は避けられている。

「準備いいのね」

「燃料はあんまりないんだ。今夜でおしまいだと思うよ」

「それでも、よく咄嗟にランタンを探そうとしたわね。普通はそんなの思いつかないわよ、ねえ？」

「え……あ、えーと？」

ランタンを囲んで干し肉と水だけの簡素な夕食を取る三人。メフイは積極的に少女に話しかけており、その表情もいつになく明るい。同性だからなのか、エルクに対してよりもいくらか饒舌になっているようだ。

ただし、少女は決して楽しげな様子ではない。

冷静さを取り戻しても、少女はあまり多くを語ろうとしなかった。シューラという名前は明かしたものの、どこ出身なのか、なぜ倒れていたのか、頭のキノコは何なのかも一切喋ろうとしないのだ。しかもただ黙秘するだけでなく、訊いた途端に泣きそうな顔になってしまうので、二人も無理に聞き出すことができなかった。

「これからどうするの？」

会話の途中でメフィがそれとなくシューラに訊ねた。メフィは干し肉を一枚握っており、少しずつちぎって食べやすいようにしているようだ。

「まだちゃんと考えてませんけど……家に帰るつもりです」

シューラはメフィから肉の欠片を受け取ると、それを口に運んだ。

食事が問題なくできるほどまで体調は整ってきているらしい。

「そりゃそうよね。で、シューラの家ってどこ？　ここから近いの？」

「……………」

「な、泣かないで！　今のはなし、なし！」

涙ぐむシューラを見てメフィが慌てて訂正する。今の質問も彼女にとつては答えたくないものなのだろう。

「……二人はどうするんですか？　私とずっと一緒にいますけど、急ぎの用事とかはないんですか？」

「それは大丈夫。ただ、どうするかって訊かれると……ねえ？」

「……うん」

メフィに急に話を振られ、傍観者気分だったエルクはとりあえず頷いた。そして言いにくそうにしているメフィの代わりに口を開く。

「どこに行くとか、全然決めてないんだよね。敢えて言うなら『どこか』って感じ」

「どこか？」

シューラが不思議そうに首をかしげる。事情を知らなければ当然の反応だろう。

「新しく暮らせる場所を探そうと思ってね。決まったところに行きたいわけじゃないってこと」

「そうですか……」

シューラはいまいち納得できていないようだった。

出立の理由を伏せているので、現実味に欠けているのはエルクも自覚している。だがエルクは、事情を話して同情されるのはできれば避けたいと考えたのだ。

お互いに次の言葉を見失い黙り込んでしまう。

「……私はあるわ、目的」

しばらく何かを考えているようだったメフィが唐突に口を開いた。「こんなことになった原因……あいつらの正体を確かめたいの。どうしてこうなったのか、どうしてレダーコールを滅ぼしたのか、そ

れが知りたい」

「あいつら？」

色々と説明不足なメフィの言葉に、シューラの疑問符が増える。説明ではなく決意だったのか、メフィに理解を求めようとする姿勢は見られない。半ば呆れながら、エルクが話の続きを伝えることにした。

「前に住んでた街が、よく分からない連中にボロボロにされちゃったらしくてね。僕らが旅に出てるのはそのせい」

「……そんなことが」

「んー、まあ僕はメフィほど気にしてないんだけど」

首を傾げてくるシューラに、エルクは苦笑いをして見せる。あまり重苦しくならないよう軽く言ったつもりだったのだが、メフィはその反応が気に入らなかったようだ。

「エルクも少しは気にしたら？」

「え、いいよ別に」

「なんでよ？ こんな目に遭わされて、あいつらの事恨んでないの？」

「それはまあそうなんだけど、そのー」

唐突にメフィに詰め寄られ、しどろもどろになるエルク。しばらく視線を漂わせたりしていたが、小さく咳払いをしてようやくメフィと目を合わせた。

「これ以上危ないことに首突っ込むことはないと思うんだ。僕はともかく、メフィの事が心配だし」

「む……まあ、その気持ちはありがたいけど」

「復讐自体を否定はしないけどね。ただ、もっと自分を大事にしてほしいって思ってるだけだから」

「……」

諭すようなエルクの言葉に、メフィはとうとう反論できなくなつたようだ。不服そうな様子なので、完全に諦めたわけでもないようだが。

「それでも…… 答えだけでも、見つけたいよ」

「うん。気持ちの整理をつけるには、そのほうがいいのかもしれないね」

エルクが笑って肯定すると、メフィも安心したように笑顔を浮かべた。

ランタンの灯りだけが辺りを照らし、あとは煌めく月だけがほのかに地上へ光を注いでいる。嵐をもたらした雲はどこへ消えてしまったのか、ばら撒いたような星の輝きが空一面に広がっている。

エルクは独りで空を見ていた。

すぐ横にランタンを据え、ぼんやりとした灯りの中で小さな光の粒を眺めている。

メフィとシューラはランタンを挟んだ隣で横になっっているので、姿が見えないというようなことはない。燃料次第だが、ひとまず真つ暗闇という状態は避けられている。

寝息が聞こえるので、少なくともメフィは眠ってしまったようだ。自分も早く寝なければならぬとエルクも分かっているのだが、どうしても眠る気になれなかった。

今日という短い時間の中で、あまりに多くの事が起こりすぎた。

目の前で起こったはずの故郷の崩壊は、既に何日も前の事のように感じられている。日付は変わっていないはずなのに、あまりに『遠い記憶』になってしまっていた。

これから考えなければならぬことも多い。シューラにも話したが、目的地は何も決まっていなかったのだ。

あてもなく彷徨う生活がいつまでも続けられるとは思っていない。かといって、頼れる親戚のような存在も心当たりがない。最悪、道中で盗賊の類に襲われるか餓死してもおかしくない状況だ。

にも関わらず、エルクは異常なまでに冷静に現状を見据えている。
（本当なら、もっと慌ててなきやいけないはずなんだけども……）
心中で自身を嘲りながら、同じ境遇であるメフィの様子を思い返す。

彼女も一見すると普段通りのようだった。だが、故郷の崩壊に対する怒りや悲しみといった感情は間違いなく持っているようだった。リーダーコールを滅ぼしたという連中への怨嗟も、その感情に基づくもののだろう。

それに対して、エルクの心はあまりに冷え切ってしまっている。
（結構冷酷なんだな、僕って）

小さなため息が、深夜の静寂に溶け込んで消えた。

「……エルクさん？」

横から声をかけられ、エルクは視線を夜空からそちらに向けた。横になって寝ていたシューラの目が開いている。彼女の丸い瞳は、ランタンに照らされながらどこか不安げにエルクの姿を捉えていた。
「起こしちゃった？」

「いえ……眠れないだけです」

「そっか」

短く返事をする、再び空を仰ぎ見る。シューラが起き上がるうとする様子はないが、そのまま眠ろうとしているわけでもなさそうだ。

しばらく黙っていたシューラが、意を決したように口を開いた。

「……お二人は、どうして一緒に旅をしているんですか？」

ひそめた声で、怯えた様子で。

エルクは視線を空に固定したまま、再び自嘲気味に笑った。目は空に向いているものの、既に星を見ているわけではない。

「自分は答えたがらないのに、人の事は聞きたがるんだね」

「あっう……その、今のは」

「いいよ。別に隠したいわけでもないし、そもそも大した話じゃない」

いから」

エルクの言葉にシューラはほっと息をついた。そして話を聞くために体を起こしたようで、ごそごと動く音が隣から聞こえた。

そちらを向いてもよかったのだが、エルクは振り返らない。

「僕とメフィは幼馴染でね、もともと仲は良かったんだ。旅に出ようって僕を誘ってくれたのもメフィ」

星空を背景に、その時の映像が目映し出される。それはまさしく『今日』の記憶なのだが、アルバムの古い写真のように褪せた色合いをしていた。

「生まれ育った街が変わり果てた姿になって……僕は、もうどうでもいいやって自暴自棄になってたんだよね。何をする気力もなくなつて、瓦礫にへたりこんで落ち込んでたんだ」

「……………」

「そしたらメフィがさ、この街を出ようって言出したんだ。僕もいろいろメフィに言ってたけど、それは衝撃的な提案だったよ。まあメフィは、復讐の為にそう言い出したみたいだけど」

「……じゃあ、いずれ二人は別れて行動するつもりなんですか？」
「それはないかなあ。確かに僕は復讐とか考えてないけど、メフィにはついて行こうと思ってる。だからまあ、落ち着いてどこかに根を下ろすのは当分先になるかもしれない」

さもおかしそうに笑ってみたが、シューラがつられて笑った様子はなかった。

エルクの脳裏に、リーダーコールでの最後の時間が蘇ってくる。

両親も、親戚も、隣近所の友人も、誰一人として生存者が見つからない。

昨日まで多くの人間でにぎわっていた大通りが、今は瓦礫と消し

炭のような何かで埋め尽くされている。徹底的な破壊痕は、誰かが意図的にリーダーコールを崩壊させた事を暗示している。

それまで平和の中で暮らしていたエルクから心を奪い取るには、それだけで十分だった。

「ダメ、こっちの方も誰もいなかったわよ……エルク？」

別方向へ生存者を捜しに行っていたメフィが、うなだれるエルクに気付いて心配そうに声をかけた。

「もう、いいよ」

エルクの口からこぼれる、諦めの言葉。

それを聞いたメフィはどう思ったのか、黙りこんでしまった。視線を落としていたエルクは、その時の彼女の表情を見てはいない。

「全部、何もかも、もうおしまいなんだ。この街も、僕も、全部ひっくるめてね」

「エルク……」

涙さえ出ない悲しみに、エルクの体から力が抜ける。このまま目を瞑り、一生眠り続ければ楽になれるような錯覚に捉われていた。

不意に両頬が包みこまれるように覆われ、顔が持ち上げられる。

頬に手を添えていたのは、メフィだった。普段の勝気な様子とは違う、優しい母親のような顔をしている。

「旅に出よう」

たったそれだけの言葉に、エルクの頭の中を困惑と動揺がめまぐるしく駆け巡っていく。

「……旅？」

「私たちが生き残ったのは、きっと何か意味があるのよ。だったらこんな所で立ち止まってちゃいけないわ。この街を出て、新しい土地で、新しい生活を始めようよ。まだまだ私たちは終わってなんかいないって信じよう」

「……」

いつも無鉄砲で、後先考えずに行動して、エルクは毎回それに振り回されてきた。

だが今回は違った。

彼女の言葉は、エルクの心に新たな一筋の光をもたらし去った。

起き上がったシューラも座って夜空を眺めており、ランタンを挟んで二人で星を観察しているかのようだ。ランタンの光は力強く、それぞれの顔を温かなオレンジ色に照らし出している。

「どんな旅路になるかは分からないけど……ひょっとしたら、シューラの故郷にも行くことがあるかもしれないね」

そこで初めて、エルクはシューラへ視線を向ける。同じタイミングで、シューラもエルクに視線を向けていた。目が合ってしまった、シューラは慌てた様子で顔をそらす。

「それで、シューラはこれからどうする？」

家の場所は黙秘されてしまったため、エルクたちに彼女を送り届けることはできない。だからこそ、彼女が今後どうしようとしているのか訊ねたのだ。

「……決めました」

シューラの横顔が大きく頷く。

「私、エルクさんたちについていきます」

そらした視線が再びエルクへ向けられた。

瞳には先刻までの怯えたような様子はなく、強い意志を宿した輝きがたたえられている。ランタンの光を映し出して宝石のように煌めく目に、エルクは思わず見とれそうになってしまった。

「……でも、僕はシューラの家の場所を」

「旅の途中で行くかもしれないんですね。だったら、私はそれまで一緒に行きます」

迷いなく言い切られてしまいエルクはたじろぐ。初対面から続いていた警戒心をあっさりと解かれ、彼女の急な心境の変化に対応が追いつかない。

「いつになるか分からないよ？　最後まで行くことがないかもしれないし」

「いいんです。独りでいるのが怖いだけですから」

まるで揺るぎそうにないシューラ。だがそこで表情に一瞬影が差し、もの悲しそうに目を伏せた。

「初めて会った時はすみませんでした。私、いろいろ……あつたので……」

「うん、そこは訊かないから大丈夫」

シューラの禁句^{タイ}を受け入れてなお陰日向なく接しようとするエルクに、彼女は少しだけ驚いたように目を見開き、そして――

「……これから、よろしく願います」

屈託の無い笑顔を、エルクへと向けた。

5話 不穩

もうじき次の街が見えてこようかというところで、エルクは前方から歩いてくる一団の姿を認めた。

いずれも動きやすそうな軽装でありながら服の上からでも分かる太い筋肉を持っており、腕利きの傭兵団か街の自警団を連想させる。そこまでの大所帯というわけではなさそうだが、ある程度は統率のとれた組織のようだ。

「……これからレダーコールに行くのかな？」

メフィが首をかしげる。

彼らの歩いてきた道は長い一本道で、ここを歩いているのならレダーコールへ向かっていることは間違いない。目的地にしろ通過点にしろ、レダーコールと無関係とはなりえないのだ。

「教えてあげた方がいいんじゃない？」

「いいかげん隣街にくらい伝わってると思うよ。現状の調査とかに行く所かも」

腕っ節が強そうな男ばかりなのも、何が原因なのかはつきりしないからと考えれば説明がつく。万が一の場合、少しでも体力のある人間の方が生き残りやすいという判断なのだろう。

「そういう雰囲気には見えませんけど……」

「いずれにしても、何が起こったかは知ってるんじゃないかな。わざわざ呼びとめるのも悪い——」

「おや？」

エルクの言葉をさえぎるようにして、野太い声が三人の耳に届いた。当然、その三人の誰の声でもない。もっと離れた位置、それも件の集団の方から聞こえてきたようだ。

「すまない、ちょっと訊きたいことがあるんだが」

「え？」

急激に近づいてきた声に振りかえると、集団のうちの一人が三人

の目の前までやってきていた。

髪は真っ白、顔にも深いしわがいくつか刻まれている。だが決して老人らしくはなく、がっしりとした体格から活力に満ち溢れている印象を受ける。かなり大柄で、向かい合つとエルクでは見上げなければならぬほどだ。

見ると、他のメンバーは少し離れた位置で待機している。どうやら目の前の男がこの集団をまとめているようだ。

「ひょっとしてお前、リーダーコールから来た？」

「あ……はい」

「後ろの二人もか？」

「まあ、そんなところです」

妙に気さくに話しかけてくる男に、エルクは少なからず警戒をしていた。

今にも襲つてきそうというわけでもない。むしろ友好的な態度で接してきている。しかし、この男は一般人とは確実に『何か』が違う。警戒を解いていい相手ではないと、エルクの全身が伝えてくるのだ。

「名前は？」

「訊いてどうするんですか」

「答えてくれないか」

圧迫感こそないが、有無を言わせぬ一言だった。

「……エルク」

「あの二人は？」

「知りません。行きずりで同行しているだけですから」
嘘をついた。

エルクは事実であるかのように振舞い、あとの二人も否定をせずに黙っている。

得体のしれない相手に必要以上の情報を与えるのはまずい。後ろめたいことがあるわけではないが、リーダーコールの生き残りなどと称されて目立ってしまうのは避けたい事態だった。

明らかに突き放した態度のその返答。だが男はそれを聞くと、むしろ嬉しそうにニヤリと笑って見せた。

「ほう、そうか……ま、そういうことにしといてやるよ」

「！」

「今は急ぐんでね。呼びとめてすまなかった」

男はそのままエルクたちに返事を許さず、後方の集団へ出発の合図を送った。暇そうにしていた大勢の男たちが一斉に歩きはじめる。そのうち数人が、全体とは逆の方向へと歩き始めた。どうやらこの男が何か指示をしたらしい。

「じゃあな、エルク。いずれまた会うこともあるだろう」

去り際、男はエルクの耳元でそう囁いていった。

「なんだったのよ、あれ」

その姿が完全に見えなくなっただけから、メファイが頬を膨らませた。

その人を食ったような言動が気に入らなかったのだろう。

それはエルクも同じ思いだったが、それよりも気になることがあった。

「あの、僕らの事を知ってたみたいだった」

「え？」

メファイが意外そうに声をあげた。単なるお調子者として軽く見ていたのだろうか。

「……何者なんだろう」

第一印象は体力自慢の傭兵の類だった。だが、エルクたちに関する何かを知っている素振りも見せていた。軽い態度も、疑念を深める材料にしかない。

「……行こうか」

「うん」

「はい」

考えていても答えは出ない。今の彼らにできるのは、前進することだけなのだ。

目指す街は、もう目の前まで迫っていた。

『古都』レクタリア。史跡を多く保有する街として知られている。レダーコールに近いということで、観光以外にも人の出入りは多い。ただし定住している人間はそう多くないらしく、普段は静かで穏やかな時間が流れている。

全体的には、レダーコールよりも少し田舎町といった雰囲気だ。

「わあ、一面だ」

新聞を受け取るなり、メフィが目を丸くした。

「当然といえば当然だよな、街が一つ消えるなんて……」

横から覗き込みながら、エルクも感慨深げに頷いた。記事にはレダーコールの惨状について書かれており、写真まで大きく印刷されている。誰かが現地まで行ってきたのか、内容はエルクから見ても的確かつ綿密に推敲されたように見受けられた。

「で、犯人に関する情報は……」

記事を視線でなぞりながら、エルクが誰にともなく呟く。

レクタリアに着いて最初に新聞を買った理由がそれだ。メフィにとつては重要な情報であり、何か手掛かりが掴めないかと期待して購入したのだ。

「何かありました？」

シユーラも興味を持ったのか、反対側から覗き込んできた。ただしメフィやエルクと違い、それほど真剣ではないようだ。

「ちよつと待つて……」

「……あつ、これは？」

少ししてから、メフィが下の方の一文を勢いよく指さした。つられて、二人の視線もそこへ向く。

「……今回の事態について、政府は大規模なテロリスト集団の存在を明示。さらなる被害を防ぐため、各国の首長による『世界委員会』を創設」

「……」

情報量が少ないためか、記事の末尾に付け加えるようにして書かれた一文。それ以外、犯人について特筆された部分は見当たらなかった。

「一応、犯人について言及してますね」

「でもこの一文から特定は無理ね」

「それ以前に、僕ら個人で追える相手じゃないような気が……」

国が動かなければならないほどの大きな集団を、成人もしていない子供だけでどうこうできるはずがない。そういった組織に所属すれば間接的に戦うことはできるだろうが、それも今の状況からでは難しいだろう。

「……やっぱりエルクは反対？ 諦めたほうがいい？」

むすつとした表情でメフィがエルクに視線を向ける。

「言うまでもない、けど……言っただけで聞かないでしょ、メフィは」

「なんか引つかかる言い方だけど気にしたら負けね」

「気にして。頼むから」

言っても無駄だと分かっている、言わずにはいらなかった。そして案の定、メフィはすでにエルクの言葉など聞いていないようだ。

「じゃ、まずはこの街を巡ってみようか。エルクもそれでいい？」

「……はいはい」

反論を諦めて頷く。やはり彼女の無鉄砲さは改善させるべきだろうか、と思わなくもないエルクだった。

カーペットのしかれた長い廊下を、二人の男性が並んで歩いていた。どちらも立派な髭をたくわえ、年齢と品格を併せ持った雰囲気醸し出している。

二人の着衣はどちらも深い青の制服で統一されていた。軍服と似たデザインだが、着ている者の階級の高さを分かりやすく表している。体の寸法にぴったりあわせており、見苦しさを感じさせない。

「……『奴ら』の仕業だろうか」

白い髪 of 男性が唸るように呟いた。口元に手を添え、ずっと何かを考え込んでいるようだ。

「十中八九そうだろう。他にあそこまで徹底的に滅ぼす連中など思いつかん」

横を歩く黒い髪 of 男性も眉をひそめて返事をする。どちらも暗い表情をしており、現状が決して楽観視できる状態ではないことを示している。

「目的は何だ？ 我らの繁栄の阻害以外に意味があるとは思えんが……」

「あまりに大規模な犯行だ。特別に理由があると見るべきなのだろうか」

お互いに言いたいことをぶつけており、会話をしているという様子ではない。彼らはそうやって自分の考えをまとめているのであり、誰も聞いていなくとも関係ないのだ。

「タイミングが妙だ……この時期になって、なぜレダーコールを？」

「これをきっかけに『奴ら』の存在を表沙汰にできたのだから、得るものもひとまずあった……失った物の方が遥かに多いがね」

ぶつぶつと言葉を連ねながら歩いていく二人の男。やがて彼らの足は、唐突に表れた一枚の扉の前で止まった。そして躊躇うことなく、その奥へと入って行った。

扉の横には大きな紙が貼られており、丁寧な字体で文字が綴られている。

『世界委員会』と。

「……あのう」

歩きはじめて数分。ずっと黙っていたシューラが、オドオドしながら前を歩くエルクを呼びとめた。

「すみません……なんか、すごく視線を感じるんですけど」
「視線？」

エルクが周囲を見渡してみると、シューラの言わんとしていることがすぐさま理解できた。

観光地や行商の中継地としてにぎわっているレクタリアだが、今はそれほど多くの人間は見当たらない。見回してみれば、通りにいる人間の数は簡単に数えることができそうだった。

そのため、自分たちを『つけている』人間を見つけるのは容易だった。

自分たちを監視している。

そんな馬鹿な、と否定しようと頭を振る。しかし、エルクたちから姿を隠そうとする彼らはそれ以外に考えようがない。

距離は保っているが、追跡に関しては素人のようだ。それだけがエルクの安心できる点だった。

では、誰が自分たちをつけているのか。少し考えただけで、エルクの頭にすぐさま心当たりが浮かんできた。

「……まさか、あの傭兵集団？」

レクタリアにつく少し前にすれ違った、物々しい雰囲気のある集団。何人かがこちらに戻ってきているようだったので、その可能性は十分にありうる。

だとしても、何のために？

そんなことを考えてる場合ではなかった。尾行されている時点で、少なくとも安全な立場とはいえないだろう。相手がどんな目的であるか分からない以上おいそれと捕まるわけにはいかない。

「早く逃げましょう」

「待って、ただ走ってもすぐ追いつかれるよ。どこか人ごみに紛れられればいいんだけど……」

無駄だとは思いつつも辺りを見回す。場所を移動したわけではないので、当然その通りは姿を隠せるほど人が多くない。

もし走り出せば、気づかれたと知った相手も全力で追ってくるだろう。まともな食事を摂っていない三人にとってはとても振り切れるものではない。

そうこうしているうちに、相手の方から動きを見せた。三人が立ち止まったのをチャンスと捉えたのか、物影を伝うようにして少しずつ距離を詰めてきている。隠れようとして全く隠れられていないのは滑稽な姿だったが、もちろん笑っている余裕などない。

「まずいよエルク。走り出すならもう今しかないよ」

「ううん……とりあえずこの場から動こう。ただ、気づいてるってむこうに知られたらお終いだよ。走るのはまずい」

「でも、どっちに行くんですか？ 他にも仲間がいるかもしれませんが」

「そうだよね……」

必死に頭をひねるが解決策が思い浮かばない。せめてこの街の土地勘だけでもあれば違ったのだろうが、あいにく三人とも以前この街に来たことはなかった。

ゆっくりと近づいてくる敵の姿。もう走り出すしかないかとエルクが腹を決めたその時、

「おい、こつちだ」

建物の隙間——薄暗い路地で、手招きをする人物の姿が見えた。

「！？ だ、誰？」

「説明は後だ。早くしないとあたしでも振り切れなくなるよ」

どうやらその人物は女性で、エルクたちをそちらに連れて行くよう
としているようだ。

「……どうしましょう」

「他に策は……ない、よね」

罠の可能性もある。後ろに見える追手の仲間かもしれない。

だとしても、今のエルクたちに選択肢はないのだ。

三人とも何も言わず、女性を追って路地の暗がりへと体を滑り込
ませた。

6話 ギルド加入

複雑に入り組んだ路地は、幾重にも交差しながら街の深部へと根を伸ばしている。立ち並ぶ建築物が日光を遮り、昼間だというのにランプが欲しくなるほどの闇に包まれている。

行き交う人間の姿は全くと言っていいほど見られない。それだけに、そこを駆け抜ける四人は異質なものとしてそこに存在しているかのようだった。

極力音は立てず、しかし素早く迷路へと入り込んでいく一行。頼りになるのは先頭に行く女性だけであり、他の三人は既に現在位置さえも把握できなくなっている。

「お、捲けたみたい」

どのくらい走ったのか、まるで息を切らせていない女性がようやく立ち止まった。ついてきていた三人は立ち止まると同時に膝に手をつき、肩で息をしている。水と干し肉しか食べていない彼らにとって、この疾走はかなり堪えるものだった。

「もう、大丈夫、だよ」

これ以上は歩けないとばかりにメフィが訊ねる。だが女性は、三人の様子を気にもせず返答した。

「まだだね。そうすぐに諦めるとは思えないし、この辺りだって安全とは限らないよ」

「うええ」

「文句言わない。これから私の店に連れてくから、そこでしばらく時間でもつぶそうか」

女性は飄々としていて緊張感などは見て取れないが、常に通りの前後へ気を配っているようだ。多少変わってはいるが、知識や経験をかなり積んでいるのは間違いないだろう。

「店？」

「ん。ま、君らには馴染みのない店かもしれないけど」

どんな店なのか想像もつかない。そもそもエルクにとつては、目の前の女性が店を経営しているということ自体がイメージできなかった。口には出せないが、そんな経営力があるようにはとても見えない。

「あの、でも……着いて行くというのは、まだちょっと」

「信用できないって？ それはわかるんだけどねー、こっちも依頼だから簡単に引き下がるわけにはいかないのよねー」

「はあ……依頼？」

「依頼主は二十八歳男性職業不詳、これ以上は機密事項。依頼内容は『少年一人と少女二人からなる三人組の保護、ならびに安全確保』って感じだったかな。報酬は機密事項じゃないけど結構いい額なのでナイシヨ」

スラスラと語られていくそれに、エルクは更に疑問符を増やした。質問が多くなりすぎてしまい、言葉が詰まって出てこなくなってしまう。

そんなエルクは気になけず、女性は三人に向かい合うと思い切り胸を張って見せた。

「案内するよ、私の『ギルド』にね」

ギルド——元々は、同じ職種の人間の集まりを示す言葉である。

現在では専ら、ハンターが賞金稼ぎで構成される組織という意味で定着してしまっている。女性の言うギルドにもそういった種類の人間が多いようで、案内された建物には腕の立ちそうな旅人らしき人間が何人かたむろしていた。ただ、明らかに一般人といった風貌の人間もいるので、必ずしも偏った職種の集会所というわけではなさそうだ。

そこそこ広いロビーに、カウンターが一つ。小さな紙きれを持った人間がカウンターに向かい、何かの手続きをしている様子が見え

る。依頼を受けているのか、あるいは依頼を申し込んでしているの
だろう。

部屋の隅には丸テーブルとイスが数脚。そこに立派な髭の男性が
座ってお茶を嗜んでいる。

そして正面の奥には、巨大な掲示板の姿があった。

無数の紙片が張り付けられており、手前にはちよつとした人だか
りのようなものができている。おそらく、そこで何かしらの依頼を
受けることができるのだろう。

物騒な雰囲気ではあったが、そこには人間の活気が溢れていた。
依頼を出す者も受ける者もいるだろうが、掲示板の前では誰もが何
かしらの感情をあらわにしている。これまで見てきたレクタリアの
印象とは違い、賑やかで安心感を覚える場所となっていた。

「……」

「おい、落ち着け少年」

ちよつとしたカルチャーショックを受けて立ち止まったエルクは、
女性に額をつつかれて我に返った。

女性はロビーをまっすぐ横切ると、奥の通路へと進んでいく。周
りの注目を集めないよう、三人はできるだけ目立たないようにして
それに続いていった。

「はいはい、それじゃ座ってちよつと待ってて」

突き当たりの扉へ通され、勧められるまま椅子に腰を下ろす。三
人が席に着くと、女性は軽い足取りで部屋を出てしまった。

訳の分からないまま取り残される形となり、エルクは呆然とした
ままその部屋を見回してみた。

どういった用途の部屋かは分からないが、あまり見栄を張ったよ
うな調度品は見当たらない。テーブルも木製のシンプルなデザイン
で、これといった特徴もない普通のテーブルだ。唯一、百合を差し
た花瓶がテーブルの中央に置かれていて、淡泊なインテリアの中で
それは特に際立っているように見える。

「私たち、どうなっちゃうのかなあ？」

メフィが今後を懸念するような言葉を発したものの、興味深そうに辺りを見回している姿は身の安全を危惧している様には見えない。もつとも、それはあの女性をそこまで警戒していないからかもしれない。完全に信頼はできないものの、メフィには悪人のように見えなかったのだらう。それはエルクも、またシューラも同様らしく、追われていた際のように神経を尖らせた様子はない。

「依頼、ていうのが少し気になるけど」

「私はあんまり気にしてないです……あの人、優しそうでしたから」「そうだよな」

メフィもシューラと同じ印象を抱いていたらしい。エルクも概ね同意しているのだが、引つかかる部分も多いので素直に安心はできずにいる。

「はい、おまちどお」

勢いよく扉を開き、女性が大きなバスケットを抱えて戻ってきた。バスケットからは香ばしい香りが漂ってきている。布が被せられていて見えないが、どうやらパンのようだ。

三人の前にバスケットが置かれ、布が取り除かれる。途端に、抑え込まれていた香りが膨らんで広がった。積まれているパンは全てバターロールで、照明を鈍く反射してキラキラと輝いて見える。しばらくまともな食事を摂れていなかったこともあり、三人の空腹感是否が応にも掻き立てられた。

「お腹すいてるでしょ？　どんどん食べちゃって」

言いながら女性が一つを手を取ってかぶりついた。パンを食べながらにつこりとほほ笑むのを見て、気がつくともエルクもパンに手を伸ばしていた。それにつられるように、メフィとシューラも一つずつパンを手取る。

手に持つとまだ少し熱い。両手で持つて二つに割ってみると、中から蒸気と香りが一気に広がる。麦の香りはエルクの鼻をくすぐり、これまで目を背けていた食欲が急激にせり上がってきていた。

警戒を解くべきではない。それはわかっていても、これ以上空腹を堪えることなどできそうになかった。

「い、いただきます」

ちぎったパンの端をほんの少しだけ齧った。

想像以上に柔らかく、熱く、噛んでいると優しい甘みが口いっぱいに広がる。香りが口から鼻へ突き抜けていき、パンの味をより存在感のあるものへと飾り上げている。

ほとんど勢いで飲み込むと、二口目は躊躇いもなく思い切り齧りついた。

これまでの粗食の反動もあるのだろうが、そのパンはエルクの食べたことのないような感動が詰まっていた。今までここまでパンを美味しく感じたことはない。食べる手が止まらなくなり、あつという間に一つを平らげてしまった。

まだパンは大量に積まれている。一瞬は遠慮しかけたエルクだったが、空腹の今はとも自制が効かなかった。すぐさま二つ目を掴み、再び食べ始める。

「ここまでおいしそうに食べてもらえると、まあ作った甲斐があったよ」

三人の食べる様を見て、女性は頬を掻きながら笑った。

「それじゃ、改めて始めまして」

パンが一つもなくなったところで、女性が満足そうに笑ったまま口を開いた。

「私はエディカ。このギルドの管理事務長……って役職に一応なってるみたい」

「管理事務長？」

「ま、責任者つてことだね。私も依頼を受けたりするからあんまりここにはいないんだけど」

突然責任者がいなくなつて苦労している部下の姿が目に見えかぶようだ。突っ込むべきか迷ったのでエルクはひとまず何も言わないで

おいた。

「えっと、僕はエルク」

「私はメフィ」

「シューラ……です」

「オツケー、覚えた」

三人の顔を眺めまわすエディカ。何に対してなのか、やたらと自信に満ち溢れた表情をしている。

「依頼主から少し話は聞いてるよ。レダーコールから逃げてきたばっかで困ってるんだって？」

「……その依頼主の正体が気になるんですけど」

「内緒ナイシヨ」

悪戯っぽく笑うエディカに、エルクはため息をつく。顧客情報を守るのは当然のことなので予想できた答えではあったが。

「で、助けてらった理由はわかりましたけど……パンまでいただいでしまつて」

「ああ、それは気にしないでいいよ？ 趣味で作っただけだから」

「いえいえ、ありがとうございます。それで、その……」

言葉を濁すエルクにエディカの笑みが深くなる。何を気にしているのか気づいているのだろう。というより、気づいてほしくて『それ』を持ってきているようにしか見えない。

「そのバッジ、何なんですか？」

エディカの手には、朱色に塗られたバッジが握られていた。丸いシンプルな形の中に、独特すぎて全く読み取れない文字が書かれている。どちらかというと何かのマークとして捉えたほうがよさそうだ。

エルクの質問に対し、エディカは待つてましたとばかりに鼻を鳴らした。言いたいことがあるなら早く言つてほしいのだが、楽しそうにしているので催促はできそうにない。

「これはね、うちの『会員証』さ」

「つまり、ここで依頼を受けるのに必要なもの、ってことですか？」

「お、さすが話が早いねー、その通りだよ。それで、これを君らに進呈します」

まるでお菓子でもおすそ分けするかのよう、ほんと掌に乗せられるバッジ。完全にデザインとして割り切ってしまうえば洒落たアクセサリー程度にはなるかもしれない。もちろん単なる飾りではないので、そう安直には決められないのだが。

「それってつまり、僕らがこのギルドに加入するってことですか？」

「そうそう。あ、入会金とかそういうのは無いから安心していいよ」

「いや、でも……そんな腕っ節が強いわけでもありませんし」

「討伐依頼ばつかじやないから大丈夫。ギルドって別にハンターの溜まり場ってわけじゃないんだよ」

「そーなんだー」

メフィが感心したように声を発した。エディカが言ったままのイメージを持つていたようで、新しい発見に目が輝いているように見える。好奇心旺盛と言えば聞こえはいいが、エルクにとってはトラブルメーカーでしかない。

「この街にも長くいるつもりはありませんよ」

「他の街にもギルド作ってるから問題ないさ。そこでもこのバッジが通用するし」

「……うう」

反対材料がなくなり言葉に詰まるが、それでも肯定できない。『一番の理由』は、会ったばかりの人間に軽々しく話せるようなものではないのだ。

思いは同じなのか、メフィとシューラも積極的になろうとはしていない。言葉を封じ、申し訳なさそうにエディカとその手のバッジを見つめている。

そんな三人の様子を前にして、エディカは——なおも笑っていた。「分かってるよ、自分たちの足跡はあまり残したくないんだろ？どこかに所属するとかして存在が公開されるのは嫌で、だからウチのメンバーになりたくない……そんなところかな。誰かに追われて

るみたいだつたし」

「……」

「私は何も詮索するつもりないよ。レダーコールの何を知ってるのか、どうして追われているのかとか、私は興味ないから」

エディカがひらひらと手を振る。とくに責めようとする意志も感じられず、エルクは有難さと申し訳なさで委縮するしかできなかった。

彼女は、考えていた以上にエルクたちの立場を理解していたのだ。その上で、ギルドへの加入を提案してきている。

「名前の登録とかそういうのもここには無いよ。だから所属してる人間は調べようがないっていうか、しらばつくれたらどうにでもなるというか」

「……どうしてそこまでしてくれるんですか？ あなたにも全く害がないとは思えないんですけど」

「ホントの事言うとな、これも依頼の一部なんだよ。方法は問わないから、君らが自立して生活できるように支援してくれって言われてさ。で、私ができる事って言ったらほら、ここで仕事を提供するか宿を貸すくらいしか思いつかなくてね」

恥ずかしそうに頬を掻いている。だがそれはある意味、他のどんな理由よりも納得のいく理由だった。

依頼であればできることはなんでもする。いい加減なようできて、仕事には誰よりも真つすぐ向き合っている。

彼女のことを詳しくは知らない。だが、それこそが『彼女』なのだろう。

「さて！ それじゃあエルク、メフィ、シユーラ。そのバッジ、受け取ってくれる？」

腰に手を当て、座っている三人を見下ろすエディカ。彼らに向けている笑顔は、彼らの返事を微塵も疑っていないようだ。

メフィに目を向ける。先ほどまで迷っていたらしい彼女は、既にエディカの意見に納得しているようだ。どことなく嬉しそうに、小

さく頷いて見せた。

シューラに目を向ける。彼女の意志はメフィほど分かりやすくないのだが、今の彼女は実に分かりやすかった。彼女もまた、メフィと同じ意見のようだ。

「……」

そしてエルクは、自分の天秤がゆっくり逆に傾いていくのを感じた。

7話 パンの残り香

焼きたてのパンの上で、チーズがぷつぷつと泡を立てている。軽く降りかけられたバジルと合わせ、まるやかな香りで空気を優しく包んでいく。

立ち込める蒸気。まるでたった今オーブンから出したばかりのよう、見ていると思わず唾を飲み込んでしまう。立ち込める香りと共に、猛烈に空腹感を掻き立ててくるのだ。

そんな逸品を前に、リダは目を輝かせて至福の瞬間を待ちわびていた。

「も、もう我慢できませんよう」

「もうちょつと待ってくれ。あとはこのオリーブオイルをかければ……」

懐から小さな瓶を取り出し、中の液体を少量パンに捲いた。ほんの数滴であったのだが、その瞬間にチーズの香りに爽やかなキレが生まれた。顔を近づけていたリダは、その変化を敏感に感じ取って幸せそうに頬を緩ませる。

「あ、ふああああ……」

「あつ、またトリップしてるよ。ほら、もう食べていいぞ」

「は、はいい！」

言うのが早いか、リダはすさまじい勢いでほかほかのパンにかぶりついた。溶けたチーズが長く伸び、パンの淵からオリーブオイルが少しずつ滴る。

しばらく口をもごもご動かしていたリダだったが、含んでいた分をこくりと飲み込むと、小さく息を吐きながら恍惚の表情を浮かべた。

「うまいか？」

「はうあ……」

返事を聞くまでもなさそうだ。

「……ガルドは食べないんですか？」

「ん、もう少ししたらな」

「そうですか」

自分の事を気に掛けられ、ガルドは適当に返事をした。リダの事はかり考えていたので、自分の食事は何も考えていなかったのだ。一緒になつて食べてもかまわなかったのだが、リダがもう少し食べ進んでからにしようと決めてテーブルで頬杖をついた。

「はむ……ふむふぐむう……、はむっ」

「……」

パンを口に運ぶ度にリダのポニーテールが揺れる。質素な黒いリボンで結わえられたそれは、今までガルドの見てきたどのポニーテールよりも長く大きい。それだけに、ガルドにとってはリダのシンボルのようなものだった。鮮やかな水色の髪は丁寧に手入れされているのか、思わず触りたくなるほどの艶がある。

それだけならば可愛らしい少女としてやや注目を集める程度だっただろう。

だが、そういったイメージをあつさり打ち崩す要因が、リダの座っているすぐ横に立てかけられていた。

リダの身長を超える、巨大な鉄斧。

闘いの場において、リダが最も得意とする武器。

刃物ではあるが、『斬る』というよりもその重量を活かして『叩き割る』といった方が用途を的確に表現していると言える。

腕力に自信のある成人男性でも両手で叩きつけるように使うのがやつのそれを、リダは軽々と振り回すのだ。しかもそれを持ったまま走り回ったり跳び上がったりと、その身体能力は人間のレベルを逸脱している。

だからといって、ガルドはリダを特別扱いしているわけではない。常識外れな腕力と俊敏性を除けば、こうしてちよつとした御馳走にも目を輝かせる普通の子供なのだ。それを理解しているガルドは、

普通の子供と全く変わらない対応をすることになっていた。

「ああ、そろそろ俺も飯にするか」

しばらくリダの食べる姿を眺めていたガルドだったが、自分も同じように空腹であることを思い出すと自分も朝食を取り出した。

リダのものと同じ大きさのパン。ただし、色はそちらと比べるとずいぶん黒い。リダの物は丁寧に挽いた小麦粉を多く使用しているが、こちらはライ麦の割合がかなり多くなっているのだ。コストがかからない分、味や食感はややランクダウンしてしまう。

苦い上に、非常に固い。長期間保存できるので長旅には良い食料なのだが、贅沢を言えばあまり口にしたいとは思えない代物だ。

金がないわけではない。ただ、自分の食事だと思ってもったいなく感じてしまったのだ。

買った当初、ガルドはそんな風に考えてそれを疑いもしなかった。だが、目の前でこうも美味しそうに食事をされるとやはり辛いところがある。リダに気を遣わせたくないのので口にはしないが。

「……ガルドのパン、僕のと違いますね」

ちまちまとかじっていると、既に半分以上食べてしまったリダがライ麦パンに気付いたようだ。自分の物と見比べ、興味深そうにその眼差しを向けている。

「俺のは安物だからな」

「美味しいんですか？」

「普通、だな」

おいしくないとは言わなかった。そのかわり、その固いパンをもう一口押し込む。固い外側を力の限り噛みちぎるが、リダのように食事を楽しめるほどの余裕はなかった。

「じゃあ、僕のと交換しましょう！　すごい美味しいですよ！」

「は？」

何が嬉しいのか、リダは笑顔のままほぼ完食していた自分のパンとガルドのライ麦パンを取り替えてしまった。食べかけのパンから

残っていたチーズがゆっくりと垂れ、ガルドは指ですくってパンに載せなおす。

そうしている間に、ほとんど食べられていない黒パンにリダがかぶりついていた。

固くて食べられないのではないか。そう思ったのは一瞬だけで、リダの幸せそうな表情を認めるとすぐに考えを改めた。

「むぐ、むぐ……これも結構おいしいですね。僕はこっちの方が好きかも、です」

そのまま無遠慮に食べ進めるリダ。瞬く間に黒パンはリダの口へと消えていき、結局ガルドが口を挟む前に完食してしまった。

「ごちそうさまでした」

あとに残されたのは、たった一切れのチーズ載せパン。口に放り込むと、確かに黒パンよりも上質な旨味が口の中に広がったが、すぐに食べ終わってしまった。

「……」

「あれ？ ガルド、どうかしましたか？」

「リダ……一個じゃ足りなかったんだな？」

「あ、はい。でもガルドのパンも分けてもらったので……」

「で……俺の分は？」

「……へ？」

「俺のことはすっかり忘れていたと、そういうことか」

「……」

「……」

「ひ、ひああああ！ ごめんなさいい！」

笑っていない笑顔を向けると、リダは椅子の上で縮こまってしまった。そのまま頭を抱え込み、半泣きの表情でガルドの様子をうかがっている。

もっと厳しく躰けなければならないとガルドは思っただが、リダの肉親というわけでもないでそこまで強気になれない。しかもこの状況は、傍から見れば自分が少女を苛めているようにも見えてし

まう。

「……まあいいさ、お前が満足なら」

下手に誤解を招くより、さっさと機嫌を直すかこの場を立ち去った方がいいだろう。そう考えたガルドは、意味のない苛立ちを抑えこんで勢いよく立ちあがった。

先ほど前を通りかかった際にはもう少し人がいたはずなのだが、あらかた出払ってしまったらしく、掲示板の前の人の姿はまばらだった。

「……確かに、こうして見るといろんな内容がありますね」

眺めていたのは明らかに腕自慢の賞金稼ぎばかりだったが、こうして見てみると依頼のバリエーションはかなり幅が広い。

単なる討伐だけでなく、逃げたペットの捕獲や買い出し、荷物の配達から農作業の手伝いまで、ありとあらゆるベクトルの『困ったこと』が集められているようだ。エルクたちでもできそうな内容の依頼もちらほら見受けられる。

「最近では討伐依頼やるヤツばっかになっちゃってさ、みんなみたいな人手が欲しかったんだよねー」

「……あれ？ いつの間にか上手く利用されてる気が」

「あ、これなんかどう？ 初めての依頼にちょうどいいんじゃないかな」

嬉しそうにするエディカが無造作に一枚の依頼を剥がし取る。エルクの発言は意図的に無視したようだ。

舌戦では勝ち目がない気がしたので、エルクは仕方なく押しつけられた紙切れを受け取って内容に目を通した。左右からメフィとシユーラも興味深そうにのぞきこんでくる。

綺麗な字で書かれているその依頼は、どうやら何かのハーブを調

達してきてほしいという内容のようだ。依頼人はハーブティーを作るのが趣味で、ちょうど切らしているハーブを摂ってきてほしいらしい。

「ふーん、ハーブかぁ。簡単そうだけど」

「僕らにできますかね？」

これならできるかもしれないという期待と、失敗を想像すると湧き上がってくる不安。他に選択肢は無くても、エルクは訊かずにはいられなかった。

「これだけで家を建てるのは無理だろうけど、生活していく分には困らないと思うよ。結局は自分の頑張り次第としか言えないわけだけど」

「……私たち三人分も、ですか？」

「そんなの、三人で頑張ればいいじゃん」

依頼をこなした分だけ収入が得られるわけなのだから、それは当然の事だろう。不安定な生活を強いられることになるのは、旅に出た時点で全員覚悟がきている。

テロ集団を追い、正体不明の連中に追われ、その上依頼をこなしている余裕があるかは分からない。だとしても、もうエルクたちに他の道は残されていないのだ。

「そろそろあの連中もいなくなっただけかな。……もう出発する？」

名残惜しそうにエディカが問いかける。

「そうします。じっとしている時間は、まだ僕らにはありませんから」

対するエルクは、自嘲気味にそう答えた。

「そっか」

エルクの返事を聞いて、それまで活発な印象だったエディカの笑顔が寂しそうなものになった。笑顔であることに変わりはないのだが、その目はどこか遠くに向けられているようだ。細かい表情の変化はなく、彼女が何を考えているのかまでは分からなかった。

「……どうかしたの？」

「ん、なんでもないよ。ごめんごめん、ちょっとぼーっとしちゃった」

恥ずかしそうに頬を掻くエディカ。そこに先刻の寂寥感が残っていない。

「私もいろんな街に行つて依頼を受けてまわってるから、どこかでまた会えるかもしれないね」

「会えるかなあ……私たち、なんて言うか……明日の见えない道を歩いてるから」

メフィが哀しそうにそう呟いた。

普段は弱音を吐かずに気張っている彼女も、やはり不安はあるのだろう。こうして胸の内を吐露する瞬間、エルクは彼女の本当の思いを感じてやりきれない気持ちになる。

「また会ったら、その時はまたパンでも作つてあげるから。気持ちは強く持たなきゃダメだからね？」

「うん」

エディカは何を察したのか、メフィの肩に手を置いて彼女の顔をじつと見つめた。不安そうにしていたメフィだったが、エディカの顔を見ているうちに少しずつ普段の元気を取り戻してきたようだ。

「……そうだね。ありがとう、エディカ」

少しでも気が楽になっただろうか。もしそうなら、それはエルクにとっても嬉しいことだった。

「……エルクさん」

しばらく黙っていたシューラがエルクの袖を引っ張ってきた。なぜか声をひそめ、しきりに窓の外を気にしているようだ。

「どうしたの？ あ……ひょっとして、さっきの奴らが？」

「い、いえ……そうじゃないんですけど……」

しばらく口をモゴモゴさせていたシューラだったが、ついに言うのを諦めて俯いてしまった。窓の外も見なくなつたので、気にして

いた何かはどこかへ行ってしまったのだろう。

「気になることがあったら早めに言ってね。早く行動することに越したことはないから」

「は、はい……」

エルクは安心させようと言ったつもりだったが、彼女の表情が晴れることはなかった。

「それでは」

「お世話になりましたー」

「あ、ありがとうございます」

三者三様の挨拶を口にしてその足を外へと向ける。まだ仕事が残っているらしいエディカは、もうしばらくここにとどまるそうだ。むしろ責任者としてはずっといるのが普通なのだろうが、いまさら突っ込むような真似は誰もしなかった。

「ん、頑張つてねー」

ひらひらと手を振るエディカ。顔に浮かべている明るい笑顔は、会った時と変わらない印象だ。

そうして見送られながら、三人はギルドを後にした。

「ふええ……すみません……」

とめどなく溢れ続ける涙をぬぐいながらギルドの後について歩いているリダ。斧はベルトでしっかりと留めて背負っているのだが、大きさが身長を超えているため、たびたび地面と擦れて鈍い音を放っている。

リダにズボンをしつかりと握られているギルドは、何度目とも分からない謝罪を受けてそつとその頭を撫でた。

「もう泣くなつて。新しいヤツ買って食べただろ？」

「でも……でも、ガルドは無駄遣いが嫌いなんですよ？」

「いや、こういう時の食費までケチるつもりはないが……お前が大食いなのは会った時から分かってるし」

自分の読みが甘かったただけのことだ、とガルドは小さく笑う。

行動を一緒にするようになった当初は、小さな体のどこに収まっているんだと驚いていたのを思い出す。そういうものと割り切ってからは全く気にしなくなったが。

「ガルドには僕のせいで嫌な思いしてほしくないんですよ」

「そう思うならもう少し自分の食欲をだな……おっと」

「あつ」

後続のリダに気を取られすぎていたせいか、すれ違った少年と肩がぶつかってしまった。

「ああ、ごめん。よそ見してた」

「あ、いえ、こちらこそすみません」

どうやら少年の方も地図を見ながら歩いていたようだ。お互いそれではぶつかってしまったのも無理はない。

「ちよつとエルク、前見て歩かないと」

「地図を押しつけておいて言うかなあ……」

少年は他に少女を二人連れていた。そのうちの一人が彼に対して延々と話しかけており、少年は苦笑しつつその対応をしている。二人の関係がそれだけでおおよそ推し量ることができた。

もう一人の少女は、奇妙なキノコの帽子を被っている。こちらは二人の会話に介入せず、なぜかガルドのことを怯えたような目で見つめている。

平均年齢を含めて変わった集団であったが、わざわざ口出しするようなことでもない。そのまま通り過ぎ、すぐに彼らの事など忘れてしまうことにした。

8話 郷愁のハーブ（前）

街の中心地から若干離れた住宅街は、人口増加と史跡の保護のために最近造られた。今でも古くからの住居で暮らす人も多いのだが、昔の建造物だけに劣化している箇所も多く、安全性に疑問を抱く人も少なからずいたようだ。

それを懸念した政府がこういった居住区を新設し、そこへの移住を推し進めているというのが現状である。

流石にできたばかりということで清潔感にあふれ、歩いていても新築の家屋が目に入る。区画や道も整備されていて、安全性の面では心配ないだろう。その代わり、『古都』という愛称はとても感じられない事務的な印象の風景でもあった。

「……まあ、どっちが大事かは人次第だけど」

「何ブツブツ言ってるの？」

メフィから白い目で見られ、エルクは顔を赤くして目を逸らした。

その庭は、壮観の一言に尽きた。

芝生にすればちよつとしたスポーツくらいは問題なくプレイできそうな面積がある。そんなフィールドには程よい間隔で花壇や植木鉢が並べられており、実に多彩な種類の植物が植えられているようだ。軽く見まわしただけでもバラやツツジ、クレマチスやラベンダーといった種類が確認できる。

特に目立つのが、何十本というウネで育っているハーブだ。虫が付きやすく管理が大変な物も多いはずだが、並んでいるハーブはどれも店頭で並べられていそうな見栄えをしている。

「あれだけ香ったのはここまでいっぱい植わってたからなのね……」
感慨深そうにメフィが呟く。中心地は古い建物が視界を完全に覆っていたので、この広さと緑の豊富さは確かにちよつとしたカルチ

ヤーショックだ。

だが、そんなメフィよりもさらに衝撃を受けている者もいた。

「……………」

「あれ？ シューラ、どうかした？」

ふと視線を向けてみると、シューラがこれまでにないほど興味深そうにその庭を眺めていた。食い入るように見つめるその眼差しには、どこか羨ましがっているような感情もあるようだ。

「……この植物はみんな、すごく愛されて育てられてるみたいですよ」

「へ？」

「見ていて、切なくなるくらい……」

シューラが何を言っているのか瞬時には分からず、エルクは首をかしげる。彼女が植物の気持ちを感じ取っているのだと理解した時には、シューラは見つめるのに夢中で言葉を全く発しなくなっていた。

よほど気に入ったのだろう。だが、そのままではいつまで経っても話が進まない。

「ねえ、まずは挨拶をしに行こう？ 庭の見学も許可をもらえばゆつくりできるわよ」

「あ、そうだよな。シューラ、いいかな」

「……………」えっ？ あ、は、はい」

今の今まで自己の世界に陶醉していたようだ。シューラに落ち着いた印象を持っていたエルクにとっては意外な反応だった。

両側に広々とした植物園を携え、石畳の道が真っ直ぐに屋敷まで続いている。それほど遠いわけではないが、手前の庭のせいで建物がやたらと巨大に見えてしまう。

「それじゃ、行こっか」

「そうだね」

メフィが促すと、三人も頷いて歩き出す。

ただシューラだけは、何度も庭の方を振り返っては名残惜しそう

にしていた。

「……あら？」

玄関を目の前にしたところで、その扉が開いて中から一人の女性が現れた。

真っ白なブラウスと紺色のジャンパースカートを着込み、雪のように白い髪の毛を頭の後ろで結わえて団子状にしている。そしてレースで飾り付けられたカチューシャをつけており、この屋敷の使用人か何かであることを窺わせた。

「あ、こんにちは」

「こんにちは。何かご用でしょうか？」

エルクたちの姿を認めるなり、女性はすぐさま穏やかな笑みを顔に浮かべた。まるで本心からのような自然な笑顔は、とても接客用の作られたものには見えない。

「あの……依頼の件で来た者です」

言葉とともにエルクがバッジを見せる。上着の内側に装着したため、一度開かなければ外からは見る事ができない。もちろん、ギルドに所属していることがバレないようにするためだ。

「あら、そうでしたか。それではこちらへどうぞ」

「あ、はい」

全てを把握したのか、女性は踵を返して玄関を開いた。さすが使用人というべきか、その動作には一切の無駄がない。

片側を大きく開放すると、女性はもう一度ニッコリ笑って中に入るように手で促した。

「お義母さま、ギルドの方がいらっしゃいましたよ」

廊下のつきあたりの扉を開くと、女性が明るい調子で声をかけた。部屋の中には老齢の女性が一人。テーブルにカップを置き、湯気

の立ち昇るお茶を注いでいるようだ。そのせいか、室内は爽やかなミント系の香りが充満している。ほのかには何かつてくるそれは決して主張しすぎることはなく、その部屋の穏やかな時間を演出している。

「ええ、分かったわ。わざわざありがとうね」

「いえ。では失礼します」

三人を部屋に通すと、使用人らしき女性はそそくさと部屋を出ていってしまった。もともと何か用事があったのかもしれない。

「……お義母さまって言ったね」

声を潜めてメフィが首をかしげてきた。

「うん、使用人じゃなかったのかな」

「案外、あの人がこの屋敷の主人なんじゃない？」

「さあ……」

エルクも気にはなつたのだが、詮索してもしかたがないと分かっている。適当な相槌を打つと、それきり口を噤んだ。

会話がなくなり、部屋が静まりかえる。気まずくはないもののどう声をかけたらよいのかわからない状況だ。

老齢の女性は、新しく三つのカップを用意してお茶を注ぎ始めている。僅かにほほ笑みながらゆっくりとポットを傾けるその姿は気品に溢れていて、貴婦人と呼ぶのにふさわしい優美さを兼ね備えていた。髪は白くしわも深く刻まれているものの、老人らしさはほとんど見受けられない。

「さ、どうぞ座つて。ベルガモットティーが入りましたよ」

全てのカップがお茶で満たされると、女性が初めてエルクたちに向けて声をかけた。落ち着きのある声色で、お茶の香りも相まってみるみる不安が取り除かれていく。

「……あ、ありがとうございます」

メフィのまどろんだ謝辞が三人の体を動かした。誰からともなく女性と同じテーブルへ近づき、勧められるまま並んで席に着く。たつぷりとお茶の注がれたカップが三人の前に差し出され、ほのかに

酸味を感じさせる蒸気が鼻まで届いてくる。

「いただきます」

真っ先に口に運んだのはシューラだった。リラックスしながらも真剣な表情でお茶の水面を見つめていたが、何かを見定めるようにカップを持ちあげてごくわずかだけ口に含んだ。

シューラの予想外な行動に驚いたエルクとメフィは続けて飲みそびれてしまい、じつくりと味わっている様子のシューラをただじっと見つめることしかできなかった。

婦人もシューラを見ているが、その表情は相変わらず柔らかい。

まるで我が子を愛でているような、慈愛に満ちた眼差しを向けているのだ。

「シューラ？」

「……」

三対の目に見つめられていたシューラだったが、カップを置くと同時にふうと息をついた。真剣そうだった表情は、いつの間にか感嘆で目が大きく見開かれている。

「……おいしいです」

一言、そう呟いた。

「それはよかったわ。さ、お二人もどうぞ」

婦人はより一層深い笑みをこぼした。やはり自分のお茶が褒められると嬉しいのだろう。

言われるまま、エルクとメフィも目が覚めたようにカップを手にとった。奇妙な感覚が残ったが、爽やかなお茶の香りで些細なことはすぐに気にならなくなった。

「それで……依頼の件なんですけど」

ひと段落ついたのでを見計らって、エルクが本題を切り出す。いい加減そちらに話題を移さないと御馳走してもらっただけで終わってしまうような気がしたのだ。

「そうね。それじゃ、お話ししようか……でも、その前に」

優しそうな表情のまま、婦人の目が離してのエルクから離れる。彼女が視線を向けたのは、またしてもシユーラだった。

「そちらのお嬢さん、あなた『アツツエの榆の木』は御存知？」

「えっ」

シユーラが分かりやすい反応を示した。そしてしまったというように小さく開いた口を押さえる。

何も言おうとしないが、その態度だけで答えは容易に想像がつく。知っているようね」

「……どうして、そんなこと」

「いいのよ、それ以上は訊かないわ。ただ……あなたが『そう』なのか確かめたかっただけだから」

どうやら二人の間だけで何かのやりとりがなされているようなのだが、エルクにはさっぱり分からない。ただ、シユーラは心なしな表情を強張らせているように見える。婦人とのやりとりが楽しいというわけではなさそうだ。

「あの、お話を始めてもらっていいですか」

「……そうね。ごめんなさい、お二人をないがしろにしていたわね」やや強引に流れを変えると、婦人もそれに乗ってくれた。それ以上シユーラについて詮索するつもりはもともなかったようだ。

「御覧の通り、私は育てた植物でお茶や香水を作っているの。庭の菜園はもう見たかしら」

「ええ、来た時に少しだけ」

この部屋の窓からも庭の様子がうかがえる。見える範囲には柑橘系の植物が集中して植わっているようだ。一部の種類は紅茶の原料になるので、それに用いているのだと推測できる。

「必要なものはほとんどここで育てているんだけど、場所が無くて作れない種類もあるのよ」

「ええ！？ こんな広いのに？」

メフィが目丸くして叫ぶ。庭はそう言っても仕方のないほどの広さがあった印象なので、残る二人も同じく驚愕を隠せずにいる。

「庭全体を使えるわけじゃないし、それに他の植物と条件が合わなかったりするから。そういう種類は、特別に育てているか自生している場所まで行かないと手に入らないの」

「つまり、今回の依頼というのは」

婦人の言葉から、エルクはだいたいの内容を理解した。

「そう。あなたたちには、ちょうど切らしてしまっているハーブを頂いてきてほしいの。懇意にしている農園の方がいるから、そこに行ってもらうことになるわね」

「なるほど……わかりました」

依頼の全容が見えたことで、構えていたエルクは全身の力を抜いた。聞いた限りではそれほど難しいわけでも危険というわけでもなさそうだ。ほぼお遣いと変わらない内容だが、初めての依頼としてはちようどいいくらいかもしれない。

「それじゃあ、詳しく説明するからちよつと待ってね。地図を持ってくるから、お茶を飲んで待っていてちようだい」

婦人はにこやかな表情で立ち上がり、三人を残して部屋を出ていった。自身のカップは持って退室しており、中身の残っているポットは三人の前に置いたままとなっている。自由に飲んでいいという話だったが、高級感のある香りにエルクは手を出す気になれなかった。

「おかわり自由なら、もーちよつと貰っておこつと」

「……私も、もつと飲みたいです」

二人の神経の図太さに、エルクは彼女たちに聞こえないよう溜息をついた。

婦人は戻ってくると、テーブルの上で四つ折りの地図を広げた。座っていた三人は反射的に立ち上がり、囲むようにその地図を眺めおろす。

どうやらレクタリア郊外の地図のようだ。現在位置もよくわからないが、赤いペンでマルをつけられている場所があるのはすぐに分

かった。

「この印の場所で、この種類のハーブを頂いてきてね。代金は必要ないから大丈夫よ。……あらいけない、私ったらまだ名前を聞いてなかったわね」

「僕はエルクです」

「メフィっていいいます」

「シユーラです」

顔を上げてそれぞれが簡潔に名乗る。婦人の作る雰囲気のせいか、三人とも言葉を交わす際にあまり気を張らなくなっていた。出会ってからほんの数十分しかたっていないのに、婦人が三人に与えた安心感は相当なものだったようだ。

「私はアドネッセ。よろしくね、三人とも」

婦人——アドネッセは地図を折りたたむと、それをエルクに差し出した。多少サイズが大きく道中では開きづらそうだが、受け取ったエルクはリュックの中にしまいこむ。

彼女は更に便箋を取り出すと手短に何かを書いて封筒に入れ、エルクに渡してきた。

「細かいことはここに書いておいたわ。あちらの人に会ったらこれを見せればちゃんと伝わるから」

「すみません、助かります」

内容が気にもなったのだが、封筒に入れられて内容をうかがい知ることとはできない。もっとも、こういった書物の詮索は無粋というものだろう。

「それじゃ、おねがいね」

「はい、頑張りま」

「任せてください！」

エルクを遮りメフィが威勢よく返事をした。エルクは苦笑したが、アドネッセはやはり優しそうな笑みを浮かべたままだ。長い人生でさまざまなことを経験してきたのだろう、と何となく感じることができる。

「エルク、シューラ、早速出発しよう！　なんだか私ワクワクしてきちゃった」

若干興奮気味にメフィが外へと向かう。後先の事は何も考えていないのは明らかで、放っておけばどこかしらで盛大に転ぶのは目に見えている。

「ええっと、アドネツセさん、行ってきます」

「ええ。あちらの方たちによりしく伝えてね」

「ま、待ってくださいよう」

メフィに引きずられるように歩き出したエルクにシューラが続き、アドネツセはそんな三人の様子をどこか微笑ましそうに見ている。

「シューラ、いつてらっしゃい」

「……？」

アドネツセが最後に何か呟いたが、小さな声のために誰の耳にも届かなかった。

9話 郷愁のハーブ（後）

辺りにはほのかに甘い香りが漂っている。ハーブの花が咲き乱れる時期なので、一年のうちでも今が最も香りが強い。刺激臭というほど強烈ではなく、程よい分量が心地よさを醸し出してくれている。穏やかな風が吹いた。佇んでいた青年——ニールの新緑色の髪が舞い、緩やかになびく。

「和むなあ」

ニールが呟いた。

「ここで寝たら気持ちいいだろうなあ」

「独り言？ 気持ち悪い」

感情のない女の声でツツコミが入る。もう慣れたものなので、ニールは全く気にせずその言葉を受け流した。ただし完全に無視すると後が怖いので、顔だけはそちらへと向けておく。

「リオナは感じないかな、この駘蕩^{たいとう}とした空気^{たいとう}の良さを」

「少し黙ってなさい」

ぴしゃりと言い放たれ、ニールは肩をすくめて自分の作業へと戻ることにした。

ニールがリオナと呼んだその少女は、彼の妹だ。彼と同じ新緑色の髪をツインテールにまとめ、黙々と農作業に勤しんでいる。すでにニールの事は眼中にないようで、作業ペースは集中力散漫なニールに比べ格段に速い。

傍から見ればリオナは不機嫌そのものなのだが、ニールにしてみれば『いつも通り』の姿だ。いつも仏頂面のような顔でいるせいで、初対面の人間は大抵彼女が機嫌を悪くしていると錯覚する。

もつとも、その表情のままニールへ辛辣な言葉を浴びせてくるので、本当に常時不機嫌なのかもしれないが。

しばらくは大人しく仕事をしていたニールだったが、しばらくす

ると顔を上げて再びリオナへ視線を向けた。リオナはすぐその視線に気づき、ニールでも分かるほど顔をしかめてニールを睨みつける。「何してるの？ この仕事、今日中に終わらせる予定だったわよね？」

「うん。でもまあ、そんなに必死になつてまで気にするほどでもないかなって思うよ」

正直な意見を述べた。すると間髪をいれず、リオナがわざとらしい溜息をつく。

言いたいことは分かっている。だが、嘘を取り繕って機嫌をとるほどニールも狡猾ではない。と言うより、その程度の嘘はリオナに通用しないというだけなのだが。

「兄さん……その能天気というか、サボリ癖なところは治した方がいいわよ」

「サボってるんじゃないくて、致命的に仕事が遅いだけさ」

「どっちも一緒じゃない。自分で致命的って言っちゃってるし」

些細な冗談一つまで拾って反応してくれるので、ニールにとってリオナはかなり会話が弾む相手だ。代償として彼女の機嫌はどんどん悪くなるのだが、その点は気にしないことにしている。

「とにかく、今はちゃんと仕事しなさい。私なんか見てたつてしょうがないでしょ？」

「いや、リオナを見てたわけじゃないんだけど」
「え？」

ニールのこぼした一言に、リオナは不機嫌とは違うベクトルで眉をひそめた。

「誰か来たみたいだよ」

「このへんのはずよね？」

地図とにらめっこしながらメフィが唸るように言った。大きめの

地図は三人で持つており、メフィの要望に合わせてくると向きを変えている。

「何も考えずにどんどん歩いて行くからだよ、メフィ」

「うー、私が悪かったわよ」

エルクは呆れ顔で地図を回している。しかし本気で腹を立てているわけではないので、そこまで責めているニュアンスは無い。

「……ま、迷路つてわけでもないし大丈夫だと思うよ。時間はかけたくないけど」

自分たちの用件ではないため、あまりのんびりするわけにもいかないだろう。自分が先導を切っても結果は変わらなかっただろうと自覚しているため、エルクも強く抗議する気は無い。

辺りにはアドネッセの庭とは違う、しかしやはり心を落ち着かせる独特の香りが運ばれてきている。ほのかに嗅ぎ取れる程度なので方向は分からないものの、目的地がもうそれほど遠くないことは感じ取れる。

「……？」

地図を持つたまま傍観していたシューラが、不意に首をかしげた。鼻をぴこぴこ動かし、キョロキョロと落ち着かない様子で辺りを見回している。何かの香りを感じ取ったようにも見えるが、エルクの鼻はハーブラしき香りのせいで何も分からない。

「誰かいるみたいですよ」

シューラはそれだけ言うと、メフィの後ろに向かって指を差した。左前方に見えていた小高い丘。そちらを差しているようなのだが、その方向に人の姿を認めることはできない。短い草地が丘を覆い、風に吹かれてさらさらと波打っているのが見えるだけだ。

「うーん？ よく見えないから判断できないなあ」

メフィが手で日陰を作りながらそちらの様子をうかがっている。それでも視認できなかったのだろう、すぐに諦めて手を下した。

「まずは行ってみようか、ここでじっとしてても仕方ないし。……でもシューラ、この距離でよく分かるね？」

「気配がしたので…… そうなのかな、と」

「気配？」

訳が分からず訊き返すが、それ以上はシューラが答えにくそうにしたのですぐに追及を諦めた。

アドネッセに会ってからシューラの様子がおかしいのは明らかだ。それでも何かできるわけではないので、エルクはもうしばらくそっとしておくことにした。

「…… 誰もいない」

丘の頂まで登ってみたが、見回してみても誰かがいるようには見えなかった。背の高い植物は生えておらず、かなり見通しが利いている状況にも関わらずだ。

その代わり、丘の反対側に広がる大きな畑を発見した。

丘の反対側は三日月のような形になっていて、囲まれる形となっている中心部には一面を埋め尽くすように植物が育てられている。正確な長方形に育っているため、まず間違いなく人の手によるものだろう。

育てているのはハーブのようで、そこが目的地である可能性が少しずつ生まれ始めた。確認の為には管理者と話をするのが手っ取り早いだろうが、結局は人の気配がないという事実に戻ってきてしまう。

「凄い大きさだね…… アドネッセさんの庭も驚いたけど、ここはもっと広さがあるみたい」

「手間がかかるハーブみたいだし、まとめて栽培した方が効率がいんだよ。これで商売をしてるならなおさらね」

かすかな風でも畑全体がざわめき、香りが丘の上まで届いてくる。ハーブの質がいいのか、量が多いにもかかわらず不快な気分には全くなならない。御馳走になったお茶がまた欲しくなってきたしまうほどだ。

「ホントに誰もいないのかな……？ ちょっと降りてみようよ」

「あ、ちよつと！」

メフィが他二人の意見を待たずに丘を下り始めてしまった。角度が急になっているためそれほど速くはないが、もしかしても無計画に突っ走る彼女を止めるタイミングを逃してしまったようだ。

「メフィ、待って！ 勝手に畑に入っちゃまずいよ！」

「あ、置いて行かないでくださいよう」

エルクも慌ててメフィを追う。シューラが出遅れてエルクの後ろにつき、転ばないようにしながら坂道を下っていく。あまりに急になっているため、畑の周りをぐるりと回る形で丘を降りなければならない。

「すみませーん、誰かいませんか？」

「あーもう……失礼します」

ずかずかと畑に踏み入っていくメフィに大きな溜息をつき、エルクも後に続いた。シューラもピタリとついてきているが、先刻から周囲のハーブに興味を惹かれているようで顔の向きが定まっていない。

下に降りて来てみて分かったのは、敷き詰められているかのようだった植物がきれいに整列されていることだった。幾つもの列に分かれて直線状に並んでおり、しっかりとウネも手入れされている。これで自生の可能性は完全になくなった。

「無人……？ ここじゃないのかな」

「堂々と不法侵入してからそう言われても……」

「……いえ」

黙ってついてきていたシューラがその言葉にはつきりと首を振った。人の姿を探していた二人は、彼女の急な発言に意識を移す。

「誰かいます。一人……二人、でしょうか」

話している途中からシューラの鼻が僅かに動いた。耳も澄ませているらしく、どうやらエルクとメフィには分からない『何か』を感じ取っているようだ。

「……怪しい？」

「分からないです……ただ、じつと動かないでいます。なんだか、私たちの様子を窺ってるような……」

はつきりとした正体までは掴めないのだろう。見えてこない『何か』の存在にエルクは頭を悩ませた。

その人物がこの畑の管理主であると考えるのが妥当なところだろう。ただ、メフィやシューラの言う『追手』や『奴ら』でないと制限らない。過剰意識であるのはエルク自身も理解しているが、そのくらいでなければ危険のような気がしていた。

「……！？ エルクさんっ」

シューラが何かに気付いて叫ぶ。すぐさま反応したエルクは、シューラの視線の先へと顔を向けた。

「うわあっ！」

ハーブの間から突き出てきたのは、拳。

音もなく放たれたそれがエルクの頬を掠めていく。咄嗟に体をひねっていなければ直撃していただろう。

「っふう、ビックリした」

「エルクさん！」

「離れてて」

自分に駆け寄ろうとしたシューラを制し、エルクはゆっくりと体を起こした。拳の消えた辺りへ視線を向け、次の相手の出方を窺う。相手が何者であれ、友好的でないことは今ので確定した。ならば少なくとも、黙ってやられるわけにはいかない。例え敵ではなく畑の管理者だとしても、まずはこちらに敵意が無いことを示す必要がある。

「……今のがかわされるのは、ちょっと予想外だったわ」

そんな言葉とともに、ハーブの間から人が現れた。

鮮やかな緑の髪の少女だ。外観はエルクより僅かに年上といったところだろうか。

鋭い眼光でエルクの事を睨み、凍りついたような無表情が顔に張

り付いている。隠すことなく敵意を向けてきており、エルクの話聞いてくれるかは怪しいところだ。

「……この畑を管理している方ですか？」

「黙りなさい。あなたが何者か知らないけど、このまま帰すわけにはいかないの」

「あの、僕たちはアドネツセさんという方に頼まれてハーブを頂きに」

「黙りなさいと言ったでしょう」

聞く耳を持つてはもらえないようだ。いつでも攻撃できる体制で少しずつエルクと距離を詰めてくる。

エルクは何か言おうとしたが、どうせ無駄だろうとすぐに諦め――自分もまた、態勢を整えた。

エルクも相手の少女も態勢を整えたようだ。距離が縮んでいき、すぐにぶつかりあってもおかしくない雰囲気になっている。お互いを牽制しているのか、まだ攻勢には転じていない。

「このままじゃエルクさんが……！」

言われたとおり離れて様子を窺っていたシューラは、二人のほうへ駆け寄ろうとした。自分が役に立たないとは自覚していたが、何もせずにはいられなかったのだ。

だが、駆け出そうとしたところで肩に手を置かれて引き留められた。シューラと一緒に様子を見ていたメフィだ。彼女はシューラと違い、余裕を持った表情をしている。

「落ち着いてよシューラ」

「でも、なんとかしないと」

「大丈夫。一対一だったらず問題ないと思うよ」

「え、それって……あ！」

話している間に、二人の方で動きがあった。

相手の少女が先に仕掛けたようで、連続する打撃攻撃をエルクが

紙一重でかわしている。少しずつ後退しているので、エルクの方が押されているように見受けられる。

「あーうん、やっぱり。心配いらないや」

だが、メフィの言葉には緊張感というものが全くなかった。

「……どういことですか？」

「んー、何て言ったらいいのかな、えーと……」

「うおっと」

すぐ目の前を蹴りが横切っていった。ただのパンチだけでなく、全身を駆使して流れるような連撃を放ってきている。どうやらこの少女は、それなりに闘いの心得があるようだ。

「いい加減にしてくれませんか？ 畑に勝手に入ったことは謝ります」

「もうそういう問題じゃないの。あなたは私たちを『見て』しまった、それだけで十分」

全く会話が成立しない。エルクにとっては最後の望みだったのだが、受け入れてはもらえなかったようだ。

「……仕方ないなあ」

攻撃をかわしながら溜息をつく。エルクとしては『実力行使』はあまり好まない方法なのだが、この状況では贅沢を言っていられないだろう。

覚悟を決めたエルクは、先刻とは違う眼で少女と向かい合った。

彼女の攻撃は、どれもかなりのスピードを誇っている。絶え間なく攻め続けているため、腕や足が増えたとさえ感じられてしまう。

だが、見切れないほどのものではない。

「よっと」

「！」

繰り出された右ストレートの合間を縫って懷に滑り込む。拳が突き出されているため、そこには一瞬の隙が生まれている。

そのまま巻き込むように腕を掴み、後方に回り込みながら思い切り捻り上げた。

「うああっ!？」

痛みによる悲鳴が少女の口から洩れる。エルクをはがそうともがくが、捻られて後ろに回った腕では力が入らない。

「すみません……こうでもしないと、会話もできそうになかったの
で」

「……へ？」

呆氣にとられるシューラの横で、メフィが苦笑気味に呟いた。

「エルクってさ、実はけっこう強いよね」

「あー」

「なっ……痛っう!？」

恐る恐る声をかけてみると、一応反応はあった。どれほど激痛なのかエルク自身は知らないが、これほどあからさまに痛がるということは相当なのだろう。

「話、聞いてもらえますか？」

「うっ……」

腕を掴む力を少し緩めた。それにより多少痛みが緩和されたのか、少女の表情に冷静さが戻ってくる。もちろん油断はできないので離さないようにはしているが。

てつきり恨めしそうに睨んでくると思ったのだが、その顔には勝ち誇ったような笑みが浮かんでいた。

「……甘いわよ。私に気を取られて、あっちの二人をないがしろにしたわね」

「え？」

不穏な言葉に思わず訊き返すが、少女はそれに答えず大声で叫んだ。

「兄さん！ あとはお願い！」

エルクが完全に押さえ込んだように見えた少女が、なぜかシューラとメフィの方を見て何かを叫んだ。何かの合図のようで、呆けていたシューラは聞き取ることができなかった。

「……え？」

そしてすぐに気付く。少女の注意が、自分たちのさらに後ろへと向けられていることに。

「ひゃあ！ いつの間に!？」

メフィが振り返るなり驚愕を露わにした。

つられて後ろを向くよりも早く、シューラは自分に迫る『存在』を感じ取った。

「……!」

すぐ後ろに誰かがいる。

自分に向けて手を伸ばしている。そこまで判るほど、近くに。

「あれ？ 君は……」

「？」

間の抜けた声が聞こえ、緊張しかけていたシューラは首を傾げて後ろを振り向いた。

目の前には中途半端に伸ばされた腕。

そこに佇んでいる青年は、どこか驚いたような表情でシューラの事を見つめている。

「え、あ」

あちらの少女と同じ緑色のショートヘアはかなり珍しい部類に入るだろう。だが、シューラはそれよりも別の事に気を取られてしま

っていた。

青年から『植物』の気配を感じ取ったのだ。
ハーブとは明らかに別物の、自分と『同種』である気配を。

10話 迫害のハーブ（前）

「本当にごめんなさい!!」

深々と頭を下げる少女。エルクたちは誰も怪我をしていないものの、下手をすれば大怪我では済まないほどの攻撃を仕掛けてきたのだ。必死に謝っているのはそのせいだろう。

「アドネツセさんの紹介っていうのも嘘じゃなかったんだねえ」

対する青年の方は何事もなかったかのように笑っている。アドネツセに渡された手紙を読んでいるので、おそらくそこにおよその事情がしたためられていたのだろう。和解は成立したようで、エルクは安心して胸をなでおろす。

「あ、改めて自己紹介するわね……私はリオナ、こっちは兄のニール」

「僕はエルクといいます。それからメフィに、シューラ」

エルクの紹介に合わせて二人が礼をする。すると、リオナとニールの注目がシューラに集まっていることに気付いた。

対するシューラも二人の事を困惑したような眼で見つめており、お互いにエルクの知らないつながりがあるようだ。

「シューラのこと、知ってるんですか？ さっきもシューラを見た時に変な様子でしたけど」

「あ、ううん、知ってるわけじゃないわ。こんな形で同族に会って驚いてるのよ」

「うううああ、あのあのあの、それはっ」

なにやらシューラが慌てて会話を阻もうとしてくる。急に割り込まれ、エルクは啞然としてしまう。

リオナが訝しそうにシューラを見つめ、それから何かに気付いたような顔をして口を開いた。

「……あなた、ひょっとして彼らに話してないの？」

「あああううう………は、話してないです………」

「それだけ大っぴらなのね。気付いてないとは思えないわよ」

「ねえ、二人とも何の話をしてるの？」

「またもや話について行けず、メフィが率直な疑問をぶつける。エルクも彼女に同意見だ。」

するとリオナは、シューラに向けて何かを問いかけるような視線を向けた。言葉にするなら「話していい？」といったところだろうか。シューラは少しだけ考えて、それから小さく頷いた。

「説明の前に、一つだけ訊かせて。……エルク、あなたはシューラのカサを見て何も思わなかったの？ とても人間には見えないじゃない」

「そうですか？ 外せないのは確かに妙だと思いましたけど、変わったデザインの帽子ぐらいにしか」

「っていうか……え？ シューラ、人間じゃないの？」

エルクにかぶせてメフィが疑問符を浮かべる。今の言葉はそう捉えてもおかしくない表現だ。

その反応を見たりオナは何がおかしいのか、不意にクスクスと笑い始めた。

「これは楽観的というか……そんなあつさり受け流されてるなんて思ってもいなかったわ。怯えながら隠れ住んでた私たちが馬鹿みたい」

「だ、大丈夫です。エルクさんたちは『奴ら』とは違います。まだ会ったばかりですけど……判ります」

必死な様子のシューラが何か庇い立ててくれているらしい。残念ながらまだ話が見えてこないの、彼女の懸念するところも不明瞭なままだ。

「ええ、分かったわ。それじゃあエルク、メフィ、よく聞いてね」
完全に警戒を解いたようで、リオナの表情がかなり柔らかいものになっている。それでも不機嫌そうに見えるのは、彼女のもともとの顔なのだと思うことにした。

「確かにシューラは人間じゃないわ。頭のカサは彼女の身体の一部

……つまり彼女は、植物の身体を持っているのよ」

「しょ、」

「植物の身体!？」

驚いたメフィの大声にシューラもビクリと反応する。目が潤んでいるのは驚いたからではないようだ。

「しゅ、シューラ……?」

「は、はい」

目を見開いたままのメフィの顔がシューラへと向けられる。潤んだ目のシューラは、怯えた様子でメフィから僅かに視線をそらした。「ホントに? 人間じゃないの?」

「……………はい」

答えにくそうにしていたが、言い逃れできないと感じたのだろう。今にも泣きだしてしまいそうだが、その理由がエルクにはよく分かっていなかった。

「会ったばかりの時にやたらと警戒してたのもそのせいだったのか」「うーあー、ビックリして頭が混乱してきた……」

「二人ともひとまず落ち着いてくれ。彼女の話は後で聞いてもらえるかな」

そこに手紙を読み終わったらしいニールが口を挟んできた。二人の追及を逃れたシューラは、それでもなお気まずそうに顔を伏せてしまっている。

「さて、その子が人間でないことは二人とも受け入れてくれたと思うけど……じゃあどうして、私たちはそんなことを知っていると思う?」

エルクとメフィに向けて、試すような口調でリオナが問いかけた。

ヒントは山のようにある。シューラの様子がおかしいことや、彼らとシューラのやりとり。質問を振るタイミングから見ても、考える間もなく容易に答えを導き出すことができるだろう。

無言で二人と目を合わせると、それぞれニコリと笑って肯定した。

「そう、僕たちもシューラと同じで人間じゃない。体に植物が生えてるんだよ。まあ僕たちの場合、キノコじゃなくて苔なんだけど」

「人間は私たちのことを『植物族』とか呼んでるみたいね」

安直なネーミングだが、分かりやすい呼称だろう。一瞬は納得しかけたエルクだったが、すぐさまその考えを打ち消して疑問を口にする。

「いえ、ちょっと待ってください。僕はそんな種族がいるなんて聞いたこともないですよ。だからシューラも人間だと思っていたんですが」

「そうなの？ 人間側の事情はよく知らないけど」
「？」

どこか突き放したような言葉に、エルクは眉をひそめる。不機嫌っぽい程度だった表情が、明らかに不機嫌なそれに変わっているのだ。

エルクの疑問を察したのか、リオナは幾分重い口調になって言葉を続けた。

「私たち植物族はね、人間に迫害されているのよ」

思いのほか深刻な言葉に、エルクの思考が一瞬フリーズする。

植物族という存在も今しがた知ったばかりだ。その上彼らが迫害されているなど、脳内で情報を上手く処理できない。

「だからさっきは警戒して襲ったりしてしまったんだ。本当に申し訳ない」

「……はあ」

ニールが重ねるように頭を下げる。そこでようやく三人は奇襲の訳を理解した。

シューラを見て攻撃をやめたのは、エルクたちが植物族を差別していない人間だと判断したからだろう。実際はそうだと知らなかっただけなのだが、結果として彼らと和解できたのでエルクは何も言

わないことにした。

「でも迫害なんて、どうして？ 僕は植物族の存在も今知ったばかりで、何も事情が飲み込めないんですか」

「私もそうよ。植物族がどうのこうのって、今まで一回も聞いたことないよ」

二人並んでリオナに詰め寄る。次から次へと疑問が湧き上がってくるせいで、自身の考えの整理すらままならない。

「私にも詳しいことは分からないわ。アドネツセさんは何か事情を知ってるみたいだから、あの人に聞いた方がいいんじゃないかしら」
「……………分かりました」

一瞬迷ったものの、その提案を受け入れる。リオナとニールは被害者であり、色々と知りたいのは彼女たちも同じなのだ。アドネツセなら人間側に関する情報も持っているだろうと考えたエルクは、彼女たちへの追及を諦めることにした。

「でも、どうしてここでハーブを育てているんですか？ 身を隠すなら定住するのは危険じゃないでしょうか」

おせっかいだとは思いつつも、エルクはそう訊かずにはいられなかった。

シューラの様子から見ても、その迫害が軽いものではないと推測できる。自分たちが知らないところでどんな仕打ちを受けてきたのかは知らないが、知ってしまった以上看過できる問題ではなくなつたのだ。

「そうだね……………」

ニールが腕を組んで考える仕草をする。真剣に考えているのだろう、無表情の中にも真面目な雰囲気伝わってくる。

「恩返し、かな」

そして、そう短く纏めた。

「それって、アドネツセさんに？」

メフィが質問すると、リオナとニールが同時に頷いた。

「まあ、厳密に言うとは少し違うんだけど。あの人の為にハーブを作っていることに違いはないわね」

「恩って、どんな？」

興味津々と言った様子でリオナに顔を近づけるメフィ。

こういったゴシップには目が無いのだろう。エルクにはデリカシ
ーの無さを露呈しているだけに見えるのだが。

「うーん……人に話して聞かせるような話じゃないから」

案の定、気軽に教えられるものではないらしい。

「そっか。でも……大丈夫？ 街からも結構近いよ、ここ？」

「意外と人が通らないし、たまに通りかかってでも私たちの事を探そ
うとする人はまずいないわ。もともと道からは見えにくい場所にあ
る畑だし」

「それって、私たちもおんなじだったんじゃない？」

「あなたたちはわざわざ丘を越えて、畑にいきなり入ってきて、し
かも大声で呼びかけてくるんだもの。そりゃ警戒だつてするわよ」
呆れた様子のリオナにメフィが体を小さくする。エルクの制止を
無視して入っていったことを忘れたわけではないようだ。

反省して今後の行動に活かしてくればエルクとしてもありがた
いのだが、かなり落ち込んだようなので少しだけ助け船を出すこと
にした。

「でも、僕はアドネツセさんの名前を出しましたよね？ あれで分
かってくれてもよさそうなものですけど」

「う……それは……、だって、今までアドネツセさんがここに人を
連れてきたことなんてないんだもの」

声が小さくなる。お互いに非があることをそれぞれ自覚したよう
だ。

「怪我もしませんでしたし、僕は一向に構わないんですが。それよ
り、ここに来た目的なんですけど」

「目的？ ま、まさか、実は最初から私たちの事を狙って」

「違います！ たった今アドネツセさんの名前出したじゃないです

か！」

植物族についてまだまだ知りたいことはあったものの、現在はお遣いの真っ最中だ。エルクは本題に入るべく、上着を開いてバッジの存在を見せた。

「あ」

渡されたハーブを持って帰路につこうとしたエルクは、懸念事項を思い出してリオナの方へと駆け戻った。

「どうしたの？」

「いえ、大したことじゃないんですけど……」

後方を見ると、突然引き返したエルクをメフィとシューラが不思議そうな目で見ていた。メフィはそれだけだが、シューラはエルクだけでなくリオナとニールのことも気にしているのが分かる。

「今日は慌ただしかったので、また後日にお話を窺いに来てもいいですか？」

「……お話？」

「その、植物族の事とか、お二人とアドネッセさんの事とか……。僕たちも、その……」

その申し出は、彼らにとって意外なものだったのかもしれない。

二人ともキョトンとした顔になった。しばらく固まり、それからリオナが嬉しそうな微笑みを表情に浮かべた。

「勿論いいわよ。でもそれなら、アドネッセさんもいろんな話を知ってると思うわ。話を聞くついでに色々質問してみたらどうかしら」

「そうします。ただ、お二人の話も……できれば、シューラに」
チラリとシューラの様子を見る。

こちらの会話の内容が気になっているようだ。耳を傾けて少しでも聞き取ろうとしているが、この距離で彼女の耳に届くことはないだろう。

「あの子のこと、ちゃんと考えてるのね。いいトコあるじゃない」

「……」

リオナに褒められ、エルクは照れ隠しに頬を掻いた。

「それじゃあね。あ、分かっているとと思うけど、私たちのことは他言無用だからね」

「アドネツセさんによろしくね」

「はい。ありがとうございました」

そろそろメフィが苛立ち始めている頃だろう。エルクは深く一礼すると、待っている二人の方へ慌てて走って行った。

11話 迫害のハーブ（後）

「あのっ……！」

驚くほど大きな声でエルクとメフィを呼びとめたのは、二人の後ろでずっと俯いていたシューラだ。

色々と考え込んでいたエルクとメフィは、完全に不意を突かれてビクリと体を震わせた。

「そんな急に大声……ビクリするじゃない」

メフィが左胸を押さえて振り返る。エルクも心臓が止まる思いだったが、切羽詰まったような彼女の声に非難の言葉を飲み込む。

シューラはそんな様子に気づいていないのか、声を張り上げた場所で哀しそうに佇んでいる。二人とは少し距離ができているのだが、その間を詰めようとはしない。

「どうしたの？」

思いつめている様子なので、エルクが慎重に声をかける。

シューラに元氣が見られないのは、リオナとニールと会話をした辺りからだ。その内容を鑑みると、おのずと彼女がふさぎこんでいる理由が見えてくる。

だからこそ、彼女の口から直接聞いておかなければならない。

「……………」

見るからに言いにくそうだ。先刻の呼びとめた声だけでも、彼女にしてみればかなり勇氣のいる行動だっただろう。

見ていられなくなっただのか、メフィが心配そうに言葉を吐き出す。

「植物族のこと？」

その問いに小さく頷き、呼びとめた際の大声が嘘のように縮こまった声で、

「嘘つきだつて、軽蔑しますか……？」

と訊いてきた。

やっぱり、とエルクは息を吐く。

彼女は、自分が植物族だと隠していたことを気にしているのだ。

実際には、エルクもメフィも植物族という存在自体を知らなかった。二人にしてみれば必要な心配なのだが、彼女からしてみれば騙しているようで後ろめたかったのかもしれない。

「幻滅、しましたか……？」

リオナに対して、二人を信じているとシューラは言った。それでも不安が完全に解消されるわけではない。心のどこかで、二人に嫌われることを恐れていたに違いないのだ。

彼女が植物族だと言われ、エルクとメフィは思わず彼女に詰め寄ってしまふほど驚いていた。その反応は、彼女自身にとつて『知らなかったから』だけでは抑えきれないほどショックだっただろう。

もし、エルクやメフィにまで差別されたら。彼女の言う『奴ら』と同じ仕打ちを受けたら。信じようとすればするほど、そんな疑念が頭をもたげてきてても不思議ではない。

当然、エルクは今でもシューラを仲間と考えている。確かめるまでもなくメフィもそうだ。

しかし、それをうまく伝える言葉がエルクの頭に浮かんでこない。どんな言葉も、咄嗟に取り繕っているだけののように聞こえるのだ。

黙っていてはいけなさと理解している。それでも、重い口はしっかりと閉ざされて開かなかった。

「そんなネガティブにならないの」

快活な口調でメフィが明るく笑いだした。

「あんまり後ろ向きだと、周りの人まで暗くなっちゃうよ」

「メフィさん……その、私」

「うん。嫌われるかもって思ったら言い出せなかった。どう言われるか分からなくて怖くなっちゃったんだよね」

軽い足取りでシューラへと歩み寄っていく。沈みきったシューラとは対照的な様子で、あまり説得しているようには見えない。

近づいてくるメフィに気付いたシューラは怯えるように半歩下が

つたが、すぐにメフィに両肩を掴まれてしまった。

「そりゃあ、最初に聞いた時は驚いたわよ？ シューラが人間じゃない…… っていうか、植物族って人たち自体知らなかったんだもん」
未知の種族の存在を知らされ、仲間がその種族だと教えられれば驚くという方が無理だろう。

「メフィさん、私は……」

「植物族だった。だから何？ って感じよ、私は」

涼やかな表情で断言するメフィ。さすがのシューラも度肝を抜かれたようだ。

「だから何、って……」

「私たちはね、シューラを肩書きなんかで判断したりしないの。迫害がどうこうっていうのも興味ないし、隠し事くらい誰にだってあるわよ。そうでしょ、エルク？」

「もちろん」

「……………」

逃げ腰だったシューラの震えが収まった。メフィが両手を下ろしたが、もう逃げるつもりはないようだ。

「その……」

「ん？」

「ご迷惑をおかけしました」

頭を下げるシューラ。彼女なりの決別の仕方だとわかるので、謝るなどとは言わない。

「これから、一緒にいてくれますか？」

「もちろん！ 私たち三人、一夜を共にした仲じゃない」

「メフィ、その表現はちょっと……」

メフィの発言に慌てて否定に入った。第三者が今の言葉を聞いたらどんな表情をするのか、想像もしたくない。

「ふえ？ 別にいいでしょ、本当の事なんだし」

「語弊があるんだってば」

分からずに言っているのか、確信犯なのか。メフィの悪戯っぽい

笑顔を見るに、おそらく後者だろう。

一言ぐらい言ってやろうともエルクは考えたが、シューラが元気になったので大目に見ることにした。今の言い回しも、メフィなりに励まそうとしたのかもしれない。

「でも、『植物族』ってネーミングはどうかと思うよね。もっと格好のつく呼び方とかなかったのかな」

「たとえば？」

「私なら『プランティア』とか、『ボタニカル』とかもいい感じかな」

「……………」

「そ、そんな二人して可哀想なものを見るような目で見ないで……言ってみただけだから」

「またお茶を淹れたのよ。今度はアプリコットティーなのだけれど、お口に合うかしら」

エルクはまずハーブを渡そうとしたのだが、アドネツセは『とりあえず座って一息つきましよう』と言い、前回と同じ部屋に通された。

リオナとニールから貰ったハーブは手元にあるままだ。急がなくていいとは言われていたが、大した依頼ではなかったことを実感させられてしまう。

「襲われたりもしたのにね」

「あれは僕らにも非があったでしょ。主にメフィに」
「そろそろ泣いてもいい？」

くだらない話をしていると、アドネツセがお茶を注いだカップを持って戻ってきた。湯気がわき上がっており、まだ淹れたてであることが伺える。

前回のベルガモットティーと違い、まったりとした甘味を感じさせる香りだ。お茶の風味を損ねないまま、ほのかなアَنْズの匂いが喉をくすぐってくる。

「お願いしたハーブで淹れてもいいのだけれど、準備に時間がかかってしまうのよ。申し訳ないけど、これで我慢していただけるかしら」

「いえ、そんな。喜んでいただきます」

「それじゃ早速」

「失礼、します」

エルクが対応をしている間に、メフィとシューラがカップに手を伸ばした。長く歩いて喉が渴いていたのだろう。

もはや呆れることにも疲れてきたエルクは、自らも残っている力ツブを手にとった。

「それで、どうだったかしら？」

一息ついたのを見計らってか、アドネッセが嬉しそうに言葉を発した。三人は何を尋ねられているのか分からずに首をかしげる。

「どうだった、とは？」

「リオナとニールに会ったでしょう？ この辺りで他の植物族の方にはあまり会えないだろうし、特にシューラは思うところがあったのではないかしら」

シューラのカップを持つ手が一瞬だけ止まった。実際に様々な感想はあるだろうが、積極的に他人に話せるものばかりではない。植物族の差別についてなど、思い出したいくないこともあるはずなのだ。「すみません。僕たちはまだ、こういうことなのか何も分かっていないんです。あの二人に聞いて、やっと植物族という存在を知ったばかりなんです」

「あら？ 植物族の事、知らなかったの？」

「あの……内緒に、してたんです。私が人間じゃないってこと」

自嘲気味にシューラが笑う。するとアドネッセは、はつきりと分

かるほど驚きを表情に出した。

「そうだったの……一緒にいるから、てっきり把握しているものだ
思っていたわ」

「教えて頂けませんか。植物族について、そして彼らと人間の関係
について」

「そうね……」

アドネッセはやや言葉を濁し、落着こうとするかのようにお茶
を口に運んだ。

エルクとメフィはお茶に手を出すのをやめ、じっとアドネッセに
視線を注いでいる。どんな心境が分かっているのか、アドネッセは
いくらか声色を低くして呟いた。

「……少し長くなるからね」

「人間と植物、両方の特徴を体に持った人々の事を植物族と呼んで
いるの。自律行動や食事もあるから、どちらかというと人間に近い
わね。この辺りは二人から聞いたかしら」

「はい」

重々しく頷く。彼らとの間でどのような会話を交わしたのか、ア
ドネッセはおよその見当をつけているようだ。

「知能や文化水準も私たちと同じくらい高いから、ほとんど人間と
違いは無いわね」

「でも、人間に迫害されているんですね。どういことなんです
か？」

人間である自分が訊くのも変な話だ、とエルクは内心で自嘲する。
自分の知らなかった暗い部分を知ってしまったというのは、あまり
いい気分にはならない。

「どうい、と訊かれても説明が難しいのだけれど……差別は確か
に存在するわ。リオナとニールの二人も、そうして追われていると
ころを助けたのよ」

「そう、なんだ」

メフィは少なからずショックを受けたようだ。二人の様子は明るく、そんな過去を感じさせる素振りとは全く見せていなかった。そんな彼らの事を思い返してやりきれない気持ちになったのだろう。

「何かできることはなかったのかな」

「メフィさん……。あの二人も、ちゃんと分かってくれてると思いますよ」

「気にしなくてもいいわ、メフィ。彼らは差別を気にしてはいただけど、人間が嫌いというわけでもないのよ」

アドネッセに対する彼らの口調を考えても、そこまで人間不信に陥ってはいないのだろう。見慣れない人間であるエルクたちを襲う程度には警戒していたのだが。

もちろん、全ての植物族がそうだとは限らない。迫害の事実もあるのだから、人間をまるごと憎んでいる者もいるに違いないのだ。仮に会うことがあっても、必ずしも友好的な対応が得られるとは限らないだろう。

「でも変だと思うのは、僕やメフィがその差別の存在どころか、植物族自体を知らなかったことなんです。迫害されているというのなら、何かしら情報が入ってきててもよさそうと思うんですが……一部の人間だけが植物族の存在を知っていて、しかも彼らを迫害しているというのは妙じゃありませんか？」

「ええ。どうやら、彼らの存在を一般の目から隠そうとする動きがあるようね。迫害のせいで彼ら自身から姿を隠すようになってしまったのも手伝っているみたいだけど」

迫害されてなお人間と共に暮らす必要はないということだろう。どの程度の規模かは分からないが、全ての植物族が集まって一か所に移り住んだとすれば、それはまさしく異常事態と呼ぶにふさわしい。

「じゃあアドネッセさんも、最初は植物族の事は知らなかったんですか？」

「ええ、あの二人に会って初めて彼らの事を知ったわ。差別のこと

もその時に聞いたけど、私は彼らも人間と変わらないと考えているから」

「……すごいですね」

「あなたたちだってシユーラと一緒にいるじゃない。それと同じじゃないかしら」

ニコリと微笑んでお茶を飲むアドネツセ。若々しい印象は変わらないが、熟年者の持つ余裕のようなものが垣間見える。おそらく植物族について聞かされた時も、エルクたちのように取り乱すことはなかったのだろう。

「あなたたちをリオナとニールの畑へ行かせたのは、シユーラとあの二人を会わせておきたかったからなの。二人は他の植物族の事が気になっていたようだし、シユーラも同族と会っておきたいんじゃないかと思ったのよ。まさか二人が植物族について知らないとは思わなくて」

「……もしシユーラが一緒じゃなかったら、別の場所に行かせたってことですか？」

「ええ。初めて会った時に『アツツエの楡の木』というものについて訊いたでしょう？ それは、植物族の人ならよく知っている『道しるべ』の事らしいわ」

シユーラを一目見て、もしやと思い訊ねてみたらしい。隠しきれなかったことを恥じているのか、シユーラが顔を赤くして小さくなった。

嘘がつけない性格なのだろうとエルクは苦笑し、それからアドネツセに向き直る。いつの間にか話がそれていることに気付いたのだ。「しかし、どうして彼らは迫害されるようになったんでしょうか。アドネツセさんに心当たりはありませんか？」

話を本筋に戻すと、アドネツセの微笑みが薄らいだ。彼女にとっても愉快な話ではないのだろう。

それでも事情を知っておきたい、とエルクは考えている。

例えシユーラを仲間のもとへ送り届けられたとしても、それだけ

で根本的な解決にはならないだろう。差別を完全になくすことは難しいだろうが、できる限りの事はしたいと思っているのだ。

「根本の原因は分からないけど……彼らが隠れ住むようになったのは、確実に人間のせいね」

静かな怒りを湛えながら、アドネツセから言葉が綴られる。

「人間と変わらない知能を持つ彼らを危険因子とみなした一部の人間が、徹底的な排除を推し進めたのよ。数えきれないほどの人が殺されたり、どこかに連れていかれたりしたらしいわ」

私も直接見たわけではないのだけど、とアドネツセは続けた。

そういった排除活動はアドネツセが生まれるよりもずっと昔に始まり、現在に至るまで続いているらしい。人間と植物族の間に横たわる確執は、それほど長く存在し続けているのだ。その過程において、エルクやメフィのような『存在自体を知らない』人間が出来上がってしまったことになる。

「植物族の人って……そんなに虐げられてきたんですね」

何も知らなかった自分に齒がゆさを感じながらエルクが言葉をこぼす。シューラに仲間だと言っておきながら、自分は何も分かっているが、いなかったという事実がエルクの胸を貫いていく。

「一部の人間……誰が、こんなこと」

哀しそうに俯くシューラに、かけるべき言葉が見つからない。

今の話を聞き、何かを思い出したのだろうか。自分自身を抱きしめ、小刻みに震える体を支えている。

「これは老婆心かもしれないけど……新聞に出ていたテロリストの集団、彼らも無関係ではないと思うわ。世界政府が対策に乗り出しているから、遭遇することはないと願いたいわね」

「……気をつけます」

自分たちの旅の目的を思い出し、エルクは今一度気を引き締めた。

話に夢中になっていたせいか、外が少しずつ暗くなってきた。

街灯がぼんやりと灯り始め、空は黒のような紺色で塗りつぶされ始めている。日の沈んでいる辺りはまだ茜色がうつすらと残っているが、完全に見えなくなるまでそう時間はかかりそうにない。

「今日のお宿は決まっているの？」

アドネツセが心配そうに問いかけてきた。幼児とまではいかないものの、少年少女ばかりのエルクたちをこの闇夜に出すのは不安なのだろう。

「ギルドで宿泊できると聞いてますから、今日はそこで」

「でも、夜のレクタリアは危ないわよ。今から戻るとだいぶ遅くなってしまうし……もし三人がよければ、今晚はここに泊まっていきなさい」

「え、でも……」

これ以上迷惑をかけるつもりはない。そう言おうとしたのだが、それを読んでいたかのようにアドネツセがメフィに何か耳打ちをした。

「実は、夜のレクタリアには………が、………で………なの」
「……！」

メフィの表情が劇的に変化した。恐怖にひきつって青ざめたその形相は、色々な意味で嫌な予感しかしない。

「エルク、泊めてもらおう！　こんな夜中に歩くのは危険だよ！」

途端にメフィが大声でそう叫んだ。彼女の行動がいつも簡単に予測できるのは、エルクにとって喜ぶべきか悲しむべきか。

「昨日は野宿だった気がするんだけど」

「あれは運が良かっただけなのよ。そもそも、こんな住宅街じゃ野宿なんてできないわよ」

「それはそうだけど……」

アドネツセに何を言われたのかも非常に気になったが、街の治安についてのことであるくらいは分かる。そこは重要な案件ではないので忘れることにした。

「気にする必要はないから安心して。この大きな家に普段は私とり

オナとニール、それとファル……もう会っているわよね、白い髪の女性なのだけれど」

「あの、最初に来た時に案内してくれた人ですか？」

「ええ、そう。いつもはその四人だけなのよ。賑やかになるのは大歓迎なもの、是非泊まっていつてほしいわ」

にこやかにそう言われると余計に断りづらい。かといって容易に認めるのも難しい選択肢だ。

なおも悩むエルクに、アドネツセがさらに追い打ちをかけてきた。わざとらしく時計を確認し、それからエルクの目を見つめて意地悪っぽく笑う。

「そろそろリオナとニールが帰ってくる頃ね。話を聞くにはちょうどいいのではないかしら」

「そ、そうなんですか」

二人の名前を出されて、エルクは言葉を詰まらせてしまう。

彼らからもつと話を聞きたかったのは事実だ。シューラにも同族と話す機会を与えてあげたいと考えており、これはまたとないチャンスと言えるだろう。

「あ、あの……私は、どちらでも構わないですから」

「……いや、いいんだよ」

迷っているエルクにシューラが気遣いの一言をくれたが、むしろ逆効果だ。ここでシューラの言葉に甘えたと、少なくともメフィから悪態と鉄拳制裁の嵐をお見舞いされることになる。

「さあ、決めて頂戴。もう全員分の夕食を作り始めているから、食べてもらわないとむしろ困るのだけど」

「エルク、ほら！」

「あの、私は……」

「……………」

逆らう術はないと悟り、エルクは力尽きたようにがっくりと肩を落とした。

「そういえば、エディカにもこんな感じでギルドに入れられたんだよね……」

「エルク？」

「……僕って、どうも押しに弱いような気がするなあ……」

「エルクさん？　どうかしましたか？」

「なんでもないよ。はあ……」

他人の意見に流されやすいのだと自覚し、エルクは再び溜息をつく。

残念ながらその溜息は、誰の耳にも届かなかったようだ。

12話 談笑のハーブ

夕食を終えた頃には、外は完全に闇に閉ざされてしまっていた。街灯が立ち並んでいるとはいえ、年頃の女の子二人を連れて歩くには向かない危険な状況になっている。

既に諦めたことではあるが、エルクはどうしても泊めてもらうことへの抵抗を払い切れずにいた。

「これは何のお茶なんですか？」

「ローズティーよ。バラの香りがするでしょう？」

どれだけの種類があるのか、アドネツセのお茶の香りは淹れる度に違うものになっている。そのため、飽きることなくお茶を味わうことができるようだ。

手際良くアドネツセがカップにお茶を注いでいく。そこへ、真っ白な髪の女性――ファルが部屋に入ってきた。

「あら。お義母様、私もお手伝いいたしましょうか？」

「こちらは大丈夫よ。キッチンにクッキーがあるから、取ってきてもらえるかしら」

「分かりました。少々お待ちください」

長い紺色のスカートをふわりと翻すと、軽い足取りで再び部屋を出ていく。エルクには心なしに彼女が上機嫌になっているように見えた。

「あの人……」

「ファルのことかしら？」

「ええ。こちらの使用人の方でしょうか」

なんとなく違うことは分かっている。しかし、他にどう形容すべきか思いつかなかったのだ。些細なこととはいえ、分からないことをそのままにしておくのは気持ちが悪い。

「あの格好ではそう思うのも無理はないわね。自分からよく働いて

くれるから、ますます使用人のように見えてしまふのかしら」

紺のジャンパースカートといい、白いブラウスといい、使用人以外でそんな服装をする理由は思いつかない。アドネッセも同意見らしいので、エルクの偏見ということはないだろう。

「彼女は、私の息子の結婚相手……彼女から見れば、私は姑ということになるのかしら。以前はずっと遠くに暮らしていたのだけど、最近はこちらで一緒に生活しているのよ」

「なるほど。それで、相手の方は……」

「仕事が忙しいみたいで、一人で以前の街にいるようね。ファルにこちらへ来るよう勧めたのは彼なの。きっと、普段ファルを一人きりにしていると思ったのでしょうかね」

アドネッセは肩をすくめて苦笑いした。

ファルについて語る様子を見る限り、二人はかなり良い仲であることが伺える。他人であるエルクが余計な気を遣う必要はなさそうだ。

「お待たせしました。これでよろしいですか？」

ほどなくして、クッキーを取りに行っていたファルが戻ってきた。渋い緑色の缶を手を持っているのは、おそらくアドネッセの頼んだクッキーだろう。

「そうそう、ありがとう。ファルも一息ついて、こちらでお茶でもどうかしら」

「そうですね……それでは、ありがたく頂くことにいたしますわ」
礼儀正しくお辞儀をするファル。エルクにとってはアドネッセもかなり気品あふれる人間に感じられたのだが、ファルは彼女よりもさらに礼節や言葉遣いが丁寧になった印象だ。かといって必要以上に堅苦しくなったりもせず、部外者であるエルクたちを快く受け入れてくれている。

「さあ、エルクさんもどうぞ」

「はい、いただきます」

バラの香りの紅茶を受け取り、エルクはそれを一口だけ含んだ。

優しい香りが鼻を抜け、心に安らぎを与えていく。

「明日はセージの摘み取りをしようと思っているの。もし手が空いたら、ファルも手伝ってもらえないかしら？」

「もちろん構いませんよ。では、農作業用のブーツを用意しておきますね」

お互いに気兼ねなく会話を弾ませるアドネッセとファルを眺めながら、エルクはカップを置いて小さく息を吐いた。

（家族、かあ……）

その胸の内に、僅かな虚しさを隠して。

カップに注がれたお茶を一気に飲み干すと、リオナはその表情いっぱいに不服を露わにした。

「あのエルクって子、なんであんなに強いなの？ 私だって少しは腕に自信あったのに、あそこまであっさり負けるなんて納得できないわ」

「そ、そんなこと言わないでください……」

テーブルに片肘をつき、唇を尖らせるリオナ。そんな彼女にどう対応していいか分からないのか、シユーラがその隣でしどろもどろになっている。あからさまに不機嫌なりオナの顔は若干赤色がかっており、まるでアルコールを摂取したかのような豹変ぶりだ。

「落ち込むわ……これでも自分の身くらい守れると思ってたのに」「エルクは特別よ。と言つても、人間離れしたくらい強いわけじゃないけどね」

そう答えたのは、アドネッセからお茶のおかわりをもらって戻ってきたメフィだ。よほどお茶が気に入ったのか、かなりのハイペースで飲み進めている。

「昔からケンカだけは強くてねー。本人は暴力が嫌いみたいだけど、いじめっ子みたいなのはよく追い払ってもらってたわ」

たはは、と恥ずかしそうに笑う。明言はしないが、そのいじめの

対象は彼女だったのだろう。

「……メフィとエルクは付き合い長いのかしら」

「小さい時から一緒に遊んでたよ。今は私が誘って、一緒に旅してるところ」

「幼馴染ってトコかしら。じゃあ、シューラはなんでその二人と一緒ににいるの？」

「わっ、私ですか？」

自分に振られると思っていなかったのか、シューラが驚いて跳び上がった。手にしていたカップを取り落としそうになり、慌てて持ち手を握り直している。

「私たちがアドネツセさんと暮らしている理由は聞いたでしょ？」

「じゃあシューラはどうしてメフィ達と旅してるのか、教えてくれたっていいじゃない」

「正論ではあるけどね」

メフィがリオナに同意する。

味方がいないと悟り、シューラが困惑してオドオドし始めた。話そうか話すまいか迷っているようだったが、教えても問題ないと判断したのか、震わせながらその口を開いた。

「最初は、エルクさんたちの事も怖かったです。お二人と会う前、色々とありまして……」

「……メフィもそうだったのね」

何かを共有したのか、リオナが哀しげに頷く。その対応がメフィも気になったようだが、この重い雰囲気の中で気軽に問いかけられるほど彼女も無神経ではない。

「確か、故郷に帰るまで独りでいるのが怖いからついて行くって決めたんだよね？」

代わりにメフィは、シューラが話しやすいよう相槌を打つことにしたようだ。

「はい。メフィさんにも話しましたっけ」

「エルクから聞いたのよ。だってシューラったら、朝になって急に

一緒に行くって言い出すんだもん」

シユーラが同伴の意志を表明したのはエルクだけで、メフィは直接聞いていない。一夜明けていきなり意見を変えられれば、当然何かあったのか気になるだろう。

なるほど、とシユーラが納得した横で、今度はリオナが腑に落ちない様子で眉をひそめていた。

「それだけ、じゃないでしょ？　いくら独りが怖いって言っても、二人は人間なのよ？　もちろん二人が『奴ら』とは違うっていうのは私も分かってるけど、初対面でそこまで信頼できるとはとても思えないわ」

「……確かに、そうですけど」

植物族は人間に差別されている。もしシユーラも何かしらの仕打ちを受けていたとすれば、人間を信じられなくなっているもおかしくはないのだ。ましてや初対面時の怯えようを鑑みれば、彼女が人間に対してどんなイメージを抱いていたかおのずと分かってしまう。「それに独りが怖いって言うんなら、私たちと一緒にの方がいいんじゃない？　エルクもメフィも、私たちのことはまだよく分かってないのよ。里の場所も知らないだろうし……まさか、教えたりしてないわよね」

「いえ……掟の通り、里の場所は話していません」

「掟、かぁ。だから話そうとしなかったのね」

納得したメフィが手をポンと叩いた。出会った当初、自分について語りたがらなかった理由は概ねそこにあるのだろう。だが、そこは今は重要でないのでメフィはすぐに口をつぐんだ。

「まあ私たちはしばらくここから動くつもりないから帰るのは遅くなるだろうけど……同じ種族の私たちという方が安心できるって思うのよ、私は。それを無下にしてまでエルクたちについていく理由は何なの？」

「独りが怖いっていうのも事実なんですけど……それだけじゃないんです。その……エルクさんが、嘘をついているって気付いて」

「嘘？」

リオナとメフィの声が重なる。それほど、彼女の発言は二人の予想を上回るものだった。

二人の声に対しコクリと頷いたシューラは、さらに言葉を続けていく。

「色々お話をして、ここまで一緒に行動してきて、エルクさんの事が少しずつ分かってきたんです」

「……………」

「エルクさんは優柔不断で、人に流されやすく、ちょっと口が悪い時があつて、でも、いつも私たちの事を真剣に考えてくれて……すごく優しいんです——哀しくなるくらい」

「激しく同意するわ」

メフィが苦笑まじりに同調する。

「でも、エルクさん……そうやって周りに気を遣つて、それで自分に嘘をついているみたいなんです。誰かが傷つかないように何かを隠そうと嘘をついて、その嘘を独りっきりで背負いこんでいるみたいな……あの、たぶん、ですけど」

「自分に嘘、ねえ」

「それで、私……エルクさんの力になりたいんです。何を内緒にしてるのかも分からないんですけど……このままじゃ、エルクさんが自分に押し潰されてしまいそうで、見ていられなくて」

エルクのどんな姿を想像したのか、今にも泣きそうな顔でシューラが俯く。

「私、エルクさんみたいに腕力もありませんし、メフィさんほどの行動力也没有せん。それでも……何か自分にできることを見つけたいんです。私の事を受け入れてくれた、お返しをしたいんです」

「シューラ……………」

「エルクさんが……心配なんです」

そこでシューラの言葉が完全に途切れた。慣れない一人語りに疲れたのか、それ以上何かを口にする余力が残っていないのか。おそ

らくはその両方だろうが、リオナもメフィもそれ以上の説明を求めたりはしなかった。今の言葉で、彼女の意志は十分伝わったのだ。

「あなたの気持ちは分かったわ」

リオナがシューラのカサを優しく撫でた。シューラは一瞬だけビクリと反応したが、何も言わずにされるがままになっている。頬が紅潮しているのは照れているからだだろうか。

「きつと今頃、『シューラは同族のリオナたちと一緒にいた方が彼女の為になるんじゃないか』とか考えてるわよ。シューラもそう思うでしょ？」

メフィがにこやかにシューラの背中を叩く。

「……かもしれませんね」

案外当たっているかもしれないその予想に、シューラはおかしそうに笑って見せた。

「でも、これから一緒に来るんでしょ？」

「はい」

「彼の意見は無視なの？」

リオナが口元を隠しているのは、笑っているのを必死に堪えているのだろう。紛らわす為に出たようなその質問に、メフィの悪戯っぽい元気がより勢いづいた。

「シューラが押し通したら絶対逆らえないよ、エルクは。人に流されやすいんだもん」

「そっか」

リオナが納得したように頷く。そしてすぐに、抑えきれなくなつた笑いが溢れ出した。

「つくし！」

「あら、風邪ですか？」

「ですかね……？ 急に鼻がムズムズして」

「そついえば全然話聞けてないんだけど、ニールってどんな人なの？」

メフィがリオナの兄について遠慮なく質問をぶつける。

メフィとシユーラがニールと顔を合わせたのは畑と、夕食時の数十分だけだ。畑での話はほとんどニールは口を挟んでおらず、夕食の際のニールはさっさと食べ終わって姿を消してしまった。

結果として、彼の話をほとんど聞けていないという状態になってしまっている。明日には別れることになるのだから、メフィとしても彼の話を少しは聞いておきたくなったのだろう。

リオナはニールの名前を聞いた途端、一瞬だけ複雑そうな表情になった。それから数秒の間を置き、怒りと呆れの混ざったような顔になる。

「兄さんがどんな人かって……一言で表すなら、いい加減な人よ」

「うわ、バツサリ切り捨てたね」

「ちよつとねえ、能天気と言うか、緊張感に欠けてるのよね。ポジティブなのはいいことなんだけど、正直兄としてはあんまり頼りにならないわね。もうちよつと兄らしいところを見せてほしいと思っ
てはいるんだけど」

リオナの口調が少しずつ変化してきている。いかにも絡みづらそうなそれは、エルクの強さについて愚痴をこぼしていた時のものと似ている。

「私だつて分かってるわよ？ 誰にだつて得手不得手はあるの。兄さんの場合、自分に課題を課すことが苦手なのね。でもそれじゃ、これから先の世の中を生きていけないじゃない」

「り、リオナさん、どうかしましたか？」

「兄さんったら、自分の事ばかりで……私だつて、兄さんを頼りたくなる時があるのよ。けど兄さんがアレじゃ、頼るに頼れないじゃない。私だつて一人で多少の事はできるけど、やっぱり妹としては兄さんがもうちよつと頑張ってくれればって思ってしまうわ」

既にシューラの言葉も耳に入っていない。素面なのは間違いないはずだが、これでは泥酔しているのと何が違うというのか。

「……私、ひょっとして地雷踏んだ？」

シューラはその問いに答えず、暴走するリオナの事をただ呆然と見つめていた。

「……………」

エルクが時間をかけて一杯のお茶を飲み切った頃には、アドネツセもファルも眠気に襲われ始めているようだった。時計を見て、普段なら自分も起きていられそうにない時間となっている事に気付く。それまで全く気付かなかった事にエルクは驚いていたが、同時に自分が時間を忘れるほど楽しんでいた事も意外に感じていた。

「あら、もうこんな時間」

ファルも現在の時刻を確認したようで、慌てた様子で椅子から立ち上がる。

「アドネツセさん、そろそろ片付けましょうか。エルクさんたちももう眠いでしょうし」

「そうね。それじゃあこちらの片付けはしておくから、部屋の準備をしておいてもらえるかしら」

「分かりました」

軽く頭を下げると、ファルはそそくさと自分の食器をまとめ始めた。名残惜しそうにも見えたが、人当たりのよさそうな笑顔を貼り付けてそれを隠そうとしているような印象だ。

「では、準備が済みましたらお呼びします。それまで少々お待ちくださいね」

「あ、はい」

丁寧に対応され、返事が思わず上擦ってしまう。恥ずかしさが瞬時にこみあげてきたが、ファルは気にした様子もなく部屋を出てい

った。

「こんな遅くまでごめんなさいね。もう眠いでしょう?」

全員分の食器をひとつにまとめながらアドネツセが謝罪をした。だが、むしろ彼女の方がエルクよりも眠そうに見える。

「それが……お話に夢中だったのか、あんまり……」

「あら、そうなの? でも楽しんでもらえたようで嬉しいわ。明日も早いでしょ、部屋の準備ができたらずくに休みなさい」

「そうさせてもらいます。色々とお世話していただいて、本当に感謝しています」

「気にしないで。しっかり眠って、また明日からギルドの依頼を頑張って頂戴ね」

「はい!」

ねぎらいの言葉を受け、エルクは力強く頷いた。

「それじゃあ、私もこのクッキーを片付けてくるわね」

明日から先は、また何があるか分からない綱渡りの毎日が待っている。メフィとともにテロ集団を追いかけ、シューラの故郷を探し、生きていくためにギルドの依頼をこなしていかなければならない。

どこまで生きていられるかも分からない危機的な状況が、終わっても見えないほど長く続いているのだ。

それでも。

この夜だけは、何も考えずにぐっすり眠ろう。

クッキーの缶をしまいに行くアドネツセの背中を見つめながら、

エルクはなんとなくそんな事を考えていた。

13話 姉を探して

「会えば分かります！ 実の姉なんですよ？」

「……………そうか」

リダにテーブルを叩きながら力説され、ガルドは呆氣に取られながらもとりあえず頷いた。普段はちよつとしたことですぐに泣きだすリダも、ただの泣き虫というわけではないらしい。これほどはつきりと断言するほどの自信を持っているのだろう。

「メシ冷めるぞ」

「あ、そうでした」

リダの前に置かれた魚のフライを指さしてやると、慌てた様子で木製のフォークを手にとってフライに突き刺した。

そそっかしい姿が見ていられず、ガルドは隣に寄ってフォークを握り直させる。ガルドなら手づかみで済ませてしまふのだが、それではリダが落ち着かないらしい。

「ま、お前は顔を知ってるからいいとして。問題は、俺がお前の姉に関する情報をほとんど持ってないってことなんだが」

「……………ええ」

気概が見られたのは一瞬だけで、またしょんぼりと落ち込んでしまふリダ。ここまで分かりやすい性格だと今後の人生で苦労するだろう。

「名前と髪の色だけじゃなあ。染めれば髪の色なんていくらでも変えられるし」

「染める、ですか。人間は自分の髪の色まで変えたがるんですね」

「ああ……………ま、あんまり奇抜な色にはしないだろうけども」

遠い目をするリダに、ガルドは若干の答えにくさを感じていた。

『人間』とは異なる種族であるリダにとって、人間の行いは理解できない部分があるのだろう。ガルド自身に髪を染めた経験があるわけでもないのに、明確な返答はどうしてもできない。

「で、結局分かるのは名前だけか。相当骨が折れそうだな、こりゃ」
「えっ……」

何気なく呟いたのだが、リダがその言葉に敏感に反応した。

「ガルド、ひよっとして……後悔してます?」

「は? いや、そこまでは」

「こんな面倒な依頼受けるんじゃないかって、そう思ってるんですか?」

だんだんとリダの声が涙ぐんできている。リダの『いつもの』の予兆だ。

「またか……いや、落ち着け。俺は一度受けた依頼をキャンセルしたりはしない」

「つまり、こんな内容だって分かってたら受けなかったってことですよね……ふえ、ふえええん……」

ぼろぼろと涙をこぼしだしたリダを前に、ガルドはがっくりと頭垂れた。

事の発端は、ガルドが引き受けた一つの依頼だ。

以前からギルドをよく利用していたガルドにとって、誰かを探してほしいという依頼はそれほど珍しくないものだった。依頼主自身も同行したいという旨が記されてはいたが、それが障害になるとも思えなかった。なので、『その依頼』もそこまで特別な意図があつて受けたわけではない。軽く片付くだろう、程度の認識でしかなかった。

まず始めに、依頼主として現れた人物が子供であることに度肝を抜かされた。報酬はキチンと支払えるとの事だったが、道中にかかった経費（主に食費）が既に報酬の額を超えている。

さらに、その探したい相手というのが大陸中をあちこち飛び回る風来坊のような人物だというのだ。そのため探す範囲はシダ大陸全土に及ぶ。その話を聞いた時、ガルドは自分の受けた依頼の凶悪さに初めて気づいた。

リダの言う通り、後悔が全くないわけではない。もし依頼を受ける段階でこの事実を知っていたれば、二の足を踏んだかもしれない。だとしても、今のこの状況から逃げ出そうとは考えていない。

なんだかんだいって、リダとの旅をそれなりに満喫しているのだ。やたらと食費のかかる点、そしてどうしても人目を引いてしまう点を除けば、やはり一人にいるよりも旅は明るいものになっている。

「もう泣きやんでくれって……周里から不審者に見られるのは俺なんだから」

「ぐすつ……でも」

「それでも俺はかなり楽しんでるぞ？　いつもは一人旅だからな、リダといると新しい発見が色々とあったりするし」

良くも悪くも、とは付け加えない。

「……ご迷惑を、おかけします」

涙を拭ききったリダが頭を下げた。泣きやんだわけではないものの、ガルドの言葉が聞こえる程度に落ち着きは取り戻したらしい。

ガルドは座ったまま椅子を引き、まだ彼を不安げに見つめるリダの頭を大雑把に撫でた。すべすべした触り心地の髪の下で、リダが目を閉じてその手の感触を確かめているようだ。

「その涙は姉に会った時にとつときな。そうというのは大事な時の為に流す物だ」

「……そう、ですね」

さらにくしゃくしゃと撫でまわすと、さっきまで泣いていたリダの顔に少しずつ笑顔が戻ってきた。ガルドにかまってもらえているのが嬉しいのかもしれない。かなり強引に答えをはぐらかしたつもりだったが、先刻の問答はもはや気にもしていないようだ。

本当に分かりやすい奴だ、とガルドは呆れる。だが同時に、小さな庇護欲のようなものが心に芽生えてきていることを自覚していた。「んじゃ、そろそろ行こう。お前の姉も近くにいるかもしれないし、善は急げだ」

「姉さんにもエディカっていう立派な名前があるんですから、それで呼んでください！　あと、まだご飯を食べ終わってません！」
「……………そうか」

ガルドはレクタリアに何度か来たことがあるものの、そのほとんどは通りがかった際に宿を調達した程度だ。街全体の地理を把握しようとしたことはない。リダは初めてレクタリアに来たらしく、移動に関してはガルドにすべて任せているようだ。

「で、どこから探したもんか」

「僕に訊かないでくださいよ」

どこから探すべきか判断がつかず、拠点としたギルドから未だに出発できていない。特にレクタリアは特徴のない地形ばかりなので、なおさら方向感覚が狂わされてしまう。街全体が遺跡の地形を利用して、いるということなので、どうしても似たような街並みが続いているように見えるのだ。

考えているだけでは進展しないので、ガルドが地図を取り出しテーブル上に広げた。

「……………迷い込んだら二度と帰ってこれないんじゃないか？」

大小さまざまな通路が直角に交差し、幾何学的な模様を作り上げている。斜線や曲線はあまり見当たらない。安直に歩き回れば、曲がり角を一つ間違えただけでたちどころに自分の居場所が分からなくなってしまうのは容易に想像がつく。

「地元の人なら道は知っていると違いますけど」

「地元の人間に遭遇できれば問題ないんだけどな」

前日に見て回った限り、話を聞いて回れるほど人が表を歩いている様子はなかった。観光を主体にした街ならば、遠方まで旅行に行く暇の無いこの時期はそれほど賑わわないのだろう。

ギルドの利用者なので宿泊代などは考えなくていいものの、あまり長く滞在していると流石に迷惑となってしまう。

「うーん……」

いい案が思いつかず、二人で頭を抱える。すると、後方で展開されている会話が耳に入ってきた。

「これはどう？ 報酬も結構高いし」

「だから討伐依頼は無理だつてば」

「なんでよ？ エルクなら余裕でしょ、このくらい」

「僕じゃなくて、メフィとシューラの事を心配してるんだよ」

「エルクがいれば私は大丈夫よ！」

「わ、私も…… エルクさんがいるなら、怖くはないです」

どうやら同じギルドのメンバーらしい。十五、六歳くらいの子供で構成された、珍しいパーティだ。

話を聞く限り、次に受ける依頼について三人で揉めているようだ。もつとも、少女二人と少年一人の対立なので既に結果が見えている気もするが。

（あれ、あいつら……どこかで会ったっけか？）

彼らの姿に既視感を覚えたガルドだったが、上手く思い出すことができない。はっきり記憶していないのなら無理に思い出さなくていいか、と気にしないことにした。

三人の会話はなお続く。

「まだ依頼にだって慣れてないし……ほら、こっちの依頼なら危ないから」

「むー……」

「えっと……私は、エルクさんに任せます」

どうやら少年が自分の意見で二人を納得させたらしい。女の子二人に押し通されると予想していたガルドとしては意外な結果だ。

錆色の髪の少女はまだ不服そうに頬を膨らませていたが、そんなことはお構いなしに少年はカウンターで手続きを済ませてしまった。彼は案外頑固な性格なのかもしれない。

「あの……気を遣わなくても、いいですよ？」

「そいうことじゃないんだつてば」

なおも騒々しく話をする彼らが外に出ていくまで、ガルドは思わず目で追ってしまっていた。

尽きることなく会話をしていたせいか、彼らの出ていったギルドのロビーがより一層静かになったような印象を受けてしまう。

（変な奴らだったなあ……あの少年、きつと苦労してるんだろうな）
もしまたどこかですれ違ったりすれば、今度こそ思い出せる自信がガルドにはあった。これも愉快的姿を見せられれば、嫌でも覚えてしまうというものだ。

見るからに強気な少女と大人しそうな少女、そして同じく大人しそうな少年。彼の苦労がありありと目に浮かんでくる。

「そうだ！」

突然、リダが大声を上げて立ち上がった。

「ど、どうした？」

「依頼ですよ、依頼！　ここの依頼を受ければ、この街の人に会えますよ！　その人からいろんなこと聞けるんじゃないですか？」

「あー……なるほど」

考えてみれば、至極当たり前の事だ。

わざわざ別の街まで行つて依頼を出す人間はいない。つまり、このギルドでの依頼を受ければこの街の人間と接触を図ることができるのだ。

「不都合とがありますか？」

「いや、大丈夫だ」

地図をたたんでショルダーバッグにしまいこむ。リダはまだコーヒーを飲んでくつろいでいるので、ガルド一人で掲示板の前に向かい適当な依頼を剥ぎ取った。その紙片をカウンターに差し出すと、慣れた様子で手続きを済ませる。

「もういいんですか？」

テーブルに戻ると、空のカップを持っていたリダが立ちあがった。まだろくに内容も確認していない依頼を渡すと、それを受け取って熟読を始める。その間に、食べ散らかしていた食器類をまとめあ

げることにした。どれもギルド側が用意してくれたもので、これもカウンターに持っていけばいいらしい。

「ギルドと言うより、宿屋みたいだな」

「ガルド、早く行きましようよ！ 置いて行っちゃいますよ？」

「ああ、分かってるよ」

入口の前でぴよんぴよん弾むリダをいなし、食器を持ちあげる。万が一落としたとしても、木製なので割れることはないだろう。

「元気な妹さんですね」

兄妹に見えたのだろうか、食器を渡す際にカウンターの女性がそんなことを言ってきた。後ろで事務にあたっている他の人間も顔に笑みを浮かばせており、ガルドは先刻からのやりとりが筒抜けだったことに気付かされた。

「……あいつは妹じゃないですよ」

それだけ言い残し、食器を渡してそそくさとギルドを後にした。

「ガルドさん、ですよね？」

「お？」

地図を見ながら通りを歩いていると、後ろから急に肩をたたかれた。

この街に知り合いはいないはず、と首を捻ったガルドは、その男の恰好を見てすぐに理解した。

「ああ……世界委員会の奴か」

「服装だけです。直接議会に参加するような者ではありません」

深い青色をした、軍服のようなスーツ。ただしデザインは上層部の人間と違い、多少はシンプルにまとめられている。あくまで関係者というだけで、高い地位にいるわけではないのだろう。ガルドに對し敬語である点からもそれが分かる。

「で、何の用だ？ 今は個人的な用事で忙しいんだが」

「すぐに済みます。ひとつ、お伺いしたいことがあります」

男は喉を軽く鳴らし、あらたまった表情でガルドの目を見つめてきた。

「ガルドさんは、キノコの帽子を被った少女を見ませんでしたか？」

「はあ？」

真面目な顔で妙なことを聞くので、思わず声が裏返ってしまった。だが男はなおも固い表情を崩さずに言葉を続ける。

「前日、この街でその姿を見かけた者がいます。ガルドさんもこの街にいらしたのなら、どこかで見たりしませんでしたか？」

「まあ、見たには見たが」

くだらない、と一蹴はできない。なにしろ、そのキノコ頭の少女をガルドも見ているのだ。他の二人の方が個性は際立っていたが、外見に限れば最も目立っていたと言えるだろう。

「その女の子がどうかしたのか？」

ガルドが腑に落ちないのは、世界委員会がなぜ彼女を探しているのかだ。

もともと世界委員会は、レダーコール崩壊の主犯とされるテロリストの対抗組織として設立されたのだ。その名前を用いるのなら、当然そのテロリストと関係していることになる。

「レダーコールの件について、彼女が関わっている可能性がありません」

「そんなふうには見えなかったが」

「いえいえ、なにもテロ集団の仲間と断定したわけではありません。未だに発見されていないレダーコールの生存者……それだけでも重要な存在でしょう」

「確かにそうだが……」

男の言うことは筋が通っている。もし彼女が事件の時にレダーコールにいたとすれば、何が起こったのか目撃している可能性もある。テロ集団がどんな手段を用いたかなど、世界委員会の欲しい情報は多いだろう。

特に、何も残すまいという意志を感じる徹底的な破壊痕。いかなる手法を用いたのか、ガルドも気になっている点だ。

「いずれにしても、世界委員会としては彼女にアプローチを図りたいのですよ」

「そうか。悪いが、俺は本当に見かけただけだ。どこに行ったかも分からない」

「そうですか。では、また見かけた際にはよろしくお願いします」
用件は済んだのか、男は音も立てずに小路地へと姿を消した。

リダが何も言わずガルドのズボンを掴んできた。なぜか怯えているようで、ガルドはその頭をそっと撫でる。

「どうした？」

「凄く嫌な感じがしたんです」

「ほお」

ガルドも心中で同意する。口では敬語を使っていたが、あの男は本心が別にあるように感じられたのだ。元々ガルドは世界委員会の堅い雰囲気が好きではなく、素直に言うことを聞く気になれない。

「お前もそう思うか」

「……あの」

すると、リダがなおも不安そうな様子でズボンを引っ張ってきた。
「ガルドって、世界委員会の人だったんですか？」

ガルドから目を逸らし、居心地が悪そうに肩を窄めている。ここまでしおらしい様子をリダが見せることはこれまであまりなかったため、慣れないガルドは言葉を詰まらせてしまう。

何が不安なのか。リダの真意がどこにあるのか分からないまま、なおも言葉が綴られていく。

「ガルドも、世界委員会の依頼には従うんですか？」

「ああ……逆らう理由が無ければそうだが」

確かにガルドは世界委員会が好きではない。だが、この組織の活動内容はむしろ支持することができる。個人の感情とは関係なく、

世界委員会については評価をしているのだ。

後ろめたい何かがあるわけでもない。そもそも、設立が公言されてからまだ数日しか経っていない。不信感を抱く暇もないはずなのに、リダはどうして怯えているのだろうか。

「そ……そうですか……」

しかし、理由が分からなくとも、リダが落ち込んでいるのをそのままにしてはおけない。

「よく分からないが心配するなって。確かに俺は世界委員会に協力してる立場だが、そこに所属してるわけじゃない。最終的に奴らの言うことを聞くかどうかは俺の気分次第だ。気に入らないことは突っぱねるさ」

「そっそうですか！ ちょっとだけ安心しました……！」

「……？　　そうか……？」

さっぱり話が掴めないが、リダの中では既に落ち着いてしまったようだ。

今度はガルドの方が色々と尋ねたくなったが、もう何かを訊き返せる雰囲気ではなくなってしまったようだ。仕方なく、今は目の前の地図とのにらめっこに専念することにした。

14話 ある苦悩と決意

部屋の中にカモミールの香りが充満しており、その香りだけで気持ちが落ち着いてくる。カモミールは安眠の薬とも言われているので、この気分のままであれば心地良い眠りが望めるだろう。

「もう少しだけ待って頂戴ね」

アドネッセが丁寧な手つきでお茶を注いでいく。その隣ではファルがテーブルを拭き、リオナは棚に並べられたハーブのビンを並べ替えている。ラベルを確認しながらいくつかのビンを見比べているので、種類ごとに整頓しているのだろう。

「あれ？ アドネッセさん、レモンガラスが少なくなってますよ」「あらそう？ それじゃあ、また依頼を出しておかないといけないわね」

アドネッセが呟くと、何か言う前に全て心得ているファルがニッコリと頷いた。ギルドに依頼を出しに行くのは、今は彼女の役目なのだ。

「どのくらい残っているかしら」

「そうですねー、毎日使って三日分くらいでしょうか」

「じゃあ……ファル、二週間分をお願いするわ」

「分かりました」

指示を受けたファルが手帳を取り出してメモを取る。

それぞれが仕事をする様子を、ニールは何も言わずに眺めていた。彼女たちの仕事を手伝おうとしても、手は足りていると断られてしまう。確かにどれも二人がかりで取りかかる仕事ではないだろうが、ニール一人だけがすることもなく疎外感を覚える結果となってしまうている。

他意はないのだろう。だが、どうしても一つの疑念がニールの胸中にこびりついて離れない。

『ポジティブなのはいいことなんだけど、正直兄としてはあんまり頼りにならないわね』

脳内で何度も反芻^{はんすう}される言葉。

『やっぱり妹としては兄さんがもうちょっと頑張ってくれればって思ってしまうわ』

思い返す度にニールを固く縛りつける言葉。

——耳に入ることが無ければ、ここまで思い悩むこともなかったのだろうか。

しかし、知らずにいる自分を想像するだけで吐き気を催してくる。知ることができたからこそ、こうして悩むことができるのだ。

逃げ出したくなるほどに苦しいが、それでも後悔はしていない。

きつとこれが、自分を変える為の一步なのだろう。そう考えれば恐怖は無い。

「兄さん？」

眼前に現れたリオナの声でニールは我に返った。いつも通りの仏頂面で睨みつける彼女は、どうやら本当に不機嫌気味のようだ。

「リ、リオナ？」

「お茶の準備ができたんだってば。さつきから言ってるでしょ？」

「あ、うん。ごめん」

見ると、アドネッセとファルが心配そうにニールの事を見つめている。それほど周囲が見えなくなっていたようだ。

「まったく……みんなが働いてるのに、兄さんはなんで見てるだけなのよ」

「……ごめんよ、ちよつと考え事してたんだ」

ジト目のリオナをかわし、アドネッセの方へと逃れる。カップを用意して待っているアドネッセはニールのことがまだ気になるようだ。

「疲れているのかしら？　これを飲んだら、今日は早く休んだ方がいいかもしれないわね」

「……そうします」

差し出されたカップを手に取り、一口啜る。なおもアドネツセの気遣いの眼差しを感じるが、ニールは敢えて気付かないフリをしてやり過ごす。

カップを口から離すと同時に、青リンゴのような香りが鼻を抜けていく。

体中に染み渡るようなその爽やかな香りも、今のニールにはひどく遠いもののように感じられた。

オレンジの街灯が夕暮れの大通りを照らし、朝とは異なる幻想的な街の顔を見せている。

古い石壁が淡く照らされて憂いを帯びたように浮かび上がり、そこに立つ者に向けて一抹の侘^{わび}しさをよぎらせていく。長い時代を孕んだ街の姿は、まるでそこにいる人々を見守っているかのようだ。

「あ」

「わぶっ」

ガルドが前触れなく足を止めると、後ろを歩いていたリダが止まり切れずにぶつかってきた。背骨に直撃したらしく、涙目で後ずさりながら鼻の頭をさすっている。

「急に立ち止まるのは卑怯ですよ」

「なんで卑怯なのかは分かんが、すまん。今のは俺が悪かった」

「うう……それで、どうかしたんですか？」

「いや、ちよっと思ひ出したことがあってな」

言い訳をしながら自らのこめかみに指を当てる。

「知り合いがこの街に来てるかもしれないんだ。ファルって名前の女性なんだが」

ガルドの記憶に残っているのは、幸せそうな様子で自らの近況報告をしてくる彼女の姿。

真っ白な髪が印象的な、清楚な女性だった。最後に会ったのはおよそ一年ほど前の事だ。その時に、夫の実家へ長期滞在することになったという話を聞いていた。あまり頻繁には会わないのでほとんど気にとめていなかったのだが、このタイミングで彼女の事が急に思い出されたのだ。

「彼女が、彼女の身内の人からエディカについて聞ける…… かもしれない、って思っただけさ」

「なるほど、そうですね」

朝と違い、リダはそれほど喜んだ様子を見せない。

先ほど解決した依頼の差出人にもエディカについて訊ねてみたところ、どこかで聞いた気がするが思い出せないと首を捻られた。結果として分かったのは、エディカがこの街にいたことがあるということだけだった。手掛かりを得られると期待していたリダにしてみれば、落胆せざるを得ない結果だったと言える。

もとより砂漠で米粒を探すような方法だ。リダの反応が芳しくないのは、それを自覚したからだろう。それでもこれしか方法を思いつかないので、地道に続けていくしかない。

「連絡はとれるんですか？」

「そうだな…… 最低でも数日はかかる。それに、もうこの街を離れたかもしれない。期待させたみたいで悪いが、そこまで当てにはできないだろうな」

「…… じゃあもう少し依頼を受けて回って、その後にまだここにいるようなら会いに行ってみましょうか」

「ああ……」

自虐的に笑うリダ。気丈に振舞うその姿が、傍にいるガルドにとって何より心苦しい。

この小さな胸の内に、どれだけの不安が渦巻いているのだろうか。こんな幼い子供一人が背負うにはいささか重すぎるのではないだろうか。

何を考えても、現状に変化はない。ガルドにその苦痛を肩代わりすることはできない。できるのは、ただリダの姉探しを協力することだけだ。

「今日はもう休もう。リダも疲れただろ」

「お腹ペコペコです」

リダが笑ったまま腹部を撫でた。落ち込んでいても胃袋は正直なようで、ガルドも僅かに気持ちが楽になる。

依頼をこなしたので、多くはないが報酬が入っている。今日くらいは美味しいものを食べさせてやろうと気持ちを立て直し、ガルドは地図を広げて最寄りの食事処を探し始めた。

暖かな街灯の煌めきが二人の顔を照らす。

陽は沈み、街は夜に染まろうとしている。

屋敷全体の照明が落とされ、物の形は窓から入る月光によってなんとか把握することができる。満月は少し過ぎているが、それでも明かりを灯さずに移動する分には困らない。廊下にはカーペットが敷かれているので、足音もほとんどしないだろう。

「……………」

僅かな音さえも発しないよう、ニールは細心の注意を払って扉を開いた。そして顔だけを出し、左右を確認して誰の姿もないことを確認する。当たり前と言えば当たり前だが、もう全員が就寝してしまっているのだろう。

不気味に静まり返る長い廊下。ニールは一切の躊躇いなく、その

廊下に出て静かに扉を閉めた。

勿論ニールも、普段はこんな時間まで起きていたりはない。それどころか、自身の部屋を出ることなどこれまで考えたこともなかった。

今の彼を突き動かしているのは、一つの決意。

ニール自身、幼稚な見栄の産物でしかないと分かっているちっぽけな決意。

十人いれば十人が否定するであろう、くだらない決意。だがその決意が、彼にとっては何よりも重い。

感情を押し殺したまま、静粛かつ素早く屋敷内を移動する。堅い決意によってニールの足は休まず動かされていたが、エントランスホールでその足が止まった。

玄関の正面に、人影が佇んでいるのだ。

「どこへ行くつもりなのかしら」

アドネツセだ。

普段のおおらかな笑顔ではない。かといって怒っているわけでもなく、石のように固くした表情で啞然としているニールに視線を向けている。

「こんな時間に外出なんて、植物族でなくても危険よ」

「……気付かれてましたか」

「あなたとの付き合いも長いもの。何か悩んでいるようだったから悩んでいることが分かったとしても、それで深夜に抜け出すまで察知するというのはなかなかできるものではない。それだけ、アドネツセはニールの苦悩を深く読み取ったのだろう。」

「ニール、何がそこまであなたを追い詰めたの？」

「……すみません、アドネツセさん。畑の管理もちゃんとしないうまで」

「そんなことはいいのよ。まず、出ていこうと思いつた理由を聞

かせて頂戴」

僅かに震えるアドネツセの声を聞き、ニールの決意が揺らぎそうになる。これまで以上に彼女たちに迷惑をかけるのだと痛感しつつも、やはり考えを改めようとは思わない。

表情を変えないだけで、アドネツセもニールの事を心配しているのだろ。う。でなければ、いつ来るとも分からないニールを玄関前で待ち伏せるなどそうはできない。これまで数えきれないほどお世話になったことも含めて、彼女の思いやりがニールの最深部まで突き刺さってくる。

話そうかどうかしばらく迷ったニールだったが、伝えておこうと決心し重い口を開いた。

「僕は、……………僕は、自分を変えたいんですよ」「自分を？」

「端的に言えば、自分に自信を持てるようになりたい、とでも言うんでしょうか」

まだアドネツセはよく分かっていないようだ。ちゃんと説明できていないとニールも自覚しているので、そのまま言葉を続ける。

「ただのワガママだって、自分でも分かってます。でも、この一回だけ、ワガママを認めてほしいんです」

二人で過ごした時間の、様々な場面がフラッシュバックする。

リオナは、大人が見ても優等生と認めるほどよくできた子供だった。

それほど比較されることはなかったものの、何でもそつなくこなしてしまう彼女の陰に、ニールはどうしても隠れがちになっていた。それを気にしたのか、リオナは積極的にニールとともに行動したかった。彼女はニールにも自分同様の能力を求めていたらしく、遊び一つでも必ず兄を巻き込み、そして自分と同じ事を兄にもやらせようとしたのだ。ニールもその気持ちに応えようと必死についていこうとしたが、これまで一度として彼女の理想に叶ったことはな

った。

ただ早く生まれたというだけで、彼女より秀でた部分は一つもない。事あるごとに彼女の足を引っ張り続けてきた。逆に、ニールの失敗をリオナがフォローするという場面も少なくなかった。お互いに成長した現在もその関係は変わっていない。

そうしてリオナの出した評価が、あの言葉である。悪気はなかったのだろうが、まぎれもない彼女の本心だ。

それを聞いた瞬間、これまで気がつかないようにしていた現実を目の前に突き付けられたかのような空虚感に襲われた。

「リオナは僕のこと、兄として頼りないと感じているようです。僕自身もそれを否定はしません。これまで、ずっとリオナに頼って生きてきたようなものですから」

表面上は何も気にしていないように振舞ってきた。その姿がどう映ったかまでは分からないが、好意的に受け止められてはいない。

「どんなものでもいい、誰かを支えられるような強さが欲しい。でもリオナと一緒にいる限り、僕はどうしてもあいつに甘えてしまうんです」

「リオナはそう思っていないわ」

「だとしても、このままだとリオナに迷惑をかけ続ける人生になってしまうと思うんです。例えばリオナがそれを許したとしても、僕自身が許せないんですよ」

無意識に声が大きくなっており、エントランスに僅かな余韻が響いた。ニールはハツとして口を押さえ、閉鎖的な沈黙がエントランスに訪れる。

かなりの間を空けて、アドネツセが小さな溜息を洩らした。

「……もし、あなたの身に何かあったら」

ニールの眼は見えていない。

「あの子はとても悲しむわ。私やファルよりも、ずっと深く」
彼女が見ているのは、『もしも』の先のリオナの姿だろう。

ニールは言葉を詰まらせた。ニールもリオナを悲しませたくて飛び出そうとしているのではない。自分が無事に帰ってこられなかったとすれば、どれだけ残酷な傷をリオナに押しつけることになるのだろうか。それだけは絶対にあってはならない。

だが、胸中に蠢く自己嫌悪は自制しきれないほどにまで膨らんでいる。

何も知らなければ抑え込んだままでいられたその欲求は、リオナの本心を聞いてしまったがために大きく成長してしまったのだ。自身に誓った決意は、無視できるほど小さなものではない。

「……このまま妹に支えられて自堕落に生きていくより、一人の兄として妹が誇りにできるような男になりたいんです」

「それはただの驕りよ。家族にも黙って家を飛び出す兄を、リオナが誇りに思つかしら」

「自己満足と解釈してもらって構いません。ただ、それでも僕は……もう誰かについて行くだけの生き方は嫌なんです」

このまま今まで通りの生活を続けていて、リオナの手を引けるような兄になれるのだろうか。

どんなに可能性を広げてみても、リオナに手を引かれている姿ばかりがニールの頭に浮かぶ。そしておそらく、それらはまず間違いない中しているだろう。

「許してくださいとは言いません。ただ、どうかこの一瞬だけ、僕のワガママを見逃してください——お願いします」

深々と頭を下げた。

目に映るのはエントランスのカーペットのみとなり、アドネッセの様子が窺えなくなる。彼女がどんな顔をして頭を下げた自分を見ているのか、ニールの視界には映らない。

どれだけの時間そうしていたのだろうか。

「顔を上げて、ニール」

アドネツセに促され、ニールは再び顔を上げた。

そして視界に入ったのは、アドネツセが持っている古めかしい本。
「これを持っていきなさい」

どんな感情も封じ込めていたアドネツセの顔に、寂しさを漂わせた笑顔が張り付いていた。

無理に作っているのは一目瞭然で、普段のように接していて安心できるような雰囲気はない。それでもニールは、そうして見せてくれる笑顔がありがたく感じられた。

「これは？」

本を手渡され、ニールはどう扱えばいいか迷い首をかしげる。内容を確認しようとめくってみると、どのページも真っ白であることが分かった。

「お守り、のようなものかしら。大した物ではないけどね」

「何も書かれてませんけど……」

「日記帳だもの。日記やスケッチに使ってもいいし、何も書かなくてもかまわないからね。ただ、いつも持ち歩くようにしてもらえば私も安心できるから」

「……分かりました。大切にします」

これもアドネツセの気休めなのかもしれない。持っているだけでこれほど安心できるのだから、かなりの存在意義があると言えるが。
「いい、ニール」

本を懷に収めたところで、アドネツセが神妙な面持ちになってニールのことを真っ直ぐに見据えていた。

「命だけは大事にきなさい。あなたは一人でないこと、忘れては駄目よ」

「はい」

長い旅路には、ただでさえ危険が伴う。ニールが植物族である点を加味すれば、おのずと危機に晒される頻度も増えてくることになるだろう。それを覚悟したうえで、こうして屋敷を飛び出そうとし

ているのだが。

「では……行って、きます」

アドネツセが引き留めたそうになっているのは気付かないようにして、ニールは玄関の扉を重々しく開いた。

すぐ目の前には、何も見えない闇が広がっている。

深夜の暗黒へ見えなくなっていく『家族』へ、アドネツセは小さく見送りの言葉を贈った。

「……いつてらっしゃい」

その言葉を彼に向けることは、これから当分ないのだと感じながら。

15話 風に吹かれて

やや風が強いのか、窓ガラスが震えて鈍い音を奏でている。外の植物が揺れてざわめいており、他の音はあまり聞こえてこない。

「兄さん、入るわよ」

声をかけながらリオナが部屋の扉を開けた。

入室するなり、リオナは部屋のベッドへと歩み寄った。室内が妙に整頓されている事に気付いたが、兄を叩き起こすのが目的なのでそれほど意識はしない。

「もうみんな起きてるわよ。あとは兄さんだけなんだから早く来て」
ベッドの膨らみに向けて呼びかけるが、全く反応が無いどころかピクリとも動かない。普段であれば何かしら返事をするのだが、前日のカモミールがよほど効いたのだろうか。

「……ねえ、早く起きてってば」

眉を吊り上げ、掛け布団の裾を掴む。語調を強くしたにもかかわらず、まだニールは目を覚ますつもりがないようだ。元々朝には弱い方だったが、ここまで起床の気配がないというのは珍しい。

そのまましばし様子を窺う。その間に置き上がったりはしないかと期待してみたものの、丸まった布団は微動だにしない。まるでそこには誰もいないかのようだ。

いよいよリオナは苛立ちを抑えられなくなり、勢いに任せて掴んだ掛け布団を思い切り放り上げた。

「もうっ！ さっさと起きな……さ？」

毛布の下に縮こまっていたのは、人に似せようとしたかのように丸められたタオルだった。

そこでニールが横になっていると信じて疑っていなかったリオナは、予想外の事態に理解が追いつかず、毛布を剥がした態勢のまま硬直してしまう。そのリオナに、投げられて宙を舞っていた毛布がパサリと被さった。

「ニールさんがいらつしやらない？」

「うん。どこに行ってるか知らないけど、一言くらい声をかけてくれたっていいのに」

パンを齧りながらリオナが愚痴をこぼす。

部屋にいないことを確認した後、リオナは屋敷中まで搜索範囲を広げてニールの姿を探した。流石に外ではないだろうと踏んで庭は探していないが、どこにもニールの姿は無かった。

「ファルさんは何か聞いてないの？」

「ええ、何も……今朝に様子を見に行つた際にいらつしやなかったのですが、御不浄だと思ひまして」

「そうなの？ 朝ご飯も食べた様子はないし……」

リオナの感情が憤怒から困惑へと変わる。そして少しずつ、何かがおかしいことに気付き始めていた。

「まさか、街に行つたりしたんじゃ」

「それは無いと思いますけど……どれだけ危険かニールさんも分かつていらつしやると思ひますし」

植物族の実情をよく把握しているファルがすぐさま否定する。それはもちろんリオナも分かっていることだが、現状を顧みるとどうしても断言ができなくなってしまう。

「私……ちよつと探しに行つてくる」

「ダメです！ リオナさんにとつても危険であることは変わりませんよ！」

立ち上がり駆け出そうとしてファルに腕を掴まれて引きとめられてしまう。言葉づかいは丁寧だが、リオナを掴む力に手加減は無い。振り払おうとしかけたリオナは、すぐに落ち着きを取り戻してその場に立ちすくんだ。

「そう、よね……。でも、現に兄さんは屋敷のどこにもいないわけだし」

リオナの言葉から余裕がなくなっていく。

これまで些事として見逃してきた様々な変化がリオナに不安を積み上げている。得度は知れないものの、想像もしたくないような『何か』が起こっているというのは肌で感じる事ができた。

「もしこの後も戻られないようでしたら、ギルドに行く時に探してみます」

「なら、私は畑の近くを探して――」

「その必要はないわ」

ハーブのビンを片手に持ったアドネッセが二人の話を遮った。

「アドネッセさん？」

朝の紅茶用のタイムを取りに行っていたので、彼女は今しがたのやりとりを聞いていないはずだ。それなのに、まるで全てを理解しているかのような表情をしている。普段の優しい雰囲気とはまるで違う、心の凍りついたような冷徹な容貌に感じられた。

「必要ないって、どういうことですか？」

問いたただす自分の声が震えていることにリオナは気付く。口では訊ねているのに、本心ではその答えを訊きたがっていない。それほど嫌な予感がリオナの中に渦巻いている。

「リオナ……辛いかもしれないけど、聞いて。ニールが、あなたの兄が、どんな決意を抱えていたのか」

「……………っ」

まだ何も聞いていないにも関わらず、リオナの背中をうすら寒いものが通り抜けていった。

「エルク！ そっちに行つたよ！」

メフィの叫声（せう）が飛ぶ。

「分かった、すぐに捕まえて……速い!？」

エルクの悲鳴に近い声の直後、盛大に転げる音が通り中に響きわたった。それに続き、嘲笑うかのような小型犬の鳴き声が遠ざかっていく。

「エルクさん、大丈夫ですか？」

「いたた……僕は平気だけど、犬は……？」

「んー、見事に逃げられちゃったみたいね」

よろよと立ち上がるエルクの傍にシューラとメフィが駆け寄る。エルクは小動物用のカゴを、メフィは大きな虫取り網を、シューラは犬用の餌を手にしており、誰が見ても彼らが何をしているのか一発で分かるだろう。

逃げた犬を探してほしい。

あまりにありがちで平和的な依頼。だからこそ大丈夫だろうと考えてエルクがこの依頼を受けたのは前日の事だ。

犬をナメていた、というのもエルクは否定できない。目標を見つけるのはそう難しくなかったものの、俊敏性の高い犬相手に大苦戦を強いられている。前日に続き挑戦二日目となる現在も、あまり戦況は芳しくない。

「あんなに速く走れるんだね……」

「餌には見向きもしませんでしたよ」

どうやら相手の犬はかなり頭がいらしく、エルクたちの作戦をこれまで何度も突破されている。飼犬である以上乱暴に扱うわけにもいかないので、いかに手際よく捕獲できるかが重要なポイントだ。

「でも、今日は少しだけ僕らに有利だよ」

「そうなの？」

余裕を見せるエルクにメフィが眉をひそめる。そこを突風が吹き抜けていき、三人の髪を大きく乱して行った。

「今日は風が強いからね」

「風、ですか？」

シューラが疑問を素直に口にする。吹きやまない風で袖やスカートのたなびいているが、特に気にしてはいないようだ。

この日は朝から強風が吹き荒れており、唸るような低い音が絶えず耳に届いている。ざわめく木々の音もそこそこ大きく、ともすれば不安を煽られやすい雰囲気と言えるだろう。

「風で臭いが散らされてるから、昨日よりは動きを悟られにくいと思うんだ」

「ああー……そういえば、犬の嗅覚って人間よりずっとすごいんだってね」

「そんなにすごいんですか？ でもそれだと、風くらいじゃ意味が無いような気がしますけど」

「確かに希望的観測ではあるけどね。ただ、風上か風下かが分かるから攻める方向を決めやすいつていうのはあるよ」

風下にいると臭いが伝わりにくく、臭いに敏感な動物相手でも接近が容易になる。狩猟などの場面では重要視されている点だ。素人が模倣してどこまで通用するかは不明だが、多少なりとも効果が望めるかもしれない。

「そーねえ……当てにするには心もとないけど、目安にするくらいならいいかな？」

「そうですね。それじゃ、もういちど追いつくところから始めましょうか」

「そうだね」

小さな起伏が連続する道を目的の犬が歩いている。周囲に人間の姿は見当たらないので、今はあまり警戒していないようだ。悠々と散歩をしている姿は妙に勇ましい。

「ヤバいわね……」

「何が？ そろそろ移動するから、作戦通りにね」

「分かりました。お互い頑張りましょう」

最後に軽くアイコンタクトを交わし、各自のポジションへと移動を始める。今の風はエルクたちが風下となっているので、立てた作戦を実行するには都合がいい。

「さて」

追い込むのはエルクの仕事だ。二人の張りこむ場所へ犬を誘導しなければならぬ。

前日からこの役回りが続けているのだが、明らかに損な役回りだ。もちろんメフィやシューラに走り回らせるのはどうかと思うが、このままでは進展のないままいたずらに体力を消費してしまう。

「上手くいきますように」と

思いつく手段は試してみようと考えた結果の一つが、今エルクの持っているビンだ。液体が入っており、満タンよりやや目減りしている。

その場にいくらか振りまきながら、エルクは犬の反対側へ回り込もうと走り出した。

全力で走る犬。小型犬とはいえ、人間よりも走りやすい体の構造をしているだけはあるようだ。エルクも気張って走っているものの、犬との距離が見る間に広がっていく。

だが、二人の構えている場所へは向かっているので失敗ではない。このまま上手くいけば二人が犬を捕まえて依頼完了となる。

もちろん、そう簡単にいかないからこそ二日もかかっているわけだが。

「二人とも、行ったよ!」

大声で叫ぶ。通行人の注目を集めてしまっても気にしない。

「オッケー、任せて!」

メフィの返事が戻ってくる。それと同時に、網を構える彼女の姿が視界に映った。犬もようやくそれに気付いたようだが、風向きのせいか反応が遅く、既にメフィの射程範囲内にいる。

「捕まえたあつ!」

「メフィ、跳びすぎ！」

思い切り飛び上がり、同時に振り上げられる網。

本人は分かっているかもしれないが、どう考えても隙だらけだ。遠方から見ていたエルクには、跳び上がったメフィの下を潜り抜ける犬がバツチリ確認できた。

「ひゃあつ！ こつちに来ました！」

「シューラごめん！」

メフィの謝罪も慌てているシューラには聞こえていないだろう。突っ込んできた犬に向かって手を広げるが、犬に完全に見切られている。

「つ、捕まえ……ひゃうう！」

不意を突かれたシューラに捕まえられるはずもなく、フェイントをかけてひるんだ彼女の横を犬がすりりとすり抜けて行った。その反動でシューラがしりもちをついてしまう。

三人が完全に遊ばれている。そう表現できるほど犬の方が何枚も上手うわてのようだ。

「こうなったら本気でいくよ！」

メフィが憤慨した様子で後を追いつ始める。今まで本気じゃなかったのか、と突っ込んではいけないのだろう。網を振り回しながら疾走する様は確かに本気であることが伝わってくるが、周囲の迷惑になっっていることは気にしないのだろうか。

「シューラ、立てる？」

ようやく追いついたエルクはまずシューラに手を差し出す。犬の行方も気がかりなのだが、彼女を放ったまま追跡するのは流石にできなかった。

「は、はい。それより、犬を……っ」

転んだ時についたのか、掌にすりむいた跡がある。エルクの手を掴んで立ち上がる際に一瞬だけ表情をひきつらせ、すぐに恥ずかしそうに笑って見せた。

「大丈夫？」

「はい、大丈夫です。それより、今はメフィさんを追いかけてましょ
う」

「うん……バイ菌が入るといけないから、水で洗っておいた方がいい
よ」

「大丈夫ですつてば。早くしないと見失っちゃいますよ」

「……そうだね」

怪我を気にする様子もなく走り出すシューラ。エルクもすぐにそ
れに続く。

短いやりとりだったが、シューラの放つ言葉をエルクは意外に感
じていた。

シューラの雰囲気明らかに変化しているのだ。

以前はエルクやメフィに対してもどこかオドオドしていたのだが、
今はエルクに対して陰日向のない態度で接してくれている。彼女が
エルクたちとの間に敷いていた厚い壁が少しずつ取り払われ、今は
その存在をほとんど意識することがない。

リオナとニールに会ったことが何かのきっかけになったのだろう
か。エルクは気になりつつも必要以上の詮索は失礼だと考え、打ち
解けてくれたのならそれでいいかと納得することにした。

何より、今は犬を捕まえなければならぬ。

一刻も早く依頼を解決できることを願い、ピンを握る手に力を込
めた。

16話 風に紛れて

「……変な臭いしない？」

走りながらメフィが疑問を口にした。

「すごく酸っぱい臭い……気分が悪くなりそう」

「あ、そうですね……？　ちょっと、だけですけど」

並走しながらシューラも同意する。言葉が短い間隔で切れるのは息があがってきているからだろう。

鼻にかかるほどではない、かすかな刺激臭が先ほどからずっと漂ってきているのだ。いつまでも付きまとってくるのでメフィはそろそろ嫌気がさしてきたようだ。

犬が逃げ込んだのは、曲がり角が多く視界の悪い細道だった。小柄な犬にとっては追跡から逃れる絶好の舞台だ。それを分かってここに逃げ込んだとすれば、相手は想像以上のキレ者ということになる。

「エルクはどこに行ったの？　近くにはいないみたいだけど」

「さっきまで、いたんですけど……回り、込んでるんで、しょうか」
辺りを見回すがエルクの姿は見えない。待っていると犬に逃げられてしまうので、二人とも立ち止まらずに走り続けている。

犬の方がはるかに足が速く、がむしゃらに追いかけていてもまるで距離が縮まらない。このままでは振り切られてしまいそうだ。

「また見失っちゃう！」

「はあ、はあ……あ、足が……っ」

「シューラ！」

「へ、平気、ですから……」

息も絶え絶えなシューラは足取りも乱れており、これ以上の全力疾走は厳しそうだ。苦しさのあまり顔色もあまり良くない。

「シューラ、無理はしなくてもいいよ」

彼女を置き去りにして行くわけにもいかず、この場の追跡を諦めようかという考えがメフィの頭をよぎる。

「およ？」

そこで二人は、犬の様子がおかしいことに気付いた。

道の途中で突然立ち止まってしまっている。そして何を思ったのか、少し手前の小道まで引き返してそこに飛び込んでしまった。

「……なに？ 今の」

「エルクさん、来たんでしょうか……？」

反対側から来たエルクに気付いたのであれば分かるが、それらしい姿は見当たらない。障害物のない直線なので、少なくとも臭いで感知できるような距離にエルクがいないのは確かだ。

理解に苦しむ現象に、二人は呆気にとられてしばらく固まってしまった。

「……つと、それどころじゃなかった！」

まだ犬を捕まえたわけではないことを思い出し、すぐに二人で走りだした。

「なんか、動きが、鈍くなったね」

しばらく追跡を続けたメフィの感想がそれだった。

これまでのように圧倒的なスピードで振り切られることがなくなったのだ。一時的には引き離されそうにはなるのだが、しばらくすると立ち止まって右往左往している犬に追いつく。二人の姿を見ると再び逃げ出すものの、流石にスタミナが切れてきたのか走るスピードが落ちてきている。

「これなら、追いつける、かもっ！」

「で、です、ね……はあ、はあ」

だが、二人の方も体力の限界が近い。追いつくか逃げ切られるかは五分五分といったところだろうか。

犬は大通りでの逃走をやめ、どんどん細い脇道に入っていくよう

になった。見通しが悪くなると同時に走りにくくなるので、それを狙ってもぐりこんだのだろう。

「頭いいのね、まったく……！」

メフィがぼやく。これまでの行動でも汲み取れたことが、この段階になって彼女の苛立ちを一層強くしているようだ。あと一步のところでは捕まえられない歯がゆさがメフィから余裕を奪っている。

そのためか、すぐ後ろに続いているシューラの様子にまで気が回らなかったようだ。

「あと、ちよつと……がんば……」

これまで笑顔を保っていたシューラが、糸が切れたようにその場にへたり込んでしまった。

「シューラ！」

それに気付いたメフィが慌てて引き返して駆け寄る。座ったままやや俯いているシューラの呼吸はひどく荒れており、肺を限界まで酷使しても酸素の供給がまるで追いついていない様子だ。

「い……いぬ、が……」

「シューラ、もういいよ！」

なおも走っている犬を追おうとするシューラを、メフィが前に立ちふさがって止めた。シューラの両肩を掴み、立ち上がるうとする彼女を再びその場に座らせる。

「犬は、また探せば、いいから！ これ以上、無茶は、ダメよ！」

息を切らせているのはメフィも同じであり、長く会話をできるほどの余力は残っていない。

だが、今のシューラは明らかに自分自身の限界を超えてしまっている。もとより体力がある方ではなかったのだろう、ボロボロのメフィよりも更に状態が悪い。

「あ……」

メフィに支えられながらシューラが顔を上げ、切なげに声を漏らした。

メフィが振り返ると、彼女の視線の先には今まさに見えなくなる

うとしている犬の姿があつた。格段にスピードが落ちているのは見るだけで分かる。

あのまま追い続けていれば捕まえることもできたかもしれない。そんな考えがよぎり、やりきれなさに唇をかみしめる。

「すみ、ません……私、迷惑、かけて」

弱々しく聞こえるシユーラの言葉がメフィの中で反響する。服の裾を握りしめて悔しそうに涙を浮かべる彼女の姿がメフィの目に強く焼き付けられた。

シユーラに非は無い。体が悲鳴を上げているにも関わらず、足を引つ張るまいと必死でメフィについて行こうとしていたのだ。言葉に出さずとも彼女の態度から嫌というほど伝わってくる。

その結果として逆に好機を逃してしまったのだ。いくらメフィが励まそうと、彼女の自責の念は相当なものだろう。

「シユーラ……」

「ごめん、なさい……。メフィ、さん、私は、いいです、から、犬を」

「できないよ、そんなこと」

「すみま、せん……」

過呼吸の合間に謝罪を繰り返すシユーラ。喋ることも辛そうな様子でいながら、それを厭わずに口を動かし続けている。

「シユーラ、もういい、もういいよ」

何度も謝られ、メフィもどうしたらいいのか分からなくなってしまう。犬はどんどん離れていくが、体が縛りつけられたかのように動かない。

今の自分には何もできない。

その事実を悟り、メフィは自分の全身から気力が散っていくのを感じた。

「……助けて」

走りすぎて掠れた声で呟く。

「助けてよ、エルクウ……」

誰よりも信頼する幼馴染の名前を、静かに呼んだ。

「そんな大袈裟な」

やりにくそうな声を後ろから発せられ、二人は反射的に振り返る。

「……大丈夫？」

「エルク！」

苦笑いの幼馴染の顔を認め、メフィは緊張していた表情を一気に緩めた。

エルクもずっと走っていたらしく、早いペースで肩が上下している。メフィやシューラと比べて余裕が見られるのは単純な体力の差だろう。

「二人ともごめん。もう少し早く戻ればよかったんだけど」

彼も犬を追っていたのは間違いない。ただ、メフィたちと別れて何をしていたかが疑問として残ってしまう。右手には殆ど空になったビンが握られており、わずかに残った液体がゆらゆらと揺れている。色つきのビンでラベルまで貼ってあるのでただの水ということは無いだろう。

正体を確かめようとラベルの文字を読み取るより先に、メフィはそこから漂ってくる刺激臭で眉をひそめた。

「なんか臭う」

「えっ……あー」

一瞬驚いたエルクは何か心当たりを思いついたようで、複雑な面持ちで手にしているビンを差し出した。

「これかな」

「なにこれ？」

「お酢だよ」

説明しながら栓を抜き、口の上部を手で仰ぐ。その途端に強烈な臭いがメフィの鼻に流れてきた。急に嗅いってしまったため、メフィは思わずせきこんでしまう。

「お酢、って……？」

少しずつ落ち着いてきたのか、シューラが顔を上げた。

「さっきも話に出たけど、犬の鼻って敏感なんだよね。人間の数千倍とか数万倍って言われてる」

「そんなに、あるんですね」

「それはいいんだけど、なんでお酢？」

「臭いによって感じやすさって違うでしょ？ お酢の臭いみたいな刺激の強い臭いだと、犬は人の一億倍くらい感じ取れるんだって」

臭いを感じする嗅覚細胞の層を、人間の二層に対して犬は複数層持っており、細胞の数自体も人間をはるかに凌ぐ。彼らは嗅覚によって危機回避や狩猟をしてきた種であり、臭いに敏感であるのはそういう進化の結果なのだ。

「だから、この臭いが充満したら僕たちの臭いを攪乱できかなって思ってたね」

もちろん自分の周りだけ臭いをつけても意味がない。エルクはそう考え、街中を回って臭いを覆い隠せるよう酢を振りまいていたようだ。少し前から周囲に酸っぱい臭いがしていた理由はこれだろう。「どこから持ち出したのよ……それに、効果あるの？」

「確証はないけど……」

ラベルを眺めて複雑な表情をするエルク。効力があるかどうか目に映りにくい作戦なので自信を持てないのも当然と言える。風の一件についても差があったのか未だによく分かっていない。

「……でも」

まだ呼吸の整っていないシューラが口を開いた。

「あの犬……ちょっと、様子が、変、でしたよ」

「変？」

「あ、そうそう。ちょっと挙動不審って言うか、逃げ道を迷い始めたみたいだったのよ」

向かいから追手が来ているわけでもないのに急に引き返したり、犬の行動パターンには明らかに変化が生まれている。それが酢の臭

いによるものか断定はできないものの、この機を逃す手は無い。

「とは言っても、その様子じゃ追跡は難しそうだね……」

メフィもシユーラも肩で息をしており、特にシユーラは運動を続けられる状態ではなさそうだ。歩くのもやっとなというような有様で、これ以上無理を強いるのはあまりに酷だろう。

「私の事は、置いて行ってください……二人で、犬を」

「シユーラ、ダメだってば」

「うん、それはできないよ。差別のこともあるし」

植物族への迫害がどのようなものかに関わらず、植物族であるシユーラを一人残して行くのは危険極まりない行為だ。せめて彼女の傍にメフィかエルクがついていた方がいいだろう。

「ですけど……一人じゃ、追いつめられない、ですよね？」

「袋小路まで追いこめばできるかもしれないけど……あの犬がそんなミスするとも思えないよね」

件の犬の賢さならば上手く回避されてしまふと容易に想像がつく。

「今日も諦めないとダメかなあ……」

手詰まり状態であると実感し、メフィが俯いてそう呟いた。あまり時間をかけてしまふと依頼主を不安にさせてしまふのだが、こうなつては依頼の辞退も視野に入れなければならない。

「すみません……ホントに、すみません」

シユーラも再び謝り始める。この状況ではどうしても責任を感じてしまふのだろう。

「……メフィ。シユーラと一緒にここで待ってて」

二人の様子を見て何を思ったのか、エルクが酢のビンを置いて歩き始めた。その方向は犬が歩いていった方向と同じであり、彼が犬を追おうとしているのはすぐに分かる。

「エルク、一人じゃ無理よ」

思わず出たメフィの言葉に、エルクは足を止めた。それからいくらか周囲を見渡し、しばらく何かを考え込むように黙ってしまった。近くに別の路地の入口がないのを確認し、それからようやくメフィ

へと顔を戻す。

「だから、ここにおびき出そうと思う。メフィ、網はまだ持つてるよね」

「えっ、う、うん……」

エルクの提案に対しメフィは返事を濁らせてしまう。言われるまま捕獲用の網を握り直すが、同じ手で既に失敗しているため自信が持てない。

「じゃあ行ってくるね。うまくここまで誘導できればいいけど」

それ以上は二人の話を聞く気が無いのか、反応を待たずにエルクは駆け出してしまった。障害物が多いので姿が隠されるのは早く、すぐにその場は二人きりの空間へと逆戻りした。

「大丈夫かな」

「信じ、ましようよ。きつとうまく、やってくれます」

エルクの消えた辺りを凝視しつつ立ち上がる。障害物が多い細い道なので、捕獲の際はギリギリまで引きつけることができるかもしれない。

「シューラ、ここは任せてね。あ、このケージ持つておいてもらえるかな」

「あ、はい……」

エルクの持つていたケージを渡されたシューラは、納得しきれない様子で視線を落としてしまった。先刻の失敗を気にしているようだったので、挽回したくて何か手伝いたかったのだろう。

「……気にしないでいいよ。今は早く体力を回復しないとね」

「……そうですよね」

同意はしたものの、なおもシューラは立ち直れていないようだ。それでも不満は口にせず、全て言われた通りにするつもりらしい。エルクが戻ってくるまでの間、二人は疲れ切った自分の身体を少しでも休ませることにした。

17話 風に任せて

かなり速いペースで走るエルクの前方には、逃走を続けている因縁の犬の姿が伺える。二人の言っていた通り、立ち止まって頻繁に周囲の状況を確認するようになったようだ。最大の武器である嗅覚を抑制することには成功しているらしい。

それでもなかなか思い通りには動いてくれない。

頻繁に道を曲がって視界から逃れようとするなど、逃亡手段にますます磨きがかかったようだ。だが流石に体力の限界なのか、エルクとの距離は少しずつ詰まってきている。

（この先でメフィとシューラが待つてる……上手くいってくれ）

誘い込むことには成功したので、あとは待ち伏せている二人が何とかしてくれることを祈るしかない。挟み撃ちはこれまでも何度か試みたが、ことごとくが失敗に終わっている。これについては解決策が見つかっておらず、現状では犬の体力切れに賭けるしかない。

「……いた！」

道の先にシューラとメフィの姿が確認できた。メフィが網を構えており、このまま事が運べば捕まえられる可能性は十分あるだろう。さらに後方ではシューラがケージを持って事の成り行きを見守っている。捕獲に直接は関わらないが、自分にできることをしようと、この彼女の気持ちの表れなのかもしれない。

「メフィ！ また跳び上がったんじゃないでよ！」

大声で注意を促すと、メフィはムツとして頷いたようだ。

犬もようやく二人の存在に気付いたようで、その足取りが迷い始めた。エルクとの距離を確認し、そして道の両方向に注意を払いながらゆつくりと立ち止まる。以前の挟み撃ちの際と反応が違うのは、それぞれの居場所を臭いで特定できていないからだろうか。

エルクも走るのをやめ、きよろきよろと両サイドを確認する犬を見つめる。

ここで慌ててしまえば隙を突かれて逃げられてしまう。ここからはより一層集中して挑まなければならない。

勝負は一瞬で決まる。

「メフィ、行くよ！」

「うん！」

掛け声とともにエルクが一気に距離を詰める。気付いた犬が反対側に走りだす。

やや遅れてメフィも走り出し、網を持つ手に力を込める。両側に抜け出せる路地は無く、犬はうろたえてその場に立ち止まった。

「つえやあ！」

大きく横薙ぎにふるわれる網。今回は軌道に死角が無く、間近にいたエルクの目にも見事に捕獲したように見えた。

「え」

「あっ！」

ほぼ同時に二人が声を上げる。

犬は網の枠に乗り、その勢いと自らの脚力を利用してメフィの後方へ思い切り飛び出したのだ。

網のスピードも加わった犬のジャンプ力はその身体を持ち上げ、全員が見上げる形となるほどの高度を現実のものとした。

犬は空中で脚をばたつかせているので、あちらもかなり慌てているようだ。着地してしまえばそのまま再び逃走を始めるだろうが。

「ウソ！？」

「まずい！」

また逃げられてしまう。そう分かっているにも、追いつめて捕獲するつもりだったエルクとメフィは体がすぐに反応できない。また失敗か、とエルクが拳を握りしめる。

「だめえっ！」

悲痛な叫び声はどうやらシューラの発したもののようだ。エルクもメフィもその声に驚き、体を固まらせてそちらに視線をやった。

遠巻きに見つめていたシューラがケージを放り出し、空中の犬を見据えて走り出していた。足がふらふらでスピードもないが、犬の着地点には二人よりも近い。

「シューラ！ そんな、大丈夫なの！？」

「へいき、ですっ！ 捕まえ、ます！」

犬が少しずつ落ちてくるが、まだシューラとの間は広く開いている。着地する前にキャッチしなければ、今のシューラにはまず捕まえないだろう。

倒れてしまいそうになりながら、それでも犬の後を懸命に追いかけるシューラ。彼女からすさまじい執念のようなものを感じたエルクは、思わず制止の言葉をかけてしまいそうになるのを何とか飲み込んだ。

犬が地上に迫る。まだシューラとは距離がある。

「っ……届いてっ！」

両手をいっぱい伸ばしたまま、シューラは着地寸前の犬めがけて飛び込んだ。

「きゃあああっ！」

地面と激突したらしく、シューラの悲鳴と犬の短い吠声はいせいが同時に響いた。飛び込んだ勢いでシューラの姿は物影に隠れてしまい、エルクとメフィからは見えなくなってしまう。

そして見えなくなつた直後、何かにぶつかったような鈍い音が聞こえた。

「だ、大丈夫！？」

「シューラ、しっかり！」

二人して顔をひきつらせて叫ぶ。

彼女がかなり無理をして走り出していたのは明らかで、上手く着地できたとも思えない。今の鈍い音は頭をぶつけたのではないだろうか。

犬の事など頭から消し飛び、エルクはただシューラの無事を確認しようと慌てて駆け寄る。

「ひう……ひゃ、あ」

気の抜けるような喘ぎ声が聞こえ、エルクは急がせていた足を止めた。

「あ、やあつ……」

メフィにも聞こえているようで、同じように訝しげな表情をしてエルクと顔を合わせる。密やかに発せられるその声は意味を持ち合わせておらず、まるで喃語のようだ。

考えるまでもなく、声の主はシューラだろう。だが、こんな奇妙な声を発するというのは何があったのだろうか。

焦燥感が空振りしたエルクは、自分でもよく分からない気分のまま嬌声きょうせいの流れてくる物影を覗き込んだ。すぐ隣でメフィも同時にそこの様子を確認しにかかる。

「ひゃつ……あんつ、くすぐつたいですよ」

シューラが仰向けに倒れたまま両手で犬をしつかりと抱きしめていた。そんなシューラの頬を、抱えられたままの犬がしきりに舐めている。尻尾を盛んに振り、喜んでいるかのような様子だ。変な声を発していたのは舐められてくすぐったかったせいらしい。

「……大丈夫？」

「あ、エルクさん、メフィさん」

エルクが声をかけると、シューラはようやく二人が駆け付けていることに気付いたようだ。二人に顔を見せるようにして犬をしつかり抱え直し、心から嬉しそうな笑顔を浮かべた。

「あの……この子」

控えめながらも喜びを前面に押し出すシューラ。既に逃げる気がないのか、犬はシューラにされるままとなっている。

「つ、捕まえ、ました」

「……う、うん。やったね」

見れば分かる、と口にするのは無粋な気がしたのでやめておいた。これほど歓喜を露わにしているのだから、わざわざ水を差す必要は

ないだろう。

「すごい、すごいよシューラ！」

そんなエルクの後ろでメフィが目を輝かせて感動を口に出していた。

「そ、そうですか？」

「そうよ！　さんざん苦勞させられてきたじゃない！」

不敵に微笑みながらメフィが犬の頭を撫でる。乱暴な手つきだったが、犬が嫌がる様子はなかった。

「この子、遊びたかっただけなんだと思います。いっぱい走り回って、私たちと追いかけてこして」

「そんな易しいものじゃなかった気もするけどね」

街中を必死になって追いかけて回したこの二日間が楽なものであったとは言えない。犬にとっては遊びのようなものだったかもしれないが、ここまで体を酷使したのはエルクの人生の中で初めての事だ。他の二人にしても、会話がままならないほどの息切れを起こしておいて楽な依頼だったとは思わないだろう。

「何はともあれ、これで無事に解決したってことよね？」

犬にちよっかいを出していたメフィが顔を上げ、エルクに向けて首を傾げる。そのくらい彼女でも分かりそうなものだが、他の人間の口からそうだと聞きたいのかもしれない。

「うん。お疲れ様、メフィ、シューラ」

おそらく二人が望んでいるであろう言葉を口にする、やはりメフィは満足そうに微笑んで見せた。

「犬に傷もないみたいだし。けっこうスマートに成功したんじゃない？」

「うん。まあ、問題があるとすれば――」

言葉を区切りながらエルクは周囲に視線を配り、それからそこに漂っている臭いを感じて苦笑いを浮かべた。

「お酢の臭いが……ね」

「酸っぱい臭いがします」

のんびりとガルドの隣を歩いていたりダが口を尖らせてそう言った。それはもちろんガルドの鼻にもかかってきていて、指摘されるまでもなく何事か気にしていたところだ。

「これはお酢の匂いですね。しかもそこそこ高いやつです」

「分かるのかよ。……ずいぶんご立腹のようだが」

「当然です！ これ、お酢を街中で振りまいたんですよ！ もったいない！」

どうやら食べ物を粗末にしたことに対して怒っているらしい。普段から食にこだわりを持っているリダならば当然の心構えと言ったところか。なかなか強烈な臭いなのでガルドもあまり快くは感じていないものの、ただの悪戯で撒いたとも考えにくいのでそこまで腹は立てていない。

「仕方ない事情があったんだろ」

「それでも、お酢じゃなくていいじゃないですか…… お酢は魚介類のカルパッチョにもよく合うのに」

「どれだけピンポイントな使用例だよ……と、そんなことはどうでもよかった」

リダと違い、ガルドは食料に対してそこまで神経質ではないのだ。今現在、もっと気にすべき事柄はいくらでも列挙することができる。まだ機嫌の悪いリダの頭に手を置き、くしゃくしゃと雑にかき回した。

「お前の姉貴、最近までこの街にいたみたいだな」

「そうなんですか！？」

撫でられながらリダが目丸くする。エディカに関する話は今日に会った依頼人にも訊いたが、彼もまた知らない名前だと首を横に

振っていたのだ。

「でも、あの人は知らないって……」

「ああ、まあな」

言葉通りに受け取ればその反応は普通だろう。人を信じることしか知らない分、リダもまだまだ子供なのだとガルドは再確認した。

「気付かなかったか。あの人、嘘ついてたんだぞ」

「え!？」

よほど意外だったのか、普段見せないような面白い顔をするリダ。今は比較的真面目な話をしているので茶化すのはやめておくことにした。

「ああ、別に俺たちに意地悪しようとしたわけじゃない。あれは多分……誰かに口止めされていたクチだろうな」

「口止め……まさか、姉さんに？」

「順当に考えるとそうなるか」

「そんな、なん——」

さらに質問を重ねようとしたリダの口をガルドが塞いだ。

「それ以上は俺に訊いても仕方ないだろ？ エディカがどんな考えか、俺が何を言っても俺の予測でしかない。今は今できることをするだけだ。そうだろ？」

リダはすぐには納得しかねたようだったが、事実を飲み込んだのか言葉を発さずに頷いた。そこそこの付き合いの中で、ガルドの言葉に多少の信頼は置いているのだろう。

「でも、それだと今はこの街にいないってことになりますよね。だつたらすぐにでも出発したほうがいいんじゃないですか？」

「どっちに行つたかまでは分からないし、まだ情報を集める必要があるだろうな。それでも駄目だつたらまた考えよう」

レクタリアから近い街も八方にある。崩壊したレダーコールを除いても、せめて方角くらいは限定しないと探しようがない。

「なににせよ、今日は休もう。お前だつてそろそろ腹減ってきた頃だろ」

「あ、はい。流石ガルド、よく分かってますね」

「そりゃ長く付き合ってるからな」

毎日食事時に言われていれば頃合いが掴めてくるというものだ。最近ではガルドもそれに合わせて空腹を感じるようになってきている。こういうものも適応力と言っのだろうか、とガルドは下らないことを考えていた。

「今日は何にする？」

「んー、魚介類のカルパッチョがいいです」

「こんなに臭うのにか」

「こんなに臭うからですよ」

既にリダの目は夕食の席に並ぶ魚の切り身と貝を見ているようだ。こうなってしまうと、異論を唱えたところでリダの耳にはまず入らない。そういった点も併せて適応しているガルドは、何も言わずに食事処へと向かい始めた。

18話 兆し

ベッドの端に腰かけ、そこで横になる人物へ薄く微笑みかける。返事はもとから期待していない。ただ、安らかな寝息さえ聞こえてくればそれでよかった。心地よく眠っているのだと、そう信じられればそれでよかった。

聞こえてくるのは、大地を震わせるような荒い呼吸。苦痛を滲ませる表情が彼の穏やかでない現状を伝えている。

深い失意に吞まれながらも、女性には信じていた。

彼が、いつか必ず快復すると。

過酷な追走劇から一夜が明け、エルクが目を覚した時にはメフィとシューラが既に朝食を済ませていた。しかも脚に筋肉痛が残っており、歩くたびに太腿がつりそうになる。それだけ前日の運動が限界を超えていたということだろう。

「あ、おはようエルク。昨日はお疲れ様」

「あ、うん、おはよう」

エルクに気付いたメフィがまずねぎらいの言葉をかけてきた。それが意外だったエルクは返事がぎこちなくなってしまう。エルクの経験では、これまでメフィにそういった言葉をかけてもらったことはなかったのだ。

何も言わないだけで、彼女の体にも疲労が残っているのかもしれない。あるいは彼女自身の心境が変化したとも考えられる。いずれにしても、今の自分がかつてと同じ境遇にいないことを改めて実感

させられてしまう。

これから自分たちはどうなっていくのか、そんな不安がエルクの胸中で燦^{くすく}り始める。

「……エルクさん？」

シューラの呼びかけがエルクを現実に取り戻した。

「どうかしましたか？」

「え……別に、何でもないよ」

心の乱れが拳動に表れていたようだ。心配そうにエルクに視線を向けるシューラへわざと大袈裟に笑いながら、エルクは自身の内面を覆い直した。

シューラはなおも眉尻を下げているが、エルクが何を懸念しているかまでは分からないだろう。

「二人ともご飯は食べ終わってるみたいだし、もう出発して大丈夫だよ」

いつも通りの表情を心がけ、エルクは出かける身支度を始めた。もともと、上着を着て手荷物のリュックを背負うだけなので大したことはしないのだが。

「エルクは何も食べてないじゃない」

「少しでも食べておいた方がいいですよ」

メフィとシューラがエルクの体調を気遣ってくる。

やはり彼女たちも体力が回復したわけではないのだろう。昨日で最も運動量の多かったのがエルクだと分かっているからこそ、余計にエルクが無理をしていると感じてしまうのかもしれない。

「平気だよ、そんなに疲れてないから。僕のせいで時間を取らせたくないし」

ここまで分かりやすい嘘もないだろうと、言った本人であるエルクもそう感じていた。

体重をかける度に脚に鈍痛が走り、思わずよろけそうになる。言葉にこそしないが、傍から見ても脚が回復していないというのは理解できるだろう。こんな状態の人間を疲れていないと考える者はま

ずいない。

「時間とか気にしないでいいわよ。エルクはそういうことに気にしすぎ」

「私たち、待ちますから。だからエルクさん、お願いですから無茶はしないでください」

説得を試みる二人の顔が、エルクの目にはいつになく哀しそうに映った。

「……………、分かった」

二人の心遣いを無下にする気にもなれず、エルクはそれ以上の抵抗をやめて背負いかけたリュックを下ろした。

「病気、よくならないわね」

横になったままの男性に声をかける。目は覚ましているのだが、やはり呼吸は荒いまま、自身を気にかけている女性への反応は見られない。

しばらく男性を見つめていた女性は、彼の枕元に置いている薬の瓶へ視線を移した。

彼の症状に効くと聞いた薬草を煎じたもので、茶葉のような濃い緑色をしている。彼を助けてから数日飲ませ続けているのだが、それらしい効果は全く表れないままその量はかなり減ってきてしまっていた。このまま飲み続ければ一週間経たずに底をついてしまうだろう。

「大丈夫よ、ギルドに依頼しておいたから」

返事がないと分かりつつ、女性はそう言って笑って見せる。男性は一瞬だけ女性に目を向けたが、すぐに目を瞑ってしまった。

彼を助けてから看病を続けているが、全く快復の兆しが見えない

まま時間だけが過ぎていく。どうすれば彼の症状は良くなるのか、いくら調べても答えが見つからない。

彼を救うことはできないのか。女性は、自身の限界にもどかしさを感じていた。

「ねえエルク、今回の依頼ってどんな内容？」

「……確認してないの？」

依頼主の家の前まで来て、メフィが唐突に疑問を口にしてきた。あまりに基本的な質問にエルクは思わず訊ね返してしまう。怪訝そうな顔をされ、メフィは恥ずかしそうにしながら唇を尖らせた。

「うー……エルクが知ってれば一応問題ないでしょ」

「でも無関係じゃないんだから、概要くらいは把握しておこうよ」
接触場所や報酬などはエルク一人が知っていれば十分でも、依頼をエルク一人でこなすわけではない。少しでもいいので事前に分かっておいてほしいと思うのだが、彼女にそこまで求めるのも悪いかと思ひあまり強くは言わないようにしている。

それでも、ここまで自覚のない態度を取られては苦言を呈したくなるというものだ。

「薬の材料を持ってきてほしいっていう依頼だよ。詳しい話は直接会ってから教えてくれるってさ」

「……ここが、その人のお宅ですか？」

「うん。普段はずっと家にいるからいつ来てもいいって書いてあったけど……」

いざドアを前にすると、不在なのではないかと不安になってくる。ここまで来て引き返すわけにもいかないので、後ろ向きな気持ちを押し込めてドアに近付く。

ノックを二回して反応を待つと、すぐに一人の女性が出てきた。明るいブラウンの髪はボサボサで、服装もシワが多くお世辞にも

おしゃれとは言えない。整った顔立ちでエルクから見ても綺麗な人なのだが、少しやつれている姿はかなり疲弊していることを窺わせる。

「……どちら様？」

発せられた声にも張りがなかった。

「えっと、ギルドの者です」

上着を開いてバッジを見せる。女性はそれを見て僅かに目を見開き、それから弱々しく微笑んで見せた。

「まあ、もう来てくれたの。嬉しいわ」

「こんなかわいい子たちが来てくれるなんて、あのギルドも変わったわね」

通されたソファに座る三人。メフィは自分の家であるかのようにくつろぎ、逆にシユーラは体を硬直させて座っており、二人の性格の差を顕著に表している。

エルクはシユーラほど固くなってはいないものの、初対面の人の家なので粗相そそうのないよう姿勢を正してじっとしている。

「お姉さんって学者さん？」

背もたれに頭を乗せたメフィが後ろの本棚を眺めてそう訊ねた。

棚には分厚い本が何冊も並んでおり、ただ趣味で集めているわけではないというのが窺える。よく見回してみれば、同様の本を収めた本棚は部屋を取り囲むようにして幾つも並んでいるのが分かった。返答を聞きたがっているのはメフィだけだったが、女性は律儀に答えようとしてくれているようだ。

「……まあ、学者の端くれみたいなものね。分野でいえば民俗学を……まあ、かじるくらいだけ」

女性は少し照れながらもそう肯定をした。

「民俗学、ですか」

「ええ、やってみると奥が深く——と、話すと長くなるからやめておきましょう」

おそらく本心から民俗学が好きなのだろう。語りだすと止まらなくなるので自制した、といった様子だ。依頼を優先すべきエルクたちにとってはありがたい判断力である。

「薬の材料、というお話でしたよね」

エルクが早速依頼の話題を持ち出す。本題に入り、リラックスしていたメフィも居住まいを正した。

「何かご病気なんですか？　あまり具合が悪いようには見えませんが」

「あ、ごめんなさい。病気なのは私じゃないの」

「じゃあ、お姉さんの家族とか？」

悪意なく尋ねるメフィに対し、女性は困ったように首を振った。

「この間……ほら、レダーコールの事件があつたじゃない？　あれの次の日に会ったばかりの人なの。今は奥の部屋で寝かせているわ」
簡単な説明とともに女性が部屋の奥のドアへ視線を送った。当たり前だが現在の部屋からその姿は見えず、どのような人物なのか確かめることはできない。

「何の病気か分からなくて……表れてる症状に効く薬草を飲ませても効果が見えてこないの。お医者さんに診せても原因が分からないって言われるし、病気のせい何か何も喋らないし……今回頼んだ薬も、本当に効き目があるのか確証はないのよ」

悲しげに目を伏せる女性に、エルクとメフィは返す言葉をすぐに思いつけなかった。その人物のことを本気で助けたいという気持ちはよく伝わってきていて、それだけに治療がうまくいかない辛さも分かってしまう。

ギルドのメンバーとして来ている以上、本来ならば依頼主の事情に介入するのは喜ばしくない。それでもエルクは、損得勘定抜きにこの人の手助けをしたいと思い始めていた。

「とりあえず指定の材料を探してきます。それでもし効果がないようでしたら、僕たちも――」

「あ、あの」

未だ緊張で体をこわばらせているシューラが、何か言いたげな目で小さく手を挙げた。それに気付いた女性がシューラへと耳を傾ける。

「何か？」

「その人と……二人きりで、あの、会わせて、もらえませんか？」

「二人きり？」

さすがに女性も奇妙な注文だと思ったようだ。シューラの双眸をじっと見つめ、質問の意図を表情から読み取るうとしている。

「二人きりって、どうして？」

「……」

女性の疑問には答えず、シューラがエルクに視線を向けてきた。どうやら自分ではうまく説明できないので、エルクに言い訳をしてもらいたいようだ。

もちろん、シューラがその人物と二人きりで会いたがる理由などエルクは知らない。ただ単に興味本位で会ってみようとしているのであればエルクも協力するつもりはなかった。

シューラは、その人物と会って『何か』を確かめようとしている。しかもその『何か』は、エルクたちとも無関係ではない。

そんな意図を感じ取ったエルクは、まず女性の疑問を解決するべく一芝居うつことにした。

「すみません。彼女、医術を学んでいる学生なんですよ」

「え、そうなの？」

「ちゃんとした治療はできませんけど、依頼を受けた時から興味を持っていたようで、病状だけでも診ておきたいらしいんです。だよね？」

「え？ あ……は、はい」

エルクの解釈は間違っていなかったようで、突然のフリでもシューラは頷いて肯定した。

「……」

メフィが度肝を抜かれたような形相でエルクのことを凝視してき

たが、エルクは気づかないフリをした。咄嗟に考えついた嘘なので驚くのも仕方のないことだろう。

後の説明が面倒になると予想される。それ以前に、メフィが空気を読んで黙認してくれるかどうかが最大の懸念事項だ。

「そうだったの。で、二人きりになりたい理由は？」

「診ている所を他の人に見られたくないみたいなんですよ。不都合があるようでしたら諦めますが」

「それは彼次第だから私は何とも言えないけど……」

納得はしたが、それでも女性は了承していいか迷っているようだ。ついさつき会ったばかりの子供を信じると言う方が無理な話だろう。

「うーん……大丈夫なの？ まだ勉強の途中なんですよ？」

「あ……それは、大丈夫です。その、診るだけ、ですから」

「後学のため、ってこと？ ちゃんとした医者さんでも分からなかった病気なのよ」

女性がなおも半信半疑で質問を重ねてきた。よく知らない人間と病気の人物を二人きりにするのは抵抗があるのだと分かる。

どう理由を取り繕おうかエルクが首を捻ると、じっと座っていたメフィが突然立ち上がった。口を開いた。

「シユーラはすごい優秀だもん。心配いらないよ」

「優秀？」

「少し人見知りだけど、誰よりも勉強家なの。いろんな病気を直接自分の目で見て知識を増やそうと頑張ってるのよ。治すことはできないかもしれないけど、その努力は絶対に嘘じゃない」

「……………そう」

メフィの説得を聞き、女性の心はようやく決まったようだ。

「分かったわ、あなたに協力する。シユーラさんだったわね、こっちよ」

「あ、はい」

シユーラを手招きし、女性は奥の部屋へと歩き始めた。慌ててそれに続くシユーラはエルクとメフィのことを気にしているようだっ

だが、すぐに女性について隣の部屋へ入って姿が見えなくなる。

「……なんであんな嘘ついたの？」

ドアが閉まるのを見計らい、メフィが不信を露わにしてエルクを睨み下げてきた。立ち上がっているせいで威圧感は普段より強い。

「それは……シューラがどうしても病気の人と会いたいみたいだったから」

「アイコンタクトってやつ？ 知らない間にずいぶん仲良くなったみたいね」

頬を膨らませてそっぽを向いてしまうメフィ。まったく自覚のないまま、エルクはまたしても彼女を怒らせてしまったようだ。しかもまだ機嫌を損ねた原因が思い当たらない。

「メフィだって便乗してくれたでしょ」

「それは……エルクのことだから、何か考えがあるんだろうなっと思って……」

言葉が濁ってよく聞き取れなかったが、どうやら先刻の懸念はいらぬ心配であつたらしい。

彼女は彼女なりに考えがあつて動いているのだ。何でもかんでもエルクが気を揉む必要など最初からなかったのかもしれない。

「そっか、ありがとう。メフィのおかげで助かったよ」

「そ、そう？」

エルクに褒められ、メフィはまんざらでもない様子だ。だが恥ずかしさのほうに勝つたのか、すぐさま会話の内容を別の話題へとシフトさせた。

「でも、シューラはどうしてそこまで熱心に会いたがつてたの？ 何か聞いてないの？」

「んー、これは僕の想像なんだけどね」

シューラの様子を顧みながらエルクが顎に手を当てる。

「たぶん、その病気の人って——」

19話 覚り

「さあ、どうぞ」

女性に付き添われながらシューラはゆっくりと部屋に入った。

部屋の中に余計な装飾や家具は置かれておらず、奥に置かれたベッド以外に目に留まるものと言えば、窓を覆う白いレースのカーテンとドアの前の赤いラグくらいしかない。シンプルというより、殺風景な印象を受ける個室だ。

「突然ごめんなさい」

女性が突然謝った。どうやらベッドに横になっている人物へと語りかけているようだ。

がっしりした体格から男性であることが分かる。鮮やかなブロードのショートヘアが一番に目に入り、一切の感情を見せない無表情で天井を見つめている。周囲に対して——女性に対しても、どこか気を許していない節があるようだ。

「……………」

彼の様子を確認し、シューラは自分の予想が正しかったと確信する。

「今の調子はどう？ 体は大丈夫？」

静かに、包み込むように語りかける女性。対する男性は口を固く閉ざしたまま何も言わず、一瞬だけ女性と目を合わせた。

「……それはよかったわ。薬が効いてきたのかしら」

女性は嬉しそうに頬を緩ませるが、その言葉を本心から言っているわけではないようだ。これまでもこうした小康状態を何度も繰り返してきたのだろう。男性もまたそれを分かっているらしく、女性の言葉にも反応せず視線を天井から動かさない。

気まずい沈黙がしばらく続いた後、不意に女性がシューラの手を取ってきた。

「調子がいいところ申し訳ないんだけど、少しこの子の勉強に協力

してほしいの」

女性の言葉に男性がピクリと反応をする。過敏とも取れるその態度は、まるで何かを恐れているかのようだ。場の空気が重く、今のシユーラにそれを気にする余裕はなかった。

「ほらシユーラさん」

「え、あ」

背中に手を添えられ、シユーラはベッドのすぐ横まで押し出されてしまう。そして二人を対面させてから、女性は扉の方向へ踵を返した。『二人きり』という約束をしっかりと遵守しようとしてくれているらしい。

「あなたの病状が診たいそうよ。詳しい説明はその子がしてくれるから、何かあったらすぐに呼んで」

最後に一言付け加え、女性は静かに退室した。

「……………」

望み通り男性と二人きりになり、シユーラは戸惑っていた。

シユーラには、女性があまりにもあっさり自分たちを信じたことが理解できなかった。言い出したのは彼女自身だが、立場が逆ならシユーラは絶対にこの面会を承認しなかっただろう。結果として自身の予想を確かめる機会を得られたものの、彼女の中には大きなわだかまりが残ることとなってしまった。

人を信じるというのは簡単ではない。今でこそシユーラが気を許しているエルクたちも、出会った当初は疑うことから始まっていたのだ。彼らが『奴ら』と無関係だと分かってからはそれもほとんどなくなったが。

「……あ。すみません、ぼーっとしてしまっ」

考えて答えの見える疑問ではないので、シユーラはまず目の前の現状に集中することにした。

この状態はエルクやメフィが協力して用意してくれたシチュエーションであり、彼らの行為を無駄にするわけにはいかない。単なる

好奇心としてではなく、今回の依頼やエルクたちの今後、そしてシューラ自身のことを鑑みても、聞いておいたほうがいい事項はいくつもあるのだ。

男性は訝しげな表情でシューラを見つめている。二人きりである現状も含めて、そうやすやすとシューラのことを信用はできないのだろう。シューラもそれは当然だと考え、明らかな疑いの眼差しも気にしないことにした。

「あの……最初に、謝らせてください。ごめんなさい」

男性と若干の距離を残してシューラは頭を下げた。

「あの女の人が言つてたこと……ホントじゃ、ないんです。私は、あなたの病状を診たいわけじゃありません」

男性の目がわずかに見開かれる。彼は内容よりも、『嘘についていた』という事実のほうに気になったようだ。

彼の意識が『不審』から『警戒』に変わったのを感じ取り、シューラは次の言葉に躊躇いを覚えてしまった。

どうしても確かめておきたいこととはいえ、病床の男性には大きなストレスとなるだろう。おそらく彼と同じ『体験』をしているシューラには、その言葉の持つ重みが身に染みてよく分かっている。思い出すだけでも胸を刺し貫くような苦痛がそのころの恐怖を呼び覚ますのだ。

だが、ここまで来てもう後戻りはできない。

「そ、その……。あなたは……人間じゃ……ないです、よね？」
「……」

男性の変化は目に見えて明らかだった。

シューラをあからさまに警戒し、体を無理やり起こして既に戦闘の構えに入っている。シューラが距離を残しておいたのでそれで済んでいるが、近くにいれば彼はシューラに対して危害を加えていただろう。

「お、驚かせてすみません……。あの、私は敵じゃないんです」

慌てて両手を挙げて敵意がないことをアピールする。それでも警

戒を解かない男性に、シユーラはますます自分の行動が正しかったのか分からなくなってしまった。

何よりまずは和解するのが先決である。シユーラはそう判断し、とにかく彼を安心させられそうな言葉をぶつけてみることにした。「し、信じてもらえるかわかりませんが……その、私も『奴ら』に捕まっていたんです」

「……！？」

男性の目が驚愕に見開かれる。シユーラはそれに気づかず、説得のための言葉を重ねて羅列していく。

「この頭のキノコも帽子じゃなくて、私の体の一部なんです」

「……っ！」

「う、嘘じゃないですよ？　ち、ちょっとくらいなら、触っても……って、あれ？」

男性が混乱していることを認め、シユーラもようやく口を休めた。男性はシユーラの全身をじっと見つめている。そうして言葉の信憑性を吟味しているかのようだ。

瞬間、沈黙する。

『なるほど。確かに君は人とは違うようだ』

次に語り出したのは男性だった。シユーラの話を受け入れたのか、瞳の中に暗く輝いていた憎悪の炎はひとまず影を潜めている。

『分かった、君を信じてみよう。先ほどは不躰な態度をとって申し訳なかった』

「あ……」

男性は言葉を発している間、全く口を開いていなかった。シユーラと向き合い、いかにも会話をしているといった雰囲気なのだが、今しがたの声は彼の口から聞こえたものではない。

シユーラは一瞬だけ驚いたものの、それが『過去の知人』と同じ特徴だと気付くと逆に安心して胸をなでおろした。

「あ、ありがとうございます。嬉しいです、信じてもらえて」

『しかし、ひとつ確認しておきたい』

ピシ、と空気に亀裂が入ったかのようにだった。

男性はシューラの話疑っているわけではない。しかし、彼女に対する警戒を完全に解いたわけでもないようだ。会話はしても、仲間として捉えたりはしないということだろう。まるでそれを体現するかのよう、男性の言葉にはシューラに向けられた冷酷な感情が滲み出ている。

『なぜあの女性を騙してまで私と会おうとした？』

心の奥底まで覗き込もうとするかのような鋭く冷え切った視線。シューラはビクリと体を震わせ、耐え切れずに男性から目をそらした。

『君にとっても相当のリスクがあつたはずだ』

そこへ男性の言葉が続く。追い詰めるような気迫にあふれ、ただでさえ気圧され気味だったシューラはますます縮こまってしまふ。男性の言葉は間違っていない。彼の言うとおり、かなりのリスクを覚悟して二人きりで面会を所望したのだ。

もし自分の思い違いで、彼がただの人間だった場合。加えて、彼が『奴ら』と関係のある人物だった場合。シューラだけでなく、エルクやメフィにまで迷惑をかけることとなっていたかもしれない。

「あの……ご病気、なんですよね？」

自分が彼と会おうと思いついた理由を顧みる。

女性から彼の症状らしきものを聞いた時から、男性が人間でない可能性を疑い始めていた。そして、今の治療が彼に対して効果が無いことをシューラは知っていた。その症状は奇しくも『過去の知人』と同じものだったのだ。

彼を助きたい。その気持ちに他意はなかった。

「私、たぶん……その病気の治し方、知ってるんです」

顔をまともに合わせられないまま自信なさげにそう呟いた。

「それで、助けたらいい、思っただけです」

ほとんど説明にもなっていない稚拙なものだったが、男性はその言葉を正面から受け止めてくれたようだ。天井を見つめたまま再び沈黙して何かを考え始めた。

「あ、あの……？」

『質問はやめておくとしよう』

シューラの心情を察したのか、男性はまずそう前置きをした。その事情の裏に何があったのか詮索すべきでないと勘づいたのだろう。『君の言うとおり、私は病気だ。あの女性が考えているものとは別物のようなだが』

「……あの人は、何も知らないだけです」

『だろうな。だからといって信じたわけでもない』

突き放したような言葉に、シューラは男性へ顔を向ける。

「どうしてですか？ あの人はあなたを助けようとしてくれているのに」

女性もまた、彼を助けようと尽力していた。疲労を滲ませていた身嗜みが整っていないのも彼の身を憂慮しているからだと推測できる。

そんな彼女の努力を否定されたような気がして、シューラはどうしても今しがたの発言を看過することができなかった。

「あの人は優しい人です。私たちのこと知っても……受け入れてくれる気がするんです」

『君は人を恐れていないのか？』

全てを見透かそうとする男性の瞳がシューラを貫く。

彼は人間を信用していないようだ。シューラと同様過去に何かあったのだろうか、シューラもそこを詮索するつもりはない。もとより、訊かなくともおよその見当はついてしまう。

「全く、ではないです……でも、人間ってだけでみんな嫌いになるわけじゃないです」

『君も被害者のはず。それでもなお人間を信じるというのか』

男性がどれだけ人間を嫌悪しているかが垣間見える。その気持ち

もシューラは理解ができてしまい、やりきれなさに胸をおさえた。
「……人間にも、いい人はたくさんいます。私は……それを知ることができた」

エルクとメフィの顔が脳裏に浮かぶ。

シューラが植物族と知ってなお親しく接してくれている彼らの存在は、確実に彼女の人間観を大きく変えた。全ての人間を信頼することこそまだできないものの、人間というだけで完全に拒絶することとはもうないだろう。

それを男性に押し付けるつもりはない。あくまでシューラ一人の意見に過ぎず、正当性は全く証明されていないのだ。男性の立ち位置にも同時に立っているシューラとしては、彼の意見もまた否定することができない。

「人間を信じて、とは言わないです。ただ、あの人が本気であなたを助けようとしているのは分かってください」

必死に懇願したシューラに対し、男性はそれ以後何も話そうとしなかった。

「どのくらいこの街にいるの？」

「別にいつ出発してもいいんだけど。目的地がないし、どこに行くかの目安くらいは欲しいね」

メフィの問いかけに対し、エルクはお茶を飲みながら淡々と答えた。そこに『自分の意思』と呼べるものは含まれておらず、他者の決定に従うという気持ちだけが表れている。

「じゃあ、この依頼が終わってすぐ出発したりもできるのね」

「話聞いてた？　せめて目安が欲しいって言ったじゃないか」

「……………北で！」

「それを目安とは呼ばない」

荒唐無稽にもほどがある、とエルクは嘆息した。もっとも責める

つもりがあるわけではなく、心の奥ではそれでもいいかもしれないとさえ感じている。

「じゃあ何を目安にすればいいのよ？」

「それをメファイが訊くんだ……」

「何？」

「なんでもないよ」

もう一度深くため息をつくとき、エルクはのんびりとした様子のメファイをまじまじと見つめた。

彼女の目的は、リーダーコールを滅ぼしたテロ集団を追いかけること。その割には執着した様子が見られず、彼女もまた状況に流されて行動している節が強い。エルクが消極的な発言をすると怒り出すので仇討ちを意識はしているようだが。

ふと、エルクは疑問に思う。

彼女は本心からテロ集団を追いかけようとはしていないのではな
いかと。

「……ねえ、メファイ」

「ん？」

「リーダーコールを滅ぼしたのって、本当にあのテロ集団なのかな？」
ストレートに「テロ集団を追う気あるの？」などと訊けばドロツ
プキックをお見舞いされるので、少し間接的な質問をぶつけた。

「メファイも直接見たわけじゃないんだし、犯人が他にいる可能性も
あるんじゃないかな」

「……私の勘違いってこと？」

「分からない。本当にテロ集団の仕業かもしれないし……確信を持
つには早いっただけだよ」

エルクの指摘にメファイは難しそうな顔をして黙り込んだ。安直に
反抗するのではなく、冷静に自分の記憶を掘り起こしているようだ。
それでもすすきりしない表情なのは、事件の際の記憶がはっきりし
ていないからだろうか。

「……もし、エルクの言うとおりだったとしたら」

エルクから顔を逸らしながらメフィが言葉を紡ぐ。

「私はその真犯人を追いかけるよ。きっとその答えも、この旅の中で見つかると思うの」

「……そっか」

彼女の返答に、エルクは安堵を覚えた。

彼女は全てを諦めたわけでも、自暴自棄になったわけでもない。真面目に自分たちの今後を見据え、そして出した結論をその胸中に持っているのだ。それはちょっとした言葉で覆したりできない固い決心として、今の彼女を支えているのだろう。

「エルク、その時は一緒に来てよね？」

何かを期待するような微笑みがメフィの顔に浮かんでいる。

「うん、もちろん」

そう返すのに、躊躇いは微塵もなかった。

「お待たせしました」

幾分か軽い足取りでシューラが二人の元へと戻ってきた。知りたいたことが確認できたのか、表情も隣の部屋へ向かう前より明るくなっているようだ。

「シューラ、どうだった？」

「あ、はい。やっぱり——」

メフィに向けて何かを言いかけたシューラは、すぐ後ろにいる女性を気にして言葉を止めた。少しの間シューラの口元で言葉が右往左往し、ややあつてそれらしい嘘が紡がれる。

「……とても勉強になりました」

「それはよかったわ。彼も喜んでいてでしょうね」

女性が薄く微笑んで見せた。虚ろげに目を細めている姿は蠱惑的に映り、彼女の本心を覆い隠してしまっている。本当はシューラの嘘に気付いているのではないか、そんな懷疑を抱いてしまう。

「何か分かったことはあった？」

「あ、あの、そのことなんですけど」

特に期待した様子のなかった女性の問いに、シューラは慌てつつも懸命に答えた。

「私……あの病気に効く薬草、知ってるんです」
「えっ？」

瞬時に女性の態度が豹変する。余裕を感じさせた微笑は消え去り、珍しいものでも見つけたかのような顔色でシューラに視線を注ぎ始めた。

「……お医者さんでも分からなかったのに？」

「えっと、珍しい病気で……まだあまり知られていないのかもしれないです」

シューラの態度はお世辞にも信憑性のある姿とは言えなかったが、気の動転している女性は気にした様子がない。シューラの言葉をそのまま信じたようで、眉根を顰めて黙り込んでしまった。

病気の人物と会う前のシューラの態度を思い返す限り、これ以上は詮索されないほうがいいだろうと察しがつく。そう考えたエルクは、先手を打って口を開くことにした。

「僕もその病気については詳しくありませんが、どうしますか？」

「え？」

熟考していた女性は、エルクが何を言っているのかすぐに理解できないようだ。

「依頼である以上、僕たちはあなたに指示された通りに動きます。今のところ依頼書にあった品物を調達するつもりでいますが」

「あ、ああ、そうね……」

ようやくエルクの言わんとしていることを把握したらしい。

つまり、当初の予定に沿った品を頼むのか、シューラの助言にしたがって彼女の言う薬草に変更するのか、それを決めてほしいのだ。両方頼まれればエルクはどちらも持つてくるつもりでいるが、それを厚かましいお願いだと感じる人も多いだろう。どちらにしても、エルクの私情を挟む必要はない。

「じゃあ……その子の言う通りにしてくれる？」

「分かりました」

エルクの予想よりも素直に、女性はシューラの言葉を受け入れたようだ。

当初頼まれていた材料で作る薬では効果が無かったのかもしれない。リーダーコール崩壊後に会ったのならそれほど時間は経っていないが、献身的に介護を続けてきたのは彼女の姿を見るだけで分かる。「ごめんなさい、勝手に依頼内容を変えてしまって」

「とんでもないです。こちらが言い出したことですし」

頭を下げる女性に断りをいれながら立ち上がる。することが決まったのであれば、いつまでもここで微睡^{まどろ}んではいられない。

「よし、じゃあ早速出発しよう」

「んー、もう行くの？」

だがメフィだけはソファに座り、まだ名残惜しそうにお茶をすすっている。先刻の出立に対する気概はどこへ消えてしまったのだろうか。

「もう行くの。仕事なんだからきびきび行動しないと」

「しょーがないなあ。エルクってばせつかちなんだから」

「それは違うと思うなあ……？」

渋々立ち上がったメフィの文句に、エルクは苦笑をもって返した。

昼が近くなり、通りの人数も少しずつ目につくようになってきている。賑わっていると称するほどは多くないところが、史跡のような街の独特な雰囲気を実感させているのだろう。

今回はシューラを先頭にしてメフィ、エルクが続く形で歩いている。彼女の言う薬草がどんなものでどこで手に入るのかまだ聞いていない二人は、ひとまずシューラについて歩くことにしたのだ。

「シューラ、ひとつだけ確認させて」

「はい」

最後尾からエルクが声をかけた。呼ばれたシューラは足を止めないまま振り返る。

「その人……人間じゃなかったんでしょ？」

「……………」

シューラが突然、それも二人きりで誰かと面会しようとしたことを、エルクは疑問に思っていた。迫害の事実から考えて、彼女が誰かと積極的に会いたがる理由はかなり限られてくる。

それを踏まえると、エルクがこの結論に至るのにそう時間はかからなかった。

すぐには返事をせず、シューラは訪ねてきたエルクの顔をじっと見つめてきた。特に驚いた様子がないので、この質問をされることを予想できていたのかもしれない。

間を歩くメフィも口を挟まずにシューラの返答を待っている。シューラが席を外している間の会話で、メフィもエルクの予想を聞いているのだ。

「……はい、そうです」

彼女の返事は、開き直ったかのように淡白だった。

「確かに、あの人は人間じゃありませんでした」

「それを確かめたかったのね」

「あの女の人が最初に頼んでいたものだと、彼には効果がないんだと思います」

「なるほど……それが最初に疑いだした理由か」

種族が違えば効果のある薬も違ってくるのだろ。人間の医者に診せても分からないのは仕方がないと言える。

ただ、なぜシューラがその薬草のことを知っていたのかという疑問は残るが。

「女の人に教えたほうがよかったですか」

「え？」

「あの人が人間じゃないって……」

シューラが不安そうな様子で後ろを振り返ってきた。

同居している女性のこととも気がかりなのだろう。女性はその人物が人間であると思っていたはずであり、一緒に暮らしていけば何か

弊害が表れてもおかしくはない。病気の件についても、人間でないと知れば違う治療法を探し始めただろうと予想できる。

「いや、それは」

「それは違うと思う。植物族は迫害されてるって話だし、あの女の人の不安を増やしてもいいことないよ。植物族って存在自体信じるか分かんないし」

エルクに代わってメフィがその懸念を否定した。内容もエルクとほとんど同じ意見である。

「時機を見て自分から話す気なのよ。今はまだ早すぎるって判断したのかも」

「……そう、ですね」

「どのみち、僕らの介入できる問題じゃないと思うな。迫害については別にしても」

エルクが続いて進言すると、シューラもようやく安心できたようだ。二人に向けてニコリと微笑み、再び前を向いて歩き始めた。

「まずは依頼をこなさないかね。それが僕らにできる一番のことだよ」

「はいっ」

エルクの激励に、シューラは元気よく返事をして応えた。

「あの人は、植物族じゃないんですけど……ね？」

最後にシューラの呟いた一言はあまりに小さく、二人が聞き取ることはできなかった。

20話 歪み

片手でレースのカーテンを開くと、窓の向こうに広がる澄みきった群青色の空が映った。ちぎった綿のような雲がゆるやかに流れていき、安穩とした午後の時間を演出している。音も何も聞こえず、一秒が非常に長く感じられてしまう。

そのためか、男性は何の気なしに午前の訪問者について考えを巡らせていた。

自分が人間でないと云った植物族の少女。大人しい性格のように見えるが、危険を冒してまで見ず知らずの自分を助けようとする大胆な面も併せ持っているようだ。人間の迫害を受けた影響か、人間以外の種族に固執しているような印象だった。

ただ、そんなことはさして気にすることでもない。彼女の善意について他人が口出しするのも無粋というものだろう。

何より気になったのは、少女の持つ人間観だ。

これほど人里に近い場所にいるのだから、彼女も当然『奴ら』に捕まっていたのだろうと推測できる。ならば何もされなかったはずはなく、自分のように人間を警戒ないしは嫌悪するのが普通の反応だ。

彼女は人間のことも信用している様子だった。むしろ、人間を擁護しようとする姿勢もあつたように思える。

彼女の中で人間の評価を改めさせるほどの『誰か』と会ったのだろう。彼女の発言を踏まえると、今もその人物と行動を共にしていると見ていい。

そこまで考えた男性の心中に芽生えたのは、少女に対する疑念だった。

頭では理解できている。しかし、心がそれを受け入れない。かつて人間から受けた蛮行の記憶が人間の許容を拒絶するのだ。

それに従い、人間を庇いたてる少女のこともどうしても信用しきれない。信じてやりたいという気持ちと、実際に信じられるかは別問題なのである。

——私も汚れたな。以前ならばこれほど他人を疑うこともなかった。ましてや、娘と同年代の子供を信じられないとは……。

故郷で待つ我が子の顔を思い出し、男性は憂いと共に窓から視線を落とした。

レクタリアから郊外に向かうと、古い時代のものである低い石垣が散在する平原に出る。地質の影響なのか、長い年月を経ても背の高い植物はほとんど育たないようだ。石垣の隙間から意欲的に伸びる雑草も大きく成長する気配はない。

「こんなところに薬草があるの？」

草地に膝をつきながらエルクが疑問を口にする。地表を這うように視線を動かし、無数の植物を一つ一つ確認していく。

「人間とは違うんでしょ。文句言っでないでちゃんと探してよ」

素っ気なく答えたのはメフィだ。こちらは石垣に手をつき、やや高い視点から平野を眺め回している。

「す、すみません……お手数おかけします」

そんな二人からやや離れた位置で、しゃがみこんでいるシューラが申し訳なさそうにそう謝った。他の二人とは違い、彼女の手には既に数株の草が握られている。それらはどれも同じ種類らしく、三人がその草を探し回っているのは誰が見てもすぐに分かるだろう。

男性の病気に効く薬草が道端に生えているというシューラの話、エルクもメフィもすぐに信じる事ができなかった。

とはいえ、男性が人間でないことを知っている以上は否定するこ

ともできない。少なくとも彼女のほうが異種族について詳しいことを考えれば、疑うべきは自分たちの常識の方なのだ。

さすがにシューラのように効率よく探す事はできない。手探り状態であるエルクとメフィの収穫が彼女と比べて芳しくないのは目に見えて明らかだ。

「できるだけ、たくさん……すぐには治らないので、いっぱい必要になると思います」

シューラがそう言うほどのだから、彼女一人で十分な量を確保するのは難しいだろう。少しでも多く見つけなければ、という焦りがエルクの搜索の手を早める。

「あとどのくらい必要なの？」

なかなか成果を上げられない苛立ちを紛らわせるようにメフィが振り返った。

「そ、そうですね……このくらい、でしょうか？」

片手に薬草を持ったまま、シューラが両手でワイン瓶ほどの円筒を形作って見せた。いくらか首をかしげながらそのサイズを拡張させる。

「うわぁ全然分かんない」

「ふええ、すみません」

その大きさの瓶いっぱい、ということだろう。それにしても目安にならない説明である。液体でないものを容器いっぱいと言われても想像するのが難しい。

「終わりが見えないよー」

「まあ多くて困ることはないんだし、できる限りは探そう」

すっかり萎えてしまったらしいメフィを励ましながら、エルクは該当の草を見つけて手早く抜き取った。

「……僕は僕で気になってるんだけど」

抜き取った薬草を目の高さに上げ、その外観を改めて確認する。

どう見てもただの雑草——それが、件の薬草を前にしたエルクの印象だった。

シユーラを疑ってはいない。おそらく人間にとって役に立たないだけできちんと効果が表れるのだろう。

しかし、いくら異種族にとっての薬草であつたとしても人間には雑草に過ぎないのだ。看病をしていた女性が再び不安を感じるのは間違いないだろう。洗って泥こそ落としたものの、『その辺の適当な草を採ってきた』感が漂っていることは否めない。

「あの人、絶対に怪訝そうな顔するよ」

「そうですね……でも、これがよく効くんです。間違いありません」
「僕は疑ってないけどさ、あの人にも信じてくれるかはちよつと難しいかも」

口にするとなれば一層神経を尖らせるだろう。エルクも、前知識なしにこの草を飲めと言われれば間違いなく拒否する。

「見た目をなんとかすれば説得まではなんとかかな……」

「そう、ですね。すぐに塗れる状態にしておけば外觀は薬らしくなりますし」

「うん……ん？」

さりげないシユーラの一言がやたらと気にかかり、エルクは思わず彼女を二度見してしまった。

「今、塗るって言った？」

「え？ あ、はい。この草をきれいな水に溶かして、それを背中に塗るとよく効くんです」

「あ……そう、なんだ」

言われてみれば、シユーラは一度もこの薬草を飲み薬とは言っていない。女性の頼もうとしていた品が飲み薬の材料だったこともあり、エルクは早合点してしまっていたようだ。

抵抗が完全になくなったりはしないだろうが、飲み薬よりは了承を得られるような気がしてくる。こちらで加工して持っていけばなお良い。

「それなら……大丈夫そうかな。分かったよ、ありがとう」

気を引き締めなおしたエルクは、会話を中断して再び視線を草地

へと落とした。

少しずつ傾き始めた太陽が、広い大地を^{たお}嫺やかな茜色に染め上げていく。

「疲れた……」

ソファに乱暴に腰かけるなり、白髪の男性は短くそう言い放った。後ろに体重を預け、だらしなく両足を投げ出して自身の発言を体現している。

「相変わらずだねー、アンタは」

反対側の椅子に前後逆に座っている女性が呆れ顔で男に微笑みかけた。馬鹿にしている風というわけではなく、お互いに相手への遠慮や気配りが必要としないといった雰囲気だ。

「今日は取り巻きナシ？」

「今はプライベートだからな。大半の奴はレダーコールに置いてきたし」

「何の組織か知らないけど、ずいぶん偉くなつたみたいで」

女性が重心を前後に振るたびに椅子が軋んだ音を出す。リズムカールに繰り返されるそれは、ほぼ無音のこの室内でどこか不気味な空気を醸し出している。

「これからどうすんの？」

「明日の朝一で出発する。やることはまだたくさん残ってるしな」

「せっかちなだね……ま、そんな余裕もないってことなんだろうけど」

具体性のほとんどない会話だったが、二人の間ではしっかりと意思の疎通ができていようだ。必要以上に知り過ぎないようにして、決して相手の暗部に踏み込まないようにしている。

「お前こそ、ずいぶんレクタリアを出発するのが早かったみたいじゃないか。久しぶりだったんだろ？　もう少しゆっくりしたってバチは当たらなかっただろうさ」

ソファから体を起こし、男性が南の方角——レクタリアのあるであろう方向に視線を向けた。

そちらに部屋を仕切る壁はなく、彼らの歩いて来た街道が真っ直ぐ見えなくなっていく様子をはつきり捉えることができる。部屋が三階なので遠くまで見渡せるのだが、それでもレクタリアの街並みは遥か水平線の彼方のようだ。

「そりゃ、確かにもっといふつもりだったよ。ただ」

男性の言葉に対し、女性が初めて笑顔を曇らせた。

「……ちよつと変な感じがしてさ。背中あたりがムズムズするっていうか」

「変な感じ、ねえ。お前の勘はよく当たるけども」

「それで長居したなくなっちゃったんだよね。知り合いに挨拶はできたんだけど、それだけ」

女性も男性に合わせて名残惜しそうに南へ顔を向ける。郷愁の念を思わせる顔立ちだが、それでも顔に浮かべる微笑は崩さない。

「ま、いいんだけどね。面白い子たちにも会ったし、退屈はしなかったから」

「自由だなあ……組織がなければ俺も旅に出たいよ」

「私はいつでも待ってるよ。その時はパンをごちそうしてあげよーか」

「そりゃいいな」

堂々とサムズアップをする女性に、男性は彼女の拳動も含めて可笑しそうに苦笑をにじませた。

周囲は夕焼けですっかり紅に染まっており、太陽を見送った空はわずかに夜の闇色を含み始めている。

「これがその薬です」

女性と向かい合い、エルクは薄緑色の液体の入った瓶を机に置いた。その衝撃で水面がゆらぎ、まるで劇薬であるかのように演出されている。実際人間にとっては劇薬になり得る気がしてしまう。

「……これを、飲むの？」

「飲み薬じゃないらしいですよ。詳しい使い方はシューラが教えますので」

女性の誤解をすぐさま訂正し、エルクはシューラに詳細説明を促す。間違いを期待していたわけではないが、自分と同じ勘違いをした人の存在はエルクにささやかな安堵を覚えさせた。

「正直、ちよつと安心したわ。他人とはいえ、これを人に飲ませるのはちよつとね」

「同感です」

女性が差し出された瓶を持ち上げて軽くゆする。粘性は全くない液体のようで、それだけすればただの水と変わらない。そのため、色だけがその毒々しさを演出しているというのがよく分かる。

「えっと……もう、いいでしょうか」

シューラが待ちきれないといった様子で消極的にせかした。本物の医学生ではなくとも、一度面会した人物の容体は気になるのだから。

「そうね。すぐに準備するから一緒に行きましょう」

「あの……本当に、申し訳ないんですけど……」

「ん？」

「できれば、その……また、二人きりで……」

言葉とともにシューラ自身まで縮こまり、末尾は誰も聞き取るこゝとができなかった。それでも、彼女が何を望んでいるのかは少し聞き取っただけでよく分かる。

女性は呆れたような顔をして溜息をついたが、すぐにニツコリと笑って優しげにシユーラの力サを撫でた。

「実はね……あの男の人、あなたに診てもらった後から様子が変わったのよ。何か色々と考え事を始めたみたい。前はそんなこともなくてボーっとしてるだけだったのに、今はなんていうか……『生きてる』って感じがするの」

「そ、そう……なんですか？」

「あなたなら彼を助けられるんじゃないかって……私の勝手な想像だけだね」

シユーラを見つめる女性の瞳には、彼女に向けた期待の色が表れている。男性の変化がよほど嬉しかったのだろう。

「あなたを信じるわ。二人きりになりたいのね？」

「は、はいっ」

どうやら女性はシユーラの要望を了解してくれたようだ。それを理解したシユーラは表情を引き締めて頷く。

「ありがとうございます」

「いいのよ。私はこの二人とここで待つてるから」

どれほどシユーラのことを信頼したのだろう。これが彼女の懊惱おうのうの反動だとしたら、よほど看病に行き詰まっていたのだろうか。

「じゃ、あの、失礼します」

「彼のことよろしくね」

部屋を出ていくシユーラを、女性は印象的な笑顔で見送った。

「お姉さんの研究の話が聞きたいな」

女性が向かいに座ったのを認めると、間髪を入れずにメフィがそんなことを言い出した。その申し出が意外だったらしい女性が目を丸くしてメフィを見つめる。

「……急にどうしたの？」

「待つてる間ヒマでしょ？ せっかくだし、色々聞いてみようかな」

「って」

「私は構わないけど……あなた期待しているほど面白くはないと思うわよ？」

「うっん、興味があるから大丈夫。エルクもいいでしょ？」

「ん？ うん、僕はいいよ」

彼女のことなので、絶対に嫌とは言わせないだろう。条件反射で彼女の思考回路に則した行動がとれるのも防衛本能と呼ぶのだろうか、などとエルクは考えていた。

「それじゃ、彼女が戻ってくるまでの間だね。ちょっと待ってて自分の研究分野に興味を持ってもらったのが嬉しいのだろう、女性はいさよよな表情になって立ち上がった。

病気の人物の様子が変わったと言っていたが、彼女もたいぶ雰囲気が見えなくなったように思える。自分の行動が彼女たちの手助けになったと実感すると、エルクの胸中に温かいものが込み上げてきた。単なる達成感とも違う、自分が広がっていくような感覚。その正体こそ分らないものの、決して悪い気分ではない。

「おまちどうさま」

戻ってきて再び席に着いた女性は、ボロボロの冊子をテーブルに置いた。

ハードカバーのしつかりしたものではなく、サイズがバラバラの紙を集めて片側を紐でまとめただけの簡素なものだ。女性が自ら収集した資料を一つにまとめたのだろう。

さっそく目を輝かせるメフィの前で、女性が冊子のページをめくり始めた。そうやって大まかに内容を確かめているようだ。

「それはどういう資料なんですか？」

エルクも内容が気になって質問をする。遠目から見た限りでは短い文章が乱雑に書き記されており、正式な書類というわけではないらしい。見やすいように多少書き方を工夫しているものの、やはりメモ書きという印象が否めない。

その質問に反応して手の動きを止め、女性が顔を上げる。

「君たちは、かつて人間以外にも文明を持った種族がいたって言うたら信じる？」

不敵に笑うその姿は、彼女がこれまで見せたことがないほど生命力に満ち溢れていた。

「私はね、各地に散らばる民間伝承の中に登場する『異種族』の人々に興味があつて調べているの」

女性の言葉を受けながらエルクとメフィが顔を寄せ合つて本を眺める。じっくり読んでみると、さまざまな文献から異種族に関する記述を抜粋してまとめ上げていることが分かった。どれも彼女が自分で書き写したというのが型崩れした文字から窺える。

「異種族……ですか」

「そう。色々な記述を読んでいくと、確かにその異種族の人々は実在していたみたいなのよ」

ちよつとした好奇心で始めた話題だったが、エルクの考えていた以上に重要な情報を含んでいるようだ。

女性の言う『異種族』とはおそらく、シューラたち植物族のことを指しているのだろう。女性が植物族の伝承を調べているのである。彼女は知らず知らずのうちに異種族の存在を確認していることになる。

もちろん彼女の研究内容には、今のエルクたちにとって知っておくべき情報も多いはずだ。

「彼らがどんな生活をして、どんな文化を持っていたのか。それを世界各地の文献から探して明らかにするのが私の研究よ」

「それって、体に植物の生えた人たちのこと？」

「ちよつと!？」

メフィが驚いた勢いでほぼ核心をつく質問をぶつけた。エルクが慌ててメフィの口を塞ぐがもう遅い。

いきなりピンポイントな質問をされたので、女性も度肝を抜かれたようだ。まさかシューラがそうだとまでは思わないだろうが、さ

すがに不審に思ったかもしれない。

「……あなたたち、本当に不思議なことを言うのね……」

女性は目を白黒させながら二人をじっと見つめてきた。査定するかのような視線を受け、エルクの背中を冷たい汗が流れていく。メフィも口を滑べらせたと自覚したらしく、エルクが手を離しても口を堅く噤んで黙り込んだ。

迫害の存在を鑑みて、彼女に事実を伝えるのはかなりのリスクを背負うことになる。それはエルクたちというよりもむしろ、今後の女性の方が当てはまるだろう。

何にしても、ここで彼女に植物族のことを明かすのはまずい。

「……………そういう種族も確かにいたみたいね」

彼女の胸中でどんな結論を出したのか、女性は何事もなかったかのような口調で優しく質問に答えた。ひとまず追及されないとわかり、エルクもメフィもひとまず肩をなでおろす。

「でも、それだけじゃないわ。私の知っている限り、そういう種族は他にもたくさんあった」

「えっ……………」

淡々とした女性の言葉が二人の余裕を一瞬で打ち砕いた。

「私が確認できたのは、人間を除いて四つ」

「そ、そんなに？」

今度は二人の方が驚きを隠しきれずに声に出してしまった。

異種族という存在は一般に認知されておらず、一つ存在するだけでもかなり衝撃的であると言える。それが四つも存在するとなれば、聞いて驚かない者はいないだろう。

「四つ……………他には、どんな種族が？」

「その資料にまとめてあるから、そっちを読んだ方が分かりやすいと思うわ」

そう言っ女性性は、先刻持ち出した冊子を指差した。表紙などはなく、一枚目から異種族に関する文章が記録されている。

女性に促されるまま、二人は冊子を手にとってページをめくって

いく。そしてすぐに女性の説明となる記述のあるページを発見した。

『異種族の分類について』

人と異なる生態を持ち、なおかつ高度な文化を育んでいたとされる種族の記録は数多く存在している。だがその大半は自然現象などの原因として過去の人間が創作したものであり、実在した形跡はない。そのため、実在したと確認のとれた種族のみを研究対象とする。現在その存在を確認している種族をここに列挙する。確証を得られたものも随時追加していく。

- ・土の民
- ・糸の民
- ・色の民
- ・力の民

すでに記されている種族名の下には余白があり、追記できるようにしてある。

ページを一枚めくると、そこから数ページにまたがってそれぞれの種族の詳しい特徴や考察などがまとめられていた。かなり詳しく書かれているようで、時間が許すのであれば全てに目を通しておいでも損はないだろう。

「あなたたちが言ったのは、そこに書かれている『土の民』のことだと思うわ」

二人がひとしきり読み終えたのを見計らって女性が説明を再開した。それに反応し、冊子の中の『土の民』に関するページを開く。

『ある特定の生物的特徴を身体に有する。大半は陸地に自生する植物であるが、生活環境によっては海藻や菌類、無生物である岩石に酷似するという記述も存在。人間に次いで確認された文献が多く、生活圏が広大であったと推測される。大陸の西部に最大規模の都市

が存在した模様であるが、具体的な都市の情報は未確認であり、人間が想像で書き加えた可能性も――」

「……なるほど」

さらに読み進めたくなるところをなんとか堪えてページを閉じる。情報量の多さから見て、読みふけてしまうといつまでたっても話が進まなくなるのは間違いないだろう。

冒頭数行に限っても、書かれている内容はシューラのことを機械的に解釈したような説明である。エルクたちの知らない事柄も色々と載っているようだ。

「植物族以外にもこんなにいたんだ……」

感慨深そうにメフィが呟く。やはり彼女にとってもショッキングな事実だったのだろう。

「あなたたちは植物族って呼んでるの？」

「えっ……あ、はい」

「あなたたちはどこでその話を聞いたの？ 呼び方も初めて聞くものだし、色々と詳しく教えてもらえないかしら」

研究者魂に火がついてしまったのか、まるで別人のように積極的になった女性がメフィへと迫ってきた。呼び方のちよつとした差も彼女にとっては重要な手がかりになり得るのだろう。

だが、その探究心が今のメフィにとっては厄介なことこの上ない。「え、いやその……えーと」

事実をそのまま話してしまうとリオナやニールに迷惑をかける可能性もある。

メフィもそれは分かっているようで、代わりとなる嘘を懸命に捻り出そうとしているようだ。だが目を逸らすばかりで言葉が出てこない。普段は自分に正直に生きているので嘘は苦手なのだろう。

「あの――」

「あのっ」

また助け船を出す必要があると判断したエルクが割り込もうとし

たところ、第三者によつてさらに割り込まれてしまった。誰にとつても予想外であり、三人そろつて声のした方へ視線を向ける。

「あ……お取込み中すみません」

シューラが申し訳なさそうに扉から顔をのぞかせていた。こちら側で騒がしく会話をしていたので、エルクたちの邪魔をしてしまったと思つたようだ。

「シューラ、そっちはもう終わったの？」

「い、いえ、そのことなんですけど」

慌てた様子で否定するシューラ。逼迫ひつぱくした状態というわけでもなさそうだが、エルクたちの手を借りたがつているのも間違いない。

「エルクさん、メフィさんも……ちょっと、来てもらつていいですか？」

「え？」

突然指名されて首をかしげるエルク。人間が会つと相手を不安がらせる可能性もあるのだが、それを踏まえたうえでシューラは二人を呼んでいるのかもしれない。

「急にどうしたの？」

「あの、ですね……私もよく分らないんですけど」

エルクの問いかけを受け、シューラはオロオロしながら後ろを何度も見返す。隣の部屋の男性が気になっているようだ。

「あの人が、会いたがつてるんです」

「会いたがつてる……私たちと？」

不思議そうに聞き返すメフィ。シューラはコクコクと頷きながら、彼女が聞いてきたままの言葉を二人に伝えた。

「エルクさんたちを見定めるつて、言つてました」

21話 軋み

『君は一人でここへ来たのではないはずだ』

挨拶をする間も無く、横になったままの男性から冷やかな言葉が浴びせられた。薬草を取りに出かける前と比べてシューラに懷疑を抱いているように見受けられる。

「あ……あの、急にどうしたんですか？」

『君は今、人間と行動を共にしている。違うか？』

シューラの言葉にはほとんど耳を傾けようとしない。初対面の時に見せていた拒絶と似たものがある。だがシューラのことを遠ざけようとしている訳でもなく、彼の中でどのような変化があったのか推し量ることができない。

シューラにはどうすることもできず、それ以上を言葉にはせず黙って頷いた。

彼がどう感じているかは別にして、エルクたちのことを指して問にかけているのは間違いないだろう。これまでそれを負い目に感じたことはないが、彼にとってはシューラを見極める重要な判断材料になるのかもしれない。

彼との会話を考えると、それが印象にプラスに働く可能性は低いと思われる。

『君はその人間を信用しているのか？』

畳み掛けるような質問に、シューラは唇を噛んだ。

この質問にどう答えたところで、一度抱かれてしまった疑念を取り払うことは難しいだろう。彼の中で、シューラの言葉はすでに『疑わしいもの』として扱われているのだ。

「どうしてですか？」

『どうして？』

「私も知ってます。私たちに酷いことをする人間がいることを知ってます」

それでもシユーラは、エルクたちのことを信じようと考えていた。彼女の中で、彼らは既に『仲間』として受け入れているのだ。誰に何を言われようと、シユーラに彼らを疑うつもりなど全くない。エルクたちはシユーラのことを代償なしに信じてくれている。シユーラが彼らを信じる理由は、ただそれだけで十分だった。

「でも、だからと言って人間すべてを拒絶してしまつてはダメなんです。怖いかもしれませんが……私たちからも一歩、踏み出さないといけないんだと、私は思います」

エルクもメフィも、何の気兼ねもなくシユーラと接してくれた。植物族だと知られてしまった後もその態度に変化はなかった。

だからこそ、シユーラの中にこれほど大きな変化が表れたのだらう。

彼にもエルクやメフィのような人間の存在を受け入れてほしい。シユーラが望むのは、ただそれだけだった。

男性は再び沈黙した。彼の中でシユーラの言葉はどのように受け止められたのかシユーラに知る術はない。ただ、こうして熟考を要するだけの影響はあったのだと確信を持つことができる。

『人間を——』

「え？」

『君が行動を共にしている人間を、ここに連れてきてほしい。隣の部屋で待っているんだらう？』

男性がシユーラの瞳を見据えている。先刻の目とはまた違い、どういった感情を伴っているのか読み取ることができない。

『なに、君の信じる人間を見定めようと思ったまでだ』

「えっ、えっと……」

『もちろん嫌なら強要はしない。君の連れの人間をそのように判断するだけだ』

決して強い語調ではない。それにもかかわらず、男性の言葉にはシユーラに反論を許さないだけの力が込められていた。

エルクたちが男性に嫌悪を示すことはないだろう。しかし、男性がエルクたちを許容する保証はどこにもない。エルクたちに危害が及ぶような事態は何としても避けておきたいところである。

男性と同じ異種族として。そして、エルクたちの仲間として。

「……………分かりました」

シューラが悩んだのは、ごく短い時間だった。

エルクとメフィなら——そんな期待とともに、シューラは男性の要求を呑むことにした。

「……薬のことはどうなったの？」

扉を前にして、エルクは声をひそめてシューラに問いかける。シューラは元々薬を渡すために男性と会っていたはずだ。それがどうして、エルクが男性と会って話をするという展開になっているのだろうか。

「ご、ごめんなさい。その、薬のことを言い出しにくい空気になってしまつて……」

「あー、わかるわかる」

メフィの同意が後ろから耳に入る。周囲の空気を気にしたことがあったのか、という感嘆は胸の内にしまっておくことにした。

「じゃあ、話がひと段落したら僕から……いや、シューラから切り出したほうがいいのかな」

「それは……ちょっと、自信がないです」

男性に疑われたことを気にしているのか、シューラが悲しそうに目を伏せる。エルクが解決できる問題ではないので今は何もしてあげられない。

「まあ、まずは実際に会ってから考えようよ。ここで悩んでも仕方ないでしょ？」

メフィの意見に反論の余地はなく、エルクは改めて男性のいる部

屋へと向き直った。

「失礼します」

エルクが恐る恐る扉を開くと、真っ先にベッドに横になる男性の姿が目映った。決して広いとは言えない部屋で、無骨なレイアウトがどうしても気になってしまう。病人のいる部屋であると思い出してすぐにその考えを打ち消したが、自分が同じ立場に置かれた時のことを想像したエルクは気が滅入りそうになる。

「ちよつと、早く入つてよ」

「あ、ごめん」

後ろからメフィに背中を押された。入り口で放心しては邪魔なだけだと気付き、エルクはすぐにベッドの脇まで歩み寄る。すぐにメフィ、そしてシューラと女性もそれに続く。

男性は、すぐそばまでやってきたエルクとメフィを冷え切った瞳で睨みつけてきた。病気で衰弱しているのは目に見えて明らかだが、気力の面に限れば健康体のエルクにも負けていない力強さがある。

「……初めまして」

「……………」

挨拶を口にしても向けられた殺気に変化はない。ただ、それは単純な敵意や警戒心とは趣が異なっているように感じられる。エルク、そして後ろに立つメフィのことを吟味しているかのような。

シューラの言葉を反芻し、エルクは彼がどういふつもりなのか少しづつ理解し始めていた。

「僕たちのことは……シューラから聞いていると思います。僕がエルク、彼女がメフィです」

「は、初めまして」

男性に気圧されたのか、メフィは普段の活発な様子からは想像できないほどしおらしくなっている。あまり彼女を男性の前に押し出さないようにして、エルクは自分一人で男性と対峙することを決めた。

「……僕らはあなたたちを差別したりはしません」

あえて飾らず、エルクはストレートに断言する。

「あなたやシューラがどんな仕打ちを受け、どんな気持ちで今ここにいるのかはわかりません。ただ……その仕打ちが間違っているというのは、僕たちにも断言できる」

下手に回りくどい言い回しをしても男性の信頼を得るには足りない。取り繕ったような言葉では彼の心を開くことなどできないだろう。そう確信したエルクは、ただ自分の心の内だけをつらつらと語り続ける。

「僕たちを信じて、とは言いません。ただ、シューラがあなたを本気で助けようとしているのは紛れもない真実です。どうかそれだけは分かってあげてください」

「……！」

特に何かを意識したわけではなかった。

だが『その一言』で、男性はあからさまに動揺していた。

「？」

「……、……」

何をしようとしたのか、男性は横になったまま体を不自然に動かし——すぐにそれをやめ、枕元からノートとペンを取り出した。乱暴な手つきでページをめくり、中ほどのページでペンを滑らせ始める。

そしてそれを書き終えたかと思うと、書き込んだページをエルクに突き付けて見せた。

『君はなぜ、シューラと共に行動している？』

筆談で意思の疎通を図るつもりのようなのだ。女性やシューラとの会話でもこの手法を用いたのだろうとエルクは推測する。

「なぜって……彼女は仲間ですから、当たり前のことじゃないでしょうか」

シューラは『故郷に帰りたい』と言った。そしてその後『一人では心細いから』という理由でエルクたちに同行するようになった。

振り返ってみても、何か特別にシューラと親密になるような事件があつたわけではない。男性が不思議に思うのも無理はないだろう。それでも、彼女がいることにエルクが疑問を覚えたことはない。リオナたちとの一件や、今回の依頼に関してもシューラの存在は不可欠だつた。なるべくしてなつたとも考えられるが、既にエルクとメフィにとつて彼女は『行きずり』で済ませられるような間柄ではないのだ。

「まあ彼女の故郷に着くまでの間だけですけどね。大切なのは一緒にいる時間や出会つたきっかけではないと、僕は思っていますよ」
「……」

断言したエルクに男性は何を感じ取つたのか、ペンを握つたまましばらく硬直してしまつた。そして難しい顔をしたまま、ゆっくりと筆が動き始める。

『異種族である彼女を仲間として受け入れることに抵抗はなかったのか？』

「え？」

ある意味予想できた質問に、エルクは疑問の声をあげた。

男性はこの質問をしようか迷つたようだ。エルクと目を合わせようとせず、しきりに背後のシューラへと意識を傾けている。エルクの真意というより、彼女の本心を気にしているのだろうか。

それがエルクには不思議だつた。

「そんなの、あるわけないじゃないですか」

「……！？」

あつけらかんと言つてのけるエルクに、男性はノートを取り落としそうになるほどの衝撃に襲われたようだ。

エルクも男性の反応には気付いたが、気にすることなく言葉を連ねていく。

「だって当たり前でしょう？ 人間かどうか仲間になる障害にはなりませんし。それに彼女は人間でも珍しいくらい優しいですし、拒絶する理由なんてありませんよ」

「え、エルクさん……」

話を聞いていたシューラが頬を桜色に染めて俯く。恥ずかしそうにしているものの、褒められるのはまんざらでもないようだ。エルクも言い終えてから大胆なことを口走ったと自覚して顔が赤くなる。一方の男性は、ペンを握ったまま完全に静止してしまっていた。当初の疑惑の意志はどこへやら、ただ信じられないといった表情でエルクのことを見据えている。

「と、とにかく……きっかけはどうあれ、シューラは大事な仲間であり、友達なんです。いまさら種族がどうか、気にしたりしませんから」

咳払いをし、男性への返答をまとめる。

言いたいことは言った。あとは男性がエルクの考えにどこまで理解を示してくれるかだ。結局のところは彼自身から歩み寄ってもらわなければ何も進展し得ない。これ以上言葉を連ねても意味はなさないだろう。

しばらく続く沈黙は彼が決意を固めるまでの時間と考え、エルクは口を開かずに待った。

『ああ……道化は私の方だったようだ』

沈黙を先に破ったのは男性の方だ。

『なるほど。シューラ、君が信じた人間がどういう者なのか、私にもようやく理解できたよ』

「あ、ありがとうございます！」

「え？ あ、あれ？」

言葉を交わす男性とシューラを交互に見合わせ、エルクは現状が理解できずに目を白黒させる。

『私も君を信じることにしたよ。そう慌てないで、冷静に話をしようじゃないか』

「そう、ですけど……え？ これってどういう……？」

リアルタイムで進行する『違和感』が、エルクの余裕を一瞬で奪

い去った。

今、確かにこの場の誰とも異なる声が聞こえた。明らかに男の声色だったが、この場に彼とエルク以外の男はいない。となれば、必然的に彼の発したものだと思われ、絞らねることが出来る。

しかし、男性は口を全く開いていない。

ノートを紹介した筆談での意志表現でもなく、まるでエルクの脳に直接言葉を送り込まれているような感覚で男性の『声』が聞こえてくるのだ。

「エルクさん、落ち着いてください」

「あ、うん……ごめん」

「エルクったら慌てすぎ。私たちの常識が通用しないことくらい、シユーラで十分予測できたでしょ？」

同様の状態のはずのメフィはエルクよりもはるかに落ち着いており、余裕のある表情で混乱するエルクを諭してきた。それでも男性のことは怖いらしく、エルクよりも前に出ようとはしないが。

「えっと……僕たちと会いたいつて言ったのは、こういう理由だったんですね。もういいんですか？」

『自覚していないだろうが、十分すぎるほど君たちのことはよく分かった。どうやら君たちは、愚直なまでにお人好しな子供ばかりのようだな』

「……なんか引つかかる言い方ね」

『それでも褒めているつもりだ。おかげで私も、人間という存在を少し見直すことができた』

「そうですか……よかった……」

男性にわずかでも影響を与えられたと分かり、エルクは胸をなでおろす。

あのまま拒否されたままであれば、わざわざ彼の治療を申し出たシユーラが不憫な思いをする結果となっていただろう。彼女の胸中を鑑みれば、より良い方向に話が進んでいるようだ。

「ねえ、ちょっと待って。全然話についていけないわ」

するとそこで、最後方で黙っていた女性が抗議の声を上げた。

「あなたたちは何の話をしているの？ 人間じゃないとか、異種族がどうとか、さっき見せたメモとは少し違うみたいだけど……それに」

洪水のように情報が押し寄せ、女性は話の整理をつけられていないようだ。そしてその混乱が頂点に達したとき、女性の視線は男性へと向けられていた。

「どうして彼は、口を動かさずに喋っているの？」

『そうだな。これまで世話になったのだし、あなたにも知る権利はあるだろう』

疑問に答えたのは当人である男性だ。自身が人間でないことを隠すつもりはないらしい。

まだ病が治ったわけではなく、時折男性の顔が疲労と苦痛に歪む。しかしそれを常時あらわにすることはなく、男性はあくまで淡々とエルクたちと相対していた。

『君たちも聞いておきたいんじゃないか？ 君……エルク君の様子から見るに、異種族についてはその存在を知っている程度しか知らないんだろっ』

「……ええ、そうですね。是非お聞かせください」

男性の言つとおり、エルクたちが知っているのは彼が人間でないというところまでだ。先刻までは彼も植物族と信じて疑わなかったが、女性の話からはシューラとも違う別の異種族である可能性も十分考えられる。

全員が自身の言葉に意識を傾けていることを確認すると、男性は少し間を置いてから『話し』始めた。

『結論から言つと、私は人間ではない。人間からは蜘蛛族と呼ばれている異種族だ』

「人間じゃ、ない……！？」

女性が目を丸くして男性の言葉を復唱した。その反応はシューラ

の時のエルクたちとよく似ている。

エルクたちにとつても、『蜘蛛族』という新たな異種族の名前はショッキングな存在だった。覚悟こそしていたものの、未知の存在を容易に受け入れられる程エルクも達観していない。

『私たちは発声器官を持たない種族だ。なので、口を使って言葉を発することはできない』

「……病気は関係なかったのね」

今も男性は口を動かしていない。音声はすべて、聞いている四人の頭に刻み込まれるかのように流れ込んできている。

「じゃあ、この会話はどうやって行っているんですか？」

『これは種族名の由来にもなった点だが……我々は、蜘蛛のように体から糸を放出することができる。頑丈な糸で、移動から輸送まで大概のことはこなせる。いや、糸で大概のことをこなせるように進化した種族と言うべきか』

そう言つて男性はおもむろに右手を挙げ、人差し指から糸を射出させてノートを拾い上げて見せた。蜘蛛とは違って様々な箇所から糸を出せるらしく、伸縮や細さなども調整が効くようだ。

『そして、我々はこの糸をコミュニケーションの手段としても用いている。具体的に言つと——相手に糸を繋ぎ、それを介した振動によつて擬似的に相手に伝えている。耳で聞き取る音の振動が元になつているから、君たちにも言葉として伝わっているはずだが』

「はい……確かに」

男性の言つような糸が体についているようには見えない。肉眼では見えないほど細いのだとすれば、本物の蜘蛛にも引けを取らない能力であると言える。

どれほど高度な技なのだろうと感心しかけたエルクだったが、彼らにとつては自分達の発声と同じ感覚なのかもしれないと考えることにした。

「しかし……僕たちはともかく、あの人に教えてしまつて良かったんですか？ あなたにとつても、彼女にとつても弊害がありそうで

すけど」

『私は当分ここから動けない。しばらく世話になる人にいつまでも隠し事を続けられる程、面の皮は厚くないのでね』

「薬を使ってもダメですか」

エルクの言葉にシューラがはつとして、男性のために作った塗布剤を取り出した。相変わらずの毒々しい外見に思わず眉をひそめそうになる。

『薬というのはそうすぐに効きはしないさ。それが無ければ病状はより深刻になっていくだろうが』

「じゃ、じゃあすぐに塗らないと！ 失礼しますっ」

「シューラ、待って！　そこまで急を要する訳じゃないから！」

『さすがにこの人数の前では……』

今にも男性の上着を脱がし始めそうなシューラを諫め、エルクと男性は大きく息をついた。必死になった彼女は周囲の様子が目に入らなくなってしまうようだ。

「薬は話が終わってからにしてもらえるかしら。一区切りつけてからの方が落ち着いて作業できるでしょう？」

「あ。そ、そうですね……すみません、取り乱してしまって」

女性に言い聞かされ、シューラもようやく納得したようだ。どうやら女性も少しずつ今の状況を理解してきたらしく、真剣な面持ちで男性の言葉へ注意を払っている。

シューラが冷静さを取り戻したのを見計らい、エルクは再び口を開いた。

「念のため確認しておきたいんですけど……蜘蛛族も、植物族と同じように人間に迫害されているんですよね？」

『ああ。私たちやシューラの種族に限らず、異種族全体を弾圧する動きが人間の間に存在しているのは確かだ』

「それは有名な話なんですか？　すみませんが、人間である僕たちはそんな話をほとんど聞いたことがないんです」

『直接確かめたわけではないが、異種族であれば例外なく知ってい

るだろうな。既に多くの被害者を生み出していて、少なくとも私の里ではかなり深刻な問題になっていた』

「……そうですか」

つまり、まだエルクたちの知らない未知の異種族も同様の憂き目に遭っているということだ。他にどれだけ異種族が存在するにしても、人間のせいで大手を振って街中を歩くこともできないのだろう。理不尽な現実には歯がゆさを感じながら、エルクはさらに質問を続けた。

「では、それを把握した上であなたがこの街にやってきた理由はなんですか？ 差別されている人にとってこの街は危険な場所じゃないでしょうか」

『君たちにも同じことを言ってやりたいが……まあいい』

シューラを連れていることを指して言っているのだろう。確かに、可能であればシューラがこの街に長くどどまるべきではない。どこが安全か不明瞭なまま行動するのが危険であるために現状で落ち着いているだけなのだ。

『来たくて来たわけではない、というのが正直なところか』

「それって……」

「つまり、誰かに無理やり連れて来られたってこと？」

メフィの予想に、男性は幾分か表情を暗くして頷いた。

「あなたの身に……何があったの？ 私と出会う前、あなたはどんな目に……」

いい予感をさせない男性の態度に、これまで冷静を装ってきた女性も我慢しきれなくなったようだ。震える唇から彼女の不安が零れ出していく。

そんな彼女を突き放すでもなく、男性は優しい口調で回答を拒否した。

『あまり詳しくは訊かないでくれ。あの時のことを思い出すだけで……今でも吐き気が治まらなくなる』

「……そう。ごめんなさい」

何かを感じ取ったのか、女性はしつこく言及するようなことはしなかった。

「……訊かないでくれ、か」

男性の放ったフレーズがエルクの耳に残響し、かつてのシューラの言葉と重なる。

おそらく、彼らは同じような理由で望まずして人間の領域へと放り込まれてしまったのだらう。今はエルクたちとわだかまりなく過ごしているシューラだが、彼女もまたかつては男性と同じ絶望の中にいたのだ。

エルクたちはまだ、彼女の心の闇を知らない。

『私の人間不信もそこから始まった。以前から話に聞いていたのでもともと良い印象は持っていなかったが』

眉をひそめながら男性が吐き捨てた。聞けば聞くほど、彼の信用を得られたのが奇跡のように感じられてくる。その言葉の通り、現在でも彼は人間に対して激しい憎悪を抱いているだらう。

あまり触れる話題ではない。そう感じ取ったエルクは、早々に会話を切り上げることにした。

「ありがとうございます。貴重なお話が聞けてとてもためになりました」

『気を遣わせてしまったかな』

「とんでもないです」

男性もエルクの判断を分かっているようだ。それでも言葉数が少なくなっているのは、それほどまで当時の記憶が残酷なものだからなのだろうか。いずれにしても深入りすべきではないだらう。

「それじゃあ、薬を塗ってしましましょうか。席を外しましょうか？ それとも、僕たちも手伝った方が——」

『ああ、その前に少しいいかな』

次の行動を計画し始めたエルクを男性が引き留めた。

「何でしょう」

『私からも一つだけ——君たちに聞いて欲しいことがあるんだ』

男性の瞳がエルクたち三人を見つめる。
その瞳には、それまで覆い隠されて見えなかった慈愛の光が煌々と輝いていた。

22話 疼き

『迷惑を重ねるようでなんだが……頼みがある』

「え？ それは……依頼ですか？」

男性からの突然の申し出にエルクが訊き返す。先刻まで会話すら拒絶されていたことも手伝い、意外な話の運びに驚いてしまったのだ。

そうした反応をあえて無視し、男性は口を開く代わりに糸を引っ張るような動作をして見せた。

『私には娘が一人いてね。ちょうど君たちと同じくらいの年頃なのだが、故郷の里に彼女だけを残してきてしまった』

「……奥さんは」

『十年前に死んだ。他に親族もないから、今も彼女だけで暮らしているはずだ』

男性の目が遠くを見つめる。たった一人の我が子を慈しむ思いが、その一瞬の表情に色濃く表れていた。

『こちらに来てからもう五年になる。独りぼっちで、寂しい思いをさせてしまっているかもしれない。すぐにでも帰ってやりたいが、体調がそれを許してはくれなくてね』

寝たきりになるほどの重症である彼が遠方までの旅路を耐えられるとは考えにくい。それどころか、満足にこの家を出ることすら叶わないだろう。

「それで、頼みというのは」

『これを私の娘に届けてほしい』

男性が取り出したのは一通の封筒と、小さなペンダントだった。

「これは……」

『娘に宛てた手紙と、彼女の十五歳の誕生日プレゼントだ。まあ、とうに十五歳を迎えてしまっているだろうが』

よく見ると、ペンダントは見慣れない繊維で丁寧に装飾を施され

ている。おそらく、自らの糸も利用して全て手作りで完成させたのだろう。

『これを娘に渡してほしい。そして、私は無事だと伝えてもらいたい』

「……話から察するに、娘さんは蜘蛛族の里にいますよね？」

僕たちに見つけられるか分かりませんし、あなたの話も信用されるかどうか」

『ああ、不躰な願いだとは理解している。人間にとって簡単でないことも分かっている。だがしかし……私には、君たちしか頼める人がいないんだ』

これまで他者との交流を絶っていた彼にとって、こんなことを頼めるほどの仲の人物は近くに存在しない。世話をしてくれている女性性は、自身の看病もあってここを離れるわけにはいかないのだ。

エルクたちにとっても決して得のある話ではない。シユーラも連れている分危険が付き纏う。その上さらに危険を増やすような行為を下手にとるべきでないのは理解している。

だがそれでも、エルクは彼の懇願を一蹴する気分になれなかった。

「お受けしたいのは山々ですけど……」

気まずさからエルクの視線が男性から逸れる。

「あなたにとって僕らは信用のおける存在ではないでしょう。それに、僕らが届けても娘さんの方がどこまで受け入れてくれるかも分かりませんし」

『君たちなら大丈夫だ、と私自身で判断した。君たちは私の見てきた人間たちとは違う……そう信じただけだと言われても否定はできないが』

「……」

『自分でできるのならばそうしたかった。ここまで体が衰弱していなければ……いや、本当ならば無理を押してでも自分の手すべき義務なのだろう。そういう意味では父親失格なのかもしれないな、私は』

物憂げな表情で男性がペンダントの蓋を開く。

そこには、小さな女の子を抱えて満面の笑みを浮かべる男性の写真が収まっていた。その子供はまだ幼く、当時のことを本人が覚えているかは際どいところだろう。

「ズルいですね……そんな風に言われたら断れないって分かって話してるでしょう」

『打算が無かったと言えば嘘になる』

「意地が悪いですね、はあ……。……分かりました。責任をもって届けます」

いかにも渋々といった口調のエルクだったが、内心ではそれほど落胆していなかった。

男性の身の上はこれまでの会話で詳しく知っている。無視を決め込むには彼の事情を深く知りすぎてしまっているのだ。異種族の存在を受け入れているという点からも、エルクたちが適任であるという判断はあながち外れていない。

なんにせよ、エルクがお人好しであるという一点に全て収束されるのだが。

「エルクさん、大丈夫ですか？」

「まあ、なんとかなるでしょ」

「いいの？ 安請け合い……。じゃないのは分かるけど」

「いつまでもこの街に留まるわけにはいかないからね。あのテロ集団も追いかけなきゃいけないでしょ？ ちょうど目安が欲しいって言ったばかりだし」

「目的が逸れてる気がするよー」

「メフィの『北で！』よりはマシだと思う」

二人での会話を茶化すと、メフィの目がわずかに吊り上った。そういう場ではないと感じて自重してくれたようだが、普段ならば鳩尾に一発入れられているところだ。

『本来は掟により里の場所は口外してはいけないんだが……。無理を聞いてもらっているのだし、教えておくべきだろう』

「掟かあ。シューラも同じ理由で教えられないんだよね」

「あ、はい……ごめんなさい」

こういった点からも、彼らが実際に迫害を受けているのだと感じることができる。自分たちの居場所をひた隠しにして身の安全を保っているのだろう。

それはつまり、エルクたちが里に立ち入ることを許されない可能性もあるということでもある。

『私たちの里はここより北部、ヒューク山の中腹に存在している。人の足ではなかなか踏み込めない場所だから、探し出すのは難しいかもしれない』

「なんだ、結局北に行くんじゃない」

「はいはい、結果論だから」

不服そうなメフィを軽く受け流し、エルクの思案は男性の言った『ヒューク山』へと移行する。

大陸中部に存在し、古くは御神体として信仰の対象ともなっていたという霊峰。それほど標高が高くないにもかかわらず、崖と見まごうほどの傾斜の斜面の影響もあって実際以上の迫力と威圧感を醸し出している。さらに山麓は鬱蒼とした森に囲まれており、未だ人の手がほとんど入っていない未開の地として有名な場所だ。

「確かに、人目を避けるには絶好の場所ですね。辿り着くまで苦労しそうですが」

「エルクが弱気になるなんて珍しいね。もっと元気出してこうよ、ね？」

「メフィのそういうポジティブなところが羨ましいよ……」

彼女としては激励しているつもりなのだろう。皮肉なことに、それを見ているとエルクの気力はどんどん低下していく。

『娘はシオリという名前だ。私と同じブロンドの髪である以外に目立った特徴を思いつかないが……』

「人を探すには心もとない情報量ね」

『蜘蛛族でブロンドの者はそう多くない。その点では人間ほど苦勞

はしない……と、思う』

五年も経てば外見が大きく変わっている可能性もある。親とはいえ、男性も現在の娘がどんな姿なのか分からないだろう。むしろ彼の方がそれを知りたがっているのは間違いない。

「受けた以上は全力を尽くしましょう。結果を伝えられるのがいつになるかは分かりませんが……」

『ありがとう。どうか、娘を頼む』

「……はい。それでは、そろそろ薬を塗らせていただいていいですか」

横になったまま深々と頭を下げる男性に対し、エルクはそれ以外に返す言葉を思いつかなかった。

「エルク、ずいぶんあの人のこと気にかけてるね」

シユーラと女性が男性に薬を投与している間、メフィがふてくされたようにそんなことを訊ねてきた。

作業の邪魔にならないように退室したので、今は二人きりという状況だ。つまるところ、エルクに逃げ場はない。

「あそこまで聞いておいて無視できないでしょ？」

「それはそうだけど、そうじゃなくて……なんていうか」

不満げになっている理由は分からないが、彼女の疑問は当然とも言える。常識で考えれば、単なる『人助け』で済ませるにはあまりに無謀な要件であることは違いない。加えて、エルクたちにも一応の目的というものがあるのだ。

「私たちがってテロリストを追いかけなきゃいけないのに」

「情報収集の段階で行き詰ってたじゃないか。この街じゃそろそろ限界だろうし、新しい場所に向かうのは悪い判断じゃないと思うよ」

「……諦めたわけじゃないのね？」

「もちろん」

念を押すようなメフィに頷いて返事をする、彼女もようやく納得してくれたようだ。いくらか不機嫌な様子は残しているものの、エルクに食いついてはこなくなった。

「そっか、よかった。もしエルクに嫌がられたらどうしようかと思っただ」

「嫌になる要素はいくらでもあると思うけど。まあ、どのみちここまで来て途中で降りることはないから安心して」

途方もない旅にここまで付き合おうとするのは、相当な物好きでなければまず不可能だろう。もっとも、どんな状況であってもエルクはメフィを一人きりにする気などないのだが。

「ねえ、エルク。なんでそんなに異種族の人たちにこだわるの？」

会話が途切れるのを恐れているのか、間髪をいれずに次なる質問を口にするメフィ。黙ったままというのが耐えられないのだろう。

「ついこの間知ったばかりなのにずいぶん固執しているというか……」

「そりゃあ、シューラの故郷の手がかりが欲しいのはわかるけど」「僕も上手く説明はできないんだけどね。ただ、シューラやあの人みたいな『異種族』って存在がすごく大切な気がするんだ。シューラやあの男の人だけじゃない、僕ら自身のためにもなるかもしれない……って、そんな気がしたただけなんだけど」

「？」

要領を得ないエルクの回答にメフィは不思議そうに首をかしげる。真意が伝わっていないと知りつつもエルクはそれ以上の説明をせず、彼女から目を背けて更なる問答を拒絶した。

「蜘蛛族……女の人の研究でいうと『糸の民』にあたるんだろうね。僕たちの知らない何を知っているのか……会ってみれば何か分かるのかな」

その言葉が誰に向けられたものでもない独り言であると気付くと、メフィは今度こそ会話を続けられずに黙り込んでしまった。

ガルドが最後に訪れた時の様子と比べても、その屋敷の様相はほとんど変わっていないかった。

嫌味なほど壮大ではなく、広い庭を埋め尽くすほどの園芸植物が建物の長い歴史に彩りを添えている。辺りにはハーブや果実の芳醇な香りが立ち込めており、感動とともに穏やかな安らぎがガルドの胸元に広がっていく。

「あ、ああ……ふああ……」

「……予想通りすぎる反応でちょっと驚いてるぞ」

「……すみません。でも、これほどの香りだと……ふあ」

ガルドの隣で、リダが目を半開きにさせて遠い世界に陶醉している。ハーブなどは必ずしも食用となるわけではないのだが、リダにとっては全てが食を連想させる香りではないようだ。

「ガルドさんは子供好きだったのですか？」

心ここにあらずといったリダを引きずるように歩いていると、先行するジャンパースカート的女性——ファルが振り向いて疑問を投げかけてきた。視線は呆けた顔のリダに向けられており、彼女が何を言わんとしているのか嫌でも理解できる。

「こいつのせいで嫌いになったかもしれない」

「ふええ！？ ご、ごめんなさい！ 僕、何か悪いことしましたか？」

「いや、そういうわけじゃないが……」

「この間のパンのことですか？ それとも、その前のお魚のことですか？」

「お前の思考が食い物基準だつてのはよく分かった」

出てくるのは食事に関する事ばかりだ。傍からすればギャグとして受け取られてもおかしくないが、リダは本気でそれを懸念しているらしい。

そして反応に困っているガルドをよそに、とうとうリダの声が震え始めた。

「す、すみません……何でもしますから、見捨てないでください……ふえええ……」

「ここで泣き出すのか!? お前、狙ってやってるだろ!」

いくら泣き虫といっても限度があるだろう。大食については耐久力のついたガルドも、これだけではどうしても慣れることができない。周囲からは自分が悪いように見られるため、なおさらタチが悪いのだ。

どうあやしたものが困窮するガルドの様子を眺めながら、ファルが場違いな笑顔を浮かべて首を傾ける。

「やっぱり子供がお好きなのですね。こんなにも仲睦まじいなんて羨ましいです」

どこかズレたその感想に、慌てふためくガルドが反論する余裕はなかった。

カップの中に自分の顔が映っている。明らかに落ち込んでいるその表情を見て溜息をつく、水面が震えて映っていた顔が歪んだ。なみなみと注がれたそのお茶を、リオナはほとんど口につけていない。ファルが淹れたてを注いでくれたはずのそれは、飲まれることなくすっかり冷めてしまっていた。

ニールが姿を消してからしばらく経つ。

どこへ行ってしまったのか見当もつかず、時間だけがいたずらに過ぎていく。危険を承知で探しに向かおうと考えたこともあったが、様々な要因に足を絡め取られてしまい行動に移す勇気がわいてこなかった。いずれにせよ、彼女に現状を打開できる力はない。

「……私、何してるんだろ」

この数日間、リオナの胸中には激しい自責の念が渦巻いていた。いつものんびりとしていた兄がどれほど思い悩んでいたのか、リオナは気づこうともしていなかった。それどころか、他でもない彼女自身が自覚のないまま彼を精神的に追いつめていたのだ。

体の大部分をもぎ取られたような喪失感に苛まれ、何をするにも一切の気力が伴わなくなってしまった。ふさぎこむリオナをアドネッセやファルは気にかけてくれたが、それで根本的な解決になるわけではない。

結局のところ、ニールはもうそこにいないのだから。

——帰ってきた時、どう言葉をかければいいんだろう。それ以前に……兄さんは、無事に帰ってくるのかな。もう二度と会えないかもしれないなんて、絶対に嫌だ……。

後悔が延々とリオナを責め立て続け、こみあげてくる溜息が幾度となく水面を揺らす。

「ごめん、兄さん……」

相手のいない謝罪は、誰の耳に届くこともなく空白の時間の中に消えた。

23話 別れ

「まあ」

普段は感情の起伏をあまり見せないファルが、口元に手を当てて驚きを表現した。

「実の姉であるエディカさんを探して、一人でこんな所まで……まだ幼いのには素晴らしい行動力ですね」

「あ、ありがとうございます」

ファルの褒詞を受けてリダが嬉しそうにはにかむ。こういった仕草はやはり子供らしさに溢れており、突拍子もない食欲や怪力の面影は微塵も感じさせない。だからこそ油断ならない、というのがガルドの認識だが。

ガルドはカップに注がれたラベンダーティーを一口啜り、母親のような眼差しでリダを見守るファルに視線を向けた。

「まだお飲みになるのでしたらお注ぎしますよ。ラベンダーは心を落ち着ける効果もありますから、少しでもお疲れを癒せるかと思えます」

「わあ、ありがとうございます！ このお茶、すごくおいしいです」
彼女は丹念にリダの相手をしてくれており、面倒見の良い性格が如何なく発揮されている。その点はガルドが最後に会った時と比べると変わっておらず、慈愛に満ちた印象が彼女の全身から溢れ出している。

しかし、そんな彼女の態度の陰に見え隠れする違和感をガルドは見逃さなかった。

「なるほど」

「？」

唐突に納得の台詞を吐いたガルドに、ファルとリダの視線が集中する。それまでの二人の会話を傍観していたガルドから言葉が発せられたことを不思議に思ったのだろう。

それを理解しながらもあえて弁明はせず、ガルドは毅然とした態度で核心をついた一言を告げた。

「ファル。エディカがここに来たみたいだな」

「！」

それを聞いて表情を一変させたのはリダだ。ファルは優しげな笑顔を崩さないまま、特別な反応は見せない。わずかに間を置き、首を傾げながらファルが口を開く。

「いえ、いらしてませんよ。急にどうしたんですか？」

「あーいや、別に隠さなくていいぞ。嘘つかれたくらいじゃ別に怒らないし」

一見噛み合っていないような会話。

しかし、全て把握していると暗示するガルドの言葉は、今度こそファルの表情から余裕の笑みを消し去った。

「え？ ええ？ ファル、姉さんと会ったんですか？」

リダの視線がガルドとファルの間を往復する。今しがたの応酬には全くついてこれなかったらしい。

しばらく言葉を詰まらせていたファルは、しらを切ることを諦めたようでも小さく息を吐いた。

「……………はい、ガルドさんの仰る通りです」

「ええ！？ もっと早く言ってくださいよ！」

「隠し立てしようとしたこと、どうかお許してください」

「気にしてないって。まあ、ファルが嘘つくってのは確かに珍しいことだとは思うが」

「…………エディカさんから口止めされていたのです。自分がここに来たことは口外しないように、と」

「なんか胡散臭い話だな。ああいや、ファルのことじゃないぞ」

本人が自身の存在を秘匿に扱おうとしているというのは、少なからず怪しい臭いを漂わせている。捻りなく考えるのであれば、エディカが何かから逃げているというのが妥当な線だろう。足跡を辿りにくくされたおかげでガルドとリダは余計に苦勞する羽目になって

いるのだが。

「姉さん……」

「リダ、そう落ち込むな。心配ならお前が傍にいて守ってやればいい話だろう」

「……。そう、ですよ」

影の差し始めた姉の行動に、リダは少なからず不安を覚えたようだ。疑っているわけではないというところが、姉に対するリダの高い信頼を示唆している。

「でも……。どうして私が嘘をついていると？」

不思議そうにファルが尋ねかけてきた。彼女にはまだエディカに關して質問をするまでに至っていないので、疑問に思うのも仕方のないことと言えるだろう。

「これでも人を見る目の求められる仕事をしてるからな。目線の軌道、息遣い、声色、表情、ちよつとした仕草……。何かを隠し持っている人間は何かしらサインを見せるものさ。見分けるのはかなりコツがいるけどな」

「ですが、私にエディカさんについての質問はまだ……」

「ファル、普段はほとんど嘘つかないだろ？ エディカを探してるって話した時の様子だけで確信を持つには充分だったぞ」

ガルドがそういうと、ファルの顔がリンゴのように赤くなった。実際にはかなりの目利きでなければ気付かないような差だったのだが、無意識にそうした挙動をしていたというのが恥ずかしいのだろう。

「やだ、私つたら……。そんなはしたないことを」

「あもう、恥ずかしいのは分かるんですけど、姉さんの話が早く聞きたいです」

「……。すみません。取り乱してしまいましたね」

リダが不満げに急かしたことで、赤面していたファルはようやく我に返った。すぐさま普段の淑やかな彼女を取り戻し、一瞬だけ見せた少女のような姿が幻であったかのように感じられてしまう。あ

れこそが彼女の本質なのかもしれないと、ガルドはなんとなく邪推する。

「ま、エディカが隠れたがってる理由とかはどうでもいいんだ。俺たちは行き先に関する情報にしか用がないし、興味もないからな」

「……そうですか。お心遣い感謝致します」

約束していた分だけ後ろめたく感じていたのだろう、ファルはガルドのフォローでいくらか気持ちが悪くなったようだ。彼女がどれだけ真面目で、なおかつ融通が利かない性格であるかはガルドもよく知っている。

最後にもう一度決意を固めたように表情を引き締め、ファルはその重い口を開いた。

「エディカさんは、ここから北西……色々な街を巡りながら、忙しくしているご友人を手伝いに行くと言っていました。どの街にどの程度滞在するかまでは分かりませんが、できる限り多くの街に寄りたいというお話もなさっていましたね」

「具体的な目的地は言ってなかったか」

「はい。おそらく……エディカさんもまだ知らなかったのだと思います。エディカさんのご友人もあまり一ヶ所に留まる方ではないらしいので」

「そうか……」

そんな流浪人の手伝いというのもしまいちピンとこない話だ。もっともそれはガルドの尺度での捉え方であり、エディカにとってはさして奇妙なことではないのだろう。彼女自身も根無し草のような人物なので、その友人とも共感する部分があつたのだと推測できる。「なるほど。いや、充分有力な情報だ。それだけ聞ければ探しに行く手がかりとして申し分ない」

「あの……他に何か気になることは」

「あるにはあるが訊く必要はないさ。エディカが隠そうとしたこと……ファルが守りたいことまで俺たちが探究する意味もないだろう」

「そうですよ。僕たち、別にファルを困らせたいわけじゃないです

から」

ガルドに便乗してリダもファルに断りを入れた。これ以上の聴取はファルに悪いとリダも感じ取ったのだろう。詳細を訊いてしまえば、聞けるにしろ聞けないにしろ、ファルに大きな後悔がのしかかることになる。

リダがそこまで考えて発言したかは不明だが、ガルドにとっては良い追い風となった。

「リダさんまで……お優しいんですね、お二人は」

「バカなだけさ。こいつも、俺も」

「僕もなんですか？ ガルドと一緒にしないでください」

「むしろお前がメインだろ」

ガルドとリダの視線がぶつかり合い、盛大に火花が散る。ファルはそんな二人の様子を微笑とともに見つめていた。

「仲も良いようですし。お茶のおかわり、すぐに用意しますね」

「あ、ああ……ありがとうございます」

颯爽と踵を返したファルは、先刻までの様子とさほど変化があったようには見えない。楽しそうに客人用のお茶を用意する姿は、今しがたの会話をなかったことにしたかのようだ。

それでも。

「こちらこそ、ありがとうございます」

振り返った彼女の浮かべている微笑みは、間違いなく本物の笑顔だった。

「何をしているの？」

客間の前で中の様子を窺っているリオナに、唐突な疑問符が襲い掛かった。一瞬ビクツとしたリオナは、声をかけてきた相手が見知った顔であると気付くとひとまず緊張を解く。

「アドネツセさん……いえ、私は別に」

「覗きなんて、いい趣味ではないわね」

「……」

優しげにそう告げるアドネッセに覗き見を咎めるつもりはないらしい。ただ、本心を探ろうとしてくる眼差しがリオナには恐ろしく感じられた。

それほど長い付き合いでもないのに、アドネッセはリオナや二ーの心中を的確に見抜いてくる。彼女曰く、長く生きていると色々なことがわかるようになるとのことだ。

看破されるのがちよつとした悩み事ならば構わないのだが、特に今のリオナにはどうしても知られたくない事情があった。

「そんなにあの人たちが気になるの？」

リオナに再び緊張が走る。

胸の内を残さず読み取られてしまうのではないかという、先刻とは別種の恐怖が。

「いえ、あの人たちについていうか……」

「ええ、そうね。正確には彼らの『行動』……この街を出てあちこちを巡っているという部分に気を引かれてしまったのよね」

「……」

「あの水色の髪の子も異種族と言っていたし、彼らについて行けば一人でこの街を出るよりも安全でしょう。今のあなたにとっては、願ってもない好機というわけかしら」

リオナは確信した。

アドネッセはすでに、自分の心の奥底まですべて見えている。

「ち、違うんです、アドネッセさん！」

中の人間に聞かれる可能性もいとわずにアドネッセの推理を否定するリオナ。他のことならばいざ知らず、こんな『ワガママ』を簡単に認めるといふのはどうしてもはばかられたのだ。

「私は別に、あの人たちについて行って兄さんを探したいなんて思っ
つてませんから！」

「……ここまで正直だと将来が心配になってくるわね」

「え……あ」

見事に墓穴を掘ってしまったようだ。

「そ、その、私……！」

「いいのよ、謝らなくて。自分の願望を持つというのは何も悪いことではないわ」

そう諭され、リオナはとうとう反論する気力を無くしてしまった。ここからどうあがいても上手く取り繕うことは不可能に近い。

アドネツセの言う通り、リオナは彼らと共に行けば兄を見つけ出せるのではないかと考えていた。実際に無理を聞いてもらえるかは別にして、少しでも自分の願望を叶えられる可能性があるというのはリオナにとってこれ以上なく喜ばしいことなのだ。

しかし、だからと言って安直に彼らについて行くこともまたリオナは躊躇っていた。

「分からないのは……普段のあなたなら、今頃は私が彼らにその意志を伝えているはず。それをしないということは、何か気がかりがあつて踏みきれずにいるのかしら」

「……ええ、その通りです」

彼女には敵わない。そう痛感しながら、リオナは力なく頷く。

「兄さんのことは心配です。でも、私はアドネツセさんからあのハーブ畑の管理を任されています。私情のために大切な仕事を放り出すわけにはいきません。アドネツセさんたちもまた、私の大切な命の恩人なんですから」

アドネツセたちには恩がある。それを返す意味でも、畑の管理を途中で投げ出すことはできないのだ。ニールがいなくなってしまった今、リオナまでいなくなってしまうては誰があ畑の世話をするというのか。

「……そんなことなの。あなたは真面目でいい子だけど、少し固すぎるところがあるわね。それがあなたらしさなのかもしれないけど」

「えっ……どういう意味ですか？」

「それでしたら心配いりませんよ。もともとは私が管理のお手伝い

をしていましたから」

扉が唐突に開き、客人と話し込んでいたはずのファルが二人の会話を割り込んできた。

「ファルさん！？ い、今の聞いてました？」

「ええ、あなたが『違うんです』と叫んだあたりからずっと。聞いていたと言いますか、意識しなくても聞こえましたね」

「……なぜだろう、嫌な予感しかしないんだが」

その後ろからは客人である青年——ガルドが複雑そうな表情で顔を出した。彼にも会話の内容は筒抜けだったようだ。

突然の介入に驚くこともなく——むしろ当然であるかのように振る舞い——アドネツセはリオナへと改めて向き直る。

そして明らかに聞いたがっていないリオナをよそに、あまりにも優しく残酷な提案を口にした。

「リオナ。本当にニールを探しに行きたいのなら、彼ら……ガルドと一緒に行きなさい」

聞いた瞬間、リオナの中で時間が静止したような錯覚に襲われた。彼らについて行く。それはつまり、これまでお世話になったアドネツセの元を離れ、ニールを探すために長い長い旅に出るということである。

ニールを見つけ出すまで戻ってくることは叶わないだろうし、道中で力尽きてしまう可能性も十二分にあるだろう。そうなった時、アドネツセたちが抱く悲愴はニールの際のリオナとは比較にならないほど大きい。だからこそ、リオナは打ち明けることを躊躇していたのだ。

決して口に出さずにいたその選択肢をアドネツセの方から突き付けられ、途端にリオナは気持ちが臆してしまった。

「で、でも……！ 異種族のことがありますし、何の得にもならないようなことをあの人たちが引き受けてくれるとは……」

「大丈夫よ。彼は植物族や他の異種族のこともよく知っているし、それに——」

アドネツセがちらりとガルドを見る。何を言おうとしているのか把握したらしいガルドは、どこか不服そうにしながらも黙って頷いた。

「……私が頼みこめば、大概の事は聞いてくれるから」

「……！？」

一瞬だけアドネツセが見せた怪しげな笑みにリオナは背中を震わせる。彼はアドネツセに弱みでも握られているのだろうか。

「あなたは何も気にしないでいいの。私たちのせいで後悔するような結果になるのだけは絶対にいけない。そのためなら、私は喜んで協力するわ」

「……………」

「もちろん、あなたが心からそう願っていれば、だけどね」

「そんな……！」

どうするべきなのか分からなくなり、リオナは泣きそうになって言葉を詰まらせた。

アドネツセの言い方は『ズルい』。彼女はつまり、全ての判断をリオナに任せたと言ったのだ。いかなる場合にしても、アドネツセはその決断に従うだけでしかない。リオナに責任を押し付けようとしているわけではないところが、余計にリオナの罪悪感を強くする。

「さあ、リオナ」

「……私は……」

嬉しい提案であることは否定できない。ファルとアドネツセのおかげで、この場を離れられない心残りは全て解消されたのだ。今すぐにもニールを探しに行きたい衝動がむくむくともたげてきている。

しかし、だからといってその好意に愚直に甘えていいのかという不安もあった。

リオナとアドネツセたちを繋いでいたものは、単なる畑仕事だけではないのだ。人間を信頼できないリオナにとっても、アドネツセたちは家族と呼べるかけがえのない存在である。これほど急に彼女

らの元を離れるかどうかなど、すぐに決めることができない。

立ち尽くすリオナに、アドネッセがそっと近づいてその手に何かを握らせた。

「はい、どうぞ」

アドネッセが手渡したのは、一冊の本。

「これは……」

丁寧な装丁が施されているが、開いて見ると中のページはすべて白紙となっている。

「日記をつけるとかスケッチをするとか、好きなことに使ってちょうだい。ニールにも同じものを渡していてね、言っなければ私なりの気休めといったところかしら」

「兄さん、も……？」

兄の名前にリオナは顔を上げた。

兄とお揃いと称するにはあまりに不格好で、重々しいその存在は持っているリオナを虚しい気持ちにさせる。これが違う状況、別の物であれば少しは感想も違ったのだろうか。

反応に困っているリオナに向けて、アドネッセが独白のように言葉を発し始めた。

「迷っているのなら、きっと本心でのあなたはニールを探しに行きたがっているわ。最終判断をどうするかを強制はしないけど、『本当にしたいこと』をしないと、きっと後悔すると思う。……まあ、これは単なる勘なのだけだね」

彼女が何を言わんとしているのか、リオナでなくとも容易に理解できただろう。

心の空洞から目を逸らすように、リオナは力強く本を胸に抱きしめる。

「アドネッセさんなりのお守り……ということですか？」

「それもあるけどね。長い旅になるかもしれないけど、たまにはこの本で私たちのことを思い出してほしいという思いの方が大きいかしら」

「アドネツセさん……」

「その本を持っていれば、私たちはいつだってあなたと一緒にいるわ。なんて、そう簡単には割り切れないから『気休め』なのだけねどね」

何もかも理解し、そして受け入れているかのようなアドネツセの笑顔。

心の底から自身のことを考えてくれていると分かるその表情に、リオナは自分の背中が優しく押されるのを感じた。

「……それじゃあガルド、この子のこともよろしくお願いするわ」
「自分から危険に飛び込むようなものだったのに、止めなくていいのか？」

もはや拒否することを諦めたガルドが溜息交じりに疑問を投げかける。

ガルドは軽く流されると予想していたのだが、アドネツセの返答には思いのほか時間がかかった。

「私はね……ニールが飛び出していく時に止めることができなかったの。止めようと思えばできたはずなのに、それをしなかった」

アドネツセの目が細められる。あまり明確に感情を吐露しないが、今の彼女の心境が複雑であることは容易に想像がつく。

「それなのにリオナだけは引き留めようとするなんて、いくらなんでも虫がよすぎるでしょう？」

「止めちゃいけないって思ったのか？」

「……かもしれないわ。あの時の気持ちがどういことなのか、今でもよく分かっているけれど」

「……そうか。これ以上は俺が口出することでもないな」

アドネツセにも彼女なりの『決意』があるのだ。この状況に心痛しているのは、決して旅に出るリオナだけではない。それでも笑顔で送り出そうと気を張っていられるのは、それほどガルドのことを

信用しているからだろうか。

「つくづくお人好しだよな、アンタは」

「それでもそれなりに長く生きているもの。あなたたちより少しだけ、持っている知識は多いのよ」

傲慢するでもなく、アドネツセが自嘲気味に微笑む。

「いくら知識があってもどうにもならない時があるって——知っているから」

ガルドは言葉を返すことができなかった。

こんな結果になったことを誰よりも悲しんでいるのは他ならぬアドネツセなのだと、ガルドは理解した。

24話　そして彼女は微笑む

緑色の丘を風が吹き抜けていった。

柔らかい日差しを受けて大地が淡く輝き、風に合わせて静かにざわめく。頂を見上げた先には色鮮やかな蒼空が広がり、綿を押し固めたような雲が風に流れることなく座り込んでいる。

それ以外は何もない、見渡す限りの草原。

穏やかな風が頬を撫でる。温度も湿度もなく、わずかに残る清涼感が心地よい。一切の苦痛を取り払ったような開放感が全身を駆け巡っていく。

人目もはばからずに走りだしたくなるようなその場所に、エルクは一人で立ち尽くしていた。

（ここはどこだ……？　こんなところ、僕は知らない）

辺りを見回すが、やはりエルクの記憶と一致する情景ではない。どこを向いても草葉と空ばかりが映り、強く印象に残る場所ではないように感じられる。

しかしエルクは、目の前に広がる風景に不思議な感情を抱いていた。

（知らない、はずなのに……　なんでこんなに、懐かしいんだろう）
こみ上げてくるものを抑え込むように胸を押さえる。

見覚えのないはずのその景色に、エルクは心が締め付けられるような感覚に陥った。ずっと昔に置き忘れてきてしまったような、そんな儚さを孕んだ郷愁が琴線に響く。

その正体も分からないまま、エルクはそこが『大切な場所』であると確信した。

周囲を見回していると、丘の上に立つ一人の人物に気付いた。つばの広い真っ白な帽子に真っ白なワンピースを身に着けており、

女性であることが窺える。帽子は風で飛ばないように手で押さえ、長いスカートを優雅にはためかせながらエルクのことを見下ろしている。

エルクから彼女の元までは少し距離があり、表情まではよく確認できない。

にもかかわらず、エルクには彼女が自分に向けて薄く微笑んだように見えた。

彼女に呼ばれているような気がしたエルクは、何となくつま先をそちらへと向ける。青空をバックに佇む純白の女性は、この世のあらゆる穢れを取り払ったかのように気高く美しい姿に映った。

一步、踏み出す。それに呼応して女性もエルクに体を向ける。そのわずかな仕草の中に、エルクは見覚えのある影を見た気がした。

(……誰だろう)

ゆっくりとした足取りが少しずつ早く、そして駆け足になっていく。

どこまでも続く新緑の世界に包まれ、いくら足を動かしても近づいていく実感が得られない。すぐ近くにいるように見える女性の存在が、ひどく遠いもののように感じられる。

いつまでもたどり着かないことにもどかしさを感じながら、それでもエルクは立ち止まろうとしなかった。

彼女に会いたい。会って話したい。

エルクを突き動かすのは、理由も分らないそんな一つの思い。他には何も考えられず、がむしゃらに女性に向かって走り続ける。

不意に女性が手を差し出した。それと同時に、今まで全く進まなかったエルクの体が軽くなり、宙に浮かぶようにして急速に女性との距離を縮めていく。

それはまるで、女性の方がエルクを呼び寄せているかのようだった。

そのままでは女性を飛び越えてしまいそうな勢いだったが、エル

クの思い描く通りに減速し、女性の少し手前でふわりと着地をする。女性までの距離はあと数歩。差し出していた手を下した女性は、再び帽子を押さえてエルクに顔を向けている。表情の確認もできそうな距離だが、帽子の影になってまだ確認することができない。眩しいほど光輝いている丘の中で、それは意図的に隠しているかのような不自然な暗がりだった。

一呼吸置き、一歩ずつ確実に女性に歩み寄っていく。

焦って近づくと、この世界もろとも彼女の存在が崩れ去ってしまったのではないか。そう感じてしまうほど彼女の存在は淡く、そして儚い。

（綺麗だ……）

会話のできるギリギリの距離でエルクは立ち止まった。それ以上近づくことはどうしてもできなかったのだ。

女性は何も言わず、帽子から手を離して後ろ手に組んだ。清楚で大人びているようであり、どこか子供らしさも感じさせる不思議な魅力が感じられる。

こちらの言葉を待っている。何も言われなかったが、エルクはなんとなくそんな気がしていた。

「ずっと、あなたに会いたかった——そんな気がします」

しばらく考えてから、奇妙な言葉が口をついて出た。

挨拶や自己紹介など、初対面の相手に対してかけるべき言葉はもとと他にあるはずだ。言ってしまったからエルクは、自分の顔が紅潮するのを感じた。

その言葉を女性はどのように受け取ったのだろうか。何も反応を返さないために窺い知ることができない。

風が止み、たおやかにたなびいていたスカートが大人しくなる。ざわめいていた草原も音を消し去り、世界から二人が切り離されたような錯覚に陥ってしまう。

世界が薄らいできている。世界が消滅しようとしている。エルクの全身の感覚がそう告げていた。

「私も、同じ気持ちだったかもしれない」

静寂に満ちた中で、そつと呟かれたそれはよく聞きとることができた。

落ち着いた印象の大人の声。聞き覚えがある気がするのに、それらしい記憶は蘇ってこない。とても大切な人であるということだけが分かり、エルクをいつそう悲しくさせる。

「エルク……会いたかった」

そして女性はい、それまで顔を覆うように被っていた帽子を頭から下ろした。

「あ……」

煌めく日の光に女性の顔が照らされた。それまで影になっていた見えなかった部分がエルクの目に飛び込んでくる。

「メフィ——？」

女性の顔は、エルクの幼馴染である少女そのものだった。

「う、ん」

短く呻いてから、エルクは重い体をゆっくりと起こした。そうするとまず最初に、昨晚の野営の名残である焚き火の跡が視界に入る。その傍で寄り添いあって眠っているメフィとシューラの姿を認め、エルクはここが現実であることを確認した。

先刻まで夢を見ていたはずなのだが、内容をよく思い出せない。胸が苦しくなるような切なさが残っているのだが、やはり思い出すことはできなかった。

空を見上げると、まだ薄暗い中に点々と星が瞬いている。どうやら少しばかり早く起きすぎてしまったようだ。二度寝をしようにも、疲労が取れているためすっかり目が冴えてしまっている。頭は驚くほど覚醒しており、眠るのは諦めるしかないだろう。

二人を起こさないよう、極力音をたてずに立ち上がる。かといって今のうちにしておきたいことがあるわけでもないの、手近にあった程よい大きさの岩に腰かけ、辺りを眺めながら時間を潰すことにした。

空の彼方にうつすらと見える朱色の輝きはエルクの周辺まで届いていない。かろうじて物の形を判別できる程度で、世界のほとんどは未だ闇の中に沈んでしまっている。

道の両脇に生える木々は北上するにつれてより高く、鬱蒼と茂るようになった。レクタリア周辺までは広大な印象のあった街道も、林立する樹木によって視界が制限されてだいぶ狭くなったように感じられてしまう。闇に覆われた枝葉は四方からエルクを囲い込み、まるで押し潰そうと迫ってきているかのようだ。

レダーコール近郊での解放感を知っているエルクにとって、それはいささか窮屈でもある空間だった。

それでも、地上を覆っている空はかつて故郷で見ていたものと何も変わっていない。

点々と撒かれている星も、煌々と広がる澄み切った蒼も、かつてのそれと同じなのだと実感できる。この雄大な空と比べてしまえば、相当な距離のように感じているここまでの道のりもごくわずかなものなのだろう。

自分がひどく矮小^{わいしょう}な存在に感じられ、空虚感がエルクの心をよぎっていく。それと同時に、無限のようにも感じられる広大な世界を想像して思いを馳せた。

「エルク？」

名前を呼ばれ、ぼんやりとしたまま振り返る。

好き放題に寝癖の跳ねまわっているメフィが欠伸まじりに近寄ってきていた。頭の上の惨事は気にする様子もなく、岩に腰をおろしているエルクを寝ぼけ眼で見つめている。

「起こしちゃった？ おはよう」

「早すぎるわよ。何してたの、まだ日も昇ってないのに」

特に断りも入れず、エルクを押し出すようにしてメフィも岩に座り込む。図々しいなどと指摘したりはせず、エルクは自ら岩の半分を彼女に明け渡した。

「いや、なんでか目が覚めちゃっただけ」

「ふうん。で、空を見てんだ」

エルクの言葉に誘われるようにメフィが群青色の空を仰ぐ。

岩が小さいため、二人の肩はぴったりと触れ合っている。ついさっきまで眠っていたせいか、メフィの体はひんやりと冷たい。じっとしているのが苦手なのか、岩につくことのできないエルクの側の手が居場所のない様子でもじもじしている。

そのままでは落ち着かなさそうだったので、エルクは自らの手を重ねて優しく握りしめた。

「！」

驚いた様子でエルクに顔を向ける。嫌がられたとも思えたが、振りほどいて拒絶してくるようなことはなかった。何も言わないまま、すぐに視線を空に戻す。

そしてメフィも、エルクの手を握り返してきた。

「ねえエルク、旅にはもう慣れた？」

世界が少しずつ明るんできた頃に、メフィが早朝の沈黙を破って口を開いた。

「急にどうしたの？」

「リーダーコールを出てだいぶ経ったし、そろそろ何か不満も溜まってきた頃かなーって思っただけ。あ、無ければ無いで別にいいんだけど」

ニコニコと笑いながら妙に饒舌なメフィ。悪意は感じられないも

の、どういった意図でそんなことを言い出したのか読み取ることができない。

返事を洪つても機嫌を損ねるだけなので、エルクは邪推をやめて素直に返答することにした。

「これと言つてあるわけじゃないよ。まだそんなに遠くまで来たわけじゃないしね」

「そっか」

メフィの返事はひどく素っ気ないもので、エルクにはその時のメフィがひどく落ち込んだように見えた。

持ち前の明るさから笑顔を保っているように見えるが、エルクにはその表情が上辺だけのものであると分かる。

「ねえ、エルク。少しだけでいいから、何も言わないで私の話を聞いて」

だからこそ、彼女からのその提案がひどく恐ろしく感じられた。

エルクの思い悩んでいることに心当たりがあるようだ。そうであった場合を仮定しての『話を聞いてほしい』なのだろう。

「思い違いだつたらごめん。でもあの、あのね？ もし辛いこととかあったら、独りで抱え込まないでね。私でもシューラでもいいから、できるだけ私たちにも教えて欲しいの」

「う、うん。何かあったらすぐ話すようにはしてるけど」

「そうじゃないのよ。エルクが黙っておいた方がいいかなーって感じたことも、なんとか私たちに聞かせてもらいたいなっていう意味」

エルクが何か隠していると確信しているかのように、メフィの言葉は休むことなく語られていく。

「エルクが辛いのを和らげられるとか、少しでも共有してあげられればとか、そんな自惚れてるつもりはないよ。エルクがどうして苦しんでいるのか、それすら分かってあげられないかもしれない」

虚勢を張って取り繕っていた空っぽの元気が、メフィの表側から少しずつ剥がれ落ちる。

「でも、でもね。それでも何もしないでいるなんてイヤなの。知ら

ないままでいたら、いつか絶対後悔するもん。もし、できることなんて何一つなかったとしても」

必死な様子の彼女に、エルクは言葉を返すことができない。

「だから、お願いだから、私たちを独りにしないで。いつだってエルクと一緒にいるんだから、離れていたりしないで」

全てが剥がれた後に残っていたのは、メフィの抱える途方もない不安だった。

今の彼女に対してどう接すればよいのか、エルクは見当が付けられない。これまでにメフィはもちろん、誰からもそんなことを言われた経験はないのだ。

メフィが変わってしまったわけではない。もちろん平和な日々を過ごしてた頃と比べれば彼女にも変化はあるのだが、こんなことを尋ねられるというのは彼女だけに原因があるわけではないだろう。

何よりも変わってしまったのは他でもない、エルク自身なのだ。それを自覚しているからこそ、メフィの言葉を聞き流すことができない。

「……努力、するよ」

口にできたのはそれだけだった。

素直な肯定でなかったためか、メフィの表情はやはり浮かないまま。彼女の不安を解消してやりたいと感じつつ、それでもエルクは全てを打ち明ける気になれずにいる。

それが本当に正しいのか、判断をつけることができないために。

「やっぱり、言いにくいことなんだ」

悲しそうに呟き、メフィの手がエルクから離れる。いつの間にか彼女の体温に慣れていた肌が外気に触れ、その温度差で手の甲がわずかに粟立った。

「その、ごめん」

「やめて、謝らないで」

顔を背けるように岩から立ち上がり、シューラの眠っている方向へと歩き始めるメフィ。

「……少し、一人にさせて」
それだけを言い残し、エルクとの会話を完全に打ち切ってしまった。

またしても怒らせてしまったようだ。しかし、これまでの場合とは怒りの方向が明らかに違う。むしろ、深く傷ついた時のような物憂げな感情を漂わせていたようにも感じられる。

怒らせるようなことをしたという自覚はあるが、彼女の様子が普段と違う理由はよく分からなかった。

メフィにも何か思うところがあるのだろう。

それ以外、今のエルクに出せる結論は存在しない。

全ては自分に非があると理解しながら、それでもどうすることもせずにいるのだから。

彼女は何も知らない。それだけでは到底納得しきれない、辛辣な自己嫌悪がエルクの心を暗色に染め上げていく。

エルクに声の届かない辺りまで離れたところで、ようやくメフィは立ち止まった。

走ったわけでもないのに呼吸が苦しくなり、胸を押さえてうずくまってしまう。

「エルクの、バカ」

口に出してみても感情の昂ぶりはまるで収まらない。ズキズキと胸の奥が痛み、無力感に顔をあげられなくなる。

「なんで何も話してくれないのよ」

その憤りを、エルク本人にぶつけようという気はメフィには無かった。

本当に許せないのは、何もすることができずにいる自分自身なのだ。エルクが何かを隠していると分かっているながら、彼自身から話してくれなければどうしていいのかさえ分からない。

無力な自分自身こそ、メフィにとって忌むべき対象なのだ。

「エルクさん、誰かが傷つかないように何かを隠そうと嘘について、その嘘を独りつきりで背負いこんでいるみたいで——」

かつてのシューラの言葉が脳裏に蘇る。

「……そう、なのかな」

長く一緒に生活していたメフィにも彼の嘘には気づけなかった。旅に出る以前と以降を比べても、エルクの行動に不審な点は思い当たらない。

物心ついた頃から一緒に遊んで、彼のことは何でも分かったつもりでいた。お互いに何でも気兼ねなく話し合ってきたつもりでいたメフィは、エルクも自分と同じ考えであると信じて疑わなかった。だからこそ、エルクが自分に隠し事をしていたという事実がメフィにはショックだったのだ。

「エルク、私にできることはないの？ 傍にいただけなんて、そんなの辛すぎるよ……」

その事実を知ったメフィの心に湧き上がってきた感情は、怒りではなく悲しみだった。

「エルクのバカア……」

もう一度不満の声を漏らすと、メフィは虚しさに誘われて空を仰ぐ。

明るんできた空は、いつの間にか夜が明けていることをメフィに知らしめていた。

「はふっ」

とろとろのお粥を一口。余分な調味料はほとんど入れておらず、少量振り掛けた塩昆布の味が口の中に広がる。

溶かしたご飯粒に代わり塩昆布が程よい食感を生み出していて、珍しい材料を用いたわけでもないただのお粥がまるで別の料理のようだ。シンプルでありながら決して単調ではなく、最後まで癖のな

いさっぱりとした味わいがさらなる食欲をかきたてていく。

ゆつくりと喉に下したシユーラは、軽く息をついて感慨に浸った。手にしたお椀にはまだたっぷりとお粥が注がれており、霧のような湯気の中で白く輝いているように見える。とても野営での食事とは思えない出来栄えなのは、レクタリアでの準備とエルクの料理技術の賜物だろう。

「……………」

やや高揚した気分で顔を上げたシユーラは、向かいで繰り広げられているエルクとメフィのやり取りを聞いて首を傾げた。

「朝はずっとパンだったから、お粥って新鮮であんまり慣れないなあ」

「ああ、そっか。パンも用意しておけばよかったね」

「あ、ううん、そういう意味で言ったんじゃないんだけど」

一見するといつも通りのやり取りのようにも見える。メフィの快活な様子などは何も変わっていない。

問題はエルクの方だ。彼も平静を装ってはいるが、メフィへの態度が普段と違う。今の場面でも、これまでのエルクなら「贅沢言わないの」などと説教をしていたはずだ。シユーラの目には、彼がメフィに対して萎縮しているような感情を持っているように見えた。

「あの、エルクさん」

「ん、どうかした？　もしかしてお粥は口に合わなかったかな」

「い、いえ！　とんでもないです、すごくおいしいです」

「それはよかった。火傷には気をつけてね」

「は、はい……………」

直接訊き出そうとしたのだが、エルクにうまくはぐらかされてしまった。

シユーラには普段のように接してくれるので、彼自身に心境の変化があったわけではないようだ。見た限り、エルクとメフィの間で問題だと推測できる。

メフィとの間で何かあったのだとすれば、これ以上はシユーラが

探りを入れていい部分ではない。そう自身に言い聞かせ、シューラは気を取り直すようにお粥を口に含んだ。

じんわりと口内に広がっていく塩の辛味が、シューラに居心地の悪さを噛みしめさせていく。

「昨日はだいぶ歩いたけど、あとのくらい？」

器に残ったお粥をまとめてかきこみ、メフィが頬にご飯粒を張り付けたままそう尋ねた。エルクが無言で自分の同じ個所を指でつついて見せると、慌ててつまみ取って口に運ぶ。

「うーん、元々目的地がはっきりしてないから何とも言いにくいんだけど」

食事の後片付けを始めながらエルクが渋い顔をした。

目的地であるヒューク山は、進んでいる道の先に確かに見えている。壁のような山脈がいくつも横に連なっており、目を引くほど頭の出ている山ではない。ただし、突き上げられた剣のように切り立った姿は畏怖の対象とするには十分な威厳を放っている。

視線を霊山に向け、そのまま数秒。

「うん……麓まであと三日はかかるかな」

「えええ、そんなに!？」

その返答は予想外だったのか、メフィがオーバーに驚いて見せる。目で見ただけでも、ヒューク山までの距離がまだかなりあるというのは分かりやすい。相当遠いらしく、山全体が青色じみたシルエツトのように映る。当然のことながら、蜘蛛族の集落を目視できるような位置ではない。

「しかも、山に着いたら蜘蛛の人たちを探さなきゃいけないんですよ? ってことは、もっと時間がかかるかもしれないってことでは……」

彼女は何日で済ませるつもりだったのだろう、とエルクに疑問符が浮かぶ。エルク一人の判断で蜘蛛族の男性の頼みを受け入れてしまったので、彼女に予備知識が無いのを責めることはできないのだ

が。

「まあ、このまま山に入るつもりはないよ。山の手前にちよつとした集落みたいなのがあるらしいから、そこで態勢を整え直すつもりでいるんだけど」

「なんだ、よかった。こんな状態で山登りなんて冗談じゃないわよ」
「そうだよな」

メフィの不満をエルクも否定しない。

レクタリアで済ませた支度は、あくまで山麓までの道のりにおける野営などの準備だ。目的地の位置が不明瞭である以上、生半可な装備では命取りになりかねない。かといってレクタリアでそこまで身を固めると、今度は荷物が重くなりすぎてしまう。

「それじゃ、そろそろ出発しょ？ やっぱりこーいのは早いほうがいいよね」

「あ、うん。食べた後始末だけするからちよつと待ってて」

立ち上がったメフィを呼び止め、エルクが野営の片付けを始める元からそれほど荷物を広げていたわけではないので、最低限の小道具をまとめるくらいしかすることはない。

「あの、何かお手伝いできることは」

「ん、大丈夫だよシューラ。すぐ済むから」

一緒に作業に取り掛かるうとするシューラにそう断りを入れ、焚火の跡を適当に踏み慣らしていく。

その際にシューラがひどく寂しそうにしているようにも見えたが、一瞬のことではほとんど気には止まらなかった。

25話 山麓にて

集落と呼ばれてはいるものの、村とも呼びにくいほどその規模は小さい。

道に沿って数軒の小屋が立ち並び、その周辺に露店のようなものが繰り広げられている。旅装の人物が何人もたむろしており、物々交換や売買などで長旅での消費を補給しているらしい。お互いに言葉を交わして情報をやり取りしている様子もあり、生活の場ではなく旅人の中継所であると割り切ってしまう。

エルクたちの横を旅装でまとまった三人組がすれ違っていった。

それぞれが体格に見合わないほど巨大な荷物をかついでいるが、全て背負ったまま出発するつもりではないようだ。集落のはずれに荷車が数台停めてあるので、それによって運搬をするのだろう。

「けっこう賑わってるね」

狭いながらも活気に満ちている様相を見たメフィの感想がそれだった。

「は、はい。確かに賑やかだとは思いますが。でも……なんででしょう、少し、怖いような……」

対して、シューラの意見は徹底的に慎重を貫いている。常に近くにたむろする人間の一人一人に気を配っており、絶えずキョロキョロと周囲を警戒している姿はかなり目立つ。

「そこまで過剰に意識する必要はないんじゃない？ みんながみんなシューラの敵じゃないと思うよ」

「それはそうなんですけど……」

「ずっと神経を尖らせてると山に行く前に疲れちゃうよ。僕たちも怪しい人がいないか警戒はしてるから、あんまり気負いすぎないで」
彼女の負担を軽くするよう忠言するが、エルクもまた彼女の不安が考えすぎだとは捉えていなかった。

その原因は、売買を行っている人間に抱いた違和感だ。

ヒューク山の近くであるせいか、純粋な旅人以外にも登山装備の人間がちらほらと見受けられる。彼らは明らかに他の旅人とは違った装備をしていて、露店で求めている物資も専門性の高いものが多い。登山靴や丈夫なロープなど、ヒューク山へ向かおうとしている登山家も丁度いい商売相手なのだろう。

問題は、彼らが単なる登山装備以外にも意識的に買い集めている部類の品があるという点である。

「これなんてどうだ？ 少々値は張るが、切れ味は保障するぞ」
「持ち歩くには少し重いが……このくらいでなければ危険かもしれないな」

アウトドアナイフとは明らかに一線を画する短剣^{ダガー}。外見だけでも物騒なそれを巡るやり取りがエルクたちの前方で行われているのだ。普通に考えれば無駄に労力を増すだけの重量の刃物を、購入者である男性は真剣な面持ちで検討している。

「うん……やはり買っておこう。ついでに、包帯や消毒薬は扱っていないか？」

「悪いがそういう類のは置いてないな。他をあたってくれ」

医療品はないと聞かされ、購入者は途端に顔色が真っ青になる。

そして商人の男性に軽く会釈をすると、せわしない様子で別の露店へと向かって行った。

「……準備をするついでに、ヒューク山について情報を集めておくか」

「というか、何も知らないままで行こうとする方がダメじゃない？」
「それはそうなんだけど、どうも僕らが思ってるほど簡単な事情じゃないみたい」

もともと人のほとんど立ち入らない未開の土地であるため、有益な情報はそれほど得られていない。それだけでも入山を躊躇するに十分な理由であり、更に妙な噂が立っているのであればなおさら警戒して然るべきだろう。

「んー、とりあえずその男の人に訊いてみようよ。さっきの話でも事情は知ってるみたいだったし」

「そうだね」

周囲にめばしい客足が見えなくなったためか、男性はパイプを取り出してふかし始めている。自分たちが商売の対象になっていないのだと感じつつ、ひとまずエルクは近寄って声をかけることにした。

「あの、すみません」

「あん？ 何か用かい」

相手が子供だと気付いても男性の対応に蔑んだ態度は見られない。どこかぶつきらばうになってしまうのは職業上仕方ないのだろう。

これなら話も聞きやすい。そう安心しながら、エルクは早速本題を切り出した。

「ヒューク山について、お話をお聞かせ願えませんか」

「……お前らもあの山に行くつもりなのか？」

ヒューク山の名前を聞いた途端、それまで朗らかだった男性が鋭い目つきに変わった。

「悪いことは言わん、やめときな。大の大人だって手に余るような場所だ、無事じゃ帰ってこれないぞ」

脅迫じみた物言いだったが、彼がエルクたちの身を案じてくれているというのはよく伝わってくる。きつい口調も、彼なりの優しさの裏返しなのだろう。

「そんなに厳しい環境なんですか。山頂まで向かうつもりは無いのですか」

「いや、道らしい道が無い以外はそこまで苛酷な場所じゃない。ただ、中腹あたりにバケモノみたいな奴が出るらしくてよ……」

「猛獣でも生息しているんですか？」

「……俺も詳しくは知らん。山登ってた奴らがみんな、『何か』に襲われてるんだ。ろくに姿を見た奴もいない、どうやって襲われたかも覚えていない。詳しい情報の無いまま、被害者だけがいたずらに増えていく。そのおかげでこんな場所でも武具の需要が生まれる

ようになったが、それでも山頂まで辿り着けた奴はまだ一人もいないって話だ」

「だからさっきの人も短剣を……」

「俺だってこんな商売をしちゃいるが、無意味に怪我人が増えるのを望んでる訳じゃない。できるなら無茶はしないでもらいたいものだ」

短剣を購入した男性の消えていった方向へ、武器商人である男性は遠くを見つめるような視線を送った。

「ねえ……どうしようか」

まずは丈夫な靴を探そうと歩きだしたところで、後ろを歩いていったメフィが不安そうにエルクの袖を引っ張ってきた。

「どうしようって？」

「だって、山にバケモノが出るって言ってたじゃない」

「ああ、うん」

彼女が言わんとしていることをそこで理解する。恐がっている姿は女の子らしいのだが、メフィらしくはない。それをすっかり口走れば頭部を驚掴みにされるので、エルクは指摘をせずに会話を続ける。

「そうは言っても、今さら約束を反故にする訳にもいかないし」

「それはそうだけど……うう、うううー」

多少は語り手の主観も入っていただろうが、メフィは全てを事実であると信じて聞いていたのだろう。

普段ならもう少し彼女をからかっているところだ。まだ彼女に後ろめたさを感じているエルクは、余計なことには言わずに自身の意見を言ってみせようとした。

「たぶん、凶暴な動物がいるとかそういう訳じゃないと思うんだ」

「そうなんですか？ 私もてつきり、大きな熊か虎でもいるんだって思っていました」

シューラもエルクの推測に興味を抱いたようだ。

「誰も襲ってきた相手の姿を見てないっていうのが引かかってね。僕の予想だと……」

そこで一度言葉を区切り、周囲を気にしながらメフィとシューラの耳に口を寄せて小声で続ける。

「……蜘蛛族の人が自衛のために人間を襲ったんじゃないかって」「！」

それを聞くなり、メフィとシューラの顔色が変わった。誰かに聞かれてはいないか視線をめぐらせ、それから小声でエルクに質問を返す。

「でも、別に蜘蛛族の人たちのことを知ってる訳じゃないんでしょ？」

「そ、そうですよ。襲われる理由がありません」

「人間を敵視しているなら、近くを通りがかっただけの人も警戒はして当然だと思うよ。外との交流を絶っているならこっちの事情なんて知らないだろうし」

単純に考えれば、山を登ろうとしている人たちも異種族のことは何も知らないだろう。たまたま蜘蛛族の集落の近くを通ってしまったとしても、彼らにそんな自覚はない。

「なるほど……それなら姿を見せようとしないう理由も分かりますね」「もちろん、凶暴な生き物が潜んでいるのかもしれないよ。いずれにしても、入念に準備しておかないと命が危ないっていうのは間違いないね」

商人から聞いた話だけですべてを判断することはできない。さらに正確な情報となると、実際に襲われた人間を訪ねる必要がでてくるだろう。男性から預かっている物を踏まえると、そんな人を探している余裕はないように思えた。

「それなら、私たちも武器を持っておいた方がいいんじゃない？」

「……それはそうだろうけど……僕はあんまり持ちたくないなあ」「え、どうですか？」

武装に消極的なエルクにシューラは首をかしげ、メフィはムツと

した様子で眉をひそめた。

「しつかり準備した人でも襲われてるのよ？ まさかエルク、私たちは襲われるはずないとか考えてるんじゃないでしょうね」

腰に手を当てて、呆れた表情でエルクを睨みつけるメフィ。彼女の言い分も理解できるだけ、そんな視線を向けられるのはいたたまれなくなる。

「その……好きじゃないんだ、誰かを傷つけるための道具を持つていうのが。まあ、ただのワガママなだけだよ」

「その考えは立派だと思うけど、状況も考えてよね。そのかわりのせいで私たちが死んじゃったら何の意味もないんだから」

「う、うん……そうだよね」

自分でも分かっていたことを改めて指摘され、エルクも反論せずにそれを受け入れた。自分たちはそんな生温い思想に拘ってはいけない立ち位置にいるのだと再確認する。

「それじゃ、武器も買うってことでオッケー？ なら早速買い出しに行こ！」

「ん。いるだろうなって思ったものがあつたらとりあえず言ってね。

メフィもシューラも」

「もちろん！」

「わかりました」

やけに威勢のいいメフィの返事は不安が残るが、ここで訝しんでも仕方がないだろう。

脳内の購入リストに『武器』の項目を加え、エルクはメフィに腕を引かれる形で歩き出した。

できれば、身の丈に合った小さなものがあってほしいと願いながら。

「エルク、これなんてどうかな」

「どれどれ？」

メフィがエルクに見せてきたのは茶色い革製の手袋だ。かなり頑丈な作りのようで、農作業や土木工事を想定したデザインだと分かる。

その強度は当然、山を覆う森林を進む際にも重宝するだろう。トゲのある枝に引っかかりたり、鋭い葉で切ったりして怪我をするのを防ぐことができる。それほど重量もなく、あまり力のないメフィやシューラにも扱いやすい逸品だ。

「うん……これは、すごくいいよ。今の僕らにはぴったりだと思う」
お世辞でも気遣いでもない、正直な賞賛がエルクの口から洩れた。
「メフィって物を見る目があるよね。ビックリしたよ」

「えへへ、ありがとっ」

褒められて嬉しくなったのか、メフィがニツコリと微笑む。親に褒められた時の子供のような、どこかあどけない幼げな笑顔だ。

幼少時代から見慣れているはずのエルクでさえ、その笑顔に心を揺さぶられずにはいらなかった。

「い、いや、こっちこそありがとっ。おかげですいぶん早く準備が整いそうだ」

「……私には、どれがどう違うのかよく分からないんですけど」
それとは対照的に、メフィの隣でシューラがしょんぼりとしている。

彼女にとっては、目の前に並ぶ多種多様な手袋がどれも同じものに見えてしまうようだ。植物族に手袋の文化はないのか、『手を覆う』という概念自体を新鮮に感じている節がある。

彼女がへこんでいるのは、メフィのように最適な道具を見つけたことができないもどかしさに起因しているらしい。

「気にすることないよ、初めて見る物なんだから。そういう慣れない物をすんなり受け入れただけでもすごいことなんじゃないかな」
「お役に立てなくて申し訳ないです」

シューラの生真面目な性格はこういった場面で災いする。いくら他人から励まされても、本人が納得するまではどうしても気持ちが悪くしてしまう。

「でも、蜘蛛族の人の時はシューラが大活躍だったじゃない」
割って入ったメフィが快活な態度でシューラの肩を叩いた。

「シューラがいなかったら、あの人は今でも病気に苦しんでたよ？
自分の子供の誕生日プレゼントだって渡せないままになっちゃってたかもしれないし」

「……お二人の旅の邪魔になっていませんか？」

「ないない。どうせどこに行ってもいいか分からなかったんだもん」
もともと辿り着けるかどうか怪しい目的地であり、多少寄り道したところでエルクたちに不都合はない。この道中で新しい情報を期待できると考えれば、この旅路も単なるおせつかいの枠には留まらないだろう。

「ちよつとだけ……ほつと、しました」

シューラが鬱状態から脱出したのを認め、エルクは懷から財布を取り出して手袋の精算を始めた。やや割高にも感じられたが、安全性を考慮すれば悪い買い物ではないだろう。

「ちよつと早いけど、今日はもう宿をとって休もう。これから山に向かうのはいくらなんでも危ないからね」

「うん、私も賛成。あちこち見て回ってさすがに疲れちゃった」

「いろいろ買いましたからね。でも、今回のためにこんなに奮発してよかつたんですか？」

「んー、確かにこの先持ち歩くには面倒なものもあるけどね」
買い集めた品を整理しながらシューラの懸念に返事をする。

「この手袋とかもそうだけど、山でしか使えないわけじゃないからね。最大限に有効活用しようと思ってるよ。将来、他の山に登らなきゃいけない時が来るかもしれないし」

「あるかなあ？」

「今後も依頼を受ける以上は充分あり得るよ。受けられる依頼の範

囲が広がったって考えることもできるでしょ」

靴や手袋は身に着ける品のため、それほど荷物にはならない。それまでの装備品の処理は難しいところでもあるが、今回の件のためだけに購入したものはほとんどない。

「けっこう色んなこと考えて行動してるのねー、意外」

「まあ、不安定な生活だしね。……意外？」

まだ日は高く、普通の旅人は先を急ぐようにして街道を歩いている。早々に拠点を確保しようとしているのは、エルクたちと同じくヒューク山を目指している人間くらいだろう。

「とりあえずみんなで一度宿に行つて、そのあとは自由行動にしようか。あんまり余計なものを買う余裕はないけど」

「エルク、なんだかお母さんみたいだね」

「おかげさまで、ね」

若干の皮肉を込めて笑つて見せる。その意図に気づかなかつたらしいメフィは同じように笑顔を返し、それから上機嫌でエルクの手を掴んできた。

「ね、早く行こう。泊まれるところならさつき見つけたよ」

「わ、そんな引つ張らないで」

「あうあ、待つてくださいよう」

メフィに手を引かれ、シューラもそれに遅れまいと駆け出す。その際に反対側の手をシューラに掴まれてしまい、エルクの自由はほとんど奪われてしまった。

殺伐とした風景の中、いささか場違いなほど賑やかに三人は道を歩いて行く。

26話 絡み合うイト

歩みを進めるにつれて平坦だった大地は一気に傾斜を増し、広葉樹ばかりだった植生も針葉樹が生い茂る森林に様相を変えている。

他では見られないほどの急激な環境の変遷は、ヒューク山がいかにか切り立った過酷な環境であるかを如実に表していた。

「ひゃう！」

何度目とも分らない転倒にメフィが声を上げる。

すでに彼女の全身は土にまみれており、錆色の髪も小枝と絡んでぼさぼさになっているという状態だ。

すっかり慣れてしまったエルクはすぐメフィに近づき、しりもちをついている彼女に手を差し出した。

「大丈夫？」

「うん、ありがと」

余計な言葉はとくに言い飽きているので、やり取りもごく単純になっている。器用にバランスをとって歩いているシューラは、疲労のせいかな一言も喋らなくなってしまった。

つまりそれほどの時間、三人は山中を探索し続けているのだ。

先駆者たちによるものか、木々の間を縫うようにして道のようなものが続いている。もちろんしっかりと舗装されているわけではなく、誰か通った形跡がある程度のものだ。

それだけのものではあっても、エルクたちの探索には十分な助けとなっていた。

急勾配に加えて落枝や根などで足場が悪く、自由に歩きまわることさえ難しい。目印が全くない未開の土地より、こうして筋道をたてるきつかけのあるほうが探しやすいのだ。

事実、エルクたちの探索は事前の予想よりも遥かに早く進められ

ていた。

「あそこで少し休憩しようか」

前方に開けた場所があることを認め、エルクが久しぶりに意味のある言葉を発した。それを聞くなり、沈黙していたメフィとシユーラの表情が一気に明るくなる。

「そろそろ休まないと体が持たないからね」

「……っ！」

無言で何度も頷く女子二人。その反応を見たエルクは、彼女たちに登山は酷だったかもしれないと不安を覚え始めていた。

これほど登りにくい山は、体力自慢の登山家でも手を焼くレベルの場所だ。おまけに正体不明の何かが中腹に出没して、それに襲われる人間が後を絶たないというではないか。

シユーラは体力に自信がないと話していたし、メフィもつい先日までは山と無縁の生活を送る一人の少女にすぎなかった。

そんな彼女たちに、いきなり難易度の高い山を登れと言うほうが無茶なのだ。

「きついようなら、二人は麓で待っててもいいよ？」

「……っ！」

やはり何も言わないまま、今度は首を横にぶんぶんと振る。さらにメフィからは恨めしそうな視線を浴びせられた。

彼女たちの言わんとしていることはエルクにも分かる。それに納得できないからこそ、こうして頭を抱える羽目になっているのだ。

「まあそうだろうね。なんとなく分かってたけど」

「……」

大きく頷かれてしまい、エルクは大きく溜息をつく。

二人にもエルクの懸念は伝わっているはずなのだが、共に行動することに固執している節がある。各々の事情で孤独を避けようとしているとはいえ、別行動が全くできないというのは何とかしなければならぬ。

しかし、エルクも今すぐに一人で行動できるほど心が据わってはいないのだが。

「……ん、この辺りでいいかな」

頭上から淡い光が差し込んでいるのを確認し、エルクは歩んでいた足を止めた。

木が生えていないため、枝葉に覆われて見えなくなっていた空がよく見えている。風にそよぐ木々の影に従ってそれはゆったりと蠢き、濁った青緑色の空はまるでくすんでいるかのようだ。

光があまり届かず、肌に纏わりつくような湿気が充満している。水分を多く含む土は踏み込むだけで沈んでしまい、仮にも居心地の良い場所とは呼べない。部分的に安定した平地になっているだけまだましなのかもしれない。

幸いなことに、手ごろな大きさの倒木が一本横たわっていた。一面が苔に覆われているものの、腰を下ろして一息つくにはちょうどいいサイズである。

「よっこいしょっと」

エルクが腰かけると、メフィとシューラもそれに続いた。接地面が徐々に湿っぽくなっていく点を踏まえても、今の二人には十分な救済だろう。

「……エルク、『よっこいしょ』だって。おじさんみたいだね」

「んな!？」

「あはは……いいじゃないですか。可愛らしいですよ」

休憩に入るなり二人から笑いかけられた。

馬鹿にしているニュアンスはなく、単に気を紛らわそうとしているだけのようだ。それでも複雑な心境に変わりはなく、エルクは気恥ずかしさから顔を明後日の方角に向けた。

ふと思い返す。

登山者を襲っているバケモノが出没するのは、蜘蛛族の暮らす中

腹のあたりだという。そして、エルクたちが目指しているのもまた中腹である。

どのあたりが中腹か具体的に線引きできるわけではない。あくまで『山の中辺り』を中腹と呼ぶのであって、人によって『中腹』というものは違ってくるだろう。

——つまり、エルクたちの今いるこの場所もまた、中腹と呼ばれている可能性もあるのではないか？

「伏せてっ！」

全身を感じ取った『何か』に従うまま叫ぶ。同時に手を伸ばし、反応の遅いメフィとシューラを思い切り突き飛ばす。

その直後、突き出した手が石のように固まって動かなくなった。

「ちよっ……いきなり何すんのよ？ 変な瘴気にでも感化されちゃった？」

事態を呑み込めていないメフィが打ち付けた腰をさすりながら苦言を呈する。だが、明らかな異変が襲いかかっているエルクに釈明する余裕などない。

「エルクさん？」

「二人とも、できるだけ一か所に纏まって！ できれば周りの様子も警戒して」

「っ！ 敵ですか！」

不自然に硬直した腕を見てシューラも現状を把握したようだ。メフィに駆け寄り、お互いの背中を合わせて死角をつくらないように身構える。

二人が適切な行動に移ったことを確認すると、エルクは気持ちを落ち着かせて未知の敵の対処を模索し始めた。

「くっ……」

いくらか前後に動かそうとしてみても思い通りになる様子はない。外見に束縛されている様子は無いが、鎖でがんじがらめにされたような感触で動きを制限されている。

敵が仕掛けてきたのは間違いない。だが、このあからさまな隙に追撃を加えてこないのは奇妙だ。よほど用心深いのか、あるいは姿を見られたくないのだろうか。

その結果として、エルクはまだ相手の位置すらも把握できていない。

「……何も、起きないね」

「ええ……」

緊迫感とは裏腹に場が静まり返り、メフィとシューラが不安を口に漏らす。あくまでエルクの腕が拘束されただけであり、彼女たちはまだ実感を持っていないのだろう。

「え、エルク？ その腕、ひょっとしてつつちゃっただけなんじゃ

——」

「来ちゃダメ！」

不用意にエルクに近寄ろうとしたメフィを一喝する。

「え」

直後、メフィの体がゴム毬のように吹き飛ばされた。

「ひゃあああああ！？」

「メフィさんっ！」

盛大に土砂の波をたてながら地面を引きずられ、全身が泥にまみれてからようやく止まる。その勢いで木に直撃していれば大怪我どころでは済まなかっただろう。

「メフィ！」

「うー……口に土入ったあ」

泣きそうになっているメフィに駆け寄ろうとしても、絡め捕られた腕がそれを許さない。ただし、思い切り力を込めると少しずつ動

き始めたので、物理的に押さえ込まれているだけのようだ。

「もうっ、どこに居るのよ！ か弱い乙女をこんな目に遭わせて！」

「待つて、すぐ行く」

今にも怒りで暴走しそうなメフィをなだめ、エルクは冷静に状況を整理する。

再びメフィが標的にされれば、今度は無事でいられる保障などない。敵の注意をエルクに引き付け、メフィとシユーラの逃げる隙をつくらなければならないのだ。

「っ……！」

腕に激痛が走り、浅い裂傷が生じる。それと同時に、後方から枝の軋む鈍い音が聞こえた。

エルクが腕に力を込めると再び枝がざわめく。わずかな振動にも反応して、腕と枝が連動しているかのようだ。

その事実気づき、エルクは一つの事を悟った。

「そうか、これは……」

レクタリアで会った蜘蛛族の男性のことを思い出す。

彼は会話において自らの『糸』を利用しており、会話以外でも様々な用途があると話していた。

ならば、この硬直もその『糸』によるものではないのか。

糸の先を手近な枝に巻きつけておけば、エルクを無力化してメフィとシユーラに集中することができる。メフィが突然吹き飛ばされたのも同様の手を使ったのだろう。

もちろん、敵が蜘蛛族であると確認できるまで断定はできないのだが。

「やつ、やあああつ！」

「ひあああつ!？」

メフィとシユーラの悲鳴で、エルクの意識は現実に戻された。二人は一纏めにされて捕まってしまったようで、不自然に密着しながら大木に括りつけられている。糸が見えないため、幹に張り付いている二人の姿はどこか滑稽だ。

「つと、悠長に分析してる場合じゃなかった」

エルクは完全に封じ込めたと思っているのか、新たに攻撃を仕掛けてくる気配はない。今のうちに突破できれば状況を逆転することも可能だろう。

「え、エルク！ どうしようこれどうしよう！？」

「分かってるから落ち着いて！」

パニック状態のメフィが長くもたなそうなので、エルクはすぐに腕へ力を集中させ始めた。

ぎちり、と嫌な音がして全身に電気が走る。刃が肉に食い込むようにして次々と新たな傷が生まれ、力んだ反動で勢いよく血が噴き出す。

肘から先が切り落とされるような激痛を覚え、それでもエルクは込める力を緩めない。

「ぐっ……こ、の」

自身を束縛しているのであろう後方の枝を見つめ、想像する。

——この腕だけで、僕はあの枝を折れる。

枝と言っても、若木の幹ほどの太さがある。外見から折れた様子に想像するのは難しい。

上に乗って体重をかけても折れるかどうか怪しいそれに、腕のみの力で打ち勝てると自身に言い聞かせて染み込ませていく。

——いける！

一瞬に全てをかけ、力の限り腕を引き寄せる。

「こんのおおおおああああ！」

「！？」

その瞬間、落雷のような爆音と共に巨大な枝が幹から剥がれ落ちた。

「……あ……うええ？ エルク、何やってん、の……？」

「うん？ 何って言われても……見たままとしか」

自由になった腕でナイフを取り出し、目に見えない糸を手探りで

切断する。切れた感触があったので、やはり襲ってきたのは蜘蛛族で間違いないようだ。

「信じられない……人間ってこんなこともできるんだね」

「人間じゃなくても無理だと思いますけど……」

身動きが取れないままの二人の言葉を聞き流し、エルクは相手の次の一手を警戒して身構えた。

驚いているのはメフィやシューラだけではない。三人を隠れて見ている敵もまた、今の所業は驚愕せずにはいらなかっただろう。狙い通り、エルクに注目が集まっているのは確かめるまでもない。

だがそれは同時に、先刻よりもさらに厄介な策を講じてくるということになるだろう。

これまではあくまで行動を封じてくるだけだったが、エルクにはそれが通じないと判断した可能性もある。多少は身の危険も覚悟しなければならなくなったかもしれない。

「それでも姿は見せないのか。よっぽど人目を嫌ってるのかな？」

「そんなのんびりしてていいの!？」

ジタバタするメフィの言葉は聞こえないフリをして、エルクはまず敵の出方を窺うことにした。

エルクが自由になったのは伝わったはずだ。それでも焦って攻め立ててくることはなく、様子を見守る姿勢を崩さない。度を越した慎重さとも言えるが、対応しにくいことこの上ない戦法だ。

相手の出方を待っているれば、今度はエルクでも対処しきれなくなるかもしれない。特別な戦術でなくとも、大木の幹に括りつけられればどうしようもなくなるのだ。

そう考えたエルクは、一つの賭けに出ることにした。

「……何もしかけてこないようだし、そっちを助けた方がよさそうだね」

「え？ あ、う、うん」

「すみません、お手数かけます」

糸を取り払ったナイフを握り、行動不能に陥っているメフィとシ

ユーラの元へと駆け出す。

注意は二人に向けられており、エルク自身も不用意だと自覚できる行動だった。

「うっ」

ナイフを持つ手が突然何かに掴まれたような感覚に襲われる。

エルクのナイフを封じようと糸を絡ませてきたのだらう。走り出していたエルクの体は後ろに引っ張られる。

「ちよつとエルク！」

「んっ……大丈夫！」

確かに不用意な行動ではあった。

しかし、だからこそ相手がどう動くかを容易に読むことができる。その攻撃を『予測していた』エルクは、慌てずにすぐ態勢を整え直す。

そして、まだ相手と繋がっているだろう腕の糸を力の限り引き返した。

「これは……アタリかな」

確かな手ごたえ。

エルクの体が切り刻まれることはなく、糸の反対側を引き寄せている感触がある。真上から抵抗があるので、相手はどうやら枝の上に隠れていたようだ。

それを裏付けるように、エルクたちの上方の枝が不自然に音を立てた。

「気を付けて、落ちてくるよ」

「いえあの、動けないんですけど」

いくつもの枝にぶつかりながら何かが落ちてきているようだ。警戒を緩めず、三人は音のする方向をじっと見つめる。

「……来た！」

一際大きな音を立てて頭上の枝が大きくたわみ、先端が折れる。そして枝と共に人影が落下してきた。

「……………！」

それは少女だった。

明るい金色のショートヘアに、髪とは対照的な漆黒のオーバーオール。深い青色を湛えた大きな瞳は、あからさまな敵意を含んでエルクのことを睨みつけている。

「こ、子供？」

メフィが目丸くしている手前で、エルクもまた言葉を失うほどに驚いていた。目の前に現れたのがエルクたちと変わらない年齢の子供だったのだから無理もない。

警備の任に就くのは、普通に考えれば腕力のある男性だ。系の扱いを重視するのであれば女性が当たっても不自然ではないが、それでもエルクたちと同年代であるのは違和感が残る。

「……っ」

困惑するエルクたちをよそに、少女は殺気を纏いながら立ち上がるうとする。だが落下した時にどこかぶつけたのか、バランスを崩して再びしりもちをついてしまった。

「あ、だ、大丈夫？」

「……………」

物騒なナイフはしまつて声をかけてみるが、少女が気を許す気配は微塵もない。今しがた引きずり落としたばかりなのだから無理もないだろう。

しかしそれを踏まえても、少女の様子は明らかにおかしい。枝から落ちただけにしては全身があまりにも汚れており、息も不自然なほど荒くなっている。ついさっきまで戦場を駆け巡っていたと言われても納得できる、満身創痍を体で表現したような有様だ。

エルクと戦う意志を見せてはいるが、今にも頽くすれてしまいそうな危なっかしさがある。

彼女の闘志の中に、エルクはある種の決意のようなものを見た気がした。

「……今で怪我したって訳でもなさそうだけど。えっと、驚かせちゃってゴメン。でも僕たちに争うつもりは——」

「……！」

言葉を遮るように少女が腕を突き出す。それと共に無数の白い糸が放たれ、エルクを縛り上げて動きを制限してきた。肉眼で確認できるようになった分、容易には振りほどけない強度がありそうだ。

「うわぁエルクが繭玉みたい」

「そこまでではないですよ。巻き板、くらいじゃないですか？」

やけに冷静に実況している後ろの二人に言ってやりたいこともあったが、少女の力が思いのほか強く、そちらに集中せざるを得なくなってしまう。

避けようと思えばできないこともなかった。ただ、避けてしまうと余計に彼女の警戒心を強めてしまうだろう。本気で殺しかかっているわけではなさそうなので、エルクは大人しく彼女の術中に嵌まることを選んだのだ。

こうでもしなければ対話が成立しないという事実には、幾ばくかのやるせなさを感じずにはいられなかったが。

「僕の話って、なんでこう聞く耳持ってもらえないのかな……」

「エルクさん？」

「うん、今はそれどころじゃないよね」

エルクを捕縛したことで冷静さを取り戻したのか、少女がゆつくりと立ち上がる。糸を出しているのは腕ばかりでなく、とにかく『全身から』放出しているようだ。

「……」

優位に立つたと理解しても少女の顔に油断の色は見られない。怒りや憎しみといった感情は溢れんばかりに剥き出しているものの、彼女にいくらか戦闘の心得があることを示唆している。

「んー。確定はした、けど……」

「？」

彼女が蜘蛛族であることを疑う理由はもうないだろう。ただ、それを口に出してしまうと彼女の神経を逆なでする結果になるのは目に見えている。

無意味に争う理由を増やすより、まずは彼女との和解を優先すべきだろう。

「……………」

少女はエルクの出方を窺っているようだ。下手に動けない状況に、誰も口を開くことができない。

もっとも、蜘蛛族である少女はそもそも『言葉』を持っていないのだろうが。

「うーん。敵じゃない、って言っても信じてもらえないよね」

ジロリとねめつける視線は「当たり前だ」とでも言いたげだ。糸を介した会話をしないのは、エルクとコミュニケーションを図るのと自体を嫌がっているからだだろうか。

「どうすればいいかな……とりあえず、君の要求には従おうと思う。どうして欲しいか言ってみてもらえる？」

エルクの提案を聞き、少女は一瞬だけ眉をひそめたように見えた。その言葉を信じていいのか、そこから吟味しているようだ。

やがてしばらく思案した後、簡潔な要求が糸を介して伝わってきた。

『帰って。今すぐ』

「あ……………」

予想通りと言えば予想通りの、いささか拍子抜けすらしそうな撤退勧告。ただ、自分と年代代の少女の言葉としてはあまりに重苦しいようにも感じられた。

「ごめん。僕たち、人を探していてね……見つかるまではどうしても帰れないんだ」

「……………！」

極力刺激しないように言葉を選んだつもりだったが、少女は再び戦闘態勢を取ってエルクの緊縛を強めてきた。

『だったら、力づくで追い返す』

「いつ、痛い痛い！」

体に糸が食い込み、バラバラに切り刻まれるような痛みに襲われ

る。機嫌を損ねてしまったのか、締め付ける力にも手加減がない。

誰の目に見ても状況が悪く、本気で一旦逃げた方がいいかもしれないと考え始めた、その矢先のことだった。

「……っ」

足元のおぼつかなかった少女が、とうとう崩れるようにして倒れてしまったのだ。

「あっ！」

三人の声が重なる。相手が倒れたことで自由になったエルクは、すぐに駆け寄ってうつ伏せの少女を抱き起こした。

「ちよつと、大丈夫？」

既に意識は無く、目を閉じてぐったりしている姿からエルクに対する敵意や闘志は感じられない。

「よくわからないけど、無茶すぎじゃ——」

体を支えながら呼びかけていたエルクの言葉が止まる。

「エルク？」

「これ……」

近くで見ると、少女の全身は信じられないほど傷ついていることが分かった。

重傷と呼べる深手こそ負っていないものの、露出する腕や首筋には痛々しい裂傷や刺傷、青紫色の打撲痕まで多々見受けられる。どんな境遇で、彼女はこれほどの怪我を負わなければならなかったのだろう。

想像を絶する苦痛に苛まれていたはずなのに、彼女の振る舞いはそれらしい仕草は全く見受けられなかった。歳に見合わない強靱な精神力を感じさせるが、これではあまりにも不憫だ。

「と、とにかく……このままにはしておけないよね」

「エルクさーん」

「こつちも助けてー」

少女に集中しかけたエルクを二つの声が呼び止めた。

「ああ、ゴメン、忘れてたよ」

「忘れてたの!？」

タオルを敷いた上に少女を優しく寝かせ、それから身動きの取れなくなっている二人の解放へと向かう。実際は忘れていたわけではないのだが、妙に余裕を見せる二人よりも少女の容体の方がエルクにとつては見過ごせない点だったのだ。

「ちよつと待ってね……よし、これでだいじょ」

「このっ、バカアツ!」

「ふぐえっ!」

解放するなりメフィから鳩尾に蹴りを入れられ、エルクは苦悶にうずくまる羽目となった。

厚手のカーテンを閉め切っているため、白昼にも関わらず室内は暗く沈みこんでいる。

透かし彫りのテーブルに置かれた天使の像の前で、一人の老翁がテーブルに両肘をついて沈黙の中に溶け込んでいた。

「失礼します」

静寂が前触れなく崩壊し、藍色の服を着た女性が薄闇に入り込んでくる。入室から老人に会釈するまで動作に一切の無駄がなく、作り物のような印象が彼女の周りに付きまとう。

老人は女性の姿を一瞥するだけで、彫像のように静止したまま動かない。

ただし、それが無視ではないと知っている女性は、しばらくの間を開けてから無機質に口を開いた。

「……『奴ら』に動きがありました」

ただ、その一言だけ。

老人からの反応は相変わらず無かったが、女性はもう一度頭を下

げ、そして老人からの反応を待った。

「場所は」

その短い一言が、一瞬で部屋の空気を塗り替える。部屋中の装飾が牙を持ち、獲物を喰らい尽くさんと目を光らせているかのようだ。「レクタリア北、ヒューク山麓です。目撃された際は二人だったようです」

気圧されるでも自己主張するでもなく、女性は淡々と自身のペー
スを保って報告を続ける。目の前で猛る『部屋全て』を、鉄格子の
向こう側から傍観しているかのよう。

老人と女性の間には、お互いに決して干渉できない不落の壁が存
在しているかのようだった。

硬直する時間。全てが静止し、無音の時間が非常にゆっくりと流
れていく。

「もし『奴ら』が行動するようならば、阻止しろ。ただし人員は二
人までだ」

老人が、動いた。

闇の中でもはつきりと分かるほど瞳に炎を滾らせ、鋭い眼光を直
立する女性へと向けた。その途端、室内に充満していた殺気が纏め
て女性を凶悪に包み込む。

「かしこまりました」

それを肌で感じている女性は、それでも感情を動かされることな
く無表情で踵を返した。

「……」

扉が重厚な音を立てて口を閉ざし、老人は再び闇と静寂の狭間へ
と埋まる。

暗黒に身を委ねる彼が何を考えているのか、知る術はない。

27話 小さくも大きな誤解

レクタリアから西に進むと、周辺一帯の川の本流であるシクナ運河が姿を現す。

大陸でも屈指の水量を誇るこの運河は、周囲の環境に実に豊かな恵みをもたらしている。ひざが濡れる程度の水深には小さな魚影が散見でき、透き通った水によって育まれた深緑の森が川に沿って続いている。古い時代の文明人によって建設されたものだが、長い時間の間に自然物として馴染んでいて違和感がない。

人為の及ばない自然に満ち溢れたそこは、大陸でも有数の野生動物の宝庫である——ガルドはそう認識していた。

手ごろな大きさの石に腰を落ち着かせ、ガルドは川で遊ぶ旅の同行者に視線を向ける。

「冷たくてキレイな水ですね」

「そうね、魚もいっぱい」

移動ばかりで疲れただろうという配慮からの休憩だったのだが、リダにとっては体の疲労よりも水に対する興味の方が勝るようだ。歳の近いリオナもリダに付き合うことへの抵抗はないらしく、一緒になって川遊びを楽しんでいる。傍から見ると仲のいい姉妹のようだ。

「あんまり岸から離れるなよ。船舶の通路なんだから、中心はかなり深いはずだ」

「分かってますよー」

危険を考慮しての忠告も、魚影を追い求めているリダの耳にきちんと届いたのかは怪しいものがある。リオナがついているので過度な心配は不要なものの、できるだけ目を離さないようにしておいた方がいいだろう。

「いや、そもそも運河にこんな河川敷があること自体が変なんだよな……まあいいけど」

砂利の敷き詰められた河原は、いかにも自然に出来上がった川である。錯覚させる。古代の人々がそうしたディテールにまでこだわったと考えるのは流石に空想が過ぎるだろうが。

「つと、ここから先は深そうね。もう少し手前で遊びましょう」

「あうう、みんな逃げちゃいました」

「浅瀬にもたくさんいるわよ」

深みに向かおうとしたリダをリオナが引き留めたようだ。初対面時のイメージと違い、とても面倒見のいい少女であることが窺える。アドネツセの元では不機嫌そうな印象だった仏頂面は、ガルドとの旅に出てからあまり見ていない。特に、仲良くなったりリダとの会話が増えてからの変化は顕著だった。

ガルドとリダ、そしてリオナの旅が始まって数日。

「兄さんを、探したいの。ついでで構わない……お願い、私も連れて行って」

出発の際、ガルドにそう告げたりリオナの顔を思い返す。

何かを決意したような表情からは、彼女の並々ならぬ強い意志が感じられた。アドネツセが彼女に尽力しようとした理由を、ガルドはその時に理解した。

「見て見て、あそこにたくさん泳いでるわよ」

「うわあ……すごいですね」

「……」

微笑ましいやり取りを遠い目で見つめる。

彼女から詳しい事情を話そうとはせず、ガルドたちもあえて訊かないまま彼女を受け入れた。この状態をいつまでも保ってはいただろうが、急いで全てを知る必要もないのだ。

だからこそ、今のリオナの振る舞いがガルドに不安を感じさせた。リオナは真面目で自分の意志をしっかりと持っている反面、何でも

自分一人で抱え込んでしまいうらいがある。こうしてリダと無邪気に魚を追いかけていながら、その一方でガルドの負担を考えて無理をしているような気がしてならないのだ。

（何でも気兼ねなく打ち明けられるようになればいいんだけどな）
全ては時間が解決する問題でしかない。焦る必要はないと自身に言い聞かせたガルドは、今後の旅の展望を想像して僅かに頬を綻ばせた。

「ひゃわぶっ！」

独特な悲鳴によってガルドの瞑想が大胆に妨害される。

「ちょ、ちよつと大丈夫!？」

顔をあげてみると、水面に体の前半分を沈ませているリダをしゃがみ込んだリオナが助け起こしている様子が映った。

つまずいて転んだ、というのがここまでよく分かる状況というのも珍しい。普通の人には手をついて着水を回避するくらいはできるだろう。

もつとも、巨大な鉄斧を背負ったままのリダにバランスを要求する方が可哀想なのだ。

「ふえええ、びしょびしょになっちゃいました」

「あーあー、何やってんだよお前は」

「ご、ごめんなさい……」

呆れ顔で二人を岸に呼び戻す。傍で水飛沫を浴びたりオナはまだしも、ほぼ全身が水浸しになったリダは悲惨な有様だ。衣服も水分を吸収し、白い肌が服の下にうつすらと透けて見える。

これも予測できた事態であり、ガルドの対応は素早い。

「そのままじゃ風邪ひくぞ。着替え持ってくるから、とりあえず服全部脱いどけ」

「あ、はい」

「つつっ!？　ちょつ、いきなり何を言い出してるの!？」

着替えの指示を出したガルドに、突然リオナが顔を真っ赤にして

声を荒げた。上着を脱ぎかけたリダを制止し、啞然とする二人に向けて怒りとも羞恥ともつかない感情を向けてきている。

「ガルド、あなたがそんな人だとは思わなかったわ!」

「あの、リオナがなんでそんなに怒るのか分からないんですけど」

「リダもそんな簡単に実行しないの!　いくら年が離れてたって、女の子が男の人に裸を見せるなんてダメ!」

「……」

眼前に指を突き付けられ、しばらく沈黙するリダ。ガルドも口を開かず、数秒がその姿勢で費やされる。

やがて、リダの方がガルドに救助要請を送ってきた。

「またですよ。リオナにまで言われるなんて」

「そうだな、無理もない……　っていつか、まだ教えてなかったのか?」

「普通はわざわざ教えるようなことじゃありませんよ」

「……?　何の話?」

複雑な表情のリダとガルドの会話が、リオナには訳の分からないもののように聞こえたようだ。まだ顔を赤くしながらも、眉をひそめて困惑を露わにしている。

「こつちの話……　ってわけでもないか。うつかりしてたよ」

「こんなのゼツタイおかしいですよ」

「だから、二人は何の話をしてるの?」

焦らすとますます苛立たせてしまっだろう。不服そうにしているリダは差し置き、ガルドは彼女に事実を告げておくことにした。

「私、そんな変なこと言っただかしら?」

「いや、俺たちの不備だ。リオナは悪くない」

「僕は納得いかないんですけど……」

「???　リダがどうかしたの?」

「いや、こいつさ、男なんだよ。こんなナリしてるけどさ」

「……」

「……」

静寂。

リオナの視線がリダの全身を嘗め回す。凝視されたリダは恥ずかしそうに身をよじらせるが、誤解を解くために耐え忍んでいるようだ。そうやってモジモジしている姿はむしろ女の子のようなのだが。

「男……」

ぱっちりとした丸い瞳。ふわふわの黒いリボン。艶のある髪と、特徴的なポニーテール。

「……ホントに？」

「ホントにホントですっ！　どこからどう見ても男じゃないですか！」

どこからどう見ても少女にしか見えない。

本人は意地でも認めようとしないので、ガルドにとってもこのやり取りは面倒に感じられる。彼にとっては充分男らしくしているつもりであるようで、周囲のこの反応は気に入らないらしい。

まなじりを吊り上げながら、リダがびしょ濡れの服を勢いよく脱ぎ捨てる。上も下も、とにかく身に着けているものは全て。

「男ですから、ガルドに見られても平気ですっ！」

取り外した鉄斧を置きながらそう宣言し、ガルドの方へ振り返って胸を張って見せた。体が小さい分、威厳があるというよりは可愛らしいという表現がしっくりくる。

「……いや、だったらリオナに見られるのを恥ずかしがるべきじゃないのか」

「あ。……あ、ひゃあああ！？」

赤面して目を逸らすリオナに気づき、両手で体を抱きながら悲鳴をあげて隠そうとするリダ。ますます女の子のよう、というより狙っているとは思えない。

「ううん……まあ、その、ごめん」

「が、ガルド！　早く、早く服を！」

「お前つて奴は、全く……」

慌ただしいリダに頭を抱える羽目になるのはこれから先も変わらないだろう。ある意味で前途多難な旅路を憂い、ガルドは誰にも聞き取れないような溜息をひとつついた。

「ふう……」

一息をついたところで、エルクは次にすべきことを見失ってしまったことに気付いた。事態はひとまず収束したものの、蜘蛛族の少女の介抱がひと段落したことで何もすることがなくなってしまうのだ。

襲いかかってきた相手とはいえ、このまま置いて行くのも後味が悪い。彼らの里へ向かおうというのに、里へ入る前から心証を悪くしては人探しも難しくなるだろう。人によっては無視して先に進もうとするかもしれないが、三人の中で意識不明の少女を見捨てられる神経の持ち主は存在しなかった。

「すごいボロボロ……よくあんなに動けたね、この子」

メフィが沈痛な面持ちで少女を見下ろす。

横になっている少女は、肌の見えている部分がごとく怪我を負っている。顔が綺麗なままで残っているのが不思議なほど、全身が傷ついてしまっているのだ。対面した時にも見せつけられたそれらは、こうしてまじまじと見つめるとより一層痛々しさが増して感じられる。

「よっぽど僕らのことを追い返したかったのか……なんにしても、精神力はすごく強いみたいだね」

「なんだか私たちを恨んでいるようにも見えましたし……やっぱり、蜘蛛族は人間が里に入ることを認めないんでしょうか」

「だとしても行くしかないわよね。今さら無理ですってあの人に言えないし」

「……そうですね」

考えれば考えるほど、不安ばかりが先行して暗い影を落としていく。下手をすれば命の保障さえない場所であるのに、心中を明るく保っていられるはずもない。

「……二人は先に戻ってていいよ。あとは僕が」

「はいダメー。それ以上口にしないの」

「むぐっ」

メフィとシューラの身を案じて下山するよう言おうとしたところ、先読みしたメフィによって口を塞がれてしまった。

「エルク置いて降りられるわけないでしょ」

「そうですね。帰る時は三人一緒、ですからね？」

「……そうだね」

以前にも同じようなやり取りがあつたことを思い出し、学習しない自分を恥じながらエルクは照れ笑いをして見せた。

「……………っ」

「んっ？」

少女の口からかすかに息が漏れたのをメフィが聞き取り、彼女の顔に注目し始めた。彼女の容体を気にしていた二人も少女へと視線を集める。

「……………」

「どう？」

「気が付いたみたい」

「そうですね、よかった」

うつすらと目が開き、まず覗き込んでいるメフィと目が合う。それから周りに集まってきたエルクとシューラに目を移し、それぞれの顔を呆けた表情のまま眺める。

「ねえ、大丈夫？ どこか痛くない？」

「……………」

まだ状況が理解できていないのか、心ここにあらずといった様子だ。横になった姿勢から起き上がろうとせず、そのまま再び目を閉じてしまうのではないかという危うささえ感じられる。

「ねえ、傷は痛まないかな。ひどい怪我をしてるようだけど」

「……………」

エルクが重ねて声をかけてみるが、やはり反応は帰ってこない。

エルクに顔を向けただけで何かを考えているようには見えず、どう対応したものか判断に困る。

彼女の対応を今しばらく待った方がいいと考え、意思の疎通を諦めたエルクがその場に腰を下ろす。

「……………！！」

「あっ」

少女の変化はその瞬間に訪れた。

眼前のエルクを信じられないといった様子で凝視し、華奢な体を硬直させる。そしてバネ仕掛けのように体を起こし、燃え滾る炎のような敵意を再び瞳に宿らせた。

「……………」

「ああ、まだ動いちゃダメですよ。怪我がひどいんですから」

そのまま後方に下がろうとしたようだが、立ち上がろうとした瞬間に表情をひきつらせてうずくまってしまう。全身を蝕む数々の傷は、やはり彼女の行動を大きく束縛しているようだ。

「初めて会った時のシューラと似た反応だね」

「蜘蛛族も人間が嫌いって証明された訳ね」

「うん……できれば違ってほしかったよ」

シューラに支えられて体を寝かせ直す少女。なおもエルクをすさまじい形相で睨み付けており、体が動けばすぐさま襲いかかってきそうな雰囲気だ。

「……………！！」

「お、落ち着いてください。もう少し休んでおかないと」

「……………」

「ひつ……ひつうう、すみません」

興奮する少女をなだめようとしたシューラが威嚇されて怖気づいてしまう。世話をされることも不服に感じているのだろうが、臆病なシューラには酷な仕打ちだったかもしれない。

「……で、どうする？」

その様子を見ていたメフィがエルクの袖を引っ張ってきた。

「どうするって訊かれても」

「助けてくれてありがとー、お礼に里まで案内しますー、ほどはなににしても、これじゃまともに手当てもさせてもらえなさそうじゃない？」

「ん……」

メフィの言葉に反論できない。彼女の言う通り、少女はエルクたちが近づくことすら許さずにいる。こんな状態で治療を施せるとは思わない方がいいだろう。

「せめて彼女が動けるようになるまでは傍にしようよ」

「寝首をかかれないか心配ね……」

「そんな子じゃないよ。僕たちの事も、あくまで『追い返そう』としてただけだし」

「……どこまでも人がいいんだから、エルクは」

どこか呆れたような、しかし喜んでいるような微笑みを向けられた。

自身のお人好しな性格はエルクも自覚している。自分だけならばまだしも、それにメフィとシューラまでつき合わせてしまうのだからもう少し冷静になって然るべきだろう。

彼女たちは、エルクのそんなところを受け入れた上で一緒にいようとしてくれている。そしてそれに気付いている以上、エルクは彼女たちの好意を利用していると言っても間違いない。

「……少し早いけど、今日はここでキャンプにしよう」

自己嫌悪を抑えこんで口にできたのは、そんな簡潔な一言だけだ

った。

「ねえ、こつちで一緒に食べない？　そこそこおいしいよ、エルクの作ったごはん」

「……………」

夕食時になり、嵐のように荒れていた少女もだいぶ落ち着いてきたらしい。体も動かせる程度には回復したらしく、エルクが食事の準備を始めた頃には体を起こして体調を確認していた。

だが当然というべきか、エルクたちからは一歩距離を置いたまま必要以上に近寄ろうとせず、食事が始まってからはずっと空を見上げている。メフィが食事に誘ってみても、反応は予想通りのものだった。

「うー……何か食べた方がいいよ？　でないと傷の治りが遅くなっちゃうし」

「……………」

ジロリと睨まれ、メフィもどうしようもなくなって口を噤む。何を言おうとも、一緒に食事をするという選択肢は彼女にはないらしい。

「毒なんて入ってないのに……」

「まあ仕方ないよ。そんなすぐに信じるって方が無茶なんだから」

「エルクが言い出したんじゃない」

「それを言われると返す言葉がないんだけど」

少女の身を案じて一緒にいるというのに、その少女から拒絶されてしまっているのだ。矛盾と言えば矛盾した状況でもあり、なんともやりきれない心境になる。

「彼女に無理やり食べさせるわけにもいかないし、向こうから近づいてきてくれるのを待つしかないのかな」

「シューラほどあっさりとは分かってくれなさそうね」

「分かってくれてる、のかな？」

理由が理由なのでいまいち肯定しきれない。

「あの子はシューラよりずっと気難しそうだし、私たちの事も嫌いっぽいし」

「シューラなら異種族同士だし、少しは分かり合えるかも……あれ、シューラは？」

会話の途中から、隣にいたはずのシューラがいなくなっていることに気付く。食事を済ませた後はあるのだが、それを差し引いてもなぜか食器が一セット足りない。

「……ああ、あそこか」

なんとなく確信を持ちながら少女のいる方へ目をやる。すると予想通り、新しくよそった夕食を持って少女に近づいていくシューラの姿が見えた。

「視線だけであんなに怯えてたのに」

「面倒見がいいのよ。優しいよね、シューラは」

「同感」

どこまでも他人想いなところは自分以上かもしれない、とエルクはなんとなく考える。そうして思いやりの心を持つことには、人間が異種族かどうかなど関係ないのだ。

まだ目に見えてこない差別の存在が、どうしようもなく憎らしく感じられた。

「どうぞ」

湯気の立ち昇るスープを少女の脇に置いたシューラは、そのまま自分も少女に並んで腰を下ろした。シューラの中には間違いないく気づいているだろうが、あえて無視しているのか顔も向けようとしていない。

「温かくて元気が出ますよ」

「……」

沈黙したまま空を見続ける少女。もともと声帯を持っていないの

で声は出せないが、例え出せたとしても今の少女は何も話すつもりはないだろう。

しばらく返事を待ってみたシューラだったが、やはり一切の反応は帰ってこなかった。

「……仕方ないですね」

寂しげに微笑み、それから少女に合わせて空を見上げる。無理に飲ませようとはせず、少女と同じ景色を見てシューラの気持ちもそちらに向けられた。

少女はシューラ存在をやや気にしているようだが、やはり声はかけずに無視を徹底するつもりらしい。

「空、キレイですね」

「………」

空気が澄んでいるのか、見上げて映る星のまたたきは街中で見るそれよりもはるかに輝いている。高くそびえる木々が視界を狭めているものの、それを補ってなお余りある魅力に満ち溢れていた。

もう一度、シューラが少女の様子を窺う。空から視線を外さないまま、しかし自分の方を向いたシューラには気が付いたようだ。口をへの字に曲げ、いかにも機嫌が悪いことを演出しようとしている。元々あまり愛想がよくなかったため、そうした表情の変化は非常に薄い。それでも、すぐ隣で見ていたシューラはその変化を敏感に感じ取ることができた。

「……あのう」

しばらく迷っていたシューラだったが、やがて恐る恐る言葉を口にする。

「やっぱり、私たちはこれ以上山に入らない方がいいですよね？」

「……」
目を合わせずに頷く少女。そこに関しては今も意見の変化はないようだ。

「でしたら、あの、私たちの代わりに会ってきてもらえませんか？
それなら、私たちも無理にお邪魔しなくて済みますから」

「……」

相変わらず何の返事もないが、続きを待っているようにも見える。そう解釈したシューラはさらに話を続けていく。

「ええっと、あの、手紙とペンダントを預かっているんですよ。蜘蛛族の方だったんですけど、ずっと会っていない娘さんに渡してほしいって」

「……？」

そこまできて、初めて少女に動きが見られた。

シューラの言葉を聞いた途端、それまでは無かった輝きが目に宿り、ゆつくりと顔をシューラへと向けてきたのだ。そして話題への興味を隠すことなく、さらなる詳細を求めるように続きを促してきた。

「あ、あのう……？ 私たちが頼まれたのはそれだけで、あまり難しい内容ではないと思うんですけど」

『名前は？』

「え？」

簡潔な言葉が脳内に響く。

どうやら、彼女が初めて『糸』を使って会話を試みってくれたようだ。厳密には昼間の戦闘中もエルクに対し数語の語りかけをしていたのだが、意思の疎通を図っているのはこれが初めての事だった。

『名前。頼んできた、その人の』

「あ、はい……でもあの、すみません。訊き忘れてしまったんですよ」

蜘蛛族の男性の名前を思い出そうとして、当時はドタバタしていた最後まで名前を訊けなかったことを思い出す。多少は親しくなった間柄であるだけに、そのドジはうっかりと呼ぶには度が過ぎていえると言えるかもしれない。

「あ、でも、娘さんの名前は聞いてありますよ！ あの、その人のこと知ってたらぜひお願いします」

「……」

むしろ、尋ね人の名前まで知らなかったらどう探すつもりだったのか。それを問いかけるような視線が少女から浴びせられても、シューラは意に介せずになんて微笑む。

「今年で十五歳になったそうなんですけど……シオリさんって人、知りませんか？」

少女から語りかけてくれたことを嬉しく感じ、シューラは自然と笑顔を浮かべていた。少女の心がわずかでも開いたことを喜び、無意識のうちに饒舌になる。

だからこそ、その一言はある意味で迂闊だった。

「……！」

少女が硬直する。

糸で縛られたエルクのように、全身の挙動の一切が静止した。空のような青色を湛えた瞳でシューラをまっすぐ見つめ、心の中を覗き込もうとしているかのようだ。極端な無表情を貫いているものの、反応としてはこれ以上ないほどに分かりやすい。

「あの……？」

顕著な変化に流石のシューラも気づき、いくらか恐^{きょうだ}ろを蘇らせて少女と目を合わせる。

『シオリ？』

「は、はい……ご存じなんですか？」

少女の方から訊き返され、たじろぎつつもしつかりと言葉を返す。名前を再確認してきたあたり、心当たりがあるのだと推測できる。それが非常に親しい仲なのか、たまたま名前を知っている程度なのかは分からないが。

「……………」

表情を強張らせ、糸による発言もなくなり、完全に沈黙する少女。その姿からはあまりいい情報を期待できない。

「ひょっとして、シオリさん……」

『死んではない。生きてる』

「そ、そうですか」

最悪の事態ではないと分かり、ひとまず胸をなでおろす。

「それで、そのシオリさんはお知り合いなんですか？」

「……………」

シューラの問いには答えず、少女は会話を打ち切って再び夜空に没頭し始めてしまった。深追いしてほしくないという意思がひしひしと伝わり、これ以上会話は続けられないと痛感させられる。

だがその際に、少女さり気なくスプの器を手にとってからシューラに背を向けた。

ただそれだけのことだが、それがシューラには何よりも嬉しいことであった。

28話 蜘蛛の里へ(前)

「彼女がシオリって人について知ってるって？」

「シューラからの報告を聞いたエルクは思わず眉をひそめた。

「はい。どのくらい仲がいいのかは分かりませんが、ご存じなのは間違いないです」

「それは願ってもない話だけど……よく教えてくれたね？」

「あ、いえ、直接聞いたわけじゃないんです。名前に反応したので、そうじゃないかって思っただけで……」

「うーん、確かに可能性はあるだろうけど」

シューラを疑うわけではないが、根拠にして行動するには不安が残る。もう一つ確信に至るきっかけが無い限り、彼女に直接聞いただしたりはしないほうがいいだろう。

いずれにせよ、彼女が話しながらない以上無理に訊くのは可哀想だというのがエルクの結論だった。

「ひとまず体力は回復してきたみたいだね、でもあの様子だと、まだ一人で動き回るのは難しいんじゃないかな」

「……明日もここから動かないんですか？」

「支えてあげれば歩くくらいは大丈夫かも。彼女が蜘蛛族の里まで案内してくれば理想的だけど、僕たちに触られるのも嫌がってるしな……」

エルクやメフィとは、会話どころか目も合わせようとしない。特に協力する理由もない現状で彼女に案内を期待するのは難しいだろう。

「何とか心を開いてくれないでしょうか……」

「誰もがシューラみたいには切り替えられないんだよ。迫害されている側は特にね……今日はもう寝よう、疲れたでしょ」

簡素な就寝器具を取り出しながら、エルクは諦めたような力の無い溜息をついた。

すでに時間は深夜にまで及んでおり、エルクの置いたいくつかのランタンが森の中を不気味に照らしあげている。灯りの淡いオレンジ色が木々を塗り潰す闇色の中で孤立して輝き、暖かな光でありながら閉塞感を覚えさせられてしまう。

「……」

「怖い？」

「いえ、そうじゃないんですけど……なんだか、変な感じです」

シューラの瞳がエルクを、そしてランタンの前でノートに何か書いているメフィを見る。

「怖いはずなんですけど、エルクさんとメフィさんが一緒にいるって思うとホッとするんです。不思議ですよね」

「なんか……照れる」

背中あたりがむずかゆくなり、熱くなった顔を手で仰ぐエルク。頼られているというのは嬉しくもあるが、やはり気恥ずかしいものがある。真顔でエルクを見つめている様子から、シューラは本心からそう思っているのだろう。

「……ランタン、いくつかは点けたままにしておいたほうがいいよね」

「そうですね。真っ暗だと危ないですからね」

苦し紛れの言葉に対してもシューラは素直に頷く。

もはや何も言えなくなつたエルクは、ただ黙って就寝の準備を進めることにした。

「……………」

全員が寝静まつたのを見計らい、少女はゆっくりと体を起こす。点けたままのランタンのおかげで、月明かりの差し込まない状況でも三人の様子がよく確認できる。一か所に纏まり、少女ともやや距離を詰めて丸くなっているようだ。

彼らの傍らには猛獣除けの鈴が提げられ、少女のすぐ傍にも同じ

物が取りつけてられていて音を発している。食事の後始末なども獣をおびき寄せないよう工夫を凝らしており、野宿に関する相応の知識は備えているようだ。

「……………」

悪人ではないかもしれないが、油断のならない相手。それが少女の下した三人の評価だった。

特に、片腕だけで自身を引き落としたエルクに向けた警戒は強い。人間そのものに対する不信も加わり、必要以上に近づくまいという決心は強くなる一方だ。寝首をかかれはしないかと神経を尖らせるのも過ぎた心配とは言い切れないだろう。

まだ体力は戻っておらず、独りでの行動は危険が伴う。夜が明けて三人がどうするつもりなのかもよく分からない。今後の行動が予測できないからこそ、安易に判断を下すことは躊躇われてしまう。

「……………」

右腕に巻かれた包帯の端に視線を落とす。

自分の手当てをした。それが、少女にとって何よりも理解できないことだった。

彼らを襲撃したのは紛れもない事実だ。命を奪うつもりこそなかったものの、多少は怪我をさせても構わないと考えていた。

そんな相手を助けようとするだろうか。何か裏があるのではと勘ぐってみても、彼らの決定的なメリットとなり得る事項は思い当たらない。蜘蛛族に近づくためだとしても、その場にとどまって手負いの子供を介抱するより効率のいい方法はいくらでもある。

「……………」

彼らの純然たる好意——一瞬だけ浮かんだその可能性を、少女はすぐさま打ち消した。

人間を信用してはいけない。人間は卑劣な存在であり、親しくなっ

てはいけない。

幼い頃の誓いを思い出し、少女は改めて気を引き締め直す。

長年貫いてきたスタンスを今さら崩すつもりはない。だからこそ、

彼らとあまり関わるべきではないと結論づける。

「……………」

それでも、やはり少女の心の奥には釈然としない何かが依然として残っていた。

自身の意志が揺れ動いているのは少女も自覚している。それが分かっていたところで解消できるわけでもなく、結局はその場の流れに身を任せるしかないのだ。自分自身のことかどうにもならないもどかしさが、少女の苛立ちをより一層かきたてる。

少女にとって、このまま彼らの世話になり続けるのは苦痛以外の何物でもない。しかし同時に、安易に彼らとの離別を決意できない理由もあるのだ。

「……………」

彼らとの出会いはある種の運命と呼べるのかもしれない——それが下らない考えだと気づいて軽く自嘲すると、少女はゆっくりと浅い眠りに落ちていった。

エルクが目を覚ました時、森は深い霧に包まれていた。

一面を水に溶かしこんだような淡い乳白色が広がり、起き上がったばかりの肌にひんやりとした冷気が触れる。ほのかなランタンの灯りが霧の中に霞んで見える様は幻想的な妖しさがあり、現実とは違う世界に迷い込んでしまったかのようだ。

昨夜から一変した周囲を見回しながら立ちあがる。霧の存在を考慮しても少し薄暗いので、夜が明けてからあまり時間は経っていないようだ。当然のことながら、メフィとシューラの二人は気持ちよさそうに眠っていて起きそうにない。

「うーん、最近妙に朝が早くなったような……………」

眠りが浅くなったのだろうか、とエルクは表情を曇らせる。

ここ数日、目が覚める時間帯が極端に早朝へ寄っているのだ。実害はないものの、二人が起きるまでの空いた時間をいつもうまく潰せずにいる。

この霧では景色を眺めることもできない。暇つぶしの手をまた一つ奪われ、エルクはとりあえず手荷物の整理をすることにした。

「……って、あれ。ここに置いたはずなのに」

枕元にあったはずのリュックが見当たらない。寝ながら蹴飛ばしたりしてしまっただろうかと周囲を見渡し――

「……………」

両手でリュックを持ち上げて硬直している少女と目が合った。

体を起こした姿勢でリュックを眺めまわしていたようだ。蜘蛛族にとつてリュックは物珍しいのかもしれない、という解釈は無理があるだろう。

「んーっと」

「……………」

エルクが口を開いた途端に少女が反応を見せる。後ろめたいことをしている、という自覚はあるらしい。

「そんなにビクビクしなくても」

「……………」

「いや、だからって威嚇されるのもちょっとね……………」

気を許してもらえるほどの交流はまだない。拒絶の姿勢もある程度は仕方がないと割り切れるが、これほど極端だと対応に困ってしまう。

「……………」

しばらく動かなかった少女だが、唐突に持っていたリュックを突き出してきた。返す、という意味表示だろう。

「あ、ありがとう」

「……………」

リュックを受け取るなり、少女はそっぽを向いてしまった。

受け取ったリュックを見回してみるが、漁ったような形跡はない。

あくまで手に持って眺めていただけらしい。その行為に意味があるかどうかは別として、彼女の意図を察したエルクは少女にそつと声をかけた。

「あのさ、もしかして……探そうとしたの？」

「っ！」

何を、とまでは言わずとも彼女には伝わっているだろう。大袈裟な反応を見る限り当たりのようだ。

蜘蛛族の男性から預かっている手紙とペンダント。彼の娘であれば是が非でも欲しがるであろう品であり、常人以外でも他人に持たせておきたくないと考えて不思議ではない。

「あー、ごめん。大切なものだからさ、服の内ポケットにしまっているんだよ。そのリュックだとダメになっちゃうかもしれないし」

「……………」

少女の注意がエルクの上着に向けられる。しまっている辺りを軽く叩いて見せると、恨めしげだった少女の緯線にわずかな変化があった。

「渡しておいた方がいいかな」

「……………」

しばらく間を置いてから首を横に振る。

「そう？　僕が持つてるより安心できない？」

「……………」

「そこまで嫌がるなら無理にとは言わないけど……」

リュックを手にとって探そうとするほど気にかけているのに、そこで拒否する理由がエルクにはよく分からなかった。まだ一人では動けない状態で受け取っても仕方ないというのもあるかもしれないが。

無理に渡そうとしても絶対に受け取らないだろう。そう判断し、上着にかけていた手を下ろした。

それを眺めている少女は、どこか落ち着かない様子で指を捏ねくり回している。

「どうかした？」

「……………」

何か言いたそうにしているように見え、エルクは彼女からの発言を催促してみた。だが、顔を背けたままエルクと向き合おうとしない。

シューラとはいくらか言葉を交わしたらしいが、やはり人間相手に会話をするつもりはないのだろう。そう考え、エルクは彼女との意思疎通を諦めてリュックへ意識を向ける。

『怒らないの？』

少女から呼び止められたのはその直後だった。

驚いて顔を向けると、少女が顔を逸らしたままエルクの様子を窺っているのが見えた。それまでエルクを近づけまいとしていた様子から一転、怯える子犬のように震えながらエルクの言葉を待っている。

「怒るって、何を？」

『荷物、触ってたこと』

どうやら、勝手にリュックをいじっていたことを気にしているようだ。

その行為が背徳的と知っていてなお、どうしても預かっているものを見つけ出したかったのだろう。動機が許される理由にはなり得ないが、それを差し引いてもエルクに彼女を責めるつもりはない。

「触ってただけだし。それに、君の気持ちも少しは理解できるからね」

『何か盗んでたかもしれない』

「それはないよ」

「！」

この一言には流石に面食らったのか、少女は啞然とした表情をエルクに向けてきた。

『そんなことない』

「自分が一番わかってると思うけどなあ」

『手紙とペンダント、盗むつもりだった』

「いやいや、本気で中身を漁ろうとしてたらリュックを持ち上げたりはしないでしょ」

「……」

凶星らしい少女が沈黙する。

エルクのリュックは上から開くオーソドックスなタイプであり、当たり前だが中を覗くのに持ち上げる必要はない。彼女がリュックを持ち上げていたのは、後ろめたさから中身を物色できず、なんとか外側から見つけ出せないかと思案していたのだろう。

「もし見つけられてたとしても、そこまで優しい人が盗みを働くなんて思えなくてね」

「……」

思ったままを告げたエルクに、少女は訝しげな視線を向けてきた。

『お人好し？』

「あはは……うん、よく言われる。あんまりおせっかい焼くから、いつか絶対痛い目見るって呆れられてばかりだね」

一緒に旅をしている幼馴染には今なお言われ続けており、同伴者がいる以上は改善すべきだと自分自身でも感じている。根っからの性格に起因しているらしく、彼女からは変わっていないと評価されているが。

「行き過ぎると迷惑になるって分かてるつもりなだけだね……。やっぱり、迷惑だったかな？ 人間の僕たちと関わりたくなかった？」

前日から不安に感じていた事を恐る恐る確認する。今更な質問ではあるが、メフィとシューラまで巻き込んで余計な世話ばかり焼いていてはいけないという思いも大きくなりつつあるのだ。

『最初は、そうだった』

「最初はって、じゃあ今は……」

『認めたわけじゃない。ただ、』

「ただ？」

「……………」

言葉を途中で区切り黙り込んでしまう少女。何を言いかけていたのか、瞳にはそれまでなかった強い光が宿っている。

何かを決意したような、そんな輝きのようにエルクには映った。

「んあ？ おはよー、エルク」

起きてきたメフィが現状を確認し、間の抜けた挨拶を口にする。

少女が起きていることに対しては大きな反応を見せない。

「ん、おはよう。シューラはまだ寝てるの？」

「たぶん。あ、おはよー」

「……………」

メフィに声をかけられた少女は黙ってそっぽを向いてしまった。訊きたかったことは体よくかわされてしまったらしい。

今から追求するのもしつこく思われるだろう。そう考え、エルク

はこれからの事に話題をシフトすることにした。

「シューラが起きたら朝ごはんの準備しようか」

「ん、賛成。ちなみにメニューは？」

「うーん……パンにハムでも乗せようか。朝から重いものは食べるに
くいし」

「やった！ エルク分かってるじゃない」

上機嫌になったメフィを見て、朝食はパン派というメフィの発言を思い返す。一度の食事の献立だけでここまで喜べるというのはある意味で羨ましくなるほどだ。

「……………」

「む……そ、それはそれとして」

少女の視線に気づいたメフィが咳払いをして冷静さを取り戻す。

「結局、これからどうするの？」

「何を？」

「今日の予定。しばらくはここで待機つてことでオッケー？」

どうやらメフィも今後の行動についてエルクと同じ見解を持って

いるようだ。話が早いとばかりにその意見を肯定する。

「うん。この子が一人で動けるようになるまでは移動できないよね」

『余計なお世話』

「う……」

すかさず入った少女からの指摘にエルクは言葉を失う。正論ではあるのだが、このまま置き去りにしないというのは三人の共通意見だ。

「……いや、せめて君が里に帰れるようになるまでは一緒に居させてほしいよ。怪我させた一端を担ってるわけだし」

「そうそう。あ、里まで案内してくれるんだったら連れて行ってあげられると思うけど」

「……………」

すぐに否定するかと思われたが、少女は何かを考え込むように俯いてしまった。

この短い間に意見が変わるようなことがあっただろうか。それを考え始めたエルクは、そこで初めて少女の変化に気付いた。

先刻までとはエルクたちに対する「構え」が違う。単に敵として警戒しているだけでなく、獲物を前にした捕食者のような殺気が彼女からにじみ出ているのだ。

『分かった』

その一言までの長い静寂は、和やかになりつつあった場の空気を一変させるには充分な時間だった。

『案内する』

ある種の決意を感じさせる表情で、少女はエルクたちと向かい合う。

『蜘蛛族の、あたしたちの里へ』

それはまるで——文字通り蜘蛛の巣へと誘い込むような、不気味なほど冷たい誘惑のように感じられた。

「なぜ、二人と限定したのでしょか」

長い廊下を歩く老人の横に、若い男がついて歩き始めた。両者ともデザインの共通する青い制服を纏っており、同一の組織に身を置いていることが分かる。

「『奴ら』の存在を想定すれば、より人員を要するかと思いましたか」

「焦るな」

老人の短い一言で男は委縮して黙り込んだ。

「急ぐ必要はない。今はまだ……そう、見定めるべき時期だ」

「見定める、ですか」

「『奴ら』がこの機にどう動くのか……それを確かめる意味で、二人という数字は妥当であり最上級の答えだろう」

「つまり、今回の件については成否を問わないということでしょうか」

男の質問に老人は答えない。

口を噤んだまま老人は足を止め、廊下の片側に張られた巨大な窓から外へ視線を映した。

「我らだけではない、全ての人間の命運がかかっているのだ。目先の事ばかりに気を取られては、いずれ取り返しのつかないことになる」

「はい」

「だからこそ、我らは誰よりも冷静に事態を見極めなければならない。そのために生まれたのが『世界委員会』なのだから」

「おっしゃる通りです」

男が力強く頷く。その返答に一切の迷いはなく、老人の発言に対して心から敬意を表しているのが分かる。

再び歩き出した老人に男も続く。

そして彼らが去った後、廊下は再び静寂に包まれた。

調理の過程で火を使ったわけでもなく、その朝食は料理と呼ぶにはあまりに簡潔すぎる品だ。それでも旅の面々には好評のようで、メフィは二度もおかわりを要求してきた上にエルクより先に完食してしまっている。

「あの、エルクさん」

エルクの耳元で、シューラが声をひそめて囁いてきた。

「あの子、急に気が変わったみたいですけど……何があつたんですか？」

「それが僕にもよく……」

二人の視線が少女へと向けられる。それには気づいた上で無視するつもりなのか、少女は二人から若干ずれた方向に視線を向けてこちらの様子を窺っているようだ。

彼女が蜘蛛族の里までの案内を申し出てくれたことは、シューラにも起きて間もなく伝えてある。出発の準備も整えてあり、食事が済めばすぐにでも動き出すことが可能だ。

「考えが変わるきっかけみたいなことはありませんか？」

「……思いつかないなあ。今朝の話もそこまで突飛なものじゃなかったよ」

「分かってくれた……というわけではなさそうですね」

「うん。あ……そういえば、今朝話をした時からちよつと様子が変わったようには感じたかな。いい方向って雰囲気じゃないけど」

彼女の敵意には明確な変化があつた。それと彼女の心変わりにどれほど関わりがあるかは分からないが、全く無関係ということはないだろう。

「何か思うところがあったのかもしれないね。あるいは、里の場所を知られて構わないような手段を思いついたとか」

「こ、怖いこと言わないで下さいよ」

「ごめんごめん。でも、あの子が悪い子じゃないのはシューラもよく分かってるでしょ」

「そんな簡単に割り切れるものなんでしょうか……」

不安そうなシューラをよそに、エルクはパンの最後のひとかけらを口に放り込む。

エルクにとって彼女の思惑と彼女への信頼は関係のないものであり、何を企んでいたとしても彼女を疑うつもりはない。エルクの中ですでに彼女は信用できる人物として認識されており、彼女の申し出を受けるのに弊害となるものは何もなかったのだ。

例えそれが罠であったとしても、悪意を持って陥れようとしたのではないと『信じて』いる。

「でも今度こそ命の保障はないかもしれないんだよね……それはさすがに心配だよ」

そういう観点で、メフィとシューラを連れていることがどうしても気がかりになってしまふのだが。

「二人を巻き込んでまでする事じゃなかったかもしれないね……考えが甘かったかな、ごめん」

「……大丈夫、だと思えます。エルクさんが信じているなら、私もあの子を信じます」

怯えていたようだったシューラから、エルクの予想していなかったそんな言葉が返ってきた。

「それに、何かあったとしても、私たちはエルクさんがいればへっちゃらですから」

「……………」

「エルクさん？ 顔がトマトみたいになってますけど、大丈夫ですか？」

心配そうに覗き込んできたシューラに対し、エルクは思わず顔を

逸らしてしまった。

その発言に他意がないのはキョトンとした彼女の表情からよく分かる。だからこそ、異性との付き合いに慣れていないエルクにはどう対処していいか分からないのだ。

「風邪でもひいたんでしょか……山の気温は変わりやすいって言いますし、野宿の時に体が冷えてしまったのかもですね」
「いや、変わりやすいのは気温じゃなくて天候だと思うけど……」

突っ込みを入れることで、エルクは瞬間的な緊張から解放される。それがメフィとシューラの偽りない本心だと分かっている、やはり面と向かって言われて平然とはしていられない。メフィはそうしたことを積極的に口にする性格ではないので、これまでに免疫ができるきっかけはなかった。

「なんか、シューラと一緒にってからドキッとさせられることが増えた気がするよ」

「……それ、喜んでいいんですか？」

何でも隠さず打ち明けてくれるシューラだからこそその変化と言えるだろう。それが良いか悪いかまでは明言できないが。

「二人ともどうしたの？ 早く食べて出発しようよ」

「あ、はい！」

待ちきれなくなったらしいメフィが声をかけてきた。まだパンを少し残してたシューラは、それを急いで口に運んでからすぐに立ち上がる。

「ほら、エルクも」

「う、うん」

エルクは彼女ほどすぐに気持ちを切り替えられず、やるせない緊迫感を引きずったままゆっくりと立ち上がって出発の支度を整え始めた。

「……………」

無関心を装っていた少女は、気が付けば三人の様子に釘付けにな

っていた。

彼らは自分には何かを持っている。それが何であるかははっきりしないものの、それに対して羨望の感情を持っていると自覚した時、エルクたちから目が離せなくなってしまったのだ。

（なんでかな……胸が、苦しい）

ズキリと痛んだ部分を押さえつけ、感傷を心の奥にしまいこむ。

これからしようとしている事を想像すると、些細なことで後ろ向きになっている余裕などないのだ。

「……………」

少女はもう一度気を引き締め直し、自分自身を隠すように心の仮面をそっとかぶり直した。

29話 蜘蛛の里へ（後）

太い幹の木々がいくつも天を目指し、そこから広がる枝葉が空を覆っている。しかし、かなりの急勾配であるために下方の木に視線を向けると自然に見下ろす形となる。

「ひっ！」

ガラ、という小さい音と共に小石が急斜面を転がり落ちていく。そこに足を乗せかけていたシューラは、震えながらその足をゆっくりと引き戻した。

「あ、う、ううあ……」

恐怖で言葉もままならないようだ。目の前で移ろうとしていた足場が崩れたのだから無理もないだろう。

『糸で支えてる。大丈夫』

「慌てないようにね。慎重に進めば行けるから」

先行したメフィと少女がシューラを誘導する。独力で歩くことのできない少女だが、糸での補助は不安定なシューラの体をしっかりと支えられているらしい。

「これじゃほとんど崖だね。普通なら専用の装備が必要になるくらい」

「つまり、あれよね？ 戻る時もこうやって手伝ってもらわないと帰れないよね？」

不安げに問いかけるメフィに対し、エルクは何も返事できない。

今は帰り道の事まで考える余裕などないのだ。蜘蛛族の里に辿り着くことさえこの有様であり、目の前の難問だけで精一杯という次第である。

「あの子に会えてよかった……これは僕らだけじゃ無理だった」

「次はエルクだよー。ほら、早く」

「う、うん」

少女との出会いに心中で感謝しながら、エルクはメフィたちに追

いついたシューラの姿を確認した。今しがた彼女が苦戦していた悪路を、今度はエルクが渡る番なのだ。

「それじゃ、お願い」

「……………」

少女に合図を送ると、頷いた彼女がエルクに向けて手をかざす。

そうやって体に糸を繋いでいるようなのだが、エルクの方に巻きつかれたような感覚はない。蜘蛛族の糸はエルクの想像を超えた汎用性と利便性を兼ね備えているようだ。

「エルクー、足滑らせないでよ」

「分かってるってば」

急かすメフィには惑わされず、自分も油断をしてはならないと目の前の足場に意識を集中させる。

数少ない足場は苔むした岩や崩れかけの崖ばかりで、蜘蛛族以外を拒絶するかのような過酷な環境だ。ここを通らずとも山頂へは向かえるので、よほどのことがない限り一般人が近づくことはないと思われる。

まさしく自然の要塞。里の発見を恐れているとしても、糸を操る蜘蛛族にとって防衛はさほど難しくないだろう。少なくともこの環境でまともに動ける人間はいない。

（なんでだろう、違和感が……）

どこか釈然としないのだが、その理由がエルク自身でもよく分からない。

ただ一つはつきりと言えるのは、その『何か』がなければ今の状況にはなり得ていないということだ。

（隠れ住んでるんだから厳しい場所なのは不思議じゃないのに）
思案を巡らせながら次の足場へ飛び移る。

着地の直後、湿った苔を踏んだエルクは勢い良く足を滑らせた。

「わああ!？」

「あ、危ない!」

バランスを失ったエルクの体が足場から零れ落ちていく。近くに

掴まれるものもなく、そのまま重力に従って落下を始めた。

「……………」

「っ！」

表情を歪めながら少女が糸を引き上げる。それによりエルクの体は足場から飛び出した位置で止まった。

「びっ……………ビックリしたあ」

「心臓が、止まるかと……………」

メフィとシューラが先の足場で腰を抜かしているのが見えた。申し訳ないと思いつつも、糸に支えられている状態では自由に動くこともできない。

『集中して。危ない』

「ご、ごめん……………」

恨めし気な少女に対してエルクは小さくなることしかできなかった。自身の不注意が招いた失態であり、弁解の余地はない。

いろいろ考えるのは里に到着してからの方がよさそうだ。そう身に染みて実感したエルクは、心もとない足場の連続する山道を見上げて表情を引き締めなおす。

「エルクはバカね」

三人に追いついたエルクにまずかけられたのはメフィの罵声だった。

「ビックリさせないで下さいよ……………私、まだ足が震えてますよ」

シューラも珍しく責めるような口調だ。相応の事をしたので仕方ないのだが。

「ホントにごめん……………あれは全面的に僕が悪かったです」

思わず敬語になってしまうほどの気迫が二人から溢れている。ただし責めたてるような眼差しではなく、エルクの身を心から案じるが故の非難であることはよく分かった。

「で、無事だったから許すとして……………ねえ、里まであとどのくらいあるの？」

「……………」

糾弾を切り上げたメフィが話題の矛先を目的地へと変えた。話を振られた少女は周囲をいくらか見渡して現在位置を確認する。

『もう少し』

「そっか、よかった。あとちょっとだけよろしくね、えーと……あ、名前」

まだ彼女の名前を知らない気づいたメフィが名乗りを求めた。それなりに一緒に行動してきたので、名前を尋ねるのも不躰ではないだろう。

「……………」

「えと、名前は……」

『次。もう行く』

追及から逃れるようにして次の足場を確保に向かう少女。露骨に自己紹介を避けられ、メフィは軽くショックを受けたようだ。

「メフィ、合図してるよ」

「うっ……名前くらい教えてくれたって」

「ほら、オーバーに落ち込んでないで。後ろつかえてるんだから」
「わっ、分かってるわよ」

いくらか大袈裟なりアクションであるのは自覚していたようだ。

少女にはエルクたちと仲良くなるつもりがないのだろう。それが蜘蛛族共通の価値観だとしたら先が思いやられるが、それよりもエルクは別の可能性の方が浮かんできて仕方がない。

「そんな偶然あるのかなあ」

「どうかしました？」

「いや、独り言」

確信は持てないのでシユーラの疑問は適当にはぐらかし、視線を山の上部へと向ける。余計な事を考えていると、また先刻と同じ失態を晒しかねない。

淡い緑と立ち並ぶ木々の溢れる道なき行路は、まだまだ先まで続いているようだ。

「俺にはこのナイフが血に染まって見える……」

「オレにはお前がバカに見える。どう見ても新品だろうが」

真つ黒なマントに全身を包んだ見るからに怪しい男が二人、露店の前でナイフを物色していた。背格好や声色は似通っているものの、マントのせいでそれ以上の事は何も判断できない。

「聞こえる……聞こえるぞ！ 血の渴きを訴えるこの刃の嘆きの叫びが！」

「新品だって言ってるだろ……店に対する嫌がらせか？」

いかにも堅気の間人ではない物々しい外観ではあるのだが、ネジの外れた会話が全てを台無しにしてしまっている。声をかけなくなる、という観点ではどちらも変わらないのだが。

「そもそも、今回ナイフは必要ないだろ。殺しの仕事じゃないんだからよ」

「……クルトに問う」

「なんだよ」

「果たしてナイフは、真に殺生のみを生業とする武具であると言えるのか？ それはお前の知るナイフの一側面にすぎないという可能性を、お前は否定し得るのか？」

「いや、さっき血の渴きがどうこう言ってたのはお前じゃ」

「英雄は言った！ その刃に悪意はない。真に悪とするはナイフを握る人間である！ ならば俺もその言葉に従うまでだ！」

「オレはお前に対する殺意に満ち溢れてるぞ、ハイド」

クルトと呼ばれた男が声を震わせて静かに呟く。明確な殺気を感じさせる言葉に、ハイドと呼ばれた男も流石に口を噤んだ。

相手が沈黙したことを確認し、短い溜息をついてからクルトは口

を開いた。

「いいか、お前がそのナイフを買おうとしてるのは分かった。だが、仕事を理由にして購入を正当化しようってのは違っただろうが」

「……」

「回りくどい言い回しはいらねえから、正直にお前の気持ちを言うてみる」

「新しいナイフが欲しくなった」

「よろしい」

クルトが頷いて見せると、ハイドは大きくガツポーズをしてから店主に件のナイフを渡した。一連のやり取りを見ていた店主は、会話の内容についても一切詮索をせずに精算を済ませた。

色々な意味で、彼らと深く関わらない方がいいのは店主以外でも一目瞭然だっただろう。

「で……新しいナイフで、今回は何をやらかすんだ？」

店から離れ、通りを歩き始めて数分。呆れ顔のクルトは、今回の『仕事』に不安を覚え始めながら一応の確認を取ることにしていた。買ったばかりのナイフで、相方が何をしでかすか全く予想がつかなかったからだ。

隣を歩くハイドは、新しい玩具を買ってもらった子供のようにナイフを太陽に掲げたりしてその刃に見とれている。彼にとってナイフは、まさしく子供のそれと変わらない感覚なのかもしれない。

「クルトも分かっているはずだ。ナイフでする事なんて、一つしかないだろう」

「何度も言うが、殺しの仕事じゃないからな」

幾度となく繰り返した言葉を投げかけるクルト。ナイフに夢中になっている彼に届いているのか……そう心配した矢先、唐突にクルトと向かい合う形でハイドが立ち止まった。

「分かっている。だが、殺すだけがナイフじゃない」

「……さっきと言ってることが矛盾してないか？」

「言っただろう、俺は英雄の言葉に従うと」

それまでとは違い、極端に冷静な口調になったハイドが笑う。

「英雄の言う『真の悪』に、俺はなつてやるさ」

その一言は——冗談でも比喻でもない、ハイドという男の真実が現れていた。

彼の言葉の力を感じ取ったクルトは、額ににじんできた一粒の冷や汗に気付かないフリをして精一杯の虚勢を張って見せた。

「ったく、バカのくせに……いや、バカだからこそ俺なんかよりよっぽどタチが悪いな、お前は」

彼らの歩く先には、シダ大陸有数の霊山——ヒューク山が静かにそびえている。

永遠に続くかのような樹木の迷宮に、唐突な変化が訪れた。

「あつ」

最初に気が付いて反応したのはメフィだ。

久しぶりに見るような広めの平地が視界に入り、少女の誘導もそちらへと向かっている。それだけならばさほど気にとまることでもなかったのだが、山肌をくり抜いたような形でそこに家屋が存在していたのだ。

「あれって家よね？」

「僕にもそう見えるよ」

人間とはだいぶ違う様式ではあるものの、生活の痕跡が見られるそこは誰の目にも住居であることが分かる。

「つまり、里に入ったんですか？」

「……………」

シューラの問いかけに少女は答えず、件の足場に向かって糸を送る。そしてメフィに支えてもらいながらゆつくりと足場に向かって進んでいく。

「他の蜘蛛族の人は見当たらないね」

「というより、この一軒以外はどこも森ばかりですよ？」

シューラに指摘されて見渡してみるが、相変わらず緑の生い茂る山中の景色ばかりで確かに集落とは考えにくい。この一軒家のほうが周囲から浮いているのだ。

『早く』

少女に催促され、急いで二人の待つ平地へと向かう。それなりに足場がしっかりしており、先刻のように踏み外してしまうようなことはなかった。

「……これは」

間近でその家を見上げたエルクは、思わずそんな一言を漏らしてしまう。

その家は、エルクの想像していたよりもはるかに古めかしいものだった。より正確に言えば、エルクがこれまで見たどんな家よりも傷みきっていた。

風雨に晒されて黄土色になっている壁を見ても、それが木材なのかレンガなのかさえはつきり判別できない。盛んに生長したツタが壁をよじ登り、その痛々しい姿を少しでも隠そうとしているかのようだ。

いくつか取り付けられている窓には本物の蜘蛛の巣がいくつも見え隠れし、長く開け放たれていないというのがよく分かる。二階建てであるのが窓の配置でわかるが、二階はおろか一階の窓さえ使われた形跡のあるものが見当たらない。

打ち捨てられた廃墟——そのままであれば、エルクの解釈はそれで決定していただろう。

『入って』

呆然としていたエルクに、少女の淡白な一言が寄せられた。

『ここ、あたしの家』

「えっ」

驚愕のあまり声が漏れてしまう。

流石に失礼な感想が伝わってしまったらしく、少女が不機嫌そうに眉をひそめる。それでも咎めることはせず、毅然とした態度で目の前の自宅を見据えている。

『先に入ってる。ついて来て』

「へ？ あ、あれ？」

少女がそういうと同時に、建物に注目していたメフィが困惑の言葉を漏らした。

突然、少女がメフィから離れて一人で歩き始めたのだ。体力が回復したのかとも思われたが、どうやら家と体を糸で結びつけてなんとか自立移動をしているらしい。

少女はそのまま、エルクたちの様子を気にかけてつつ家の中へ姿を消してしまった。

取り残された三人はすぐに行動に移れず、しばし硬直する。

「あの子の家、なんだ」

「なんていうか……ボロボロね」

言葉を選ばないメフィの感想も否定ができない。少女の家であることはもちろん、現在使われているということ自体も容易には信じられなかった。

「とりあえずお邪魔しましょうよ。あの子、待ってますよ」

「そうだね。ここから先もあの子がいないと進めそうにないし」

更に奥地に向かおうにも、人の足だけで渡れる足場が見当たらない。言われた通り、今は彼女について行く他にないだろう。わざわざ彼女の自宅にあがりこむ必要もないように思えたが、待たせても悪いのでひとまず少女について行くことにした。

「お邪魔しまーす」

玄関をくぐると、まず埃の匂いが鼻についた。

最初の部屋に置かれていたのは、テーブルと椅子、そしてベッド

くらいだろうか。飾り気のあるインテリアは全く無く、単調な色彩の部屋は生活感をあまり感じられない。

テーブルとベッドにかろうじて使ったらしい跡が見える程度で、中を覗いてみても人が暮らしているとは思えない劣悪な環境だ。

「素朴な雰囲気のお家ですね」

シューラが二人とは違った感想を述べる。彼女は素でそう思っているかもしれないので突っ込んではいけないだろう。

「こつち」

少女が家の奥まで手招きしてきた。

それなりに大きな家であるらしく、奥には更にいくつかの部屋が存在が確認できる。彼女一人が生活するには広すぎるほどであり、手入れの充分行き届いていない理由の一つはそこにあるのかもしれない。

「ねえ、ちよつと待って」

どんどん奥に連れ込もうとする少女をメフィが呼び止めた。それを受けた少女は背を向けたまま立ち止まる。

「ひよつとしておもてなしとかしてくれようとしてる？　だとしたら嬉しいんだけど、私たちと一緒にいて嫌な思いしてないかな」

「……」

「人間、嫌いなんですよ？　それなのに家にまで上がらせてもらっちゃって……だから、どうしても気になるなーって思ってる」

「そうじゃない」

メフィの言葉を遮り、少女がゆっくりと踵を返す。

そして全員が部屋に入っていることを確認して、なにかを決意するかのように小さく頷く。

「あたしは、知りたいだけ」

直後、部屋の唯一の入り口である扉が乱暴な音を立てて閉まった。

「!？」

驚いたシューラが扉を開こうとするが、固く閉じられた扉はびくともしない。それが少女によるものだと言員がすぐに気づき、視線

が彼女へと集中する。

「ちよつと、これはどういふ……うわっ」

「きやつ」

状況を確認しようとしたところ、三人の体が微動だにしくなつてしまった。扉と共に三人の行動も糸で拘束されてしまったようだ。

「う、動けないよ!？」

「またこれか……あ、イテテ」

緊縛する力に躊躇はなく、体にめり込んで痛みが走っていく。山から追い出そうとしていた初対面の際とは違い、本気でこちらを痛めつけることも厭わないような顔つきになっている。

これまで淡々としていた様子から一変、暗く重い影をその身に宿したように映った。

『話してもらふ。パパのこと、知ってるだけせんぶ』

「ぱ、パパ？」

「え、ええつと、どういふことですか？」

束縛に抵抗しながらメフィとシユーラが質問を続ける。それは本心からの疑問ではなく、急変した現状に対する焦燥を誤魔化そうしているだけのようだ。

そんな間に合わせの質問にも、少女は律儀に答えを返す。

『あなたたちが探していたのは、あたし』

自身の胸に手を当て、緊迫した表情に強い決意を抱いている。

『シオリは、あたしのこと。あなたたちが会ったのは、あたしのパパ』

糸の声から感情を消し去り、少女——シオリは氷のような視線で三人を睨みつけた。

「えええ!？」

目を丸くしたメフィが叫び、のけ反ろうとして糸に阻まれる。ごく僅かでも体が動かないのは、それだけ糸が全身を余裕なく縛りつけているからだろう。

「もつと早く言つてよ!　なんで今まで黙ってたの?」

「それらしい素振りはあると思うけど……」

「え、そうなんですか」

エルクも最初から疑っていたわけではないが、シオリの態度も分かりやすい部分がそれなりにあった。本人なら名乗り出るだろうと考えていたため、エルクの方から追及はしなかったが。

「だから、わざわざここまで僕たちを連れてきた理由が分からないだよ。手紙とペンダントだって、途中で手に入れるチャンスはたくさんあったはずなのに」

「エルクの言っていることがさっぱり理解できない」

「あ、そう……」

メフィには後で個別に説明をする必要があるようだ。

『訊きたいことがたくさんあった。それだけ』

「ああ……お父さんの事知りたいんだったね」

具体性のほとんどない説明だったが、エルクはその言葉だけで納得した。

人間を信用していないからこそ、自宅という『自分のフィールド』の選択は間違っていない。地の利はもちろんのこと、蜘蛛族である彼女ならばこうして自由を奪うことも容易くなる。

だからこそ、現状のような『脅迫』が彼女の選択肢として存在しても不思議ではない。

「訊いてくれればいつでも話したのに……って言っても信じてもらえないか」

ここまでする必要が無いというのは、エルクの本心を知っているからこそ出せる結論だ。エルクを信用していないシオリにとってこれが最も確実かつ正確な情報を得られる手段だったのだろう。

早い話が、シオリはどうしても父親の安否を確かめたかったのだ。『白状して。パパは今どこにいるの？ 無事でいるの？』

絶対零度だった眼差しに、子供らしさの残る幼い光が灯る。不安と期待の混在するそこには、彼女の父を愛する気持ちが溢れているかのようだ。

「やっぱり悪い子じゃなかったね」

「……？」

かみ合わない返答にシオリが眉をひそめる。

メフィとシユーラも腑に落ちなさそうな顔をしており、エルクの意図を正確には理解してもらえなかったようだ。

「エルクさん。今の状況、分かってますか？」

「そりゃまあ。でも、彼女だってお父さんの無事を確かめようと一生懸命なんだよ。手段はちょっと乱暴かもしれないけど……身内のことを心配するのは間違った事じゃない」

「それはそうですね……」

「だから安心したんだ。ちゃんと届けられるか心配だったから」

彼らの事情をエルクたちは知らない。なぜ二人が離れ離れになったのか、シオリは長く会っていない父親をどう思っているのか、不安になる要素はいくらでもあった。状況によっては渡すのを躊躇っていたかもしれない。

父親について言及するシオリの姿は、そんなエルクの懸念を吹き飛ばすには十分すぎるほど純粹だった。

「僕たちも詳しくは知らないけどね。分かる限りはできるだけ答えるよ」

体を全く動かせない状態のまま微笑みかける。

「……っ！？」

それを受けたシオリは、これまでにないほど困惑して見せた。糸での対話も忘れ、目をぐるぐる回して今しがたの言葉を咀嚼しているようだ。

「っていうか、その前に渡すもの渡しちゃったほうがいいんじゃないの？」

「そうですね。元々はそれが目的だったわけですし」

「あ、そうだね」

女子二人から指摘され、エルクは約束の品を取り出そうとする。だが当然ながら、動きを封じられている状態では上着のポケットに

手が届かない。

「あのー、できればこの拘束を解いてもらえると……」
「っ!!」

黙っていたシオリが過剰反応して糸を引き絞る。やはり解放してくれそうな雰囲気ではなさそうだ。

「不審だったかなあ、やっぱり」

『信じない。人間なんて、あたしは信じない!』

強い語調で断言され、三人はそろって返す言葉を見失ってしまう。こつした偏見については全員が把握していた事であり、一朝一夕には解消できないことも分かっている。

「……!」

感情的になりすぎたと自覚したのか、すぐにシオリは冷静さを取り戻してエルクたちを睨み直す。それでも先刻の発言を撤回しようとはせず、いくらか不機嫌になっているのが表情から伝わってきた。

『ホントのことだけ言って。ウソついたら、山に捨てる』

「今さらつと怖いこと言いませんでした?」

念を押しながらではあるが、ようやくシオリの側もエルクたちの言葉に耳を傾ける準備ができたようだ。

彼女としても複雑な心境だろう。人間を信用はできないが、その人間からしか父親の情報を得られないのだ。善意のつもりで話をしたとして、いったいどこまでが事実として彼女に届くだろうか。

脅迫を試みたのは、情報の信憑性を高める狙いもあったのかもしれない。

「話の前にこの糸を何とかしてほしいんだけど」

『逃げたら困る。このまま』

「逃げるって言ったって、この家の周りを私たちだけで移動するなんて無理よ?」

『それでも』

人間嫌いの彼女にとって、これが最大の妥協点なのだろう。手紙とペンダントの受け渡しは後回しにするしかないようだ。

「えーっとそれじゃあ、何かから話せばいいかな」

エルクもまたその待遇に折り合いをつけ、本題を切り出すべく口を開く。

それと同時に、耳障りな音を立てて家の玄関が乱暴に叩かれた。

30話 孤高の里へ

話を聞く姿勢になっていたシオリが目を見開いて玄関の方向を見つめる。どうやら家のすぐ外に誰かがやって来たようなのだが、場所が場所であるだけにエルクたちの不安は嫌でも引き上げられてしまう。

「誰か来たのかな」

「他の蜘蛛族の方……ですよね、やっぱり」

もともと人間は近づくことのできないような場所であり、シユーラの予想はまず当たっているだろう。

今の状況を見られた場合、どんな扱いを受けるのか予想ができない。動けないのいいことに^{なぶ}翻られる可能性も考えられる。そこまではないかなくとも、蜘蛛族にとつて人間であるエルクとメフィは快い存在ではないだろう。

「……」

シオリは先刻よりも更に表情を歪ませ、苛立ちを隠そうともせず
に玄関へと向かう。硬直するエルクたちの横をすり抜け、糸を手繰
つて部屋の扉を開く。

「誰が来たの？ シオリの友だち？」

無言で立ち去ろうとするシオリにメフィが声をかける。そんな場合ではないとエルクは突っ込みかけたが、呼びかけられた当人は複雑な面持ちでメフィに振り返っていた。

『たぶん、上の人の犬』

「犬……」

あまりいい響きではないため詳しく尋ねることが憚られる。シオリ自身も、心当たりの人物に対して好ましい印象を持っていないようだ。

『待ってて。すぐ戻る』

「って、このままで？ ちょっと、おーい……行っちゃった」

メフィによる制止も空しく、エルクたちをそのままにしてシオリは玄関へと姿を消してしまった。

「ひどいよ、このままにして行っちゃうなんて」
「ないがしろにされたメフィが唇を尖らせる。」

予告なく動きを封じられたため、今の三人は動作の一部分を彫像に彫りだしたかのようだ。文句の尽きないメフィは、右腕で腰のベルトを握った姿勢のまま固まっている。

「うっ、首が痒い……掻けない……！」

「怒ってるのはそなんだ……。ほどうたら逃げるって思ったのかもしれないね。僕らの事はあんまり信用してないみたいだし」

「でも、話は聞こうとしてくれましたよね。全く信じてないっていうわけでもなさそうでしたよ」

「うん。あの子もだいぶ悩んでるみたいだったからね。信じられないうっていうか、信じたくないって感じかな」

対話の際の彼女を思い返してみても、彼女の心はひどく揺れ動いているようだった。これから彼女がどう決意を固めるのか、そこにエルクたちが口出しすべきではないだろう。

「誤解もあると思うんですけど……本当にどうしようもないんですよか。せつかく会えたんですから、シオリさんとも仲良くなりたいです」

「気持ちには伝わってると思うよ。ただ、状況がそれを許してくれないかもしれない」

今後、彼女とともに会話をする機会は二度と無いかもしれない。手紙とペンダントを渡してしまえば、彼女との接点は無くなってしまうのだ。

今という短い期間で彼女の心を開くというのは簡単な事ではない。「そうですか……」

心から残念そうにするシユーラに、メフィが励ますように言葉をかけた。

「まだそうと決まったわけじゃないよ。今しか会えないなら、今仲

良くなればいいじゃない」

「そ、そうですね！」

（それは向こうの気持ち次第じゃないかな……）

彼女から拒絶されればエルクたちからはどうしようもないだろう。現在は彼女がこちらを引き留めているようなものだが、良好な関係を築くには難しい状態だ。

もっとも、二人の考え方もまた間違いではない。彼女たちの気持ちにシオリが応えようとしてくれれば、時間の短さは問題でなくなるだろう。口に出すのは野暮だろうと考え、エルクは黙って二人の言葉に聞き入ることにした。

「ん？」

他愛もない雑談に花を咲かせていたところ、玄関から騒々しい物音が響いてきた。

それだけならシオリと訪問者が何か揉めていると考えてあまり気にしなかっただろう。だが、その騒音は乱暴な足音を伴ってこちらに近づいてきているようだ。

「え、なに？ 何？」

「こつちに来る……？」

困惑するメフィやシューラをよそに、足音はどんどん大きくなる。荒い足取りやその数からシオリでないことは確実だ。

そしてそれを確かめさせるかのように、部屋の扉が吹き飛ぶようにして開いた。

「っ！」

威圧感を伴って上り込んできたのは三人の男。最後尾の男の腕を掴んで引き留めようとしているシオリも一緒にいる。引き攣った表情を見る限り、彼らと親しい間柄ではないようだ。

全員が鳴子のようなものを提げた変わった格好をしており、歩きたびに渴いた音を鳴らしている。不安を呼び覚ますような音は、聞いているだけで思わず顔が強張ってしまう。

「あー……どちら様でしょう」

得体の知れない圧迫感に耐え兼ね、エルクは様子を窺いながら対話を試みることにした。

「エルク、それ私たちが言えるセリフ？」

「それはそうだけど、他に何言えればいいのさ」

現段階では、彼らが蜘蛛族であることくらいしか分からない。訊こうと思えば他にも色々あっただろうが、咄嗟に思いついたのがこの質問だったのだ。

「……」

先頭の男がエルクたちの顔を一瞥する。

その瞳には、哀れみとも蔑みともつかない、冷やかな感情を汲み取ることができた。

どうやら、彼らもエルクとまともに会話をするつもりはないらしい。

「……！」

男たちとの間にシオリが割り込んでくる。エルクたちに背を向け、自分の倍近い背丈の男を物怖じせずに見み付けた。

「……！」

「……」

男の一人がシオリに掴みかかる勢いで体を乗り出す。対するシオリも一歩も退かずその迫力に立ち向かっている。

その様子をひやひやしながら見守っていたエルクは、あることに気付いてメファイたちに声をかけた。

「ひょっとして、あっちだけで会話してる？」

「そうみたい」

厳しい表情や身振りなどから察するに、どうやら何か口論をしているようだ。

部外者に聞かれたくない内容なのか、単に忘れていただけなのか。とにかく糸がエルクたちに繋がっていないので、話している内容は一切伝わってこない。

やがて決着がついたのか、男たちの注目がシオリからエルクたちに移った。そして先頭の男が一步踏み出し、糸越しに語りかけてきた。

『人間の客人よ。すまないが、我々と共に来てもらえるだろうか』
「えっ？」

雑な言葉を投げかけられると予想していたエルクは、意外に丁寧な対応に驚いてしまった。エルクたちに良い印象こそ持っていないのはよく分かるが、それを態度に表さないという節義はありがたい。

「……」
「……っ」

男がシオリに目配せをする。シオリはそれを受けて眉を顰めたものの、渋々といった様子で右手をかざした。

「あ」
「ひゃうっ」

その途端、エルクたちを捕縛していた糸が一斉に効力を失って緩んだ。体重を任せていたらしいシューラが思い切り前につんのめる。「ふう、やっと動かせるようになった」

「首痒いー」
「……」

いかにも不満そうな様子のシオリ。男たちに指示されて嫌々エルクたちを解放したのだろう。まさに彼女の求める情報を与えようとしていたところであり、歯がゆい気持ちにはエルクにもよく分かる。

そんな事情など知る由もなく、男は休む間もなく話を進めていく。

『里長が面談を所望している』
「里長？」

『我らの民をまとめるお方だ。外界からの探訪者ということで、君たちの話を聞きたいそうだ』

「里長……偉い人ってことだね。なんで私たちと」

『詳しくは後ほど話そう。今はとりあえずついて来てもらえるか』
無理やりではないものの、選択権はないに等しい。

協力を拒んだところで、山中を移動するには蜘蛛族の協力が不可欠なのだ。最終的にはそれを盾にされて聞き入れざるを得なくなるのが目に見えている。

「あまり深く関わるつもりはなかったんですけどね……分かりました」

ここで刃向うメリットは薄い。そう判断し、エルクは彼らの要求を呑むことにした。蜘蛛族の方から接触を図ってきた以上避けることはできないだろう。

「あたしも行く」

黙り込んでいたシオリも名乗りを上げた。

「あたしにも責任がある。一緒に行く」

「彼らを里に招き入れた責任、か？」

「そう」

男の問いかけに対し、シオリは無機質に頷く。

エルクたちに対してもそうだが、男はシオリの事を侮蔑に近い眼で見ているようだ。言葉にこそ出ないものの、一挙一動にその片鱗が見て取れる。

そしてシオリもまた、彼らに敵意を持っているのが分かった。

「動けるか？」

「あ、はい。大丈夫です」

「では急ごう。時間を無駄にはしたくない」

シオリとはそれ以上顔も合わせようとせず、三人の男が部屋の外へとつま先を向ける。見た目にも負傷しているのが分かるシオリへの気遣いは一切ない。

ただ、そこに関して部外者であるエルクたちから言えることは何もないだろう。

「はあ……」

めまぐるしく移り変わる状況についていっていなかったのか、シユーラが一拍子置くように溜息をついた。外に向かった男の後を追

いかなければいけないのだが、気持ちの整理をつける暇が欲しかったのはエルクも一緒だ。

「とにかく……言う通りにするしかないよね」

「そ、そうですね」

今の立ち位置を言葉に表すと、混沌としていた頭の中がいくらか落ち着いてきた。シューラも冷静に現状を把握できたようで、緊縛されていた箇所をさすりながら家の外へ注意を向けている。

「……」

そのまますぐに外へ向かおうとしたのだが、唐突にメフィが足を止めた。何事かと問いかける暇もなく、出入り口から向きを変えて顔色の悪いシオリに駆け寄っていく。

「シオリ、ゴメンね？」

「！」

呆然としていたシオリは、声をかけられるなりびくりと体を震わせた。エルクたちを脅しつけていた時の威勢はすっかり影をひそめ、全てに対して恐怖を抱いているかのように小さく縮こまってしまっている。

「なんだかよく分からないことになっちゃったけど……あっちの用事が済んだら、ちゃんとお父さんの話するから」

「……」

「また私が支えるから、とりあえず一緒に行こう？」

「……」

手を差し出しながら微笑むメフィに、シオリは驚きながらも小さく頷いた。

男たちにはないがしろにされた彼女への配慮なのだろう。気を許していなかったはずのシオリは、その言葉に抗わず素直にメフィの手を取った。

「メフィ……すごいね」

「えっそう？」

「うん。よく気が回るなあって……ホントにすごいと思う」

「そ、それほども……当然の事じゃない」

彼女の行動に心からの賞賛を送る。

自分のことで精いっぱいだったエルクには、シオリの事を気にかける余裕などなかった。自身の身の安全さえ保障できていないのはメフィも同じであるはずなのに、彼女はシオリの事を心配して声をかけたのだ。

よほど予想外だったのか、シオリが目を丸くしてメフィを見つめた。その視線に気づき、メフィもシオリの目を見つめ返す。

「……………」

「どうかした？」

「なんでも、ない」

照れたように慌てて顔を逸らすシオリを見て、メフィの笑顔は一層明るいものとなった。

「お前は里に人間を呼び寄せた。それが掟に背いているというのは分かっているな」

メフィに支えられて歩きながら、シオリは男たちとの会話を思い返す。

人間を嫌っているシオリにとって、里の掟など改めて確認する必要もないものだった。もともと蜘蛛族以外には立ち入ることすら難しい土地なので、そんな機会に巡り合うこと自体あり得ないとさえ考えていたのだ。

しかし現実には、シオリは自らの意志で人間を里に招き入れた。たとえ里の外れの自宅だけであつても掟を破ったことに変わりはない。何かしらの処罰は受けることになるだろう。

それでも、後悔はしていない。

掟に背いたとしても、父の行方を何としても確かめたかったのだ。何年也会っていないせいで顔もろくに覚えていない父親だとしても、その足跡を追うためなら躊躇いはなかった。

（人間に引き離されたパパのことを人間に訊くしかないなんて……
出来の悪い皮肉）

心中で悪態をつきながらも、隣を歩くエルクたちに対しては不思議と深い憎悪を覚えていないことに気付いた。

言葉ではうまく言い表せないが、彼らと一緒にいることを不快に感じているわけではない。人間に対する評価を改めてはいないものの、彼らが父親を奪った人間とは別種であることは十分理解している。

（人間を認めようとは、思わないけど……）

長年抱いてきた価値観はそう簡単には崩れない。だからこそ未だに彼らと正面から向き合わずにいるのだ。

意識して避けているようなもので、彼らに対する背徳感も少なからずある。今の関係のままではいられないことも分かっているつもりだ。

今後について考える時間はまだある。

だからシオリは、考えることを決して諦めない。

それが、里の掟よりも彼女が大事にしている信念であるから。

「まだ着かないの？」

移動を始めて最初に音を上げたのはメフィだった。

『あと少しだ。辛抱してくれ』

「そればかりじゃない……おんなじ景色ばかりだし」

メフィに付いてサポートしている男に口を尖らせている。半ば強引に連れて行かれているという状況のためか、彼女の発言にも遠慮がない。

「あそこまで迷いなく文句が言えるのもすごいよね」

「それがメフィさんですからね」

「確かに」

男たちを刺激してしまわないかと肝を冷やしたエルクだったが、子供の言葉として上手く聞き流してくれているようだ。エルクのサボート役の男も体調などに気を配ってくれたりして、むしろ丁寧に扱われているように感じられる。

『あそこに岩が見えるだろう』

「あ、はい」

男が指差した先を見上げると、確かに巨大な一枚岩がせり出しているのが見えた。

『あの上から里を一望できる。そのまま下りていけば近道でもある』

「つまり、あそこを目指すんですね」

その岩はエルクたちのいる地点よりもかなり高い位置にそびえており、その先の展望を一切分からなくしている。登りやすそうな凹凸は見受けられるが、やはり蜘蛛族の糸の力が無ければ上に立つことは難しいだろう。

『先に登っておこうか』

『いや、こつちにはシオリがいる。こいつにも手伝わせよう』

「……………」

メフィとシオリを連れた男が岩の上部に向かって手をかざす。二人連れているためか、目に見える太さの糸が繰り出されて岩の上部へ射出された。

シオリに手伝わせるというのは、上から後続を引き上げようということだろう。登る作業は強制していない分だけ、彼女の怪我を配慮していると言えるだろうか。

『しっかり掴まっていてくれ』

「オッケー」

まずはメフィが、先行する男に引つ張られる形で岩を登り始める。糸のおかげなのか身のこなしが非常に軽く、流れるようにその姿が上昇していく。

「うわあ、体が軽い！」

『暴れると、糸が切れる』

「えっ……き、気を付けるね」

シオリの一言ですぐさま大人しくなるメフィ。慎重さを取り戻すと、素早く頂上まで登って行った。

「よしっ。エルクー、シューラー、早くおいでよー！」

メフィの声が上方から降り注いでくる。遠足に来た子供のようにはしゃぐ様子から察するに、不満を抱きつつも今の状況をかなり楽しんでるようだ。

『よし。次、我らも行こうか』

「分かりました」

エルクに付いている男が岩に近づいて合図を送る。エルクが傍によると、上から二本の細い糸が飛んできてエルクに巻きついた。先行した男とシオリの糸だろう。

体重の多くを支えてくれているようなので、転落死の恐怖は幾分か和らいだ。もちろんまかせっきりにするわけにはいけないので、自身の腕でもしっかりと岩の突起を掴む。

「それじゃあ、行きますよ」

上の二人に呼び掛けてから窪みに足を引っかけ、慎重に体を持ち上げた。二人にもそれが伝わったようで、魚釣りのようにエルクの体が引っぱられていく。

糸のサポートは想像以上に力強く、腕の力だけでも登っていきそうなのだ。遠くに見えていた頂^{いただき}が見る見るうちに近づいてくる。

「……すごいや」

滑るように断崖を登っていく疾走感に感嘆の息が漏れた。

自分が蜘蛛族になったような感覚で、メフィが注意されるほど興奮してしまったのも納得できる。それほどまでに新鮮な感動がエルクの中を駆け抜けていったのだ。

「エルクっ」

「え、メフィ？」

手を伸ばして次の突起を掴もうとしたところ、その手をメフィが握りしめてきた。気が付かないうちに上部までたどり着いてしまったようだ。

「よい、しよっ」

「あ、ありがとう」

メフィも加わった三人でエルクを岩の上まで引き上げる。二人目の男もすぐに追いつき、あっという間に蜘蛛族の疑似体験は終了してしまった。

「あとはシューラだけね」

「うん。……うわっ、高い」

見下ろしてみても改めてその高度を目の当たりにし、驚嘆が思わず言葉として表れる。慣れない感覚のせいで、登っている間の距離感がおかしくなっていたようだ。

『こちらは大丈夫だ』

「あ、はい。よろしくお願いします」

シューラも準備が整ったらしく、男二人とシオリが岩下に向かい糸を放つ。エルク自身も体験したことなのであまり不安はしていないが、やはり登ろうとしているシューラから目が離せない。

『これ、上げられるかも』

『ああ。一気に引き上げたほうがあの娘の負担にならないだろう』

「はい？ いえ、私は別に……あ、ひゃああああ」

三人分の糸はかなりの強度になるらしく、シューラはほとんど糸に持ち上げられているような状態だ。焦ったような悲鳴が糸に吊り上げられて一気に近づいてくる。

「シューラ、掴まって！」

「ひゅええっ？ は、はい」

差し出された手を夢中で握りしめるシューラ。混乱した様子を見る限り、エルクやメフィとは違った感想を持ったかもしれない。

「あ……」

その光景を見てみると、エルクの脳裏にある記憶が蘇ってきた。

その記憶を鮮明に思い出したエルクは一瞬だけ表情を曇らせ、すぐにそれを振り払う。

「はふあ、び、ビックリしました」

平らな場所に足が着くなり、シューラは荒くなった呼吸を懸命に整え始める。彼女の中ではエルクの考えていた以上の恐怖が溜まっていたのかもしれない。

『こついつた経験があまりないようだな。こちらも少々配慮に欠けた』

『うん。ごめん』

「いえ、良い経験になりました」

「足震えながら言っても、ねえ？」

「僕に振らないでよ」

今にも転びそうなシューラを危なっかしく思いつつ、全員が無事に登り切れたことにエルクは安堵を覚えた。負のデジャヴは忘れ、進む方向に視線を向ける。

「ここから里が見えるんですね？」

『反対側に寄れば下に見えるはずだ』

「なるほど」

岩は想定していたよりも幅があり、もっと近寄らなければ下を臨むことはできないようだ。そちらにも茂っているはずの木々の先端さえも見えないので、反対側も崖のようになってるのが窺える。

男の答えを受け、足場に気を遣いながらそちらへ近づいていく。興味をそそれたらしいメフィと、独りにされたくないらしいシューラも後を追ってやって来る。

すると間もなく、明らかに自然のものではない何かの姿が眼下に映り始めた。

「わああ……」

三人の溜息が綺麗に重なる。

山の急斜面を覆う深緑の森の中に、溶け込むようにして家々が建

てられているのが分かった。完全に自然を排除するのではなく、それらと共生することを目的として住居の構造が工夫されているようだ。

それでいて殺風景ということは無く、自然に包まれた素朴な集落の姿は、新鮮であると同時にエルクたちの郷愁を誘う。

「すごいね……」

「はい。見ていると不思議な気持ちになります」

ほとんど平地のないという立地条件は決して住みやすい環境とは言えない。岩を登るだけでも緊迫を余儀なくされたエルクたちにとっては、常に滑落の恐怖に苛まれる過酷な場所である。

そこに展開されている「生活の気配」は、感動を覚えるには十分な風景と言えた。

『気持ちが悪く着いたのならばすぐに降りよう。何度も言うが、時間が惜しくてな』

「そう、ですね」

これからこの光景の中に飛び込んでいく。

それを想像すると、エルクの心は再び静かな歓喜に包まれた。蜘蛛族の人々から邪険にされるかもしれないという恐怖よりも、見たこともない世界に対する好奇心の方が上回っているのだ。

「あれ？ エルク、ひょっとしてワクワクしてる？」

「えっ！ そ、そんなことないよ」

メフィから突然指摘されて必要以上に狼狽えてしまう。

「ちよつと、それは分かりやすすぎ！ エルクってば単純ね！」

「うう……いいから、早く行こう」

よほど可笑しかったらしいメフィが口元を押さえて笑う。恥ずかしさで顔まで赤くなったと自覚したエルクは、それを紛らわすように意識を集落へと集中させる。

『ふむ、もう準備はできているようだな。それでは行こうか』

やり取りを見守っていた男の一人が先行して岩を飛び下りた。そうして降りる先からエルクたちの降下をサポートしようというのだ

ろっ。

こうしてエルクたちは、蜘蛛族の里へと足を踏み入れた。

31話 消えない壁

平地が少ないという立地条件のせいだろう、エルクたちの連れてこられた建物は半分が山に埋め込まれる形で建てられていた。地形を崩さない工夫らしい曲線的な内装など、目新しい発見には事欠かない。

「すごい……まさに異世界って感じ」

極端に高い天井を見上げてメフィが呟く。

エルクたちのいるフロアより更に上を臨むと、山側の壁に造られたいくつもの巨大な段差が確認できた。そこから覗くカーペットの端らしきものから察するに、それら一つ一つが別々のフロアなのだろう。

上の階層にいくにつれて小さくなっていく階段のようなフロア構成。エルクたちを連れてきた男たちは、その最上段の辺りまで登って見えなくなってしまった。

「何階建てなんだろ？ こんな高い建物、初めて見たよ」

吹き抜けのこの部屋からフロア間を移動できるようになっているのだが、糸の利用が前提となっていて、いるようで階段などは見当たらない。糸のための突起物がいくつか散見できる程度だ。

「僕らだけじゃ上には行けそうにないね」

「ここで待てって言われたじゃない。なんで上に行かなきゃいけないの？」

「それはそうだけど」

人間を想定していない造りから、エルクは自分たちが招かれざる客であることを感じずにはいられなかった。

「あの……私たち、なんで手を縛られたんでしょう」

シオリが傍にいたためか、申し訳なさそうにシューラが口を開いた。

建物に連れられる際、エルクたち三人は両腕を後ろで拘束されてしまっている。連れてきた男たちから一応の確認はあったものの、ほとんど否応なしに従わされたような形だ。

里に入るまではあくまで同行者の形式であつたものから一転、この扱いには捕虜のようだという感想を抱いてしまう。

「なんか騙されたって感じよね。もっと友好的だと思ってたのに」
『長に会うんだから、当然』

納得していないらしいメフィをシオリが戒めた。当たり前だが彼女は手の自由を奪われておらず、胸の前で腕を組んで訝しげに三人を睨み付けている。怪我の痛みが少しずつ引いてきたらしく、ゆっくりなら独力で歩く程度は可能なようだ。

「信用がないのは分かってたことだから。そりゃあ、いきなりやつて来た異邦人と自分たちの代表者を対等に会わせたりはしないでしょ」

「もう縛られるの飽きちゃった」

「誰も好きで縛られたりはしなないと思いますけど……」

緊張感のないメフィの苦言にシューラが苦笑を持って返す。現状をどこまで理解しているのか測れず、エルクは思わず眉をひそめた。シオリや男たちの態度で忘れがちだが、今もエルクたちの命運は蜘蛛族側の掌の上にある。彼らがその気になれば最期、今のエルクたちに対抗する術は一つもないのだ。

彼らの系に従わざるを得ない操り人形のような気分で、エルクは言葉で表現できない不安がのしかかってくるのを感じていた。そうした意味では、エルクもまた蜘蛛族の事を心から信用はできていないのかもしれない。

「時々、二人の事が無性に羨ましくなるよ」

メフィやシューラのように人を素直に信じることができれば。そんな諦観の混じった羨望から、意識せずそんなことを呟いてしまう。
「えっ？ あ、いやあ、それほどでも」

「えっと、何についてかは分かりませんが、ありがとうございま

す」

エルクの心内など知る由もない二人が微妙な喜びを表す。どこまでも二人らしい振る舞いに少しだけ安堵を覚えつつ、エルクは思案をやめて場の流れに身を委ねることにした。

誰もが彼女たちのように他人と接することができれば差別などなくなるかもしれない。

そんな現実味のない空想を胸に隠しながら。

屋内に張り巡らされた系には無数の鳴子が提げられている。シオリの家まで来た男たちの身に着けていたものと同じ、木片の形を整えただけの簡素な品だ。

風が吹き込むだけでもいくつかが触れあって渴いた木音を響かせていたのだが、耳に障るほどの騒音を醸し出すには至っていなかった。不定期に発せられるかすかな単音は、蜘蛛族流の装飾の一種なのだろう。

その鳴子たちが、何の前触れもなく一斉に鳴り始めた。

「へ？ な、なに？」

突然の事で呆気にとられたメフィの声は一瞬でかき消されてしまう。頭を揺さぶられたような感覚に陥り、三人は訳の分からないまま音の降り注ぐ上方へと視線を向けた。

少しずつ音程の違う数えきれない鳴子たちが、メロディを奏でるでもなく音の洪水を叩きつけてきている。耳を塞ぐほどのものではないものの、何かの前触れであるかのように不自然に震え続ける様は不気味なことこの上ない。

「ねえ、これ、何が始まったの？」

声を張り上げてシオリに問いかける。シオリの全く動じていない様子を見る限り、彼女はこれから起こることを知っているのだろう。

『長が来る。その合図』

「長って、里長さんのことですか？」

シユーラが続いて問いかけると、シオリは無表情のまま小さく頷

いた。その視線は遙か上階へと向けられており、そちらから『里長』
がやって来るといのが分かる。

『来た』

「！」

わずかに高揚したシオリの言葉につられ、三人の視線が最上階まで向けられた。

『とうっ！』

キレのいい掛け声とともに一つの人影が飛び出す。

「！？」

驚愕する三人をよそに、その影は空中で体を丸めて前転しながら落下運動を始めた。それはただ落ちていくというよりも、宙を泳いでいるかのような優雅な姿だ。

「ああ、ぶつかる！」

重力に従って回転しながら落下していく影。階下のフロアとの距離が一気に縮まり、激突を想像したメフィがたまらず目を逸らす。

しかし、フロアの直前まで接近したところで影の落下速度が一気に減退した。弾力のある見えない膜に乗ったかのように勢いが凝縮され、弾かれたかのごとく飛び出してエルクたちのいるフロアに向かってくる。

その後の動きはもはや落ちて来ているのではなく、空間を自在に飛び回っていると表現できるほどのものだった。上へ下へ右へ左へ、不規則に跳ね回るボールのような軌道を描きながらエルクたちのもとへ降りてきている。

「これ……系？」

不可解な移動の正体に気付いたエルクが声を上げた。だがその言葉に気持ちはこもっておらず、頭上で繰り広げられている演舞に心を奪われてしまっている。

目に見えないほど細い糸が部屋の上部に張り巡らされているよう

だ。降りて来ている影はその位置を的確に把握し、あるいは自身で新たな糸の足場を作り出し、まるで手品のように宙を闊歩して見せたのだらう。

みるみる近づいてくる影に、三人は釘付けになっていた。勢いよく接近してくる様は自らの衝突を思わせる圧迫感があるが、三人のうち誰もその場から動こうとしない。

『はっ！』

「！」

会話をできるほどの距離まで肉薄した影に目を丸くする三人。いつの間に、などと驚く暇もなく、影が三人の目の前の空中に着地をする。

『ようこそ、私たち蜘蛛族の里へ』

着地姿勢でゆっくりと立ち上がったのは、ライトブラウンのショートヘアが印象的な一人の女性。

『私が里長のキプリだ。よろしく頼む』

そう言い、女性——蜘蛛族の長であるキプリは腕を組んで微笑を浮かべた。

言葉を失う三人の隣で、シオリが無表情のままキプリに拍手を贈る。

それを受けたキプリは満足そうに頷き、直立していた糸から地面へと降りた。

『シオリ、見た？ 今のはキマってたと思うけど』

『うん。キマってた』

『ホントに？ うわー嬉しいなあ』

シオリが言葉少なに肯定すると、キプリの顔に一層明るい笑顔が生れまる。褒められて嬉しいのか、それとも思い描いた通りに登場できたことを喜んでいるのか。どちらにせよ、子供のようにはいしゃぐその姿に威厳があるとは言い難い。

「なんていうか、ちよつと変わった人ね」

こっそりと耳打ちしてきたメフィの言葉にエルクも無言で頷く。

「……カッコイイです」

「え、あ、そう」

シューラが目をキラキラ輝かせてキプリを見つめている。エルクとメフィには無い、異種族同士で通ずる感性のようなものがあるのだろうか。悪いわけではないのでもちろん否定はしないが。

「あのー」

『おっと、ゴメンね。外からお客さんが来るのなんて初めてで、つい張り切っちゃって』

「……そうですか」

『ねえ、どうだった？ あの登場キマってた？』

「ええ、まあ」

わざわざ掛け声を糸で伝えてまで登場の仕方にこだわったのだ。

その意気込みを非難するのは無粋というものだろう。

「すごくかつこよかったですよ！ 私感動しました！」

『えっ、そんなに？ うわあ、私も頑張ったかいがあったよ』

「羨ましいです。私もあんなことやってみたいです」

シューラもキプリにすっかり同調してしまっているの、どちらかというエルクの方が疎外感を覚えてしまう。彼女たち二人だけで盛り上がってきており、エルクたちの存在が視野から外れつつあるようだ。

そんな現状を見兼ねたのか、熱論を展開するキプリにシオリが声をかけた。

『長』

『あつ、ゴメン。本題に入らないといけないね』

本気で忘れていたのか、すっかりしたというような表情になって自身の頭をコツンと叩く。いかにも愛嬌があり、見ている者に好感を抱かせる仕草だ。

それまでの会話に区切りをつけるかのようにキプリが咳払いを一つした。そして表情を引き締め、いくらか里長らしい雰囲気を取り

戻して改めてエルクたちと対峙する。

『それじゃあ、大事な話に入るよ。落ち着かないかもしれないけど、ちよつとだけ我慢してね』

「は、はい」

どこか緊張感の欠ける心境のまま——エルクは、蜘蛛族の代表者との会談の席に着いた。

「腕は解放してもらえないんですね」

『そうしないと他のみんなが不安がっちゃって。あんまり人間っていう存在免疫がなくてね』

「なるほど」

未だに腕が後ろで縛られたままだが、それだけで済んでいる分まだマシな待遇と言えるだろう。キプリの陰日向のない態度も含め、想定したほど緊迫した空気になっていないためにエルクの感じるプレッシャーも少ない。

ただし、だからといってキプリが自分たちを信用しているとも考えていないのだが。

『その様子じゃ、私たちの現状についてもある程度は把握してるのかな？』

「……まあ、この待遇で納得する程度には」

『じゃあその説明は省くでしょうか。無駄に時間を消費するのは賢い選択じゃない』

ひらひらと手を振るキプリの提案をエルクたちも承諾する。

時間が惜しいというのは彼女と同意見だ。だがそれ以上に、彼女の口から『その事実』を語らせることがはばかれたというのもある。

決して愉快的な記憶ではない、異種族迫害の現実。キプリが説明を省略したのも、それを想起したくないという意志が無意識の内に働いたのかもしれない。

「その上で僕らと呼び寄せたのは、そうせざるを得ないほどの理由があるからでしょうか」

『どうしてもって訳ではないかな。都合がよかった、くらいの気持ちだったよ』

軽い調子のキプリの言葉に、黙って聞いていたメフィが眉をひそめた。

「そう言われちゃうと……なんかここまで来た甲斐がないね」

「メフィさん、それは思っても口に出さない方が……」

『なんか、ごめん』

「あ、ううん。こっちこそゴメン」

あまり感情の表れないシオリの謝罪に首を振るメフィ。シオリの態度が幾らか柔らかくなっているのは、どうやらキプリの存在が大きいようだ。

「人間である僕たちを呼び出すだけの理由があるかと思ったんですが……」

『いや、人間じゃなきゃいけないのは本当だよ。実際には外から来たなら誰でもよかったんだけどね』

「？」

エルクが疑問符を浮かべたのは、その奇妙な言い回しが耳にとまつたからではない。

その言葉を発したキプリが、シオリの挙動をやたら意識しているのに気付いたのだ。当のシオリは特に感情を動かされた様子もなく、ただじつとキプリの話に耳を傾けている。

懸念するようなことがあるのか訊ねようとも考えたが、それよりも優先すべき事柄を思い出して口には出さなかった。その代わり、自分たちが呼び込まれた理由として思い当たる事項を投げかけてみる。

「おそらく……僕たちがここに至るまでに得た情報を知りたいといったところでしょっか」

「情報？」

「里の中だけじゃ耳に届かない話もあるってこと。里長ともなればなおさら意識することだろうし」

不思議そうにするメフィに解説を挟んで聞かせる。

シオリの手助けがあったとはいえ、蜘蛛族だけが立ち入ることの許される土地に人間が入り込んだのだ。里の存在や位置を知った理由であれ、現在のヒューク山を取り巻く状況であれ、蜘蛛族の欲する情報はいくらかもあるだろう。

そして実際、キプリはそうした情報が必要としているらしかった。

「察しいいいね、その通りだよ」

話が早くて助かると言うようにキプリが両手を合わせる。

「知っている通り、この里は外界とほとんど交流がない。他の種族の立ち入れない環境に頼り切って、充分な防衛設備も整っていない。それだけが原因じゃないだろうけど、一族のほとんどは里に引きこもってしまつてね」

「確かに、ここでは自然が最大の砦の役割を果たしていますからね。そうして隔離した分、外に対する恐怖心はより増しているのかもしれないません」

「自然に守られているから安心じゃないんですか？」

「自然の防御力にも限度があるからね。もし人間がこの里の存在を知って、本気で私たちを皆殺しにしようと考えたら。その時、自然環境だけで守り切れると思う？」

「……」

キプリの言葉で最悪の光景を想像したのか、シューラが背筋を震わせた。

「ね？　そういう意味でも、里の危機を把握することが私の重要な仕事なの。何か事が起きてからじゃ遅いでしょ？」

「確かにそうだけど……そのために私たち人間を呼ぶのって、なんか矛盾してない？」

「里の中だけだとうしようもないことだからね。それに、シオリが自分の家に招き入れるくらいの人間なら大丈夫だって確信があつ

たし」

「……」

今度はシオリが、何も言わないまま目を細めてそっぽを向いてしまった。うつすら紅潮した頬を見るに、単に恥ずかしがっているだけのようだ。

しかしエルクは、その言葉の示唆するところに気付いて表情を曇らせた。

キプリの言い回しは、シオリに人を見る目があると評価している場合のそれとは違う。わざわざ強調できるほど彼女が人間を嫌悪しているからこそ、キプリはエルクたちを信用していいと判断したのだろう。

「そんなに、シオリは人間を嫌っているんですか？」

「まあ、そう、だね。それについては、今はちよつと、ね」

歯切れの悪いキプリの言葉に続き、シオリが鋭い視線をエルクに投げかけてきた。あからさまな非難の意図に、エルクは踏み込むべきでない領域に入りかけたことを自覚する。

配慮が足りなかったことを申し訳なく思いつつ、すぐに話を本題の方へ移すことにした。

「……しかし、切迫していた訳ではないにしてもずいぶん受動的ですね。現状の把握だけなら、そちらから外に出て情報収集をした方が良い気がします」

「そう思つのも当然だろうね。ただ――」

「簡単に言わないで！」

「！」

キプリの言葉を遮ってシオリが怒声をあげた。突然の事に驚き、一同はそろって言葉を失う。

「何も、何も知らないくせに！」

「シオリ……？」

「……………」

全員の視線が集まる中、シオリは真っ直ぐエルクの事を見据えて

いる。

それまで感情の乏しかった表情が一変、どす黒い焰のような憤怒を宿らせた瞳でエルクを睨み付けてきている。肩を震わせて息を荒くしている様からは、殺意にも似た憎悪を感じ取れるほどだ。

目にはうつすらと涙が溜まっており、困惑したエルクは咄嗟に反応することができなかった。

「……っ」

シオリはすぐに平静を取り戻したが、今しがたの行為を弁明することなく口を閉ざしてしまふ。あくまで自分の行動に後悔はないという意志表示のつもりらしい。

全員が、場が静寂に沈む。

時間を再び動かし始めたのはキプリだった。

『シオリ。席を外してもらえるかな』

静かに、しかし力のある一言。

「……」

シオリは不満そうに眉を吊り上げたが、同時にそう言われることを予想していたようだ。ショックを受けた様子は無く、冷静にキプリに対して反論をする。

『私も話が聞きたい』

『ダメだ、認められない。ここから先は私と彼らだけの話でないといけないんだよ』

『連れてきたのは、私。聞く権利くらい』

『もう一度だけ言うよ、シオリ』

なおも食い下がるシオリに向けられたキプリの態度は、先刻の子供らしさが嘘のように冷たく突き放されたものだった。

『今すぐこの部屋から出ていきなさい。これは里長としての命令だ』
「……っ」

有無を言わせぬ言葉に齒向かうことができず、シオリは唇を噛みしめる。

そこからじわりと滲み出た血が彼女の悔しさを如実に表していた。しばらく立ち尽くして拳を震わせていたシオリだったが、不意に全身の力を抜いてキプリに背中を向けた。

『見回りに行ってくる』

そう言い残し、未だにふらつく足取りで部屋の外へ向かうとするシオリ。ただ怪我のせいという訳ではなく、キプリに従わざるを得ないことへの失望感が彼女の足取りを重くしているようだ。

「ちょ、ちよつと待って！」

そんな彼女を呼び留めたのは、これまでの事の変遷をずっと黙って見守っていたメフィだった。

「まだ怪我也ちゃんと治ってないのよ？ 無理しすぎたらまた途中で倒れちゃうよ。これが終わったら手紙とペンダントも渡すから、そんなにガツカリしないで外で待ってて。ね？」

「……………」

必死に励まそうとするメフィにもシオリは反応を示さない。その場で立ち止まり、何かを考え込むように俯いてしまう。

メフィの呼びかけがどのように受け取られたかは分からない。

しばらく静止した後、振り返ることなく再び外に向かって歩き始める。

『私の義務、だから』

ただ、その一言だけがメフィに向けて返された唯一の反応だった。「義務って……死んじゃったら何にもならないよ？ ねえ、待ってば！」

メフィがなおも語りかけるが、シオリの足は止まらない。

そうしてメフィの伸ばした手は届くこと無く――

孤独な蜘蛛族の少女は、扉をくぐって外へ消えていった。

「どうしてあんなことを……」

シオリの足音が聞こえなくなってからエルクが疑問を投げかける。シオリの出て行った辺りを見つめていたキプリは、悲しげに目を細

めてどこか遠くを見つめているようだった。

『あの子は小さい頃に、人間によって父親と引き離されてしまったんだよ。それ以来、もともと人間を良く思っていない蜘蛛族の中でも特に人間を憎むようになってちゃってね』

「父親……」

『そんなあの子に、これからする話はまだちょっと辛いかもしれないからね。酷いことをしたっていうのは分かってるよ』

明るく振る舞おうとしているようだが、キプリの声のトーンが先刻よりも落ちてきている。

彼女にとつても、シオリを冷たくあしらうというのは心の痛む行為だったのだろう。

「……何なんですか、そこまでして彼女に聞かれないような話というのは？」

肝心な部分が見えて来ず、本気で理解の追いつかなくなったエルクがストレートに疑問をぶつける。

『いや、まあ、言ってしまったら簡単な事なだけだね』

恥ずかしそうに頬を掻くキプリ。その軽い仕草はむしろ、これから語ろうとしている『本題』が重く不気味なものであるように感じさせる。

そして、そんなエルクのことなど全く気にかけず——キプリは実にあっさり『本題』を切り出した。

『里の近くからでいい。蜘蛛族と人間の間新しい交流関係を築きたいと考えていてね』

「交流、ですか」

『そ。もっと簡単に言えば——人間と仲良くなれる方法を知りたいんだよ、私は』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4638n/>

ばくらの天使

2011年10月6日03時20分発行